

佐久市

MORIDAIRA

森平遺跡

YOSEDUKA

寄塚遺跡群

IMAI-NISHIHARA

今井西原遺跡

IMAI-MIYANOMAE

今井宮の前遺跡

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5

－佐久市内5－

2014.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



森平遺跡1区（西より）



寄塚遺跡群と湯川対岸の森平遺跡（南より）



今井西原遺跡1区（南より）



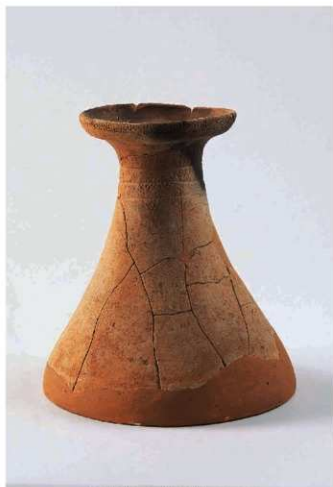
今井宮の前遺跡：手前は千曲川（南より）



森平遺跡SB01土器 (第51図-008)



森平遺跡SB01土器 (第51図-013)



森平遺跡SB07土器 (第56図-409)



左土器の疑似縄文(オオバコ)拡大

全て縮尺不同



森平遺跡SK001土器 (第67図-502有束式)



森平遺跡SB11土器 (第61図-474)



森平遺跡SB09土器 (第58図-249)



森平遺跡SB09土器 (第57図-253)

全て縮尺不同

はじめに

北に浅間火山、南に八ヶ岳の群峰に抱かれた佐久平は日本の屋根と言われる信州の中でも、平地の広がる肥沃な穀倉地帯です。古くから碓氷峠、内山峠を介して北関東への玄関口であると同時に、野辺山を越えて山梨県へ抜ける交通の要衝でもありました。

国内で海から最も離れた地点のある佐久市でも日本海側と太平洋側を結ぶ高速自動車国道である中部横断自動車道建設が始まり、多くの遺跡が発掘調査されました。特に平成23年3月に供用が開始された佐久小諸ジャンクションから佐久南インターチェンジ間は、地域の交通の足として、また上信越自動車道を通して関東・北陸方面からの観光客の誘致にと、幅広く活用されております。

甲武信ヶ岳を源流とする千曲川と、浅間山麓から流れ下る湯川や濁川は、佐久平のほぼ中央で合流し、そのあたりに形成された河岸段丘と付近の台地上には弥生時代の大集落を含む、多くの遺跡が営まれています。本書に掲載した森平遺跡、寄塚遺跡群、今井西原遺跡、今井宮の前遺跡もこうした遺跡に含まれます。特に森平遺跡は湯川の蛇行部に位置する川辺の集落で、弥生時代中期後半の堅穴住居跡とともに佐久平では極めて珍しい掘立柱建物跡も検出されました。また、赤彩が施された壺・鉢・高杯や大型蛤刃石斧をはじめとする多くの貴重な遺物が出土し、本地域の弥生時代研究のための新たな素材を多数提供いたしました。

調査内容の詳細を本書でご確認いただくと同時に、今回の調査によって得られた資料と情報が、今後、多方面で十分に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に語るまで、深いご理解とご協力をいただきました国土交通省関東地方整備局の方々、長野県教育委員会や佐久市・佐久市教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆さま、そして発掘作業や整理作業に従事協力いただいた、多くの方々に、心から敬意と感謝を表す次第であります。

例言

- 1 本書は、長野県佐久市に所在する森平遺跡、寄塚遺跡群、今井西原遺跡、今井宮の前遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の「長野県埋蔵文化財センター年報」21～23で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅳ系の原点を基準点としている。座標値は、森平遺跡では世界測地系を、寄塚遺跡群、今井西原遺跡、今井宮の前遺跡では日本測地系（旧測地系）を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくはご指導を得た。（敬称略）
測量・空中写真撮影：（株）アンドー（森平遺跡）
（株）みずず総合コンサルタント（寄塚遺跡群）
（株）協同測量社（今井西原遺跡）
新日本航業（株）（今井宮の前遺跡）
土器実測：大成エンジニアリング（株）
人骨・動物骨鑑定：京都大学名誉教授 茂原信生
総合研究大学院大学准教授 本郷一美
獨協医科大学技術職員 櫻井秀雄
石材鑑定：信州大学教授 原山 智
土器調査指導：東京大学大学院教授 設楽博己
長野県考古学会員 小山岳夫
自然科学分析：バリノ・サーヴェイ（株）
黒曜石産地分析：沼津高等工業専門学校教授（分析当時） 望月明彦
遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）
- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表す。（敬称略）
石川日出志、小泉祐紀、篠原和大、須藤 隆、須藤隆司、堤 隆、寺内隆夫、富沢一明、萩野谷正宏
馬場伸一郎、原 明芳、佐久市教育委員会、佐久考古学会
長野県遺跡調査指導委員会（戸沢充則、工業善通、丸山敏一郎、高橋龍三郎）

- 8 発掘調査・整理作業の担当者等は第1章第2節に記載した。
- 9 本書の執筆分担は下記のとおりであり、調査第2課長岡村秀雄が校閲し、調査部長大竹憲昭が総括した。ただし、第1章から第3章は櫻井秀雄（長野県教育委員会文化財・生涯学習課）の草稿をもとに執筆した。
- 水澤教子 第1・2章、第4章第2節1～6（遺物部分）・第3節1・4・5・第4節2（1）・（2）①・3、
第8章第1節2・3、第9章、その他
- 岡村秀雄 第3章、第4章第2節2～5（遺構部分）、第6章（石器部分を除く）
- 内堀 団 第4章第1節・第2節1（遺構部分）・第3節3・第4節1・2（2）②・③
- 谷 和隆 第4章第3節2、第5章第2節（石器部分）、第6章第2節（石器部分）、第8章第1節1
- 上田典男 第5章（石器部分を除く）
- 柳澤 亮 第7章
- 上田 真 第8章第2節
- 10 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。
本文PDF、写真図版PDF、遺物カラー写真データ、自然科学分析報告書、各種表データ、掲載遺物観察表、その他

凡例

1 記述・表記の仕方

記録保存の対象となった4遺跡別に第4章～第7章を起こし、遺跡の概要、遺構と遺物、各遺跡の総括を小結として末尾に記述した。

図・表番号は章ごとに付し、写真図版番号(PL)は4遺跡通して付した。

各章別の付表・付図のすべてと、その他必要とされる遺物の詳細な観察表をDVDに貼付した。遺物の観察方法は、第4章第3節1・2に記載し、第5・6・7章の観察表についてもそれに準ずる。

2 番号

(1) 遺構番号

遺構種ごとに付してある。調査段階で欠番になっているものや整理作業において遺構として認定しなかったため欠番としたものがある。整理作業段階で新たに遺構番号を付したものもある。

(2) 遺物番号

整理段階で付した管理番号である。土器は3桁で表示した。石器は頭にSを付し3桁で表示した。金属器は頭にMを、骨は頭にBを、炭化物は頭にCを付して何れも2桁で表示した。

なお、整理期間内に遺物の出土遺構や層位を変更・統合した場合、個々の遺物の注記記号は変更せず、現場段階のままとしている。参照・活用の際はご留意願いたい。

3 組順

(1) 遺構図版

組順は遺構ごととし、遺構番号の昇順に組み、必要に応じて遺物の水平・垂直分布図を加えた。

(2) 遺物図版

遺物図版の組順は、土器は出土遺構ごととし、さらに帰属時期が古いと推測されるまとまりごとに並べている(例:床下・炉・床・ピット・堀土等。ただし複数の層にまたがる場合は、より上位の層に含めた)。さらにそれぞれのまとまりに土器が複数存在する場合は、壺・甕・鉢・台付鉢・高杯・その他の順とした。遺構外出土の遺物については出土グリッドの解るものと、それが判明せず地区単位で取り上げたものに分けた。さらにそれぞれを時代順(例:縄文・弥生・土師器)に配した。

石器は器種別に組み、キャプションの1段目に管理番号、2段目左に器種名、2段目右に石材名、3段目左に出土遺構名、3段目右に重量を示した。なお、産地推定を行った黒曜石製石器については、石材名の右に産地記号を示した。産地群記号の内容については第8章第1表脚註に示した。

4 掲載図の表示の仕方

本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。他についても当該箇所スケールの上に記してある。

(1) 遺構図

遺構図中の出土遺物は遺物図版と同じである。また遺構図の縮尺は以下のとおりとする。

竪穴住居跡・掘立柱建物跡 1:80 炉跡・土坑・焼土跡 1:40 遺構割付図 1:100、1:200、1:300
溝跡 1:200、1:300、1:600

スクリーントーンは下記のとおり使用し、これ以外の場合は、該当箇所で説明している。

炭化物・柱根  焼土  地山  炭・灰の分布 




(2) 遺物図

遺物図面は、土器・石器を等倍で実測し、所定の倍率でトレース後、デジタル化して掲載大に縮小した後、必要に応じて網かけを行った。遺物別の縮尺は以下のとおりである。

土器・陶磁器（土器拓影・土器破片実測を含む）1：4 土器片加工円板1：4

太型蛤刃石斧・打製石斧1：3 扁平片刃石斧1：2 石鏃等小形石器2：3 磨石・敲石・砥石等1：3
石皿・石臼・石鉢1：6 軽石製品1：3 管玉1：1

スクリーントーンは下記のとおり使用し、これ以外の場合は、該当箇所で説明している。

① 土器 赤彩  須恵器断面  陶磁器断面 
② 石器 石槌・磨石・石皿・みがき石・砥石の磨面・砥面は断面図に矢印で記載。

5 土器・土器片加工円板・土製品観察表

土器・土器片加工円板・土製品観察表（第4章第7・8表、DVD貼付）の凡例は、属性表上段の項目順に以下のとおりである。

- ・出土位置 「床」は推定床、「層位」は推定層位を表す。推定床・推定層位の定義は本文第4章第3節1に記載した。
- ・残存率 「完全実測」は外形を実際に計測したものの。「回転実測」は外形を反転復元したものの。
- ・口径・底径・器高（ ）は一部が破損しているが現在残存している最大長、<>は反転復元した最大長を現わす。
- ・重量 []は同一個体の重量を示す。
- ・赤彩 「赤彩」欄に説明が書かれている個体の図版には赤彩のトーンを添付した。ただし「微」表記の場合は赤彩が微量であるためトーンは貼らないが、「備考」に詳細説明を行った。
- ・胎土 「分析番号」は、パリノ・サーヴェイ（株）が行った胎土分析の番号。1類、2類、3類の定義は第8章第1節3に記載し、その他は岩石・鉱物名等を記載した。

6 写真

(1) 遺構写真

遺構の昇順に左右、上下の方向に配列した。遺構の完掘と遺物の拡大写真を入れ、撮影の方向は（ ）で表記した。

(2) 遺物写真

遺物写真の縮尺は原則としては遺物図とおおよそ同じだが、任意縮尺にしているものもある。その場合は個別に記載した。なお、写真図版は土器・石器・金属製品といった種別でまとめて掲載した。写真図版キャプションの凡例は下記のとおりである。

土器 「67 - 324」は、第67図に掲載されている管理番号324の土器を示す。

石器他 「107 - SB01 - S027」は、第107図に掲載されているSB01出土、管理番号S027の石器を示す。

目次

巻頭図版	
はじめに	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
挿表目次	
写真図版目次	

第1章 調査に至る経緯	
第1節 事業の概要と保護協議	1
1. 中部横断自動車道の事業計画	1
2. 埋蔵文化財の保護協議と調査	1
3. 文化財保護法の手続き	5
第2節 発掘作業と整理作業の体制	5
第2章 調査の経過	
第1節 発掘作業の経過	7
1. 発掘作業の方法	7
(1) 遺跡名称と遺跡記号 (2) 遺構名称と遺構記号 (3) 調査区(グリッド)の設定と略称 (4) 遺構の発掘 (5) 測量と写真 (6) 遺跡の公開	
2. 日誌抄	10
(1) 森平遺跡 (2) 寄塚遺跡群 (3) 今井西原遺跡 (4) 今井宮の前遺跡	
第2節 整理作業の経過	11
1. 整理作業の方法	11
(1) 基礎整理作業 (2) 本格整理作業 (3) 資料の取納	
2. 日誌抄	12
第3章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	16
第4章 森平遺跡	
第1節 遺跡の概観と調査の概要	25
1. 遺跡の概観	25
2. 調査の概要	25
3. 基本順序	26
第2節 遺構と遺物の出土状況	31

1. 竪穴住居跡	31
2. 掘立柱建物跡	41
3. 土坑	43
4. 焼土跡	44
5. 溝跡	44
6. 遺構外出土の遺物	45
第3節 遺物	98
1. 土器	98
2. 石器	100
3. 玉類	104
4. 人骨・動物骨	105
5. 金属器	105
第4節 小結	166
1. 遺構の変遷	166
2. 出土遺物からみた森平遺跡 (1) 概観 (2) 土器各論	171
3. 森平遺跡の位置づけ	173
第5章 寄塚遺跡群	
第1節 遺跡の概観と調査の概要	177
1. 遺跡の概観	177
2. 調査の概要	177
3. 基本層序	177
第2節 遺構と遺物	178
1. 竪穴住居跡	178
2. 土坑	179
3. 焼土跡	179
4. 溝跡	179
5. 不明遺構	180
6. 遺構外出土の遺物	180
第3節 小結	186
第6章 今井西原遺跡	
第1節 遺跡の概観と調査の概要	187
1. 遺跡の概観	187
2. 調査の概要	187
3. 基本層序	188
第2節 遺構と遺物	188
1. 竪穴住居跡	188
2. 掘立柱建物跡	188

3. 土坑	189
4. 溝跡	190
第3節 小結	206
第7章 今井宮の前遺跡	
第1節 遺跡の概観と調査の概要	207
1. 遺跡の概観	207
2. 調査の概要	207
3. 基本層序	208
第2節 遺構と遺物	210
1. 掘立柱建物跡	210
2. 杭列跡(槽跡)	210
3. 土坑	211
(1) 大形土坑 (2) 小・中形土坑	
4. 出土遺物	215
(1) 土器・陶磁器 (2) 石器・石製品 (3) 人骨・動物骨	
第3節 小結	234
1. 時代ごとの概要	234
2. 旧公園との照合	235
第8章 自然科学分析	
第1節 森平遺跡の自然科学分析	237
1. 黒曜石産地推定	237
2. 古植生・植物利用と竪穴住居跡の年代	238
(1) 周辺の環境 (2) 植物利用の状況 (3) 竪穴住居跡の年代	
3. 胎土分析	242
(1) 分析試料 (2) 分析の方法 (3) 分析の結果 (4) 考察 (5) 委託結果を受けての考察 (6) まとめ	
第2節 今井西原遺跡の自然科学分析	252
1. 放射性炭素年代測定	252
2. 樹種同定	252
3. 珪藻分析	253
4. 花粉分析	257
5. 植物珪酸体分析	259
第9章 総括	263
引用参考文献	265

－ 挿 図 目 次 －

[第1章]			
第1図 中部横断自動車道 路線図と遺跡…	3	第30図 SB21 遺構図……………	71
[第2章]		第31図 ST01・02・04 遺構図……………	72
第1図 グリッドの呼称……………	9	第32図 ST05 遺構図……………	73
[第3章]		第33図 ST06～08・10 遺構図……………	74
第1図 中部横断自動車道位置図(佐久小諸 JCT～佐久南IC間)……………	14	第34図 ST 割付図……………	75
第2図 佐久周辺地質図……………	15	第35図 SK001～003・010 遺構図……………	76
第3図 周辺の遺跡分布図……………	21	第36図 SK011・018・020・023・024・ SF1～3 遺構図……………	77
[第4章]		第37図 SK 割付図1……………	78
第1図 森平遺跡周辺の遺跡分布図・鳥瞰図	26	第38図 SK 割付図2……………	79
第2図 遺跡範囲図と地区設定図……………	27	第39図 SK 割付図3……………	80
第3図 図1～3・5・6区 基本土層柱状図…	28	第40図 SK 割付図4……………	81
第4図 図4区 基本土層柱状図……………	29	第41図 SK 割付図5……………	82
第5図 遺構全体図……………	30	第42図 SK 割付図6……………	83
第6図 SB01 遺構図1……………	47	第43図 SD01～05・09・10 遺構図……………	84
第7図 SB01 遺構図2……………	48	第44図 SD01～04・06・11・12 遺構図…	85
第8図 SB02 遺構図……………	49	第45図 SD08 遺構図……………	86
第9図 SB03 遺構図1……………	50	第46図 SD(古代以降) 全体図……………	87
第10図 SB03 遺構図2……………	51	第47図 弥生時代遺構割付図1……………	88
第11図 SB04 遺構図……………	52	第48図 弥生時代遺構割付図2……………	89
第12図 SB06 遺構図……………	53	第49図 弥生時代遺構割付図3……………	90
第13図 SB07・08 遺構図1……………	54	第50図 SB10 出土人骨下顎歯写真……………	105
第14図 SB07・08 遺構図2……………	55	第51図 遺構出土土器1……………	106
第15図 SB09 遺構図1……………	56	第52図 遺構出土土器2……………	107
第16図 SB09 遺構図2……………	57	第53図 遺構出土土器3……………	108
第17図 SB09 遺構図3……………	58	第54図 遺構出土土器4……………	109
第18図 SB10・11 遺構図1……………	59	第55図 遺構出土土器5……………	110
第19図 SB10・11 遺構図2……………	60	第56図 遺構出土土器6……………	111
第20図 SB11 遺構図……………	61	第57図 遺構出土土器7……………	112
第21図 SB13・ST13 遺構図1……………	62	第58図 遺構出土土器8……………	113
第22図 SB13・ST13 遺構図2……………	63	第59図 遺構出土土器9……………	114
第23図 SB14 遺構図……………	64	第60図 遺構出土土器10……………	115
第24図 SB15 遺構図……………	65	第61図 遺構出土土器11……………	116
第25図 SB16 遺構図……………	66	第62図 遺構出土土器12……………	117
第26図 SB17 遺構図……………	67	第63図 遺構出土土器13……………	118
第27図 SB18 遺構図……………	68	第64図 遺構出土土器14……………	119
第28図 SB20・23 遺構図1……………	69	第65図 遺構出土土器15……………	120
第29図 SB20・23 遺構図2……………	70	第66図 遺構出土土器16……………	121
		第67図 遺構出土土器17……………	122

第68図	遺構出土土器18	123	第93図	オオバコ文土器の施文方向	175
第69図	遺構外出土土器1	124	第94図	有東式土器とその類似例	175
第70図	遺構外出土土器2	125	第95図	鐸・鈴の機能を持つ高杯	175
第71図	遺構外出土土器3・土器片加工円板・土製品	126	第96図	森平遺跡遺構分布図	176
第72図	土器変遷図	127	[第5章]		
第73図	弥生時代石器実測図1 (太型蛤刃石斧1)	128	第1図	遺跡範囲図と地区設定図	181
第74図	弥生時代石器実測図2 (太型蛤刃石斧2・扁平片刃石斧1)	129	第2図	全体図・基本層序	181
第75図	弥生時代石器実測図3 (扁平片刃石斧2)	130	第3図	SB・SK 遺構図	182
第76図	弥生時代石器実測図4 (扁平片刃石斧3・打製石斧)	131	第4図	SF・SD・SX 遺構図	183
第77図	弥生時代石器実測図5 (柱状片刃石斧・磨製石鏃)	132	第5図	遺物図1	184
第78図	弥生時代石器実測図6 (磨製石鏃未製品1)	133	第6図	遺物図2	185
第79図	弥生時代石器実測図7 (磨製石鏃未製品2・石鏃1)	134	第7図	寄塚遺跡群・今井西原遺跡 遺構分布図	186
第80図	弥生時代石器実測図8 (石鏃2・石錐・楔形石器・石核)	135	[第6章]		
第81図	弥生時代石器実測図9 (磨り切り具・敲石・石槌)	136	第1図	遺跡範囲図と地区設定図	194
第82図	弥生時代石器実測図10(磨石)	137	第2図	全体図・基本層序	195
第83図	弥生時代石器実測図11 (みがき石・砥石・石皿1)	138	第3図	1区 全体図	196
第84図	弥生時代石器実測図12(石皿2)	139	第4図	SB101 遺構図	197
第85図	弥生時代石器実測図13(石皿3)	140	第5図	1区 ST・SK 遺構図	198
第86図	弥生時代石器実測図14(軽石製品1)	141	第6図	1区 SD 遺構図	199
第87図	弥生時代石器実測図15(軽石製品2)	142	第7図	2区 全体図	200
第88図	弥生時代石器実測図16 (凹石)・玉類実測図	143	第8図	2区 SK・SD 遺構図	201
第89図	栗林2式古～新段階・栗林2～3式 遺構分布図	167	第9図	3区 全体図・SD 遺構図	202
第90図	栗林2式新段階・栗林2～3式 遺構分布図	168	第10図	4区 全体図・SK・SD 遺構図	203
第91図	栗林3式・栗林2～3式 遺構分布図	169	第11図	遺物図1	204
第92図	栗林3式～後期 遺構分布図	170	第12図	遺物図2	205
			[第7章]		
			第1図	周辺地形図と調査範囲	208
			第2図	トレンチ配置と調査区の設定	209
			第3図	基本土層柱状図	209
			第4図	土坑の法量と分布範囲	213
			第5図	SK120出土人骨の歯	216
			第6図	遺構分布図	217
			第7図	遺構分布拡大図1	218
			第8図	遺構分布拡大図2	219
			第9図	遺構分布拡大図3	220
			第10図	遺構分布拡大図4	221
			第11図	遺構図1(掘立柱建物跡ST01)	222
			第12図	遺構図2(杭列跡SA01・02)	222
			第13図	遺構図3(大形土坑1)	223

第14図	遺構図4(大形土坑2)	224
第15図	遺構図5(小・中形土坑1)	225
第16図	遺構図6(小・中形土坑2)	226
第17図	遺構図7(小・中形土坑3)	227
第18図	遺構図8(小・中形土坑4)	228
第19図	旧公園と遺構・溝などの照合図	229
第20図	出土遺物	230
[第8章]		

— 挿 表 目 次 —

[第1章]		
第1表	佐久小諸JCT～佐久南IC間 事業と保護協議・調査の経過	2
第2表	佐久小諸JCT～佐久南IC間 調査経過	4
第3表	文化財保護法手続き	5
第4表	調査体制	5
[第3章]		
第1表	周辺遺跡一覧	22
[第4章]		
第1表	竪穴住居跡一覧	91
第2表	掘立柱建物跡一覧	91
第3表	土坑一覧	92
第4表	焼土跡一覧	94
第5表	溝跡一覧	94
第6表	樹種同定結果	94
第7表	土器観察表	144
第8表	土器片加工円板・土製品観察表	162
第9表	遺構別器種組成表	163
第10表	遺構別石材組成表	164
第11表	石材別器種組成表	165
第12表	動物骨一覧	165
第13表	金属器一覧	165
[第5章]		
第1表	竪穴住居跡一覧	185
第2表	土坑一覧	185
第3表	焼土跡一覧	185
第4表	溝跡一覧	185
森平遺跡……………PL1～34・50		
寄塚遺跡群……………PL28・35・36		

第1図	植物珪酸体含量図	239
第2図	各粒度階における鉱物・岩石別出現 頻度(%)	246
第3図	胎土中の砂の粒径組成	247
第4図	胎土化学組成散布図	248
第5図	主要珪酸化石群集の層位分布	257
第6図	花粉化石群集の層位分布	259
第7図	植物珪酸体含量	261

第5表	不明遺構一覧	185
[第6章]		
第1表	竪穴住居跡一覧	192
第2表	掘立柱建物跡一覧	192
第3表	土坑一覧	193
第4表	溝跡一覧	193
[第7章]		
第1表	SK120出土人骨の上顎歯計測値	216
第2表	掘立柱建物跡ビット一覧	231
第3表	枕列跡ビット一覧	231
第4表	土坑一覧	231
[第8章]		
第1表	竪穴住居跡別黒曜石産地群組成	238
第2表	器種別黒曜石産地群組成	238
第3表	植物珪酸体含量表	239
第4表	竪穴住居跡別炭化材種類構成	240
第5表	種実同定結果	240
第6表	放射性炭素年代測定および暦年較正 結果	241
第7表	胎土分析の結果	243
第8表	薄片観察結果	244
第9表	蛍光X線分析結果	248
第10表	放射性炭素年代測定結果	252
第11表	暦年較正結果	252
第12表	樹種同定結果	253
第13表	珪酸分析結果	254
第14表	花粉分析結果	258
第15表	植物珪酸体含量表	261
今井西原遺跡……………PL37～40		
今井宮の前遺跡……………PL41～49		

— 写 真 図 版 目 次 —

第1章 調査に至る経緯

第1節 事業の概要と保護協議

1. 中部横断自動車道の事業計画

中部横断自動車道は、日本列島の中央部を横断するように静岡県から山梨県を経て長野県を結ぶ国土開発幹線自動車道である。静岡県静岡市を起点とし、山梨県甲斐市を經由し、中央自動車道と一部重複し、長野県小諸市に至る、延長約132kmが高速自動車国道として整備される。これにより上信越自動車道を介して日本海側地域と太平洋側地域が高速自動車道網で結ばれると共に、上信越自動車道・北関東自動車道と一体となり、東京から放射状に延びる東名・新東名高速道路・中央自動車道・関越自動車道・東北自動車道・常磐自動車道と接続した「関東大環状連携軸」のネットワークが形成される。

中部横断自動車道の長野県内分は約45kmで、小諸市の佐久小諸ジャンクション（以下JCT）で上信越自動車道と連結する。

中部横断自動車道の事業経緯や埋蔵文化財の保護・調査などについては第1表にまとめた。

本事業は、昭和62年6月に高規格幹線道路網として閣議決定され、同年9月、静岡県清水市（現静岡市）～長野県佐久市の間が国土開発幹線自動車道の新規追加路線として決定された。平成3年12月に長野県八千穂村（現佐久穂町）～佐久市の約23km間が基本計画決定され、平成8年12月、佐久南インターチェンジ（以下IC）～佐久小諸JCTの約8km間が上信越自動車道の追加インターとして整備計画決定された。

整備計画の決定を受け、平成10年4月、日本道路公団（当時）に対し同区間の施工命令が出され、事業が本格化した。また、同年12月には同区間を含む八千穂村から佐久市間の整備計画が決定された。

その後、平成15年12月の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、新直轄方式に切り替わる区間の整備計画の変更が審議・議決され、翌16年1月八千穂IC（仮称）～佐久小諸JCT間は新直轄方式での整備計画に変更された。新直轄方式の整備計画では国が4分の3、地方が4分の1の負担により、国土交通省が直轄事業として高速自動車道を整備し、完成後は無料開放される。

この整備計画の変更により日本道路公団への施工命令は撤回され、平成18年度からは国土交通省関東地方整備局の直轄事業として事業は進められている。平成23年3月、中部横断自動車道長野県内分としては初めて佐久南IC～佐久小諸JCT間の供用が開始された。この供用開始に伴い佐久市街地の交通混雑の緩和などの効果が上がっている。なお、八千穂IC（仮称）～佐久南IC間は埋蔵文化財の調査と並行して本体工事も合わせて実施されている。

2. 埋蔵文化財の保護協議と調査

長野県教育委員会（以下 県教委）は平成3年の中部横断自動車道八千穂村～佐久市間の基本計画決定を受け、平成6年度から建設予定地内の埋蔵文化財保護のため、予想されるルートの幅1km前後を関係市町村教育委員会（以下 教委）の協力のもと、遺跡の位置確認などの詳細分布調査や遺跡隣接地での試掘調査等を実施した（県教委1997・2000・2003・2007）。

佐久南IC～佐久小諸JCT間の埋蔵文化財については、平成11年日本道路公団と文化庁、日本道路公団と県教委との保護協議により、記録保存が決定された。これに伴う発掘調査は県教委が日本道路公団か

第1章 調査に至る経緯

第1表 佐久小諸 JCT～佐久南 IC 間 事業と保護協議・調査の経過

年	事業	原文	調査進捗	整備進捗	契約先
S62 (1987)	6.30 高規格幹線道路網として協議決定 9.1 群馬県清流水市（現藤原市）～長野県佐久市 L133km 国土開発院自動車高速の新築追加区間として決定				
H8 (1991)	12.25 六十榎町（現佐久郡町）～佐久市 L23km 基本計画決定				
H9 (1994)		県教委 中部横断新建設予定地進捗詳細分布調査 (概) 八十榎 IC～佐久小諸 JCT			
H8 (1996)	12.27 佐久南 IC～佐久小諸 JCT L8km 整備計画決定<土佐自動車高速の追加区間として> H9 (1997) 2.5 群馬県沼田町（現北杜市）～六十榎町 L28km 基本計画決定				
H10 (1998)	4.8 佐久南 IC～佐久小諸 JCT L8km 施工命令 <日本道路公団へ> 12.25 六十榎町～佐久市 L23km 整備計画決定（佐久南 IC～佐久小諸 JCT 間含む）	県教委 中部横断新建設予定地進捗詳細分布調査 (概) 八十榎 IC～佐久小諸 JCT			
H11 (1999)		佐久南 IC～佐久小諸 JCT 保護文化財保護協議 （日本道路公団、文化庁、県教委） 日本道路公団：文化財保護法第 57 条の 3 通知 （東建官報第 602 号 12.13） 文化庁：勧告<法務省の決定>（愛保第 65 の H1227）			
H12 (2000)		県教委 中部横断新建設予定地進捗詳細分布調査 (概) 八十榎 IC～佐久南 IC 県教委 試探調査（野大附進捗詳細地 進捗範囲拡大）			
H13 (2001)		県教委 中部横断新建設予定地進捗詳細分布調査 出発地地（概）六十榎 IC 県教委 試探調査（野大附進捗詳細地 進捗範囲拡大）	藤田昭彦進捗		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H14 (2002)		県教委 試探調査（北塩津進捗詳細地 進捗範囲拡大）	野大附進捗 野大付城跡 藤田昭彦進捗		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H15 (2003)	12.25（第 1 回回開公談）新直轄方式に切り替わる区間 とする整備計画一部変更案の審議・議決	県教委 試探調査（西一里塚進捗詳細地 進捗範囲拡大）	野大附進捗 北塩津進捗		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H16 (2004)	1.30 八十榎 IC（概）～佐久小諸 JCT L23km (2004) 整備計画の変更（新直轄方式） <日本道路公団への施工命令申請>	佐久南 IC～佐久小諸 JCT 保護文化財保護協議 （国土交通省関東地方整備局、日本道路公団東京建設局、県 教委） 発掘調査における行政手続きについて確認書締結 <日本道路公団が責任を負う> 4.1 日本道路公団、県教委、文化財再生事業（保護文化財セ ンター）で協定書締結 舞文センター道路公団との契約に必要 県教委 試探調査（高平進捗発見）	中塩津進捗 野大附進捗 野大付城跡 西一里塚進捗 常葉進捗 今井官の直進捗		日本道路公団 東京建設局
H17 (2005)	H16 日本道路公団建設局基本計画決定 (東日本高速道路株式会社が幹線路線を承継)	県教委 試探調査（湧り進捗詳細地 入保田進捗発見）	西一里塚進捗 高平進捗		日本道路公団 東京建設局 (東日本高速道路株 式会社)
H18 (2006)	国土交通省関東地方整備局による直轄事業化	国土交通省 文化財保護法第 94 条の通知<佐久南 IC～佐久 小諸 JCT 間含む>（国土開第 14 号 4.5） 県教委 勧告<記録保存>（18 教文第 18-33 号 6.8） 国土交通省・県教委 文化財調査項目 3 番指定記録（4.18） H18 年度より国土交通省関東地方整備局との契約に変更 県教委（概）八十榎 IC～佐久南 IC 現況確認・現地踏査	細田昭彦進捗 西一里塚進捗 湧り進捗 高平進捗 西一里塚進捗 今井官の直進捗		国土交通省 関東地方整備局
H19 (2007)		佐久南 IC 直轄の調査着手	北塩津進捗 西一里塚進捗 湧り進捗 高平進捗 今井官の直進捗 北塩津進捗		国土交通省 関東地方整備局
H20 (2008)			西一里塚進捗		国土交通省 関東地方整備局
H21 (2009)		佐久南 IC～佐久小諸 JCT 本橋整備作業開始	藤田昭彦進捗 西一里塚進捗 湧り進捗 高平進捗		国土交通省 関東地方整備局
H22 (2010)			北塩津進捗 西一里塚進捗 湧り進捗 高平進捗		国土交通省 関東地方整備局
H23 (2011)			北塩津進捗 西一里塚進捗 湧り進捗 高平進捗		国土交通省 関東地方整備局
H24 (2012)			北塩津進捗 西一里塚進捗 湧り進捗 高平進捗		国土交通省 関東地方整備局
H25 (2013)			西一里塚進捗 湧り進捗 高平進捗		国土交通省 関東地方整備局

ら委託を受け、(一財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター(以下 埋文センター)に再委託して実施することとなり、平成13年度から発掘調査が開始された。

平成16年、整備計画の変更に伴い国土交通省関東地方整備局・日本道路公団・県教委の三者による保護協議がもたれ、発掘調査における行政手続は日本道路公団が責を負うことが確認された。これを受けて、日本道路公団・県教委・埋文センターの三者により、中部横断自動車道(佐久小諸JCT～佐久南IC)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書が締結され、同年度から日本道路公団と埋文センターが契約を結ぶことに変更された。平成17年10月、日本道路公団の民営化により、権利義務は東日本高速道路株式会社に引き継がれた。

平成18年4月、中部横断自動車道建設事業を国土交通省関東地方整備局が直轄で実施することに伴い、佐久小諸JCT～八千穂IC(仮称)間の埋蔵文化財について文化財保護法第94条の通知が提出され、県教委により記録保存が決定された。合わせて、国土交通省関東地方整備局・県教委・埋文センターとで中部横断自動車道(佐久JCT～八千穂IC)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施に関する協定書が結ばれ、当年度から国土交通省関東地方整備局と埋文センターが契約を結ぶこととなった。

中部横断自動車道佐久小諸JCT～佐久南IC間約8kmでは、16遺跡が調査対象とされた(第1図)。調査は平成13年度の鎌田原遺跡から着手され、随時用地取得の終了した遺跡や工事工程が急がれる遺跡から調査が進められた。毎年数遺跡の調査を実施し、同区間の調査は平成21年度に全て終了した。

整理作業は平成21年度から着手し、濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群の3遺跡については平成23年度、鎌田原遺跡・近津遺跡群・和田原遺跡群については平成24年度に報告書を刊行している(第2表)。

なお、佐久小諸JCT～小諸御影料金所間は東日本高速道路株式会社の事業区間とされ、この間に所在する中原遺跡群・野火附遺跡・野火付城跡の3遺跡については同会社事業として整理作業を行い、報告書を刊行している(埋文センター2009)。

また、佐久南IC～八千穂IC(仮称)間に所在する遺跡については平成19年度から調査を着手している。

第2表 佐久小諸JCT～佐久南IC間 調査経過

遺跡名	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	
中原遺跡群														JCT～小諸御影料金所間、東日本高速道路(株)報告書刊行済
野火附遺跡														
野火付城跡														
鎌田原遺跡														【中部横断道1】刊行済
近津遺跡群														
和田原遺跡群														
西近津遺跡群														【中部横断道3】
岡崎畑遺跡群														
濁り遺跡														
久保田遺跡														【中部横断道4】刊行済
西一里塚遺跡群														
森平遺跡														
寄塚遺跡群														【中部横断道5】本報告
今井西原遺跡														
今井宮の前遺跡														
北畑遺跡群														

■ 発掘 ■ 整理

3. 文化財保護法の手続き

本報告書に掲載した遺跡の文化財保護法に基づく届け出等の手続きは以下の表のとおりである。

第3表 文化財保護法手続き

	発掘届		昭教委指示		発見届		文化財認定	
	文書番号	日付	文書番号	日付	発見届	日付	文書番号	日付
森平遺跡 (H17)	17長理第12-19号	H17.8.12	17教文第4-18号	H17.9.28	17長理第13-14号	H17.12.27	17教文第6-118号	H17.12.27
森平遺跡 (H18)	17長理第12-28号	H18.3.20	18教文第4-9号	H18.6.6	18長理第2-1号	H18.6.26	18教文第6-36号	H18.7.23
宮城遺跡群 (H16)	16長理第38号	H16.7.16	16教文第4-17号	H16.8.12	16長理第122-2号	H16.12.21	16教文第6-115号	H17.1.17
今井西原遺跡 (H16)	16長理第12号	H16.4.1	16教文第4-10号	H16.4.9	16長理第123-1号	H16.12.21	16教文第6-114号	H17.1.17
今井宮の前遺跡 (H18)	17長理第12-29号	H18.3.22	18教文第4-10号	H18.6.6	18長理第2-2号	H18.6.28	18教文第6-37号	H18.7.23
今井宮の前遺跡 (H19)	18長理第1-27号	H19.3.15	18教文第4-38号	H19.3.26	19長理第9-1号	H19.5.18	19教文第6-29号	H19.6.4

第2節 発掘作業と整理事業の体制

本報告書掲載の4遺跡に関する調査・整理事業体制は以下の表のとおりである。

第4表 調査体制

	H16	H17	H18	H19	H21	H22	H23	H24	H25
所長	小沢将夫	仁科松男	仁科松男	仁科松男	仁科松男	窪田久雄	窪田久雄	窪田久雄	窪田久雄
副所長	藤岡俊文	根岸誠司	根岸誠司	根岸誠司	阿部精一	阿部精一	阿部精一	会津敏男	会津敏男
管理部長補佐	上原 貞	上原 貞						佐藤国昭	佐藤国昭
管理課長							窪田秀樹	窪田秀樹	村山清治
管理係長			山崎勇治	山崎勇治	窪田秀樹	窪田秀樹	西澤宏明		
調査部長	市澤英利	市澤英利	市澤英利	平林 彰	平林 彰	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭
担当課長	廣瀬昭弘	廣瀬昭弘	上田典男	寺内隆夫	大竹憲昭	上田典男	岡村秀雄	岡村秀雄	岡村秀雄
担当調査研究員 (担当遺跡)	寺内隆夫 戸矢崎通明 中野亮一 (宮城・ 今井西原)	寺内隆夫 櫻井秀雄 (森平)	寺内隆夫 寺澤政俊 (森平) 白沢勝彦 柳澤 亮 (今井宮の前)	櫻井秀雄 (今井宮の前)	櫻井秀雄 (森平)	櫻井秀雄 (森平)	上田 真 (森平・宮城・ 今井西原・ 今井宮の前)	櫻井秀雄 伊藤友久 綿田弘実 森平・宮城・ 今井西原・ 今井宮の前)	内堀 団 谷 和隆 水澤敦子 (森平・宮城・ 今井西原・ 今井宮の前)

※平成19年度以降は整理事業、平成25年度の執筆分は例目のとおり



第2章 調査の経過

第1節 発掘作業の経過

1. 発掘作業の方法

埋文センターでは調査の統一を図るため、「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、今回の調査もこれに準じた。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は以下のとおりである。

- | | |
|-----------------------|----------|
| ○森平遺跡（もりだいらいせき） | 遺跡記号：DMR |
| ○寄塚遺跡群（よせづかいせきぐん） | 遺跡記号：DYD |
| ○今井西原遺跡（いまいにしはらいせき） | 遺跡記号：DIN |
| ○今井宮の前遺跡（いまいみやのまえいせき） | 遺跡記号：DIM |

遺跡記号は、記録の便宜を図るために大文字アルファベット3文字で表記する埋文センター独自のものである。頭文字の「D」は長野県内を10地区に分割したうちの佐久地区を示し、2番目・3番目の文字は遺跡名のローマ字表記の一部から採ったものである。各種台帳や遺物の注記には、この記号を使用している。

(2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、遺構の形状及び特徴で区分した。

遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また調査段階で遺構番号が付いていなかったものについては整理段階で新たに付けている。

今回の発掘調査で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

SB：おおむね、一辺2mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘り込み。【堅穴住居跡、堅穴状遺構】

SK：単独もしくは他の掘り込みとの関係が認められないSBよりも平面形が小さな掘り込み。

【土坑、井戸】

ST：SBよりも平面形が小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配列されるもの。

【掘立柱建物跡、平地式住居跡】

SD：帯状の掘り込み。【溝跡、自然流路跡】

SQ：遺物が集中する箇所

SX：その他、性格不明遺構。

なお、SB内の柱穴・貯蔵穴等やSTを構成する個々の掘り込みにはビット（記述・図を問わず、個別に番号を付す場合は「P」）を付した。

(3) 調査区（グリッド）の設定と略称

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（X=0.0000、Y=0.0000）を基準に、200の倍数値を選んで東方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッ

ドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した(第1図)。

大々地区は、200×200mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ・・・のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を40×40mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を8×8mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、大地区を2×2mの400区画に分割したもので、西から東へA～Tのアルファベット、北から南へ1～20のアラビア数字を組み合わせて番号を与えるものだが、今回の調査では用いなかった。

現場におけるグリッド設置は、業者委託で実施した。標高は公共水準点を利用し、ベンチマークを設定した。

グリッド名の実際の表記においては、読み取りやすさを考え、各地区番号の間に適宜ハイフンを挿入することがあり、本書中でもそうした表記になっている場合がある。

座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、寄塚遺跡群、今井原遺跡、今井宮の前遺跡は日本測地系の座標値を用いたが、森平遺跡では世界測地系を用いた。そのため本書では遺跡により異なる座標値で表記されているにご留意願いたい。

(4) 遺構の発掘

森平遺跡では、遺跡の性格を把握するために本格調査にはいる前段階で、確認調査として重機によるトレンチを入れた。遺構検出は2面で実施した。Ⅲ層とした黒色土上面で平安時代の遺構を検出した。また地山上面で弥生時代の遺構検出面としたが、その上層に堆積する黒色土層は遺物包含層であり、多量の遺物が出土するため、重機による掘り下げはこの黒色土中位までとし、その後は人力により掘り下げながら遺構検出作業を実施した。出土した遺物については包含された層位名またはグリッド名あるいは遺構名を付して取り上げた。検出された遺構の調査には、平面形で重複関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。精査する順番は、重複関係の新しい遺構から古い遺構へ、という流れで行った。遺構はそれぞれに十文字方向あるいは単一方向で土層を観察し、記録した。掘りあがった状態で写真撮影と測量の記録を行ったが、遺物の出土状況に特徴のあるものなどは、調査途中の状況も、写真と測量の記録を行った。また堅穴住居跡では、掘りあがった状態で写真撮影と測量の記録を行った後に床面下(掘り方)の状況を確認して調査を終了した。

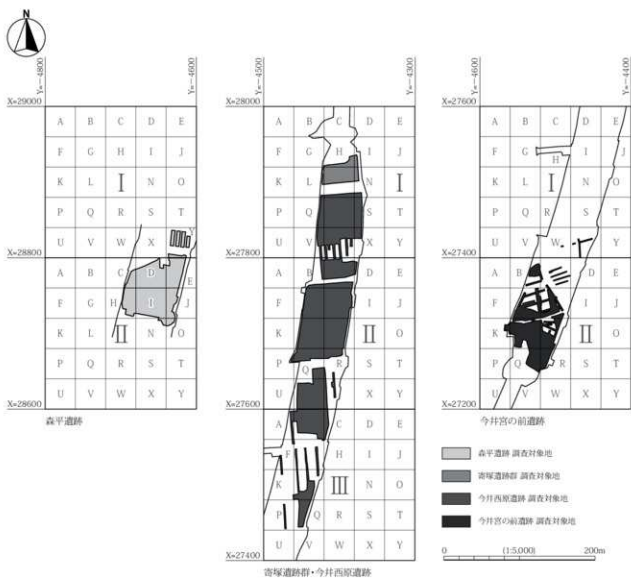
寄塚遺跡群は、地山上面までを重機により掘り下げ、その後は人力による遺構検出作業をおこなった。遺構の検出以降の工程は森平遺跡と同じである。

今井原遺跡と今井宮の前遺跡は、確認調査として重機によるトレンチを入れ、遺構が確認された範囲を中心に面的に広げる部分を決定した。遺構の検出以降の工程は森平遺跡と同じである。

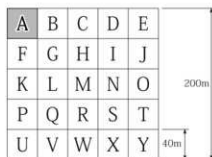
(5) 測量と写真

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもとに発掘補助員が行った。前記の測量基準杭を基準とする簡易通り方測量を基本としたが、業者委託の単点測量も併用した。遺構測量は、中地区(8×8m)単位に区切った割り付け図を基本としたが、必要に応じて住居跡などは個別の遺構図を作成した。遺構測量の縮尺は1:20を基本としたが、溝などは1:40、遺物集中など微細な図については1:10で実測した。

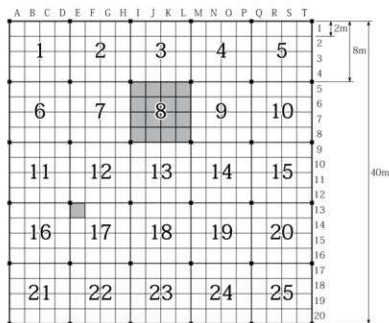
発掘中の遺構等の撮影は、マミヤRB・ペンタックス(6×7)とニコンFM2(35mm)を併用し、ともにモノクロネガフィルム(ネオパン100)とカラーリバーサルフィルム(フジクローム100F)で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼き付けは業者委託とした。また、調査区の遺構全体写真を業者委託により実施した。



大々地区(200m)：Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ…
 大地区(40m)：A・B…R…



中地区(8m)ⅣA8 ▶
 小地区(2m)ⅦAE13



第1図 グリッドの呼称

(6) 遺跡の公開

森平遺跡では、平成18年5月20日に現地説明会を実施した。108名の参加者が集まり、関心の高さを感した。なお平成17年11月20日に実施した西一里塚遺跡群の現地説明会にも森平遺跡の資料を展示した。今井宮の前遺跡も地元対象の現地説明会を平成18年6月14日に実施し、20名の参加者を得た。

展示については、埋文センターが県立歴史館および伊那文化会館にて開催している速報展にもパネルや遺物などを展示した(長野県埋蔵文化財センター速報展「長野県の遺跡発掘2004・2006・2012」)。森平遺跡については、「長野県の遺跡発掘2006」関連行事として平成19年4月8日に開催された遺跡報告会でも発表した。

2. 日誌抄

(1) 森平遺跡

- 平成17年度
- 8月22日 本日より調査を開始する。1区の重機による削ぎと検出作業。調査研究員・作業員は西一里塚遺跡群と並行して調査。
 - 9月16日 本日より西一里塚遺跡群の調査を中断して森平遺跡の調査に専念する。
 - 10月4日 本日から西一里塚遺跡群の調査を再開し、並行調査。
 - 11月1日 空中写真撮影を実施する。
 - 11月20日 西一里塚遺跡群の現地説明会開催。森平遺跡の資料も展示する。
 - 11月21日 地形測量を実施する。
 - 11月25日 本日で1区の調査を終了する。
 - 12月7日 南側ボックスとの境界地区(以後2区とする)の調査について関係機関と協議を行う。9日から2区の削ぎを行い、22日に終了予定とすることで合意する。
 - 12月9日 2区の調査を開始する。
 - 12月21日 地形測量を実施する。
 - 12月22日 2区の調査を終了する。
 - 2月28日 本日より4区・5区・6区の重機による削ぎを開始する。
 - 3月8日 本日で表土削ぎは終了する。

平成18年度

- 4月18日 本日より重機による削ぎを開始する。
- 4月25日 作業員の従事を開始する。
- 5月20日 現地説明会を開催する。参加者108名。
- 6月22日 本日で調査を終了する。

(2) 寄塚遺跡群

平成16年度

- 8月23日 本日より調査を開始する。今井西原遺跡と並行調査となる。
- 9月7日 作業員従事開始。
- 10月6日 空中写真撮影を実施する。
- 11月8日 図面作成終了。
- 12月20日 本日で調査を終了する。

(3) 今井西原遺跡

平成16年度

- 4月1日 本日より調査を開始する。
- 4月16日 調査区際の仮刺野の造成工事を行う。
- 4月23日 2区・3区の重機によるトレンチ調査、表土削ぎを開始する。
- 5月6日 作業員従事開始。
- 5月11日 1区の調査開始。
- 5月20日 4区の調査開始。
- 6月16日 3区の空中写真撮影を実施。
- 6月24日 2区の空中写真撮影を実施。
- 8月11日 2区・4区の空中写真撮影を実施。
- 8月19日 1区第1回の空中写真撮影を実施。
- 8月27日 本日より寄塚遺跡群と並行調査となる。
- 9月14日 1区第2回の空中写真撮影を実施。
- 10月27日 1区第3回の空中写真撮影を実施する。
- 12月20日 本日で調査を終了する。

(4) 今井宮の前遺跡

平成17年度

- 2月28日 1-2・3区のトレンチ調査を開始する。
- 3月9日 トレンチ調査の結果を踏まえて3区の一部を重機により表土削ぎを開始する。
- 3月13日 安全対策を行い、表土削ぎを終了する。

平成18年度

- 4月24日 1-2区の重機によるトレンチ調査と表土削ぎを開始する。
- 4月25日 作業員従事開始。
- 5月1日 3区の面的調査範囲を拡張する。
- 6月13日 空中撮影を実施する。
- 6月14日 地元対象の現地説明会を開催。参加者20名。
- 6月22日 本日で調査を終了する。
- 2月5日 5区の調査開始。重機によるトレンチ掘削。
- 2月6日 トレンチの土層観察、単点測量を行い、調査を終了する。

平成19年度

- 4月23日 4区の調査開始。重機によるトレンチ掘削、土層観察。
- 5月15日 トレンチ範囲の単点測量を行う。
- 5月16日 本日で調査を終了する。

第2節 整理作業の経過

1. 整理作業の方法

(1) 基礎整理作業

発掘作業年度に基礎整理作業として図面整理、写真整理、遺物洗浄及び注記等の作業を行った。

遺構図面類および委託測量図類は記載内容の確認、修正を行い、台帳を作成した。竅穴住居跡など一部の個別図はトレースのための2次原因を作成した。調査所見は一部表にしてまとめるなどして、内容の点検、追加記載を行った。写真類は撮影内容を点検し、35mm カラーリバーサルはマウントに、その他はアルバムに注記した。モノクロ写真はベタ焼きを貼付し、35mm カラーリバーサルフィルムはマウントに、6×7はマウントを付けず、台帳作成の後アルバムに収納した。遺物は、洗浄・注記を行い、取り上げ袋ごとに台帳登録した。金属製品については、県立歴史館にてX線透過写真撮影を実施し、本格整理作業に備えた。

(2) 本格整理作業

報告書作成に向けて、記録類相互を調整や調査所見との統合、出土遺物の検討整理などの本格整理作業を平成21～25年度に実施した。なお、平成21～23年度については、本報告遺跡以外の本格整理作業と並行して実施した。

遺構図面類は、基礎整理作業で作成した修正図や2次原因をもとに、個別遺構図、土層図、遺構配置図(全体図)などを作成し、Adobe Illustratorを用いてデジタルトレースを行った。

遺物は、土器・土製品、石器・石製品、金属製品、その他の遺物に大別して整理作業を進めた。土器・土製品については、接合・復元・補強を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。出土遺物は遺構単位に観察し、全体像を把握した後に遺構内外の出土遺物ともできる限り図化・掲載した。実測は手実測により、1:1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。また必要に応じて拓本も行った。トレースはすべて製図ペンを用いた手作業で埋文センターにおいて実施した。掲載した土器・土製品については、観察表を作成した。

石器・石製品は分類を行いながら、報告書掲載遺物を抽出した。実測はすべて手実測により、1:1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレースはすべて製図ペンを用いた手作業で埋文センターにおいて実施した。掲載した石器・石製品については、観察表を作成した。

金属製品については、保存状態が比較的良好であったため、保存処理は行わなかった。

トレースした遺物図は、スキャンし、デジタルトレースした遺構図とあわせてAdobe Illustratorを用いてデジタルデータ化して図版を作成した。

遺物写真は、業者委託により実施した。撮影には巻頭カラー図版用にカラーリバーサルフィルム、モノクロ写真図版用にはモノクロフィルム(ともに6×7カメラ使用)を使用した。テスト撮影を兼ねて一眼レフデジタルカメラでも撮影を行った。

なお、寄塚遺跡群と今井西原遺跡の遺跡範囲は、現在の佐久市教委による遺跡範囲と調査時点では異なっているが、本書では発掘調査を実施した時点での遺跡範囲としてある。

(3) 資料の収納

出土遺物、実測図面、写真などの記録類は、報告書刊行後の保管先変更へ備えて、分類収納した。

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、土器・土製品は出土遺構・地区別に、石器・石製品は器種別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図面は、手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真収納台帳に登録し、アルバム（ファイル）に収納した。

2. 日誌抄

平成21年度

- 1月5日 委託による土器実測を始める。
- 1月6日 遺構図の点検、2次元図作成、デジタルトレスを始める。
- 1月26日 注記作業を始める。
- 1月28日 注記作業終了。

平成22年度

- 4月1日 遺構図の2次元図作成およびデジタルトレスを始める。

平成23年度

- 10月1日 土器検合、遺構図の修正およびデジタルトレスを始める。

平成24年度

- 4月2日 整理作業開始。
- 4月9日 土器検合、遺構図のデジタルトレスを始める。
- 5月31日 依入市取組課にて今井地区の旧公園を閲覧・複写。
- 6月12日 土器復元作業を始める。
- 7月11日 設楽博己東京大学大学院教授が森平遺跡の弥生土器の資料調査に本誌とする。
- 9月10日 土器整理を始める。
- 9月25日 復元作業終了。
- 11月20日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄岡崎医科大学技術員に森平遺跡他の出土人骨・動物骨報告に関する指導を受ける。
- 12月3日 土器の実測を始める。

- 12月19日 長野県考古学会員小山岳夫氏に森平遺跡の弥生土器指導を受ける。
- 1月7日 土器実測を開始する。
- 2月20日 塚山智信州大学理学部教授に石材鑑定指導を受ける。

平成25年度

- 4月1日 整理作業開始。
- 4月5日 土器・石器の実測、遺構図の修正・デジタルトレスを始める。
- 6月6日 一部実測と併行して土器トレスを始める。
- 6月9日 埼玉弥生土器研究会が長野県埋蔵文化財センター弥生時代資料調査。
- 6月11日 土器実測を完了する。
- 10月20日 日本考古学会2013年度長野大会研究発表資料集で小山岳夫氏が、森平遺跡、寄塚遺跡群について扱う。
- 9月30日 土器実測、トレス完了。
- 10月30日 土器実測、トレス、属性表の作成を完了。
- 10月31日 遺物写真撮影（業者委託）を開始。
- 11月11日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄岡崎医科大学技術員による森平遺跡他の出土人骨・動物骨報告に関する指導を受ける。
- 11月28日 遺物写真撮影終了。
- 1月10日 印刷・製本業者決定。
- 3月25日 報告書刊行。

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

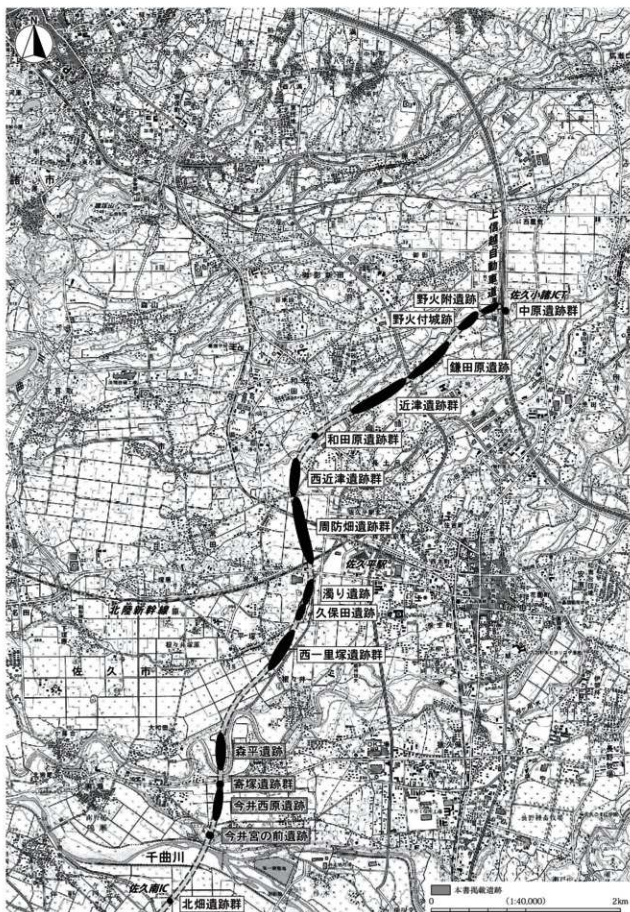
通称佐久平と呼ばれる一帯は、北に浅間山、東に荒船山や八風山などの関東山地(佐久山塊)、南に蓼科山・八ヶ岳の山々に囲まれた標高700m前後の高原性盆地である(註1)。佐久平の中央部ではこれらの山々から流れ出た湯川・濁川・滑津川・片貝川などの中小河川を集め、川上村を源流とし南から北へ流下する千曲川に合流する。

佐久平の地形は千曲川の右岸と左岸で大きく異なる。千曲川右岸の佐久平北部では浅間山の火山活動により形成された地形が広がる。浅間山は、黒斑山・仏岩・前掛山の3つの火山の集合からなる。数万年前に火山活動を開始した浅間山のもっとも古い山体である黒斑山が約23,000年前に大規模な水蒸気爆発した。その際に黒斑山の東半分が大規模な山体崩壊を起こし、土石なだれとなって群馬県北麓と長野県側の南麓を襲った。このうち長野県側のものは塚原土石なだれと呼ばれ、その残丘である「流れ山」が佐久市塚原を中心に点在している。

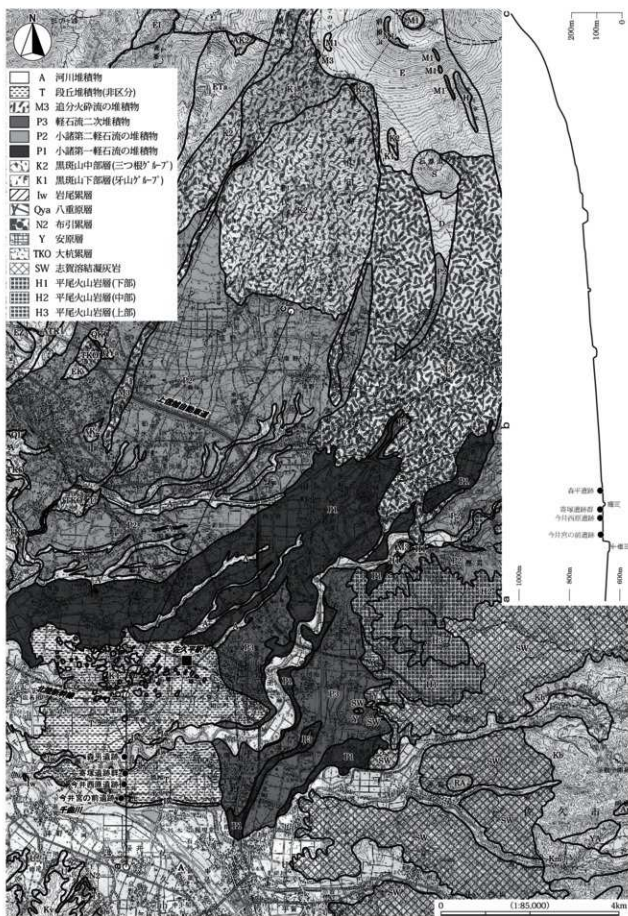
その後、約13,000年前には大規模な噴火によって軽石流とも呼ばれる火砕流が浅間山南麓から佐久平を覆った。これが浅間第一軽石流である。約11,000年前にも火砕流が発生し、こちらが浅間第二軽石流である。軽石流堆積物の最大の厚さは30mにも達するという(佐久市1988)。これらの軽石流は小河川でも浸食されやすいため浅間南麓から放射状に浸食谷が形成され、「田切り地形」と呼ばれる箱形に切り立った佐久平北部独特の地形を造り出している(註2)。こうした田切りの台地上には畑作地、田切りの底面には水田が広がっている。なお、この田切り地形がみられるのは、おおそ長土呂地籍の小海線付近までである。その南側では田切り地形は消滅し、湿地帯の低地と微高地、それに流れ山からなる地形が広がっている。千曲川右岸の佐久平北部ではこのような浅間山からの噴出物や土石なだれ、軽石流が厚く堆積しているため、千曲川左岸の佐久平南部よりも一段高い段丘面を形成している。

一方、千曲川左岸の佐久平南部では山地部分と平地部分に分かれる。山地は蓼科・八ヶ岳山麓から筋状に伸びる尾根からなり、それらの谷筋から流れ出る布施川・宮川・中沢川・大沢川・片貝川など小河川は小規模な扇状地を造り出している。平地には千曲川の氾濫により形成された沖積扇状地が広がっている。

本書に掲載する森平遺跡、寄塚遺跡群、今井西原遺跡、今井宮の前遺跡の4遺跡は、千曲川右岸に位置し、その支流である湯川をはさんで佐久平北部の横和地籍・今井地籍に所在する。森平遺跡は湯川右岸の低位段丘(第1河岸段丘)に立地するが、他の3遺跡は湯川と滑津川にはさまれた台地上に立地する。この台地上は浅間軽石流に覆われている。



第1図 中部横断自動車道位置図(佐久小諸JCT～佐久南IC間)



第2図 佐久周辺地質図

第2節 歴史的環境

佐久地域（小諸市・佐久市・軽井沢町・御代田町・立科町・佐久穂町・小海町・北相木村・南相木村・南牧村・川上村）では約2,500箇所の遺跡が残されている。ここでは、本書掲載の森平遺跡、寄塚遺跡群、今井西原遺跡、今井宮の前遺跡の4遺跡が所在する千曲川右岸の佐久平北部を中心として概観する（註3）。

旧石器時代

佐久地域で最も古い遺跡は、西山の蓼科山麓から伸びる尾根上に立地する佐久市の立科F遺跡と香坂川流域の八風山II遺跡、香坂山遺跡であり、約30,000年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼる。立科F遺跡では黒曜石製の台形様石器が出土し、放射性炭素年代測定により約31,000年前のものであることが判明した。群馬県境に近い八風山は良質なガラス質黒色安山岩（無斑晶質安山岩）の産地であるが、八風山II遺跡ではそのガラス質黒色安山岩を用いた石刃素材のナイフ形石器が出土した。放射性炭素年代測定によれば約32,000年前という数値が出ており、この時期からこの原産地が開発されていたことがわかる。3遺跡ともに始良丹沢火山灰（AT）の下層からの出土である。AT以前の遺跡は、今回の中部横断自動車道建設に伴う発掘調査により確認された西山地域の高尾A遺跡も含めた4遺跡をあげるにすぎないが、AT以降の後期旧石器時代後半期には遺跡が急増する。この時期の遺跡は100箇所を超えるが、南牧村野辺山高原や川上村などの高原地帯に集中する。野辺山高原では、国内ではじめて細石刃文化が発見された国史跡の矢出川遺跡や中上原遺跡、川上村では馬場平遺跡、三沢遺跡、柏重遺跡などがある。

一方、後期旧石器時代終末から縄文時代草創期にかけては、ガラス質黒色安山岩の産地に近い香坂川流域の佐久市下茂内遺跡や八風山VI遺跡では槍先形尖頭器を大量に製作していたことが明らかとなった。また今回の中部横断自動車道建設に伴う発掘調査でも、佐久穂町の満り久保遺跡で槍先形尖頭器、細石刃等が出土している。

これに対して佐久平北部では、旧石器時代の遺跡の存在は皆無といってよい。これは、前節でも記したように、約13,000～11,000年前に噴出した軽石流の堆積により、それ以前の遺跡は厚い軽石流の下に埋没しているか、あるいは押し流されてしまった可能性が高いからである。

縄文時代

佐久地域における縄文時代の集落遺跡の分布は、5つの地域に大別できる（櫻井2012）。南佐久郡南部の千曲川源流域、佐久市の東山地域をはじめとする関東山地西麓、佐久平、佐久市の西山地域を含む蓼科山北麓、浅間山麓である。縄文遺跡は佐久平の周縁部に多くみられ、千曲川源流域では早期の北相木村枋原岩除遺跡や前期の小海町中原遺跡、中期の川上村大深山遺跡などが、蓼科山北麓では中期の佐久市（旧望月町）平石遺跡、下吹上遺跡などが、関東山地西麓では中期の佐久市吹付遺跡や寄山遺跡、後期の軽井沢町茂沢南石堂遺跡などがある。浅間山麓では標高約700～850mにかけての地帯に縄文遺跡は集中している。これはこの標高地帯が浅間第一伏流水の湧水群地帯にあたることに起因し、主な遺跡としては縄文前期初頭の「塚田式」の標識遺跡である御代田町塚田遺跡、国重要文化財の指定を受けた中期中葉の焼町土器を多数出土した御代田町川原田遺跡、中期後半の中核的集落跡である小諸市郷土遺跡、遮光器土偶や人面付注口土器といった稀少な遺物が認められる後晩期が主体の小諸市石神遺跡群などがある。またこの地域では八ヶ岳西南麓よりもやや遅れて中期後半から後期に最盛期を迎える。

これに対して田切り地形が発達する中央平地では、縄文遺跡の分布は稀少である。これまで中期の佐久市中村遺跡や小諸市久保田遺跡をあげる程度であったが、千曲川左岸、兩川の扇状地にあたる田口地籍の大奈良遺跡では狭い調査区であったにもかかわらず中期の堅穴住居跡17軒等が検出され、約3,500点も

の打製石斧も出土している。事例が少ない平坦部での大規模な集落遺跡であり、注目される。

軽石流により厚く覆われたこの地は集落を営むには適していなかったであろう。近年、西近津遺跡群で縄文時代中期の堅穴住居跡が2軒発見されたことは注目されるが、やはり集落遺跡の存在は稀少な地域であることは間違いない。

このような集落遺跡の僅少さに対して陥し穴の検出事例は着実に増加している。長土呂地籍の長土呂遺跡群、近津遺跡群、聖原遺跡などである。八ヶ岳西南麓でみられるような一遺跡で数十単位もの陥し穴が検出される事例はないが、佐久平北部の平坦部は狩猟場となっていたことが推測できよう。

弥生時代

佐久地域での縄文時代晩期終末から弥生時代中期前半の遺跡は稀少であり、晩期の標識遺跡である小諸市水遺跡の他、佐久穂町中原遺跡、佐久市（旧臼田町）月夜平遺跡、南牧村矢出川遺跡などで土器が出土するにすぎず、佐久平北部の平坦部では、岩村田地籍の下信濃石遺跡で水式土器が検出されている程度である。そのなかでは、佐久穂町館遺跡で中期前半に比定できる土偶形容器の出土をみるのが特筆できる。

中期後半になると、佐久平北部に集落が形成されはじめる。佐久市北西久保遺跡・鳴澤遺跡群五里田遺跡・西一本柳遺跡・根ヶ井芝宮遺跡・森平遺跡などである。これらの遺跡は湯川右岸の根ヶ井地籍から一本柳地籍に集中する。昭和59・60年に行われた発掘調査により92軒の堅穴住居跡が発見された北西久保遺跡が中期後半の代表的遺跡と考えられてきたが、その東に隣接する西一本柳遺跡では現在までに約230軒以上の住居跡が、西に隣接する鳴澤遺跡群五里田遺跡でも43軒の住居跡が検出され、これら3遺跡は中期後半の一統きの大規模集落であったことが判明しつつある（小山2011）。この他、湯川左岸の根ヶ井芝宮遺跡や右岸の森平遺跡でも集落の出現をみたのである。他の地域では瀬戸の和田上遺跡群や伴野の西裏遺跡群・北裏遺跡群などでも集落が出現する。

後期になると段丘上や低地に臨む台地縁辺部にも進出し、遺跡数は拡大する。湯川・濁川が流下する岩村田・長土呂地籍には佐久平でも最もこの時期の遺跡が集中する。なかでも岩村田地籍の円正坊遺跡周辺、長土呂地籍の西近津遺跡群・周防畑遺跡群周辺、それに中期後半以来の西一本柳遺跡周辺にその中心がある。これらは田切り地形が消滅した常田・塚原地籍の低地を取り囲むように立地している。この低地では濁り遺跡や西一里塚遺跡群で平安時代以降の水田跡が検出されている。いまだ弥生時代の水田跡の発見はないが、弥生時代においてもこの低地周辺が生産基盤であったであろうことは古くから指摘されている。

一方、千曲川左岸の佐久平南部の広大な沖積平野は弥生時代にはまだ開拓が進んでいなかったようであり、遺跡の発見事例は少ない。西裏遺跡群・北裏遺跡群や後沢遺跡、後家山遺跡などのように丘陵地帯に拠点集落がみられる。

古墳時代

佐久平北部で繁栄した弥生後期の大集落遺跡は、古墳時代に入ると解体し、小規模な集落遺跡が点在するようになる。古墳時代前期の集落はその立地も弥生時代集落密集地帯の外縁部にあたる場所に目立ってくる。佐久市近津遺跡群・栗毛坂遺跡群・腰巻遺跡、小諸市鎌田原遺跡・和田原遺跡群・久保田遺跡などの他、石神遺跡群、御代田町塚田遺跡、軽井沢町泉遺跡などの浅間山南麓でも小規模な集落が営まれるようになる。ただしこれらは短期間で終焉したものが多く、中期後半になると、北西久保遺跡や下芝宮遺跡、下聖壇遺跡などのように前期には放棄されていた弥生時代の集落密集地帯に再び集落が形成され、また御代田町前田遺跡のように縄文時代から古墳時代までは居住域としては利用されなかった田切り台地上のさらに奥部でも集落が出現するようになる。千曲川左岸地域でも沖積低地にある市道遺跡などで新たに集落の出現をみる。後期には立地は中期を踏襲しながら、飛躍的に規模を大きくし、遺跡数も増大する。佐久平北部の田切り台地上には古墳時代後期から平安時代前期にかけて継続する大規模集落がいたるところで

みられる。代表的な遺跡は、小諸市中原遺跡群、小諸市・御代田町・佐久市にまたがる鉾師屋遺跡群、佐久市聖原遺跡・西近津遺跡群・周防畑遺跡群・芝宮遺跡群・栗毛坂遺跡群・桶村遺跡である。

墳墓については、流れ山を利用した根々井地籍の根々井大塚古墳が佐久地方最古の墳丘墓に位置づけられ、千曲川左岸では前方後方型墳丘墓の瀧の峯1号墳・2号墳がみられる。他には右岸の藤塚古墳群や、西近津遺跡群で検出された3基の古墳が前期古墳として理解されるのみであり、佐久地域では前期古墳は稀少である。前期の小諸市野火付遺跡では古墳からの出土が一般的である石銅が前期の堅穴住居跡から発見されているが、これは前期古墳が少ないこの地域の特性を如実に示していると考えられる（櫻井2011）。中期古墳も数は少なく、調査されたものとしては北西の久保古墳群をあげる程度である。古墳の築造は爆発的に増大するのは後期の6世紀後半から7世紀代である。

佐久地域に約500基ある古墳のうちの大半が後期以降の古墳である。そのなかには径約30mという佐久地方最大の佐久市三河田大塚古墳、金銅製馬具の優品が出土した東一本柳古墳、長野県内では珍しい埴輪が多量に出土した北西の久保17号墳などがある。また祭祀遺跡としても軽井沢町入山峠祭祀遺跡や立科町雨境峠祭祀遺跡群がみられ、これらを結ぶルートは古東山道として理解されている。

古代（奈良・平安時代）

701年に制定された大宝律令により確立された律令体制のもとで、佐久地方は、信濃国佐久郡という行政単位に編成されることとなった。佐久郡には8つの郷が置かれた。『和名類聚抄』には美理郷、大村郷、大井郷、刑部郷、青沼郷、茂理郷、小沼郷、余戸郷の名が記されている。官道である東山道も佐久地方を通過し、清水駅、長倉駅が置かれた。また御牧も望月牧、塩野牧、長倉牧の3つの牧が置かれ、なかでも望月牧は、「望月の駒」として全国的にも名馬の産地として譽れ高いものであった。遺跡としては前述したように古墳時代後期から継続するものが多いが、これらは奈良時代から平安時代前期に最盛期を迎える。そのうちのひとつである小諸市・佐久市・御代田町にまたがる鉾師屋遺跡群は面的調査した部分で約100,000㎡という県内でも例をみない広大な面積であった。古墳時代後期から平安時代にかけて357軒を超える堅穴住居跡と掘立柱建物跡434棟などが発見され、このうち約130軒の堅穴住居跡が奈良時代に比定される。同遺跡群を構成する遺跡のうち御代田町野火付遺跡では平安時代の埋葬馬が発見された。また同遺跡群に近隣する小諸市宮ノ反A遺跡群では現在のところ佐久地域唯一の官衙跡が発見され、長倉駅の駅稲を納める倉庫であるとの見解も近年出されている（田中2009）。この周辺に東山道および長倉駅が存在していた可能性が高くなっている。長土呂地籍の聖原遺跡も約100,000㎡の調査面積であり、堅穴住居跡818軒、掘立柱建物跡869棟が検出された。この他にも栗毛坂遺跡群では堅穴住居跡約150軒・掘立柱建物跡約140棟などが、また芝宮遺跡群では堅穴住居跡約250軒、掘立柱建物跡90棟などが検出され、海獣歯骨鏡も出土している。芝宮遺跡群と田切りを挟んで北に隣接する小諸市中原遺跡群でも堅穴住居跡約140軒・掘立柱建物跡約90棟などが発見されている。中部横断自動車道建設に伴い調査した西近津遺跡群・周防畑遺跡群でもこの時期の相当規模の集落が姿をあらわしている。これらの遺跡は規模が大きいことも特筆されるが八咫鏡や帯金具、獣脚風字鏡、円面鏡、皇朝十二銭、銅碗、瓦塔、金銅製鈴、馬鈴、銅印、石印など稀少遺物の出土も少なくない。また県内で数例しかない漆文書が出土した宮ノ反A遺跡群竹花遺跡も注目される。

佐久郡衙の比定地はいまだ確定していないが、佐久平北部の田切り台地上に存在している可能性が高い。なお、「大井」と記された墨書・刻書土器が長土呂地籍を中心とした佐久平北部から出土する事例が数例みられ、ここが「大井郷」であった可能性は極めて高い。こうした佐久平北部に栄えた大規模集落遺跡は律令体制の崩壊する10世紀には住居数の急激な減少がみられ、解体の道をたどる。これに呼応するかのようにより9世紀後半以降には浅間山南麓や南佐久郡南部など、それまで集落が営まれなかった山間地にも小

さな集落が点在するようになる。そして時代は中世へと移っていく。

ところで、平安時代は甚大な自然災害に見舞われた時代でもあった。888年の千曲川の大洪水（仁和の大洪水）の爪痕は佐久市砂原遺跡の2mを超える堆積砂層や上中込地籍の離山遺跡にも残されている。また1108年の浅間山の大噴火（天仁の大噴火）は御代田町東部から軽井沢町西部を火砕流が襲いかかった。現在でも平均8mの厚さをもつ追分火砕流の下には御代田町池尻遺跡のように眠っている遺跡が少なくないであろう。またその際に降下した浅間Bテフラも軽井沢町泉遺跡で確認されている（川崎・櫻井ほか2012）。

中世（鎌倉時代・室町時代・戦国時代）

佐久地方に根拠をもつ武士には、桜井太郎・次郎、根井小弥太、小室太郎、望月次郎、落合五郎などが知られ、佐久党と呼ばれる武士団を形成し、木曾義仲挙兵の際には義仲に従って活躍した。そのひとり根井行親の居館跡は根々井地籍の正法寺一帯に比定されており泉史跡になっている。本書掲載遺跡に近接して今井城跡がある。義仲に従った今井四朗兼平の本貫地としては岡谷市、松本市、長野市とともにこの佐久市今井地籍も比定地の候補とされるが、その可能性は低いと考えられている。

義仲滅亡後は伴野庄地頭職に任ぜられた小笠原長清を祖とする大井氏と伴野氏が次第に台頭し、千曲川右岸は大井氏、千曲川左岸に伴野氏が勢力を伸ばした。岩村田・長土呂地籍には大井氏に関係するとみられる遺跡が少なくない。方形の地割をもつ長土呂館跡は大井氏の初期の館跡ともいわれる。大井城は王城（泉史跡）・石並城・黒岩城からなるが大井氏の城とされる。発掘調査も実施されており、15・16世紀の遺構や遺物が出土している。また大井氏が開基した龍雲寺の可能性が高い建物跡が発見された下信濃石遺跡や時宗の開祖・一遍が1279年に佐久へ遊行した際に訪れたといわれる大井太郎の館の可能性が指摘される柳堂遺跡などもある。岩村田地籍の若宮八満神社も大井氏の創建と伝えられる。

一方の佐久平南部では伴野氏の館跡とみられる野沢館跡があり、10回にのぼる発掘調査が行われ泉史跡となっている。

集落遺跡では、12～13世紀の中世初頭期の遺跡の発見例は佐久でも少ない。そのなかで御代田町・佐久市にまたがる栗毛坂遺跡群前藤部遺跡は1,000基以上の土坑と80棟以上の堅穴状遺構などが発見され注目できる。14世紀代も多数の遺構群がみられ豊富な遺物がみられている。他には小諸市・御代田町・佐久市にまたがる野火付遺跡や佐久市前田遺跡で集落跡がみついている。また佐久市北西久保遺跡に隣接して鎌倉時代中期から後期の五輪塔などからなる石造塔婆群がみられる。生産遺跡としては、岩村田地籍の松ノ木遺跡で水田跡が発見されている。

室町時代も応仁の乱以降になると、佐久地域では大井氏と伴野氏が抗争を繰り返した末に、文明16年(1484)に村上氏により大井氏の宗家はここに滅んだ。それ以後は盟主不在の地となり、小田井城の尾台氏や志賀城の笠原氏、田口城の田口氏、芦田城の依田氏など多くの小領主が割拠することとなる。戦国時代の城郭は多く、黒岩城、金井城で調査が実施されている。1540年からは武田信虎、晴信の侵略を受け、1549年には武田氏の支配下になることになった。武田晴信（信玄）は南牧村海尻城を奪い佐久へ進み、前山城を拠点とした。そして内山城、志賀城などを攻め落とした。

近世（江戸時代）

依田信蕃・松平康国父子により佐久地方は統一され、仙石氏がその後を引き継いだものの、その後は松平忠憲が1624年に徳川忠長領であった佐久郡のうちの約35,000石を分与されたことで分割支配がはじまった。年とともに細分化がさらに進み、信濃で最も所領関係の複雑な地域のひとつとなった。小諸藩は石高を次第に減らし、代わって幕府領（天領）が増え、後年には岩村田藩や田野口藩も置かれることとなる。この他にも旗本知行所などもみられる分割状態であった。天領の陣屋は小諸市御影に置かれ、泉史跡となっ

ている。幕末に築城された田野口藩の龍岡城跡は全国で2例しかない星形城郭として著名であり、国史跡の指定を受けている。

五街道のひとつである中山道も整備され、佐久には9つの宿が置かれ、一里塚も各地に設置された。本書掲載遺跡が所在する地籍は中山道沿いではないが、岩村田宿と塩名田宿の間に位置する。

17世紀中頃には新田開発も盛んとなり、佐久では五郎兵衛新田・御影新田・塩沢新田・八重原新田が有名である。これらは用水堰を新たに切り開いたものであり、佐久平北部の台地でも水田耕作が可能となっていたのである。佐久市常田居屋敷遺跡群では近世以降とみられる水田跡が発見されている。今井西原遺跡の東にある三河田新田も市村新田、矢島新田とともに五郎兵衛新田を開いた市川五郎兵衛により開発されたといわれている。

災害にもたびたび見舞われたが、とりわけ寛保2年(1742)に起きた千曲川の大水害は「戊の大満水」と呼ばれ、被害は甚大であった。浅間山も天明3年(1783)に大噴火し、群馬県側に大被害をもたらした。

本書掲載遺跡の所在する地籍についてみると、近世には横和村と今井村になる。横和村は小諸藩領→幕府領→徳川忠長領→小諸藩領→甲府藩領→幕府領と幾次の変遷を経て、正徳元年から岩村田藩領となり明治時代に至った。寛永6年・寛文元年の検地によると戸数49、人口190名であった。

今井村も目まぐるしく所領体制が変わり、小諸藩領→徳川忠長領→小諸藩領→幕府領→坂木藩領→幕府領を経て、享保10年から旗本水野氏領となった。寛永20年には一部が三河田新田として分村した。

近代以降

明治12年の郡区町村編成法により、佐久は南北両郡に分けられ、それぞれに郡役所が設けられた。また町村の合併も進められ、明治22年には南佐久郡は23村、北佐久郡は小諸町・岩村田町の2町と26村となった。

第二次世界大戦後、昭和28年に町村合併促進法が公布されたことにより佐久地方でも昭和の大合併が相次いだ。そして佐久市が昭和36年に誕生したことで昭和の合併は一区切りが付き、佐久市・小諸市の2市と、北佐久郡は御代田町・軽井沢町・立科町・望月町・浅科村・北御牧村の4町2村、南佐久郡は白田町・佐久町・小海町・八千穂村・北相木村・南相木村・南牧村・川上村の3町5村となった。

この行政体制は平成まで続いたが、平成の大合併により平成17年4月1日をもって佐久市・望月町・浅科村・白田町は合併し、新「佐久市」が誕生した。また佐久町と八千穂村も平成17年3月20日に合併して佐久穂町となった。北御牧村は平成16年4月1日に東部町と合併して東御市となり、佐久地方から離れた。

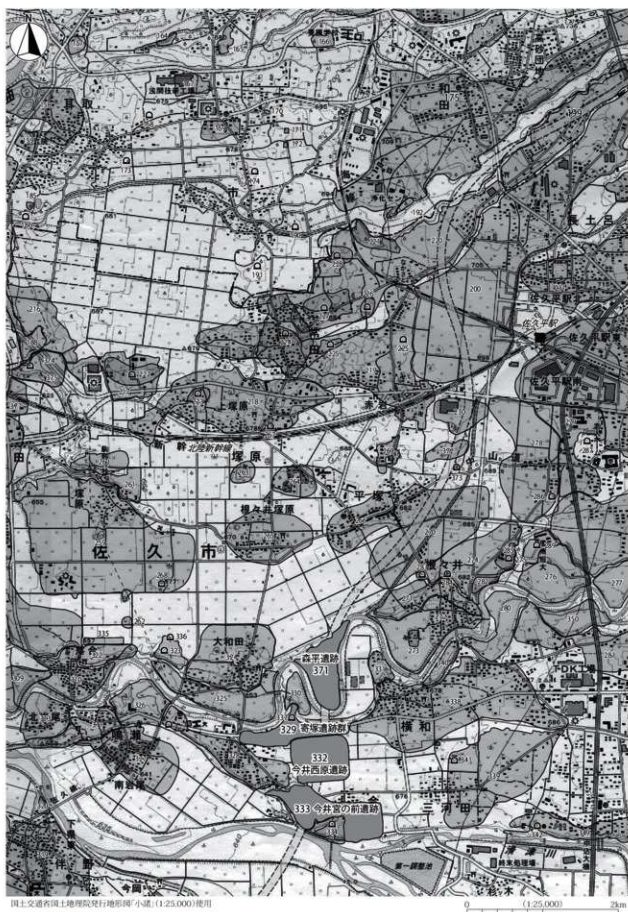
本書掲載遺跡が所在する地籍についてみると、横和村と今井村は、鳴瀬村・三河田村と明治22年に合併し、高瀬村となった。なお、明治24年段階で旧横和村は戸数64、人口311名、旧今井村は戸数45、人口198名であった。「角川日本地名大辞典」編纂委員会ほか(1990)。高瀬村の名前の由来は、「千曲川の断崖上にあり、湯川と千曲川の合流する水声にもとづく」ものであったという(平林1975)。

この高瀬村は中佐部村・岩村田町・平根村と合併し、昭和29年に浅間町となり、そして昭和36年に佐久市となったのである。

〔注1〕市川隆大氏は、地形的に重要な意味での佐久盆地は、佐久市白田から野沢・中込・坂井・岸野の沖積扇状地に限られるとし、「岩村田・小諸・塩原などは浅間山から噴出したが砂流が埋積したシラス台地であり、地形的にみると盆地とはいえない」ことを指摘する(市川2007)。

〔注2〕軽石流堆積物は固結度もゆるく崩れやすいので、ごく小さい河川により垂直に侵食される。そして浸食された分がその堆積物の底の地下水位まで達すると下層はとどまる。そして両側の谷も浸食により切り崩され、谷底を広げていく(小諸市誌編纂委員会1986)。この作用により田切り地形は形成される。

〔注3〕佐久平の遺跡の立地地形については「佐久市誌 自然編」では東部山地、西部山地、中央低地に分類している。東部山地は関東山地(佐久山塊)の北半部で、西部山地は八ヶ岳・蓑刈山地にあたる。地元ではそれぞれ「東山」地域、「西山」地域と呼ばれていることから、本稿では東山地域、西山地域の語を用いる。



第3図 周辺の遺跡分布図

第3章 遺跡の位置と環境

第1表 周辺遺跡一覽

地目番号	遺跡名	市町村名	遺跡番号	所在地	跡								
					縄	縄	古	中	古	中	古		
1	西茂神	新代町	1	篠野	○								
2	東茂神	新代町	2	篠野 塩	○								
3	満沢	新代町	6	篠野	○								
4	上藤塚	新代町	12	篠野	○								
5	東二ツ石	新代町	13	篠野	○								
6	涌玉	新代町	14	篠野	○								
7	額田塚古墳	新代町	15	篠野	○								
8	塚田古墳群	新代町	16	篠野	○								
9	高塚	新代町	17	篠野	○								
10	めがね塚古墳群	新代町	18	馬瀬口	○								
11	下原古墳群	新代町	19	馬瀬口	○								
12	小田井城跡	新代町	20	新代田						○			
13	兄玉	新代町	28	兄玉									
14	塩野西原	新代町	29	塩野	○								
15	上西田	新代町	30	篠野	○								
16	西品	新代町	32	塩野	○								
17	赤堂	新代町	33	篠野	○								
18	下藤塚	新代町	37	塩野	○								
19	野火付	新代町	40	小田井						○			
20	前田	新代町	41	小田井						○			
21	十二	新代町	42	小田井						○			
22	根岸	新代町	43	小田井						○			
23	根岸古墳	新代町	44	小田井						○			
24	金舟城跡	新代町	45	小田井						○			
25	中金舟	新代町	46	小田井						○			
26	曾根城跡	新代町	53	小田井						○			
27	跡取	新代町	54	小田井						○			
28	前藤部	新代町	55	小田井						○			
29	聖堂口	新代町	56	小田井						○			
30	西向原	新代町	57	馬瀬口						○			
31	塩野城跡	新代町	60	塩野						○			
32	額田	新代町	61	塩野						○			
33	下克田	新代町	62	塩野						○			
34	塚田	新代町	63	塩野						○			
35	吾妻城跡	新代町	65	鹿町						○			
36	馬瀬口城跡	新代町	66	馬瀬口						○			
37	下赤堂	新代町	67	塩野						○			
38	中野原	新代町	68	塩野						○			
39	額原	新代町	69	塩野						○			
40	下大宮	新代町	71	塩野						○			
41	下ノ手	新代町	72	塩野						○			
42	北原	新代町	73	塩野						○			
43	阿塚	新代町	74	馬瀬口						○			
44	長倉城跡	新代町	75	小田井						○			
45	戸分城跡	新代町	76	小田井						○			
46	鶴巻	新代町	79	兄玉						○			
47	一本木	新代町	81	兄玉						○			
48	鹿巻	新代町	82	兄玉						○			
49	下兄玉古墳	新代町	83	兄玉						○			
50	塚保城跡	新代町	84	新代田						○			
51	小孫城跡	小諸市	78	丁						○			
52	鹿島古墳	小諸市	79	丁						○			
53	東沢城跡	小諸市	81	甲						○			
54	松舟古墳	小諸市	82	甲						○			
55	北蔵古墳群	小諸市	83	甲						○			
56	塚上	小諸市	84	甲						○			
57	塚上古墳群	小諸市	85	甲						○			
58	中松青城跡	小諸市	86	甲						○			
59	吉熊野堂古墳	小諸市	87	甲						○			
60	熊野裏A	小諸市	88	甲						○			
61	塚下古墳群	小諸市	89	甲						○			
62	石神遺跡群	小諸市	90	八歳						○			
63	長嶋	小諸市	91	八歳						○			
64	沼田	小諸市	92	八歳						○			

地目番号	遺跡名	市町村名	遺跡番号	所在地	跡								
					縄	縄	古	中	古	中	古		
65	牛原	小諸市	93	八歳									
66	牛原塚古墳	小諸市	94	塩野						○			
67	宮輪城跡	小諸市	95	塩野						○			
68	善仁古墳	小諸市	96	塩野						○			
69	中大宮	小諸市	97	塩野						○			
70	下克田	小諸市	98	塩野								○	
71	七五三松城跡	小諸市	108	甲									
72	万才海上古墳	小諸市	109	甲						○			
73	万才海上	小諸市	110	甲						○			
74	北巻田	小諸市	115	丁						○			
75	与良平古墳	小諸市	116	甲						○			
76	与良城跡	小諸市	117	甲						○			
77	惣畑	小諸市	118	甲						○			
78	六道A	小諸市	119	甲						○			
79	六道B	小諸市	120	甲						○			
80	野原	小諸市	121	甲						○			
81	熊野裏B	小諸市	122	甲						○			
82	東野原	小諸市	123	甲						○			
83	藤川原	小諸市	124	加増						○			
84	与良古墳	小諸市	126	甲						○			
85	加増遺跡群	小諸市	127	加増						○			
86	加増古墳群	小諸市	128	加増						○			
87	日向	小諸市	129	加増						○			
88	乙女城跡	小諸市	130	加増						○			
89	澤太谷地5号墳	小諸市	131	加増						○			
90	事	小諸市	132	加増						○			
91	加増城跡	小諸市	133	加増						○			
92	八子原塚古墳	小諸市	134	加増						○			
93	菅谷一里塚	小諸市	135	甲						○			
94	大塚遺跡群	小諸市	136	加増						○			
95	菅谷古墳群	小諸市	137	加増						○			
96	吉原巻	小諸市	138	朽木						○			
97	朽木北城跡	小諸市	139	朽木						○			
98	朽木南城跡	小諸市	140	朽木						○			
99	額原古墳	小諸市	141	朽木						○			
100	朽木原遺跡群	小諸市	142	朽木						○			
101	坪ノ内	小諸市	143	朽木						○			
102	藤田入	小諸市	144	朽木						○			
103	久保田	小諸市	146	平原						○			
104	久保田古墳群	小諸市	147	平原						○			
105	平原城跡	小諸市	148	平原						○			
106	北原遺跡群	小諸市	149	平原						○			
107	三田原遺跡群	小諸市	150	平原						○			
108	三子城遺跡群	小諸市	151	平原						○			
109	寺裏塚古墳	小諸市	152	平原						○			
110	赤巻古墳	小諸市	153	塩野						○			
111	上三田原城跡	小諸市	154	平原						○			
112	十石城跡	小諸市	155	平原						○			
113	三子塚1号墳	小諸市	156	平原						○			
114	赤沼	小諸市	158	平原						○			
115	中村	小諸市	166	山道						○			
116	大洞	小諸市	167	甲						○			
117	北原田	小諸市	169	甲						○			
118	西原田	小諸市	170	甲						○			
119	池久保	小諸市	171	甲						○			
120	葛藤沢	小諸市	172	山道						○			
121	上塩川	小諸市	173	甲						○			
122	塩川城跡	小諸市	174	甲						○			
123	下塩川	小諸市	175	甲						○			
124	立原	小諸市	176	甲						○			
125	八幡倉家古墳	小諸市	177	甲						○			
126	八幡倉家	小諸市	178	甲						○			
127	北ノ城跡	小諸市	179	耳取						○			
128	九磨松	小諸市	180	甲						○			

地目番号	遺跡名	市町村名	遺跡番号	所在地	時代							
					縄	古	中	近	中	近	古	
129	前原田	小浜市	181	甲				○				
130	磯丸川城跡	小浜市	182	甲					○			
131	乙女古墳	小浜市	183	甲			○					
132	上懸巻	小浜市	184	甲					○			
133	南蓬山	小浜市	185	甲					○			
134	北蓬山	小浜市	186	甲					○			
135	上山ノ前	小浜市	187	甲					○			
136	山ノ前	小浜市	188	甲			○					
137	関口B	小浜市	189	甲			○					
138	関口A	小浜市	190	甲			○					
139	茶神	小浜市	191	御影新田			○					
140	山神	小浜市	192	森山			○					
141	宮ノ反A遺跡群	小浜市	193	御影新田			○					
142	舟塚	小浜市	194	御影新田			○					
143	宮跡	小浜市	195	森山			○					
144	船原遺跡群	小浜市	196	森山			○					
145	大塚原遺跡群	小浜市	197	御影新田			○					
146	三弘法山城跡	小浜市	198	平原						○		
147	一ツ登大塚	小浜市	199	御影新田			○					
148	舟塚跡	小浜市	200	御影新田			○					
149	舟塚原遺跡群	小浜市	201	御影新田	○		○					
150	長野原	小浜市	202	平原	○		○					
151	長野原塚古墳	小浜市	203	平原	○		○					
152	宮ノ反B	小浜市	204	御影新田			○					
153	鐘物屋屋	小浜市	205	御影新田			○					
154	宮沢宮下	小浜市	208	山崎			○					
155	御城跡	小浜市	209	耳取			○					
156	大林	小浜市	210	耳取			○					
157	長林	小浜市	211	耳取			○					
158	耳取城跡	小浜市	212	耳取	○		○					
159	王仁院跡	小浜市	213	耳取			○					
160	宮ノ北	小浜市	214	耳取	○		○					
161	久保田	小浜市	215	耳取	○		○					
162	西城跡	小浜市	216	森山						○		
163	森山城跡	小浜市	217	森山						○		
164	天待池	小浜市	219	森山					○			
165	蔵久保	小浜市	220	森山					○			
166	中野	小浜市	221	耳取			○					
167	牛原	小浜市	222	耳取			○					
168	十字塚古墳群	小浜市	223	耳取			○					
169	五ヶ塚	小浜市	224	市	○		○					
170	芝宮	小浜市	225	市			○					
171	北狭A	小浜市	226	市			○					
172	北狭B	小浜市	227	市			○					
173	耳取大塚古墳	小浜市	228	耳取			○					
174	北市古墳	小浜市	229	市			○					
175	和田原遺跡群	小浜市	230	和田	○		○					
176	大北原	小浜市	231	和田			○					
177	和田原A	小浜市	232	和田			○					
178	和田原B	小浜市	233	和田			○					
179	香久保	小浜市	234	和田			○					
180	藤田原	小浜市	235	藤影新田			○					
181	中原遺跡群	小浜市	236	藤影新田			○					
182	野火付城跡	小浜市	237	藤影新田			○					
183	野火付古墳	小浜市	238	藤影新田			○					
184	宮ノ下古墳	小浜市	239	耳取			○					
185	宮ノ前	小浜市	240	耳取			○					
186	宮ノ前古墳	小浜市	241	耳取			○					
187	五願A	小浜市	242	耳取			○					
188	五願B	小浜市	243	耳取			○					
189	五願C	小浜市	244	耳取			○					
190	林業山古墳群	小浜市	245	市			○					
191	藤塚古墳	小浜市	246	市			○					
192	東城跡	小浜市	247	和田			○					

地目番号	遺跡名	市町村名	遺跡番号	所在地	時代							
					縄	古	中	近	中	近	古	
193	野火野	小浜市	252	御影新田				○				
194	下前田原遺跡群	佐久市	1	小田原				○				
195	前田遺跡群	佐久市	2	小田原				○				
196	碓輪原遺跡群	佐久市	3	小田原				○				
197	曾根城	佐久市	4	小田原				○				
198	下前田原古墳群	佐久市	5	小田原				○				
199	近津遺跡群	佐久市	6	長土呂				○				
200	岡崎遺跡群	佐久市	7	長土呂				○				
201	芝宮遺跡群	佐久市	8	長土呂				○				
202	長土呂遺跡群	佐久市	9	長土呂				○				○
203	東毛塚遺跡群	佐久市	10	小田原				○				
204	跡坂	佐久市	11	小田原				○				
205	中金舟遺跡群	佐久市	12	小田原				○				
206	坂月古墳	佐久市	13	小田原				○				
207	高草古墳	佐久市	14	小田原				○				
208	から石古墳	佐久市	15	横根				○				
209	宇の原遺跡群	佐久市	17	横根				○				
210	下の原遺跡群	佐久市	18	横根				○				
211	上長坂遺跡群	佐久市	20	横根				○				
212	横根	佐久市	21	小田原				○				
213	横根古墳群	佐久市	22	横根				○				
214	久口古墳群	佐久市	23	横根				○				
215	平古墳群	佐久市	24	横根				○				
216	稲名田稲	佐久市	25	常田				○				
217	藤塚	佐久市	26	塚原				○				
218	前田遺跡群	佐久市	27	塚原				○				
219	常田居敷遺跡群	佐久市	28	常田				○				
220	西津津遺跡群	佐久市	29	長土呂				○				
221	鷲林城址	佐久市	30	常田				○				
222	塚原古墳群	佐久市	31	塚原				○				
223	細小古墳群	佐久市	32	塚原				○				
224	家地原古墳群	佐久市	33	常田				○				
225	大豆塚古墳群	佐久市	34	塚原				○				
226	下大豆塚古墳群	佐久市	35	長土呂				○				
227	東曲下古墳群	佐久市	36	常田				○				
228	鷲林古墳群	佐久市	37	長土呂				○				
229	下藤津	佐久市	38	長土呂				○				
230	常田	佐久市	39	塚原				○				
231	長土呂船跡	佐久市	40	長土呂				○				
232	鞍部塚遺跡群	佐久市	41	岩村田				○				
233	中久保田	佐久市	42	岩村田				○				
234	西曲稲	佐久市	43	岩村田				○				
235	上野子	佐久市	44	岩村田				○				
236	新城	佐久市	45	岩村田				○				
237	蘭巻	佐久市	46	上平塚				○				
238	西大久保遺跡群	佐久市	47	上平塚				○				
239	桃敷	佐久市	48	安原				○				
240	上小平	佐久市	49	岩村田				○				
241	下小平	佐久市	50	岩村田				○				
242	大舟城跡	佐久市	51	岩村田				○				
243	岩村田遺跡群	佐久市	52	岩村田				○				
244	溝石	佐久市	53	上平塚				○				
245	溝石古墳	佐久市	54	上平塚				○				
246	桃敷古墳	佐久市	55	安原				○				
247	東大久保遺跡群	佐久市	56	上平塚				○				
248	十二前	佐久市	57	上平塚				○				
249	矢津	佐久市	58	上平塚				○				
250	宮の前	佐久市	59	下平塚				○				
251	北山寺	佐久市	60	下平塚				○				
252	木田原	佐久市	62	下平塚				○				
253	白岩城跡(原古墳)	佐久市	67	下平塚				○				
254	塚原古墳群	佐久市	71	上平塚				○				
255	堀古墳	佐久市	72	上平塚				○				
256	宮ノ西古墳	佐久市	73	下平塚				○				

第3章 遺跡の位置と環境

地目番号	遺跡名	市町村名	遺跡番号	所在地	跡							
					縄	弥	古	中	近	古	遺	
257	藤田遺跡群	佐久市	75	鳴瀬	○	○	○	○				
258	熊の堂	佐久市	78	鳴瀬								
259	尾原遺跡群	佐久市	79	鳴瀬	○	○	○	○				
260	新城	佐久市	80	塚原	○	○	○	○				
261	宮の前田	佐久市	82	塚原								
262	中津	佐久市	83	塚原	○	○	○	○				
263	塚池	佐久市	85	常田								
264	宮の前	佐久市	86	塚原								
265	滝池	佐久市	87	塚原								
266	塚原屋敷池	佐久市	88	塚原								
267	宮の塚古墳	佐久市	89	塚原								
268	風塚古墳	佐久市	90	塚原								
269	熊子田	佐久市	91	塚原								
270	西一里塚遺跡群	佐久市	92	岩村田	○	○	○	○				
271	日向原敷	佐久市	93	根ヶ井	○	○	○	○				
272	根ヶ井居原敷	佐久市	94	根ヶ井	○	○	○	○				
273	根ヶ井式部跡	佐久市	95	根ヶ井								
274	鳴津遺跡群	佐久市	96	根ヶ井	○	○	○	○				
275	北西久保	佐久市	98	岩村田	○	○	○	○				
276	中西の久保遺跡群	佐久市	99	岩村田	○	○	○	○				
277	中鳴津遺跡群	佐久市	100	岩村田	○	○	○	○				
278	上砂田	佐久市	101	岩村田	○	○	○	○				
279	松の木	佐久市	102	岩村田	○	○	○	○				
280	諏訪分遺跡群	佐久市	106	根ヶ井	○	○	○	○				
281	寺廻遺跡群	佐久市	107	根ヶ井	○	○	○	○				
282	根ヶ井東原跡	佐久市	108	根ヶ井					○			
283	根ヶ井大塚古墳	佐久市	109	根ヶ井								
284	藤宮古墳	佐久市	110	根ヶ井								
285	上鳴津古墳群	佐久市	111	根ヶ井								
286	南平山古墳	佐久市	112	岩村田								
287	因蔵山古墳	佐久市	114	岩村田								
288	東一本柳古墳	佐久市	115	岩村田								
289	北西の久保古墳群	佐久市	116	岩村田								
290	丁宿遺石	佐久市	118	岩村田								
291	塚原遺跡群	佐久市	119	熊子田								
292	東内原	佐久市	121	熊子田								
293	野原遺跡群	佐久市	122	塚久保	○	○	○	○				
294	塚久保屋敷池	佐久市	123	塚久保	○	○	○	○				
295	引井	佐久市	124	岩村田	○	○	○	○				
296	野原古墳	佐久市	125	塚久保	○	○	○	○				
297	塚塚古墳群	佐久市	126	安原								
298	戸原遺跡群	佐久市	127	安原								
299	南久保遺跡群	佐久市	128	安原								
300	高野町遺跡群	佐久市	129	熊子田	○	○	○	○				
301	山崎遺跡群	佐久市	130	安原	○	○	○	○				
302	家村遺跡群	佐久市	131	下平塚	○	○	○	○				
303	茂家遺跡群	佐久市	132	安原字	○	○	○	○				
304	前上原敷	佐久市	133	安原字								
305	大内	佐久市	136	下平塚	○	○	○	○				
306	高城址	佐久市	139	安原							○	
307	安原大塚古墳	佐久市	141	安原								
308	柏田	佐久市	202	鳴瀬								
309	熊畑	佐久市	203	鳴瀬								
310	善合居原敷	佐久市	204	鳴瀬								
311	鳴瀬宮の前	佐久市	205	鳴瀬	○	○	○	○				
312	岩塚城跡	佐久市	206	鳴瀬							○	
313	下北古屋	佐久市	207	鳴瀬	○	○	○	○				
314	倉敷	佐久市	209	伴野	○	○	○	○				
315	合浜田	佐久市	217	根原	○	○	○	○				
316	傍松塚	佐久市	218	伴野	○	○	○	○				
317	林石	佐久市	219	伴野	○	○	○	○				
318	藤石橋	佐久市	220	伴野	○	○	○	○				
319	下原屋敷遺跡群	佐久市	221	伴野	○	○	○	○				
320	東原野戸	佐久市	222	伴野	○	○	○	○				

地目番号	遺跡名	市町村名	遺跡番号	所在地	跡							
					縄	弥	古	中	近	古	遺	
321	大の塚原古墳	佐久市	223	伴野								
322	鳴瀬神明	佐久市	224	鳴瀬								
323	北尾見	佐久市	225	鳴瀬	○	○	○	○				
324	大和田原歌遺跡群	佐久市	226	鳴瀬	○	○	○	○				
325	大和田遺跡群	佐久市	227	鳴瀬	○	○	○	○				
326	上平遺跡群	佐久市	228	鳴瀬	○	○	○	○				
327	鳴瀬中屋敷遺跡群	佐久市	229	鳴瀬	○	○	○	○				
328	白山遺跡群	佐久市	230	鳴瀬	○	○	○	○				
329 吾妻遺跡群	佐久市	231	横根	○	○	○	○					
330	根治田	佐久市	232	横根	○	○	○	○				
331	北久保	佐久市	233	横根	○	○	○	○				
332 今井西原	佐久市	234	今井	○	○	○	○					
333 今井宮の前	佐久市	235	今井	○	○	○	○					
334	今井城跡	佐久市	236	今井	○	○	○	○				
335	善合神明跡	佐久市	237	鳴瀬								
336	遠見塚古墳	佐久市	238	鳴瀬								
337	吉塚古墳	佐久市	239	横根								
338	宮の上遺跡群	佐久市	240	横根	○	○	○	○				
339	中原遺跡群	佐久市	241	今井	○	○	○	○				
340	赤石原	佐久市	242	根ヶ井	○	○	○	○				
341	上草古墳	佐久市	243	三河田								
342	三河田大塚古墳	佐久市	244	三河田								
343	藪ノ置古墳	佐久市	245	中込								
344	富士塚古墳	佐久市	246	塚久保								
345	西妻津	佐久市	247	中込								
346	藤原前遺跡群	佐久市	248	塚久保								
347	大塚遺跡群	佐久市	249	中込								
348	馬鹿口遺跡群	佐久市	250	根ヶ井	○	○	○	○				
349	梨の木1	佐久市	251	中込								
350	柳田	佐久市	252	塚久保	○	○	○	○				
351	相田	佐久市	253	根ヶ井	○	○	○	○				
352	鷹の宮	佐久市	254	根ヶ井	○	○	○	○				
353	深根遺跡群	佐久市	255	根ヶ井	○	○	○	○				
354	岩山遺跡群	佐久市	256	根ヶ井	○	○	○	○				
355	中城塚城跡	佐久市	257	根ヶ井								
356	中城塚古墳群	佐久市	258	根ヶ井							○	
357	御経塚古墳	佐久市	259	塚久保								
358	金比羅塚古墳	佐久市	260	塚久保								
359	相田上古墳	佐久市	261	根ヶ井								
360	岩山古墳	佐久市	262	芝賀								
361	戸原遺跡群	佐久市	263	熊子田	○	○	○	○				
362	家の前	佐久市	267	熊子田	○	○	○	○				
363	清水池	佐久市	271	芝賀								
364	鳥取城跡	佐久市	273	熊子田								
365	中島塚	佐久市	275	根ヶ井								
366	延寿城跡	佐久市	329	横根								
367	弁井城跡	佐久市	540	小田原								
368	竹根新城	佐久市	541	岩村田								
369	浅井城跡	佐久市	545	熊子田								
370	四つ塚古墳	佐久市	552	熊子田								
371 轟平	佐久市	593	横根									
372	久保田	佐久市	594	塚原	○	○	○	○				
373	若山古墳	佐久市	595	塚原								
374	湖口古墳	佐久市	811	塩名田								
375	久藤城跡	佐久市	812	塩名田								
376	砂原	佐久市	813	塩名田	○	○	○	○				
377	山王	佐久市	814	塩名田								
378	下原原	佐久市	815	塩名田								
379	原屋敷遺跡群	佐久市	816	塩名田								
380	中平	佐久市	818	御高宮								
381	田中島	佐久市	819	御高宮	○	○	○	○				
382	御高宮城跡	佐久市	820	御高宮								
383	下平	佐久市	821	御高宮								
384	熊野	佐久市	822	御高宮								

第4章 森平遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1. 遺跡の概観

森平遺跡は、佐久市横和字森平915番地ほかに所在する。湯川右岸の低位段丘（第1河岸段丘）に位置する（第1・2図）。標高は約659～661mで、湯川の水面からは5～10mほどの比高差である。森平遺跡の位置するこうした湯川に面した低位段丘上にはそれまで遺跡の存在は確認されていなかったが、「土器片が拾える場所」という情報が地元から寄せられたことを踏まえ、平成17年に県教委が佐久市教委とともに現地踏査を行い、遺物の散布を確認した。これを受けて平成17年7月25～29日にかけて県教委が実施した試掘調査により、多量の弥生土器等の遺物の出土と焼土跡や土坑などの遺構が確認できたことから、周辺の埋蔵文化財包蔵地に登載された新発見の遺跡である（県教委2007）。しかし、包蔵地範囲内の路線範囲部分は、すでに工事着手されており、路線範囲内北側の部分的な調査となっている（第2図）。

なお、調査区南側は、すでに工事着手され、ボックスが建設されていたが、事業者との協議を経て埋文センターにより平成17・18年度に発掘調査を行うこととなった。

また平成18年度には、佐久市教委より今回の調査区南側の近接地について、市道改良工事に伴う発掘調査が行われ、弥生時代中期後半の竪穴住居跡6軒などがみつまっている（佐久市教委2009b）。遺跡は今回の調査区からより南側に延びていることがわかる。

2. 調査の概要

前述のとおり、発掘調査は平成17・18年度の2箇年にわたり実施した。調査面積は5,500m²であった。平成17年度は南北に通る市道の西側を調査範囲とし、東側を平成18年度に調査することとした。西側範囲は1区と呼称し、調査に入った。年度当初には予定されていなかった新発見遺跡のため、西一里塚遺跡群調査班が併行して調査にあたることとなった。当初は西一里塚遺跡群調査班2名の調査研究員のうち1名が森平遺跡に対応したが、9月16日からは西一里塚遺跡群の調査を中断し森平遺跡に専念した。10月4日からは再び西一里塚遺跡群と併行調査となり、調査研究員1名と作業員十数名が森平遺跡に従事することとなった。発掘調査は平安時代と弥生時代の2面にわたり実施した。

1区の調査は11月25日で終了したが、調査を進める中で、弥生時代の集落跡の範囲は、すでにボックス工事を行っている南側に広がること明らかとなってきたことを踏まえ、関係機関との協議を行った。その結果、12月9日より、ボックス工事区との境部分の調査を改めて行うこととなった。この境部分を2区とした。2区の調査は12月22日まで続けた。

また平成18年2月28日からは、次年度調査の効率を上げるため、市道東側の表土剥ぎを実施した。調査区は市道部分を2区、市道東側を水田区画の段差により3つに分け、北から、4区、5区、6区とした。このうち4区については重機によるトレンチを入れて遺構の有無を確認した。その結果、遺構は検出できなかったため4区の調査を修了した。表土剥ぎは5区・6区において3月8日まで実施した。

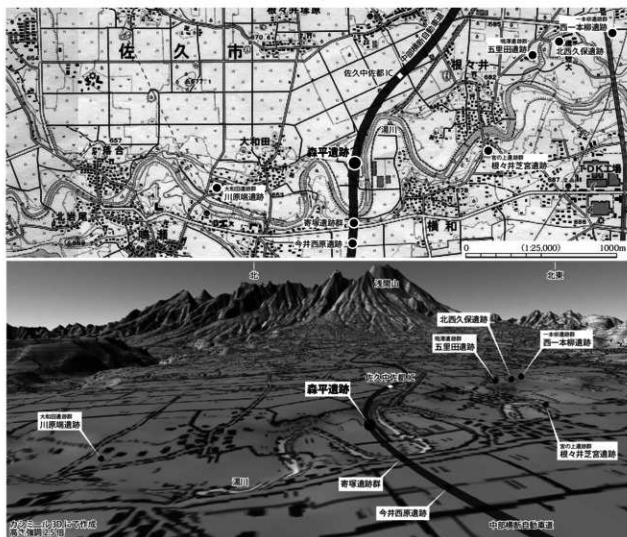
平成18年度の調査は4月18日から重機を稼働し、25日から作業員従事を開始した。3区・5区・6区の調査を実施し、6月21日に終了した。

3. 基本層序 [第3・4回]

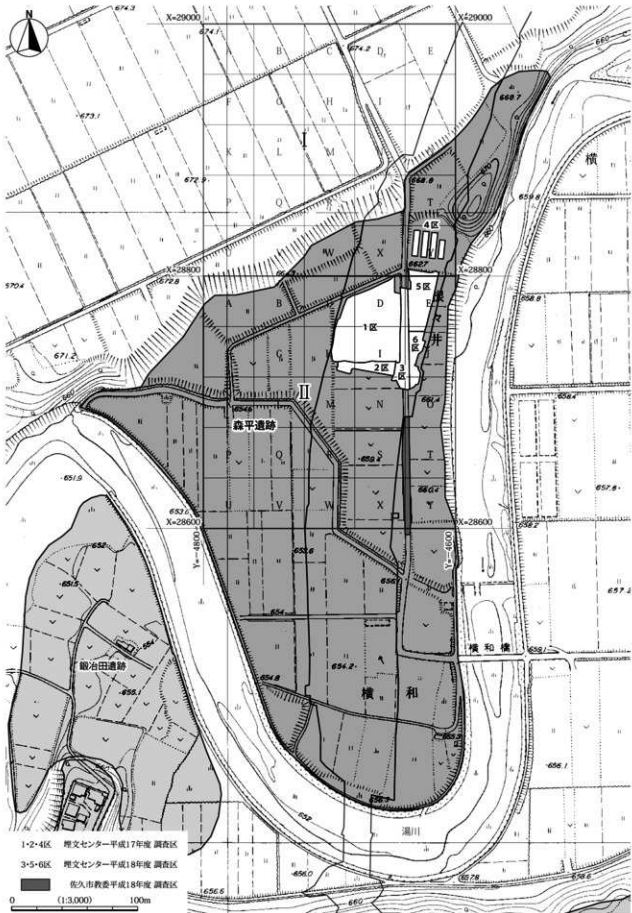
本遺跡の土層堆積は5分層される。Ⅰ層は盛土層で、上部は現耕作土となっている。Ⅱ層は褐灰色を呈する旧耕作土である。Ⅲ層は黒色～黒褐色土の遺物包含層で、上面で古代以降の遺構が確認されている。

このⅢ層は5層に細分されている。そのうちⅢ-1層では、遺物の出土量が多い。集中して遺物の出土する箇所は遺構の存在が想定されたが土質の変化を捉えづらく検出できなかったため、その部分を人力により掘り下げつつ調査した。その結果、弥生時代の遺構の多くはこのⅢ-1層中から掘り込まれたようであったが、検出層理面を明らかにできなかった。また、このⅢ-1層は1区北半および3・5・6区の範囲で、遺物のほかに大小の自然礫が多数含まれており、弥生時代の環濠とみられるSD08埋土を覆う状況も観察された。このことから、Ⅲ-1層の一部は洪水性の堆積と考えられたが分層できず、この層に含まれている。

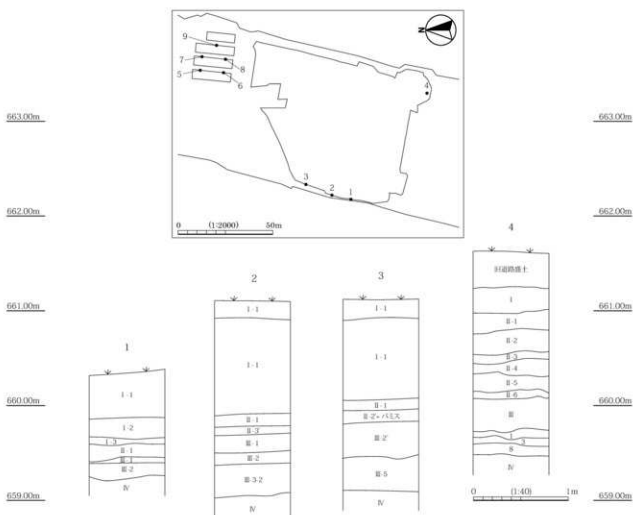
Ⅳ層は褐色を呈する地山である。弥生時代の遺構の大半は、この層まで掘り下げたようやく検出できた。調査区の北側に位置する4区は他の地区よりも1mほど高い位置にあり、層序もやや異なる。Ⅰ層の耕作土、Ⅱ層の灰黄褐色土があり、シルトと砂の互層の下に、他の地区でいうⅢ層相当の層が確認された。この層は遺物もなく、遺構も確認されなかった。



第1図 森平遺跡周辺の遺跡分布図・鳥瞰図



第2図 遺跡範囲図と地区設定図



断面1～3(第44回SDO2～04断面図も参照)

I-1 盛土層。

I-2 旧耕作土(溶脱層)。シルト。

I-3 旧耕作土(集積層)。細砂。

I-4 旧耕作土?(溶脱層)。

I-5 旧耕作土?(集積層)。

II-1 黒褐色(10YR3/1)粘性弱。しまりあり。細砂-シルト。

II-2 黒褐色(10YR3/1)粘性弱。しまりあり。III-1層に比べ、小礫の混入が増加する。鉄分やや増加。

II-3 黒褐色(10YR3/1)粘性ややあり。しまりあり。灰色がかっている。

II-3' II-3層に比べ、さらに黒化が増す。

III-1 黒色(10YR2/1)粘性ややあり。しまりあり。ハミス・小礫の混入ほとんどなし。

発土層出土。III-1層は住居の集中する地点では黒みを増す。住居層土では、ハミス粒の混入が認められる。
これは、調査区北平の小礫・ハミス粒が多く混在する層(多分、洪水性堆積物)の縁辺部にあたっていたためと思われる。

III-2 黒褐色(10YR2/2) III-1層より粘性やや弱。しまりあり。黄褐色砂層少量混入。

III-3-1 (NR) 褐色(10YR4/1) 細砂主体。

III-3-2 (NR) 黒褐色(10YR3/2) φ1～3cmの小礫主体。

III-4 灰黄褐色(10YR4/2)～褐色(10YR4/1)シルト主体に、細砂・小礫が混在する。小礫などは流水による可能性大。

III-5 褐色(10YR4/1)～褐色(10YR4/4)混在層。砂質。しまりあり。洪水性の堆積物か?

IV 褐色(10YR4/6)粘性なし。しまりあり。浅間軽石流の堆積物か?(地山)

断面4

I 旧耕土。黒褐色。

II-1 にぶい。黄褐色(10YR4/3)粘性なし。しまり強。(砂)ハミス多量混入。

II-2 灰黄褐色(10YR4/2)粘性なし。しまり強。(砂)ハミス多量混入。II-1層に比べ灰色かかる。

II-3 褐色(10YR6/1-5/1)粘性なし。しまり強。II-2層に比べ粒子が粗くなる。

II-4 にぶい。黄褐色(10YR5/3)粘性なし。しまり強。ハミス・砂主体にシルトが混入。

II-5 灰黄褐色(10YR4/2)粘性ややあり。しまりあり。シルト主体にハミスが少量混入。

II-6 II-5層とII層の混在層。

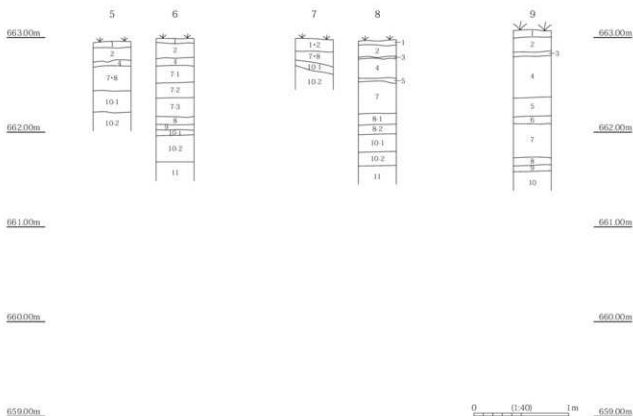
III 基本土層。

I 褐色(10YR4/1)粘性弱。しまりあり。3層に比べるとやや明るく粘性弱。炭化物粒などの混入も微か。灰白色粘多量混入。黒土土混入。

3 黒色(10YR2/1)粘性ややあり。しまりあり。焼土粒・炭化物粒微混入。ローム粒・小礫(地山に含む)少量混入。

8 地山ブロック(部分的に砂・黄褐色粒など変化が大い)と黒色(10YR2/1前後)粘性ややあり。しまり強。

第3図 1～3・5・6区 基本土層柱状図



トレンチ断面5

- 1 表土。
- 2 灰黄褐色。
- 4 灰黄褐色。
- 7・8 シルト～細砂(小礫の混入ほとんどなし)。
- 10-1 黒色(1.7/1)粘性ややあり。しまりあり。小礫混入せず。
- 10-2 T3-10層対応。

トレンチ断面6

- 1 表土。
- 2 灰黄褐色。
- 4 小礫混入層。
- 7-1 小礫混入層。
- 7-2 シルト層。
- 7-3 小礫ほとんど含まず。粗砂～細砂。
- 8 褐灰色。シルト。
- 9 黒褐色(10YR3/1)粘性あり。灰色がかる。
- 10-1 黒色(1.7/1)粘性ややあり。しまりあり。小礫混入せず。
- 10-2 T3-10層対応。
- 11 褐灰～黒色。砂礫層。

トレンチ断面7

- 1・2 表土～灰黄褐色土。
- 7・8 シルト～砂。小礫少ない。
- 10-1 黒色(1.7/1)粘性ややあり。しまりあり。小礫混入せず。
- 10-2 T3-10層対応。

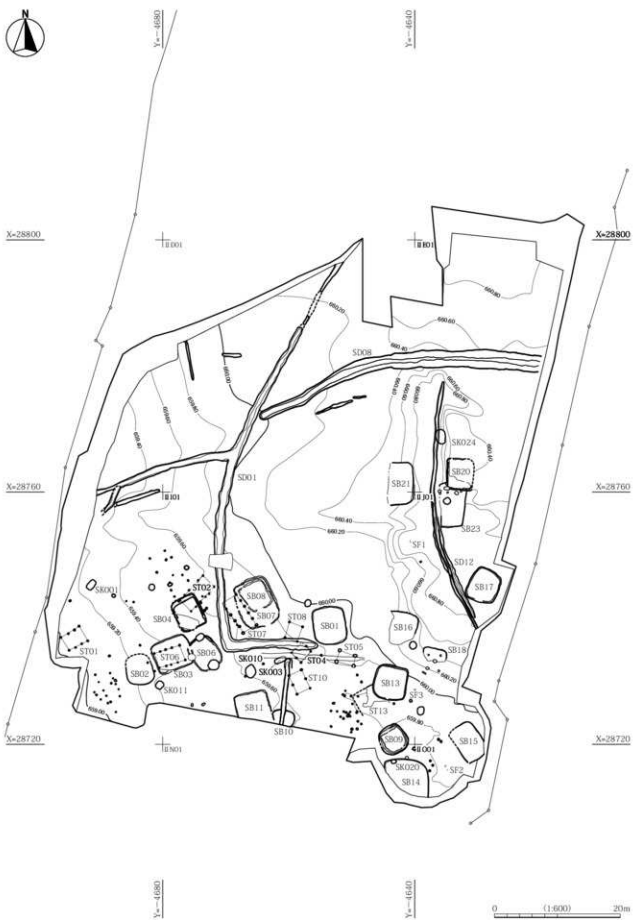
トレンチ断面8

- 1 表土。
- 2 灰黄褐色。
- 3 黒色ブロック混入(ほとんど層をなしていない)。
- 4 灰黄褐色。
- 5 黒色ブロック混入(ほとんど層をなしていない)。
- 7 褐灰～ぶい黄褐色。砂層(シルト～礫あり)。小礫混入。
- 8-1 シルト。
- 8-2 褐灰色～明るい。
- 10-1 黒色(1.7/1)粘性ややあり。しまりあり。小礫混入せず。
- 10-2 T3-10層対応。
- 11 褐灰～黒色。砂礫層。

トレンチ断面9

- 1 表土。
- 2 灰黄褐色。
- 3 黒色ブロック混入。
- 4 灰黄褐色。
- 5 灰色。シルト～砂。小礫混入。
- 6 黒色ブロック混入。
- 7 褐灰～ぶい黄褐色。砂層(シルト～礫あり)。小礫混入。
- 8 褐灰色。シルト。
- 9 黒褐色(10YR3/1)粘性あり。灰色がかる。
- 10 黒色(10YR1.7/1)粘性強。しまりあり。礫混入。

第4図 4区 基本土層柱状図



第5図 遺構全体図

第2節 遺構と遺物の出土状況

調査区の地形は、標高約 659～661m で、北東部から南西部に向かい傾斜しており比高は約 1.8m を測る。遺構検出面は 2 面あり、上面で検出した遺構が、溝跡 11 条である。下面の遺構は、包含層を掘り下げて検出され、竪穴住居跡 22 軒、掘立柱建物跡 6 棟、土坑 100 基、焼土跡 3 基、溝跡 1 条である。

以下、遺構別に位置、検出状況並びに重複関係とその構造、遺物の出土状況、時期決定の根拠について記載した。

1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は弥生時代中期 17 軒、同後期 2 軒で、弥生時代中期を主体とする。基本土層Ⅲ層下面からⅣ層上面で検出されている。以下、遺構ごとに記述する。なお、SB05・12・19・22 は欠番である。

SB01 [遺構：第 6・7 図 PL3、土器：第 51・52 図 PL11・12、石器：第 73・74・78・81・83・85・86・88 図]

位置：1 区、Ⅱ H13・14・19 グリッド。**検出**：Ⅲ層中～Ⅳ層上面。包含層との区別は難しく、Ⅲ層中で壁の立ち上がりを確定できた部分はごく一部である。**経過**：重機による表土剥ぎの段階で、遺物が集中して出土したことから遺構の存在が想定された。そのため人力により掘り下げつつ平面精査してプラン検出に努めた。Ⅲ層中で炭化物や遺物が集中する箇所があったが明確なプランは確認できず、最終的なプラン確定はⅣ層上面となる。調査は、Ⅲ層中でプラン確定できなかったため、先行トレンチを設定し、床面と壁の立ち上がりを確認した。その後、床面中央付近から壁に向かって埋土を掘り下げ、壁の立ち上がりを確認した。埋土中から多量の焼土・炭化材・遺物が出土した。炭化材、焼骨集中部はサンプリングした。**重複関係**：切り合う他遺構は確認されなかったが、本住居跡の南東に近接して ST05（詳細は ST05 参照）が位置することから重複していた可能性が考えられる。**埋土**：壁際より落ち込んだ様に若干の埋土が形成され、その上部付近で焼土や炭化材が検出されている。何らかの火を用いた行為の後、自然埋没したものと考えられる。**構造**：長軸 6.04m、短軸 5.20m の隅丸長方形、主軸方向は N7° W である。壁高は 28cm である。床は堅緻な薄い貼床。ピットは主柱穴の P1・3・4・6 と深さの浅い支柱穴の P2・5 がある。出入口ピットは検出されていない。**炉**：土器埋設炉。床面中央付近、支柱穴の P5 寄りに位置する。不整形の浅い掘り方をもつ。中心付近に土器がまとまることから廃棄段階に壊された可能性もある。**出土遺物**：炉から赤彩壺 334 が、口縁部と胴下半を打ちかれ、逆位の炉体土器として出土した。炉の北側から壁面にかけての床面レベル（第 3 節 1 (2) 参照）以下には赤彩無頸壺 008 が伏せて置かれ、その周辺の炭層部分を中心に完形に近い 001・005・006・007・009・010・013・331（第 51 図）・332（第 52 図）が集中的に出土している。ここには頸部のⅡ文様帯とⅣ文様帯（上田 1995）のみに装飾をもち、胴部がくの字状に張り出す壺 001、赤彩鉢 006・007・332、櫛描波状文が重畳する小形甕 009 や内面に赤彩が施された台付甕 013 がみられる。また、この炭層を含む北壁際 3 層中にはニホンジカ B08・09・11 等の焼骨の集中箇所がある。特に B11 は軟部が付着した状態で焼かれたシカ右脛骨であった。また、これらの上層の 2 層下部（3 層との層理面）レベルからはコの字重ね文の甕 003、胴部がくの字状に張り出す櫛描波状文の甕 002 や台付甕 335 が出土し、口縁部に櫛描により鋸歯文が描かれる赤彩の高杯 333 は北東壁際に伏せられた状態で出土した。石器は西側の床面レベルから大型蛤刃石斧 S027・028、扁平片刃石斧 S034、磨製石鏃未製品 S361、磨り切り具 S130 が出土している。また、炉の北側の 2 層からは軽石製品 S099、その他埋土からミニチュア土器 341 がみられる。また、緑色凝灰岩の管玉片 1 点（第 88 図 - 玉 1）が埋土最

上部より出土している。**時期**：床面レベルの土器から栗林2式新段階、2層下部レベル出土土器から住居埋没の上限は栗林3式の段階とする。

SB02 [遺構：第8図 PL3、土器：第52図 PL13、石器：第78・79図]

位置：1・2区、II H20 グリッド。**検出**：IV層上面。1区の南壁際を、重機で包含層のⅢ層を徐々に下げている途中、炭化物などが多く認められたことから遺構を想定した。すでに遺構の北半部分をIV層まで掘り下げており、住居プランが不明となる。遺構が1区南側にのびるため一部1区を拡張して調査した。拡張に際し、Ⅱ層から徐々に掘り下げと精査を繰り返したが、プランを明確にできなかった。最終的には、Ⅲ層中位以下にみられた炭化物粒の有無でプランを確定した。2区も同様で、床からわずかで炭化材が多量に出始めた段階で、壁の立ち上がりを確認した。検出は、土壌の差ではなく炭化材の有無が頼りで、壁の明確な立ち上がりは捉えることはできていない。また、床面は軟弱であり確信を得るには至らなかった。1区側は北半部を削平したため、拡張区でできるだけ情報を得ることを目指した。しかし、南西側は壁だけでなく床面もは明確に捉えられず、埋土の炭化物粒子の量も遺構の内外で差ほど変化がなかった。**重複関係**：SK043と切り合が新旧不明である。SB03・ST06が近接してある。**埋土**：床面直上に多量の炭化物と焼土ブロックがあり、その上部、特に南半部に多量の炭化材が認められる。上層は、細粒の堆積土が徐々に溜まっており自然堆積と思われる。床面付近には炭化材が放射状に認められた。屋根材などがそのまま崩落した可能性がある。土器などは少ないことから、片付けにともなう焼却の可能性があらう。**構造**：長軸4.28m、短軸3.68mの隅丸長方形、主軸方向はN11°Wである。壁高は10cmである。床は硬化面が認められず軟弱で遺構外との差が不明瞭。柱穴は5基検出された。主柱穴はP1・2・4・5で、P5を除く主柱穴には直径20cm程度の柱痕が認められた。**炉**：不明。**出土遺物**：中央北東部床面近くの炭化物と焼土ブロック中から、頸部のⅡ文様帯に頸部文様帯技法a（青木2000）の横走波線文装飾で胴部最大径が高くかつ「く」の字状に張り出す壺343と柳指波状文の小形壺347が伴し、同じく住居跡南側の床に近いレベルでは赤彩の鉢C345が潰れた状態で出土した。1層中や上のレベルからは赤彩高杯344、脚部に凸帯のある赤彩高杯346が出土した。**時期**：1層中の焼土ブロックと含む床面に近いレベルの土器から栗林3式の段階と認定される。

SB03 [遺構：第9・10図 PL4、土器：第53・54図 PL13・14、石器：第73・76～78・80・81・83～85・88図]

位置：1区、II H15・20、II I11・16 グリッド。**検出**：IV層上面。Ⅲ層中から遺物が出土し始めており、遺構はⅢ層中から掘り込まれたものと見られたが、プラン確定ができず徐々に掘り下げた。先行トレンチも設定して壁の立ち上がりと重複関係の確認を行った。しかし、埋土中ではSB06との切り合い部は最後まで確定できなかった。本住居跡の北壁側はIV層を掘り込んでおりプランを確定できたが、南西壁側は周溝から判断した。床面精査でST06を検出した。**重複関係**：SB06を切る。SB03埋土を切って周溝およびP6・8が検出されたことから確定した。ST06との新旧関係は不明。本住居跡と主軸方向がほぼそろっていることから関連性が伺える。**埋土**：床から多少浮いた層位に焼土ブロックや炭化材が散乱する層がある。それより上層には、炭化物粒子の混入が多少認められたが、周囲の層との区別が難しいことから自然堆積の可能性が高い。**構造**：長軸6.20m、短軸5.20mの隅丸長方形、主軸方向はN110°Wである。壁高は16cmである。床は堅緻な貼床だが、掘り方は浅い。周溝がほぼ全周する。主柱穴はP1～4があり、長軸方向南側列のP1・2間のみ支柱穴とみられるP5が設けられている。出入口と考えられるピットはP6・8・9が相当し、北東壁際に設けられている。炉：石囲炉。床面のほぼ中央に設けられる。石はコの字状に設置される。南西側に凹部がみられたことから石を抜き取った可能性もある。**出土遺物**：住居構築

時期に最も近いものは貼床下から出土した櫛描波状文と刻み文を有する台付甕 371 である。調査所見では炉の南西床面上に比較的多くの壺が集中している。その他は床面上に広がる炭化材や焼土に混じって、大きく住居跡西壁の床面レベルと北東壁際の埋土 1・2 層境レベルでの出土がみられる。住居跡西側の床面レベルのものとしては、I～IV 文様帯に装飾をもち、押し出し凸帯（頸部文様帯技法 c）・懸垂舌状文を有する装飾性の高い壺 355 に、頸部押し出し凸帯（頸部文様帯技法 b）の壺 357 が伴う。また、それらのやや北の床面レベルから II 文様帯のみに縄文を有する壺 356、と赤彩鉢 A370 が出土した。また、櫛描波状文の壺 363 と櫛描縦羽状文の壺 367 は破片が床面レベルから 1 層まで分散している。北東壁際は 1・2 層境レベルから頸部文様帯技法 a の壺 354 に口唇部に刻み文をもつ壺 358 が伴い、北壁付近には受け口状口縁の壺 361 が正位埋納様に検出された。住居跡内北東部分からはイノシシの臼歯片、南西部分の床下レベルから種不明の焼骨片が出土した。石器は炉の南側の床面レベルから 4 点の磨製石鏃 S002・003・005・006 と磨製石鏃未製品 S007 が出土し、大型始刃石斧は西側壁際の床面にレベルに S029、北壁周溝上に S129 がみられる。また、石槌 S059、砥石 S056、みがき石 S133 は床面レベルから、大形の石皿 S139 は埋土 1 層から出土している。**時期**：床面レベルの壺の器形、装飾から栗林 2 式新段階の段階に比定する。

SB04 [遺構：第 II 図 PL4、土器：第 54 図 PL14、石器：第 77・80・83 図]

位置：1 区、II III グリッド。**検出**：Ⅲ層中～Ⅳ層上面。Ⅲ層上面で遺構は確認できず、遺物も少なかったためⅢ層を重機で削いでⅣ層上面まで掘り下げていたところ、土器埋設炉が検出された。住居中央付近は重機で削平したが、Ⅲ層の残る部分があったため人力での検出に切り替え調査した。しかし、プランは、埋土と遺構外との土質の差が認められず、Ⅳ層上面まで掘り下げて確定した部分が多い。**重複関係**：貼床を削ぐ段階で、入れ子状態の一回り小さい住居跡の周溝を検出した。このことから本住居跡は拡張後の住居跡と考えられたため、これを 4a とし、拡張前の住居跡を 4b として報告する。ST02・SK067 と切り合が新旧不明である。**埋土**：床近くまで削平してしまっただけで詳細は不明だが、床面よりやや上に炭化物がやや多めに入る層があり、それより上層は遺構外との区別がつかなかったため自然堆積の可能性がある。

構造：4a は、長軸 5.32m、短軸 4.44m の長方形。主軸方向は N26° W である。壁高は 14cm である。貼床で浅い掘り方をもつ。主柱穴は P1～4 で、柱間が長軸方向にやや長い配置となっている。南壁中央にある P5 は出入口ピットと考えられる。周溝はほぼ全周する。**炉**：中央に位置する土器埋設炉である。埋土には若干の炭化物と焼土や焼骨などが極わずか混入する。4b は、周溝の平面規模で、長軸 4.50m、短軸 3.90m である。柱穴は、新たに検出されなかったことから、拡張後の 4a 住居跡で検出された入口を含む柱穴の配置を、4b 住居跡の配置をそのまま用いたものと理解する。4a の土器埋設炉に切り合いは観察されていないが、炉体土器の脇に土器片が数枚重なっている様子が観られたことから作り替えの可能性もあろう。炉の位置も柱穴同様、そのまま 4a 住居跡に引き継がれたものと理解しておきたい。**出土遺物**：炉体土器として櫛描縦羽状文の壺 397 が正位で埋設されており被熱が著しい。炉体土器内には、埋土 2 層とその下層 3 層の層理面に沿って壺 398 の胴部破片と受け口状口縁壺 399 が散らかっていた。また、炉内からは種不明の焼けた動物骨も出土している。石器は埋土からみがき石 S134 が出土した。**時期**：炉の一括資料から栗林 3 式の段階に比定する。

SB06 [遺構：第 12 図 PL4、土器：第 55 図 PL14・15、土器片加工内板：第 71 図 PL27、石器：第 77・79・80・83 図]

位置：1 区、II III・12・16・17 グリッド。**検出**：Ⅲ層中。Ⅲ層上面まで重機で掘削後、Ⅲ層を徐々に削ぎ取り中、大形の土器片が多く認められたため、人力による平面精査に切り替えた。広範囲に遺物が分布することから重複の可能性を考慮し、平面精査と並行して先行トレンチを設定した。その結果、当初

SB06の北側に広がるプランをSB05としたが、Ⅲ層を誤認しており欠番とした。**重複関係**：SB03に切られる。土坑のSK005・007と切り合うが断面では明らかにできていない。SK005の新旧関係は、SB06の床面付近の遺物分布がSK005のプランと重なるためSB06が新しいと思われる。**埋土**：炭化物の微量な混入が認められたが、Ⅲ層とほとんど区別はつかない。**構造**：長軸5.40m、短軸4.54mの隅丸長方形、主軸方向はN32°Wである。壁高は12cmで、周溝が全周する。溝内には小ピットと凹凸がみられる。支柱穴はP1・3と切り合う北東位置のP2・8、南西位置のP4・5がある。うち、P2・8との重複関係は、P2断面1層部分の段が東側に広がりP8のエレベーションと深さがほぼ一致することから同一のものも考えられる。支柱穴は、長軸方向の支柱穴の間にP9・10、中軸線上には北側支柱穴間の北壁寄りにP6・7が設けられている。P2・4も支柱穴より浅く規模も小さいことから支柱穴であったと考えられる。出入口ピットは、SK005底面で検出されている2本1対の2組が想定される。**炉**：土器敷炉。住居中央に位置し、浅い掘り込みに土器片内面を上にして敷き詰められている。**出土遺物**：炉跡から口縁部と底部が欠き、摩耗の著しい壺382・385、円形浮文が添付され櫛波状文が施された台付甕391と櫛波状文・垂下文が施された甕386が割られて、内面を上にした状態で出土している。P11からは口唇部に縄文が施された鉢A573が出土した。床面レベルの資料としては、壺の頸部389、連瓦文a状の山形沈線文が施された甕381、甕(有孔鉢)383、高杯392と甕387がみられる。甕387の一部はP2埋土一括の土器と接合した。また2層レベルからは口縁の外反が著しく横走沈線文(頸部文様帯技法a)が施された壺380、胴部径が比較的狭い壺379、櫛波状文・垂下文aの甕384、内外面に穿孔をもたないC類の土器片加工円板390が出土している。特に壺379の破片の1/3程度はP3からも出土している。石器は石皿S064が住居跡南壁より、埋土から磨製石鏃S011が出土している。**時期**：無文の壺が多いが、炉出土土器の特徴から、栗林2式古一新段階の段階と考える。

SB07 [遺構：第13-14回 PL4・5、土器：第56回、土器片加工円板・土製品：第71回 PL27、石器：第74～80・84・86～88回]
位置：I区、II I07・08・12・13グリッド。**検出**：Ⅲ層中位～Ⅳ層上面。重機によるⅢ層上面までの表土剥ぎの段階では、礫と土器の集中が認められたが遺構プランは全く不明であった。Ⅲ層を掘り下げ、北側では浅い位置でⅣ層が露出し検出できた。これを手がかりに平面精査したが、他の側面はつかめなかった。炭化材の出土が途切れる範囲を壁際と推定したが、壁の立ち上がりを確認できなかった。最終的には、住居内を掘り下げ、周溝からプランを確認した。なお、本住居跡の西側部分は、重機による表土剥ぎで削平したため、壁は無くⅣ層上面でのピット・周溝のみ検出した。住居跡の床面は、南北に設定した先行トレンチ断面から貼床が2面あると想定し調査したがわからなかった。**重複関係**：SB08、ST07を切る。**埋土**：黒褐色土で遺構外側の包含層との土質の差を見極められず掘りすぎている。**構造**：長軸7.92m、短軸6.20mの隅丸長方形、主軸方向はN23°Wである。壁の立ち上がりを検出できた北壁で壁高は18cmある。支柱穴はP5・8・9・28、長軸方向の支柱穴間には支柱穴が設けられている。南壁際中央付近のピット群は、P31を中央にして2本1対で配置された出入口ピットと考えられる。周溝はほぼ全周する。**炉**：中央やや北寄りで検出。礫の出土が見られるが埋め込まれたのではなく石囲炉と断定できない。**出土遺物**：遺物はいずれも床面から10～20cm程度浮いた状態で出土していて、Ⅱ文様帯より下に文様が施されない壺406・409と3・4文様帯に文様がある壺411と壺410、赤彩の無頸壺438、高杯脚部441・442、甕(有孔鉢)430等がみられる。このうち409は横走沈線文(頸部文様帯技法a)が施文されている受け口状口縁の甕であるが、オオバコの花茎を回転施文したとみられる疑似縄文が施されている。施文方法は、口縁部には穂先を下にして回転、頸部は上にして回転しており、花茎の生育状況から春先に製作されたものと推測される。甕はやや乱れた櫛波縦羽状文の甕416、コの字重ね文の甕(もしくは台付甕)415、台付甕脚部429

がみられる。また、442は大きな透かしが5箇所みられる高杯の脚部であるが、脚部内面中央から下がる突起の残欠があり、そこに2孔が穿たれていたと推測される。またP9からは手づくねの土製品418が出土している。石器は中央東側床面レベルからは大型蛤刃石斧S032、SB08周溝が埋まりきった上部から扁平片刃石斧S036・128、P10の1層上部から緑色片岩の磨製石鏃S012が出土した。南壁付近西側には石鏃S157・158、P28上に石鏃S161、出入口ピット上には楔形石器S206がみられる。住居跡中央付近の床面から10cm以上浮いたレベルに投棄された多くの礫に混じって軽石製品S047・069・070・071・072や、焼けた動物骨が出土している。また、中央付近の礫集中部脇の床面レベルから頁岩の管玉1点が出土した。

時期：栗林3式の段階とみられる。

SB08 [遺構：第13・14図PL4・5、土器：第56図PL15、石器：第84図]

位置：1区、II I07・08・12・13グリッド。**検出：**SB07の床面で検出された。(調査経過はSB07を参照)
重複関係：SB07に切られる。SB07で検出された炭化材が本住居プランを切る形で検出されていることから判断した。**埋土：**不明。**構造：**規模・平面形はほぼ全周する周溝からみて、長軸4.68m、短軸4.08mの隅丸長方形。主軸方向はN23°Wである。壁はSB07に削平されている。P27は出入口ピットと考えられる。主柱穴とみられるピットはP17以外ないが、平面位置関係でみるとSB07の主・支柱穴としたP8・10も考えられる。よって、本住居跡はSB07の拡張前住居跡と理解しておきたい。**炉：**石囲炉か。礫は南辺のみ残存し、火床上には土器片が認められる。**出土遺物：**SB08附属遺物として認定できるものは炉1から出土した壺407と櫛描縦羽状文の甕408と石皿S067・068。周溝から出土した石鏃S162のみである。**時期：**炉出土土器から栗林2式新段階の段階に比定したい。

SB09 [遺構：第15～17図PL5、土器：第57～59図PL16～18、石器：第74～77・79・81～83・86・88図]

位置：3区、II I25、II N05グリッド。**検出：**Ⅲ層中～Ⅳ層上面。調査は3区表土剥ぎ後、住居北側の調査を実施した。当初、3区南側は工事エリアで調査区南壁に住居跡がかかるため、断面で掘り込み面を明らかにしようとしたが、これまで同様、Ⅲ層と埋土の差を認識することができずⅣ層上面でプラン確定した。その後、工事関係者との協議で発掘区の拡張を行い全体の調査をした。本住居跡の埋土からは、多量の遺物が出土した。床面調査の段階で、何回かの建て替えを認識したが明確にできていない。**重複関係：**他遺構との切り合いはない。遺構内で何回かの建て替えがあるが明確でない。炉が4基重複していたことから4回の建て替えが行われた可能性がある。**埋土：**黒色土、土器片などを多量に含むが、周囲の包含層との見分けがつきにくく堆積状況は判断できなかった。**構造：**長軸4.48m、短軸4.40mの隅丸方形。主軸方向はN30°Wである。壁高は24cmで緩やかに立ち上がる。周溝が全周する。主柱穴は配置と切り合い関係からみてP1・2・3・8が相当するか。ピットには、大量の土器片が流れ込むP2・16のものがある。P11・13は2本1対の中央に浅いP12を伴う出入口ピットと考えられる。その出入口ピットのP13と住居南壁との周溝脇に粘土が入っていたP17・18がある。**炉：**住居廃絶時に伴う炉跡は中央やや北壁寄りにある炉1の土器敷炉である。埋土中には礫も入っていた。旧炉跡は、重複関係からみて炉2から北壁へ向かって古くなる。**出土遺物：**炉1には、櫛描斜線文か受け口状線の甕262が敷設されている。また、内外面に化粧土が貼られた壺288は胴下半部を水平に切断されていて、その破片の1片が炉1から、その他は1層から出土した。また住居跡北西壁際P16の埋土1層の最上部を封鎖するような形で櫛描縦羽状文の甕255と壺257が割られた状態で上下に折り重なって(255の方が上)出土した。南東のP2の埋土1層上部からも、253の甕が割られて出土し、そこに南東壁床面に潰れて出土した壺250と胎土2類(第8章第2節3のC類)の甕254の破片の一部が伴っていた。埋土中の出土土器としては、炉の北側の

1層下部から床面レベルにかけて土器集中（1層下部土器集中）があり、Ⅱ文様帯に頸部文様帯技法aが用いられる壺249・251・259やⅠ文様帯のみの壺256、瓶（有孔鉢）264・265等がみられる。南壁際を中心に1層上部から多くの土器が出土しており、壺には頸部が外反するもの260と緩い受け口状になるもの261・293がみられる。動物骨は南側の2層レベルからニホンジカの大腿骨片（B24）、1層下部からはイノシシの下顎切歯片（B26）など9点の歯や焼骨が出土している。また南東部のP17・18からは良好な白色粘土が出土しており、土器作りの原料であった可能性が高い（第8章第1節3）。石器はいずれも1層から出土していて、北壁付近で大型蛤刃石斧S074、西壁付近で扁平片刃石斧S078、南西隅に磨製石鏃S013、敲石S081、磨石S144、凹石S083がある。**時期**：炉、ピット中の一括資料から栗林2式新段の段階と比定し、1層出土土器は栗林3式までの幅がある。

SB10【遺構：第18・19図PL5・6、土器：第59図PL18】

位置：2区、ⅡI23グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。重機でⅢ層を掘削中に、遺物が多量に出土したため人力による検出を行った。だが、Ⅲ層中では平面プランをつかめず、Ⅳ層上面まで掘り下げて検出した。SB11との新旧関係も、Ⅲ層中では壁の立ち上がりを探掘できなかった。越冬期の調査となり、埋土が凍結してしまい微細な調査は不可能であった。そのため、土器などの遺物も埋土から分離できず、土ごと取り上げて水洗選別する方式をとった。**重複関係**：SD06に切られる。SB11との新旧は不明である。南側半分は工事により削平されている。**埋土**：全体に炭化物粒が認められ、特に下層に多く混じる。東壁際に炭化材の残存あり。SB11との切り合い部付近では、多量の土器片や礫が集中して出土した。この遺物集中区はSB11上層にもつながっていたようであり注意を要する。**構造**：長軸3.44m、短軸2.40m以上の楕円形か。他の住居跡と異なり規模は小さい。主軸方向は、炉を通る東西軸のP1・2と直交する方向で測り、N18°Eである。壁高は12cm。支柱穴はP1・2が相当するか。**炉**：土器埋設炉。炉の位置は、現状で中央やや東寄りに位置する。**出土遺物**：壺455の胴部以下が炉体土器として正位に埋設され、その脇に沿うようにⅣ文様帯に沈線による重山形文が軸文された壺454が埋設されている。また、次に述べるほぼ完形の土器が炉を取り囲むように埋土最下層の床面から3cm程度浮いたレベルから遺棄されたように出土している。まず、住居跡西側に瓶（有孔鉢）459が伏せられ、その中から渡来系弥生人の特徴をもった歯（本章第3節4参照）が出土した。その北側に櫛形羽状文の甕492が横転し、さらに北側のP1上からは瓶（有孔鉢）457が正位で出土している。北東部からは赤彩高杯456が逆位、その北側から瓶（有孔鉢）458が正位で出土している。**時期**：炉出土土器から、栗林2式古～新段階の段階に比定される。

SB11【遺構：第18～20図PL6、土器：第60～62図PL19～21、石器：第73・75・77・78・82図】

位置：2区、ⅡI17・18・22・23グリッド。**検出**：Ⅲ層中～Ⅳ層上面。Ⅳ層上面。重機でⅢ層を掘削中に、遺物が多量に出土したため人力による検出を行った。だが、Ⅲ層中では平面プランを掴めず、Ⅳ層上面まで掘り下げ、周溝からプランを確定した。このためSB10との新旧関係や、Ⅲ層中での壁の立ち上がりは把握できなかった。越冬期の調査であったため、埋土は凍結し、微細な調査は不可能であった。そのため、土器などの遺物も埋土から分離できず土ごと取り上げ、水洗選別する方式をとった。南側半分は工事により削平されている。**重複関係**：SB10と切り合うが新旧不明である。遺物からみてもほぼ同時期とみられ確定できない。炭化物の出土状況からみれば、本住居跡の床面に広く炭化物が分布することからSB10を切る可能性がある。**埋土**：SB10にまたがる埋土上層に礫を中心とした遺物集中箇所がみられた。大量に炭化物粒子が混入し、床面直上では多量の炭化材を検出した。**構造**：長軸5.44m、短軸4.48mの長方形、主軸方向はN14°Wである。壁高は不明。周溝は、ほぼ全周していたものと見られる。ピットは10基あるが、

主柱穴とみられる P1・2 以外的小ピットは床下で検出されており、他の遺構が存在していた可能性もある。P1・2 には柱痕がみられた。**炉**：浅い掘り込みの北辺を除く 3 方向に礎を設置した石囲炉。**出土遺物**：埋土中に多数の土器が出土している。床面に比較的近いレベルのものは北東隅から出土した懸垂杵状文の壺 460 で底部が正位で出土している。その他多くは住居跡北側、床面から約 5～10cm 程度浮いて炭化材に混じった状態で一括出土した。壺は 467・486・461・466・468・475・479（第 60 図）と 478（第 61 図）で、甕は 483・474・473・481（第 61 図）と、480・485（第 61 図）、台付甕 469・470（第 61 図）、赤彩台付甕 464、赤彩鉢 465・484（第 61 図）があり、その多くに煤が付着している。そのうち壺 475 の第Ⅲ文様帯には、縦方向に沈線が垂下しそこから杖状に沈線が伸びる特殊な文様が描かれている。これは佐久市北西久保遺跡等でも出土した通称「水鳥の足」文様（佐久市教委 1984a）と共通する可能性があり（註 1）、やや類似した文様は東海地方の弥生中期後半にもみられる（東海埋蔵文化財研究会 1990）。この他、平行沈線文間に押し引き文が施された壺 479、細頸の 466 など、4 つの文様帯が揃っている土器が複数ある。一方甕は柳描縦羽状文 480・481 と、縦羽状の沈線文が施された 474 がみられる。また、その他の埋土出土遺物では、西壁際から、他よりも細く撚りが緊密な縄文が胴部下半に施された壺 463 が、P5 上から赤彩壺 489、炉の埋土中から壺 462、東壁際ではⅡ文様帯のみの壺 472・476 が出土した。石器には、床から数 cm 浮いて扁平片刃石斧 S038・039、炉縁石から 17cm 程度浮いて磨石 S101 がみられる。**時期**：一部古い様相を残すものの、基本的に栗林 2 式新段階の段階に比定したい。

SB13〔遺構：第 21・22 図 PL6、土器：第 62・63 図 PL21、土器片加工円板：第 71 図 PL27、石器：第 74・79・83 図〕

位置：3 区、Ⅱ I20・25 グリッド。**検出**：Ⅲ層中～Ⅳ層付近。H17 年度 2 区の調査でⅢ層上面まで表土剥ぎを行い、Ⅲ層を徐々に重機によって剥ぎ始めた段階で多量の遺物が出土した。Ⅲ層中ではプランが確定できず、Ⅳ層付近まで人力で精査し、住居北西隅が部分的に調査区にかかるプランを検出した。よって翌 H18 年度 3 区調査時に全体を調査することとした。H18 年度の検出も遺物が大量に出土したⅢ層から徐々に平面検出を行ったがⅢ層中ではわからず、Ⅳ層に近い層位でようやく確認できた。先行トレンチは、住居壁面からプランを追うために設定し、プランをはは確定させて掘り下げた。埋土中には、床面よりやや高い位置で、焼土ブロックを多量に出土する層がみられた。**重複関係**：ST13 を切る。根拠は、新旧関係を確定させるため、SB13 埋土中で ST13 床面検出をしたが、SB13 埋土中では検出されなかったことによる。**埋土**：炭化物を若干含む黒色土が主体でⅢ層との見分けがつかなかった。一部に焼土ブロックを含む堅い層が存在した。本来、残存状況はよかったと考えられる。しかし、Ⅲ層中でプランを捉えられず、埋土の床面上のわずかなところまで掘り下げており、詳細は不明である。**構造**：長軸 5.36m、短軸 5.32m の隅丸方形。主軸方向は N11°W である。壁は平面形で南西側の湾曲が強く、壁高は 16cm である。主柱穴は P1～4 があり、P5 は支柱穴とみられる。南壁際中央の P8 は出入口ピットと考えられる。床下から検出された P6・9 は位置からみて 2 本 1 対の出入口とみられる。床は中央付近を主として堅固な貼床が認められた。床面は北に向かって若干高くなる。周溝が巡り、溝内には凹みが多く認められた。**炉**：石囲炉。住居のほぼ中央で、炉縁石は、北側を除く 3 辺に配置したコの字形。**出土遺物**：住居跡北西の P4 の埋土 2 層から 3 層にかけて赤彩の高杯 075 が出土した。レベルから床面と認定される土器は北壁側の大形の赤彩壺 073 と南西壁側に正位で出土した赤彩鉢 A074 のみである。その他は床から数 cm 浮いた 3 層レベルから散漫に出土し、一括土器は見られない。良好なミガキの壺 078 は破片の 1/2 が南側の出入口ピット P8、残りが埋土から出土している。埋土からはニホンジカの末節骨近位焼骨片など焼骨が出土した。石器は東側から大型蛤刃石斧 S097、南側周溝内からはみがき石 S148、南西部床面からは土器片加工円板 566 がみられる。土器片加工円板は A 類 566・567、B 類 568 とともに出土している（第 71 図）。**時期**：ピットと床面レ

ベル出土遺物でも栗林3式に相当する壺 078・鉢 074 と後期の様相がみられる壺 073・高杯(もしくは鉢 B) 075 がみられ、比定が難しいが、栗林3式から後期に向かう過渡的段階と捉える。

SB14 [遺構：第23図 PL6、土器：第63図 PL21、石器：第77・78図]

位置：3区、II N05・10、II O01・06グリッド。**検出**：Ⅲ層中位～Ⅳ層上面。検出は、他の住居跡同様でⅢ層とⅣ層の見分けがつかなかったため、Ⅲ層中位からⅣ層上面まで重機で掘り下げてプランを確定させた。検出した遺構プランは、ボックス工事側に延びており、その境界の壁面を断面観察に用い、その壁際に先行トレンチを設定した。トレンチでは床を確認できず住居跡と確定できなかった。平面プラン内を掘り下げた中で、壁の立ち上がりを検出できたことから堅穴住居跡とした。なお、ボックス工事側に遺構が延びていたため、協議してボックス工事側にて限り拡張して調査した。**重複関係**：SK020・105と切り合うが新旧不明である。**埋土**：3層に分かれる。3層の黒色土を主体とし、その上層に灰白色粒を多量に混入した1層が形成されている。**構造**：長軸6.60m、短軸5.28mで平面形は北東隅がかなりの丸みをもつ隅丸長方形、主軸方向は真北である。壁高は32cmである。主柱穴はP1・3・4があり、P2は支柱穴とみられ他の柱穴と比較して浅い。**炉**：不明。**出土遺物**：住居跡北側に床面から5～10cm程度浮いた3層レベルから良好な一括土器がみられる。まずの壺 014 と鉢 C015 は横に押しつぶされた状態で出土し、その脇から柳播浪状文と廉状文が施された壺 016 が出土している。一方、南側の3層レベルからは柳播横羽状文が2段にわたり密接に施文された壺 019 が出土している。石器は、北東壁際の3層下部から床面レベルに磨製石鏃 S016・017、磨製石鏃未製品 S018 が、P3の北西側に磨製石鏃未製品 S019 がみられる。**時期**：床面～3層レベルの遺物から弥生後期前半段階とみられる。

SB15 [遺構：第24図 PL6・7、土器：第63図 PL22、石器：第75・76・79・83・85図]

位置：6区、II J21・22、II O01・02グリッド。**検出**：Ⅲ層中位～Ⅳ層上面。調査区東側の断面付近でⅢ層中から礫や土器が比較的多く出土し、人力による検出に切り替えた。しかし、Ⅲ層中での検出はできず、Ⅳ層上面近くまで掘り下げた段階で平面プランを確定した。**重複関係**：なし。**埋土**：上層に多量の礫が混入していた。床面直上には炭化材が残る黒色土層が形成されていた。炭化材は住居跡の壁際に比較的多かった。また、礫集中層から床面近くにかけて動物骨片と見られる骨が点在していた。**構造**：長軸6.16m以上、短軸4.12mの隅丸長方形、主軸方向はN37°Wである。壁高は22cmで緩やかに立ち上がる。10cm程度の掘り方をもつ。主柱穴はP1～4である。いずれも平面形は径20cm前後の円形、深さは40cm程度で、他の住居跡と比較して規模も小さく浅い。南壁中央寄りに2本1対となる出入口ピットのP5・7がある。これらは主柱穴より浅く30cm程度である。**炉**：主柱穴のP1・2間の中央に位置し、浅い掘り方をもつ地床炉。掘り方規模は径70cmの円形で、その中央付近の30～40cm前後の範囲に焼土層が形成されている。**出土遺物**：1層内の床上10cm程度から床面にかけて炭化材が多量に出土し、さらにその10cm程度上から直径10～20cm程度の大量の礫が出土した。その中には扁平片刃石斧 S040 が含まれていたが土器はほとんどみられなかった。土器は炭化材中から床面レベルにかけて3点が出土した。そのうち南西隅の赤彩鉢 B039 は伏せた状態で、南東部壁際の鉢 A045 は正位で、その北側の壺 044 は頸部以上のみを切断して伏せて出土した。特に壺 044 は口縁部のみが爆けているため、炭化材が焼けてまだ熱をもった状態の折にこれらの土器が配置された可能性が考えられる。また、動物骨はシカの歯 (B036・037・038) やその他の焼骨が1mほどのエリアに集中している。その他、住居跡南壁近くの同レベルからは石鏃 S168 と砥石 S344 が出土している。**時期**：上記3点の土器から、本住居の廃絶時期は、後期前半に比定される。

SB16【遺構：第25図 PL7、土器：第64図 PL22、石器：第75・77・80図】

位置：3区、Ⅱ H15・20、Ⅱ J11 グリッド。**検出：**Ⅲ層中位～Ⅳ層上面。重機によるⅢ層掘り下げの際、遺構とみられるプランの一部を検出した。Ⅲ層中ではプラン確定ができないため、Ⅳ層上面まで剥き取り確定させた。この時点では、軟弱な床面が削れる状態となっていた。先行トレンチを設定したが、壁の立ち上がりを確認できなかった。床面の大半が礫層上で、明確な床はわからなかった。炉も焼土が残らず、その位置から炉とした。本住居跡の西側は、H17年度調査1区となることから、重機によるⅢ層の掘削時に削平した可能性が高い。**重複関係：**位置から SK019 と切り合いが想定されるが新旧不明である。**埋土：**北壁際に黄褐色土ブロックを含む層があり、その上層に黒色土を中心とした堆積が認められた。焼土・炭化物を若干含んでいる。**構造：**長軸 5.32m、短軸 4.56m の隅丸長方形、主軸方向は N17° E である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は 24cm である。主柱穴は P1～4 で、うち P2 は広い掘り方をもち一番深い。また、P3 上部から礫がまともって出土した。P5 は掘り方の一部を捉えた可能性が高い。**炉：**ほぼ中央に位置した浅い掘り方をもつ地床炉。地山に混入する礫上に設定されたためか、焼土はほとんどない。**出土遺物：**北東隅の床面レベルに遺物が集中して出土している。北壁付近には口唇部に刻みの入った三角形突起、頸部に横走沈線文（頸部文様帯技法 a）をもつ壺 060、北東隅には格子目状に櫛歯文が施された甕 061 が傾転状態でほぼ完形で出土した。その他、脚部が水平に切断された台付甕 062、楔形石器 S213 がみられる。また、西側の検出面からは釘 M4 が出土しているが本住居跡に確実に伴うかどうかは不確定である。**時期：**床面レベルの土器から栗林 2 式新段階に比定したい。

SB17【遺構：第26図 PL7、土器：第64図 PL22、石器：第77～79・81図】

位置：6区、Ⅱ J07・12 グリッド。**検出：**Ⅲ層中～Ⅳ層上面。**重複関係：**SD12 と切り合う可能性があるが、Ⅲ層を掘り下げて検出したため明らかでない。**埋土：**焼土の有無で2層に分かれる。2層中から床面にかけて炭化材が検出されている。**構造：**長軸 5.44m、短軸 4.88m の隅丸長方形、主軸方向は N23° E である。壁高は 22cm である。主柱穴は P1・2・6・7 で、P4・8 が支柱穴とみられる。南壁際にある P3・5 は出入口ピットと考えられる。**炉：**切り合う 2 基が住居中央付近で検出された。炉は新しいものを炉 1、古いものを炉 2 とした。いずれも土器埋設炉と考えられる。炉 1 は壺、炉 2 は甕が用いられている。掘り方は、用いられた土器より一回り大きく掘られている。2 基の炉からそれぞれの中軸上に合う支柱穴の配置をみると、炉 1 は P8、炉 2 は P4 が中軸上に合う。このことから炉の作り替えに伴い支柱穴の位置も替えた可能性もあろう。**出土遺物：**炉 1 の炉体土器として壺 096（正位）、壺 097（逆位）、壺 098 がみられ、特に 097 と 098 が同一個体の可能性が高い。炉 2 の炉体土器としては頸部に櫛歯文、胴部にやや乱れた櫛歯羽状文をもつ甕 099 がみられる。埋土下層から床面に広がる焼土、炭化材を伴うレベルから床面にかけて土器・石器が出土している。そのうち床面レベルでは口唇部に隅丸三角形突起、Ⅱ 文様帯に頸部文様帯技法 c による横走沈線文、Ⅲ 文様帯に櫛歯垂下文 a と押し引き文が施された壺 110 が、その北西から台付甕 109 等が出土した。また炉 2 の北側から土器全体の外面がかなり煤けた赤彩小形壺 296 が、炭化材に伴う 2 層レベルからは壺か甕の底部 103 が逆位で出土した。住居出入口ピット上 2 層下部レベルの赤彩鉢 101 は、内外表面がバッチ状に剥落している。石器は 1 層から出土していて、北東側に磨製石鏃未製品 S021、東側に石槌 S149 がみられる。**時期：**炉出土土器から栗林 3 式の段階に比定できるが、栗林 2 式新段階の土器が混在している。

SB18【遺構：第27図 PL8、土器：第65図 PL23、石器：第79・82図】

位置：3・6区、Ⅱ J16 グリッド。**検出：**Ⅲ層中位～Ⅳ層上面。重機によるⅢ層掘り下げ中に黒褐色土の

広がりを確認した。人力による検出作業で南半分をかく乱された住居跡と確定した。北半部は通常通りの調査を行い、南半部はかく乱を掘り下げ残存ピットや周溝の検出を行った。**重複関係**：なし。**埋土**：黒褐色土の堆積層のみ確認した。**構造**：長軸 3.76m 以上、短軸 2.04m 以上の隅丸長方形、主軸方向は N7° E である。壁高は残存した北壁側で 12cm。主柱穴は P1～4 である。P5・6 は、住居範囲内に取まるため本住居跡に含めているが、本住居跡のものか判断がつかない。**炉**：主柱穴配置からみてほぼ中央にある。浅い掘り方もつが、礫等を据えた痕跡が確認できなかったことから地床炉とみる。**出土遺物**：住居跡北壁際の床面レベルから頸部横走沈線文（頸部文帯技法 a）の壺 064 と磨石 S146 が出土し、床から 3cm 程度浮いて櫛波状文の甕 065 が一括出土している。**時期**：遺物が少ないが、床面レベルの土器から栗林 3 式の段階とみられる。

SB20 【遺構：第 28・29 図 PL8、土器：第 65 図 PL23】

位置：5 区、II E21・22 グリッド。**検出**：Ⅲ層中位～Ⅳ層。重機による表土剥ぎの段階で遺物量や炭化物粒が多く出土し、遺構の可能性があったため掘削を止め検出作業をした。その結果、住居跡であることを確認したが、すでに大半を削平してしまった。**重複関係**：SB23 を切る。**埋土**：炭化物粒がわずかに混入していたがⅢ層と埋土の見分けがつかなかった。**構造**：長軸 4.88m、短軸 4.32m の隅丸長方形、主軸方向は真北である。壁高は 20cm で、やや傾斜角をもって立ち上がる。周溝は検出されたが全周したか不明。主柱穴は P1～4 で、長方形プランに則して配置されている。P5 は出入口ピットと考えられる。**炉**：削平しているが礫等の抜けた痕跡がみられないことから掘り込みをもつ地床炉であろう。位置は、住居ほぼ中央に設けられている。**出土遺物**：本住居跡 P5 内から非常に精製された胎土の壺 154 が胴下半部から上を切断された状態で正位に埋設された状態で出土した。下半部内側から外に向かって 1.3cm 程度の孔が穿孔されている。住居入口に関わる祭祀との関係が推測される。**時期**：壺 154 の胴部の張りがかたく底部がすぼまるため、栗林 3 式の段階の可能性がある。

SB21 【遺構：第 30 図 PL8、土器：第 65・66 図 PL23、石器：第 78・79・81・85・88 図】

位置：3 区、II D25、II I05 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。重機でⅢ層上位から掘り下げ、Ⅳ層上面で検出した。本住居跡の西側は、H17 年度調査 1 区となることから、重機によるⅢ層の掘削時に削平した可能性が高い。**重複関係**：他遺構との切り合いはないが、柱穴数、炉数から、改築が複数回行われたと想定される。**埋土**：Ⅲ層とほとんど区別がつかない。**構造**：長軸 6.64m、短軸 4.00m 以上の隅丸長方形、主軸方向は真北である。壁高は 24cm である。**炉**：2 基を検出した。炉 1 の石開炉と炉 2 の土器埋設炉がある。床に石が露出していることから、石開炉が新しいと判断する。ピットは 21 基確認したが、主柱穴の組み合わせは不明。ただし、炉を中軸線としてみた場合、炉 1 は P14・17・18 が、炉 2 は P12 が出入口ピットと考えられる。よって、この出入口ピットの位置関係から南側へ大きく拡張された住居跡と理解しておきたい。**出土遺物**：炉 1 には壺 123 の底部が割られて正位で散かれ、破断面が被熱により赤化し内面が剥離している。また北側の炉 2 には壺 125（頸部文帯技法 a）が逆位で埋設されている。P13 の 1 層上部からは赤彩高杯 126 が出土した。埋土出土遺物で最も床面に近いものは P13 の脇から正位で出土した甌（有孔鉢）128 でその他は顕著ではない。また南側 1 層下部の床より 5～10cm 高いレベルから集中出土した土器には口縁部に波状沈線文が施された受け口状口縁の壺 131、円形浮文が貼付されたコの字重ね文の台付甕（もしくは甕）136 と台付甕 135 がみられる。また南壁際の 1 層のかなり上部から出土した赤彩鉢 C151 は、口縁部内外面ともに口縁の沈線上 3cm 程度の部分のみに赤彩が良好に残存し、それ以下は、部分的にしか残っていない。残存部分は明らかに故意に赤色顔料を塗布した部分、少ない部分はミガキの際に赤彩が膜って付着したものの

本来の意図的な赤彩は施さなかった部分と考えられる。その他、埋土からは台付甕と推測されるミニチュア土器149も出土している。石器は、床面直上から凹石S092が出土した（現場所見）。**時期**：炉と1層の出土遺物から栗林3式段階とみられる。その他、埋土から棒状の鉄製品M5・M6が出土している（PL34）。いずれも混入品であろう。

SB23 [遺構：第28・29図 PL8、土器：第66図 PL23、石器：第74・85図]

位置：5・6区、Ⅱ E21・22、Ⅱ J01・02グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。重機による表土剥ぎ段階で、土器小破片が比較的多く認められたため、Ⅲ層中位からトレンチ調査に切り替えた。しかし、明確な壁の立ち上がりや床面を特定できず、再度重機による剥ぎ取りを行った。当初はプランがはっきりせず切り合うように見えたため、北側部分をSB22、南側をSB23として調査を開始した。Ⅳ層が見えた所ようやくプランを確定したが同一遺構として取り扱うまでには至らなかった。本格整理作業の段階で支柱穴の配置などから同一遺構と判断した。なお、遺構番号の統合の決定に際し、遺物出土量の多いSB23を残しSB22を欠番とした。遺物は取り上げ位置が残るよう遺物の注記までは変更していない。**重複関係**：SB20、SK023、SD12に切られる。**埋土**：砂礫混じりの黒色土が主体だが、Ⅲ層との区別がつかない。**構造**：長軸7.12m、短軸3.92m以上の隅丸長方形、主軸方向は真北である。壁高は40cmである。支柱穴はP2・3・7・10で、東側の支柱穴との間に支柱穴のP1が設けられている。支柱穴P7と切り合うP8は旧支柱穴と考えられる。その他にピットが6基検出されている。P1・11を2本1対の出入口のみ場合北側に出入口を設けた主軸方向を真南にもつ住居跡となる。**炉**：不明。**出土遺物**：遺物はいずれも床面から10cm程度浮いて出土した。住居跡中央部では、胎土に微細な白色粒子を含み口唇部に鋭い刻み文をもつ壺172と櫛描縦羽状文の甕171が相伴し、P3脇からは壺301、東壁際からは壺の胴部を表現したミニチュア土器569が出土している。口唇部内面に山形沈線文、頸部に刻みを伴う横走沈線文（頸部文様帯技法B）が施される壺176は埋土と床下出土の破片が接合している。299は本住居跡内から出土してはいるが、包含層からの落ち込みの可能性もある。石器は南壁際床面には石皿S347、南東隅には太型蛤刃石斧S076がみられる。**時期**：床下と埋土出土土器から、栗林2式古～新段階の段階と考える。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡としたものは9棟あり、調査区の南側に偏って検出された。規模は1間×1間から1間×5間で、堅穴住居跡に比べて小規模な柱穴もある。検出面は基本土層Ⅲ層下部からⅣ層にあたり、古代以降の溝跡と考えられるSD01にST04・07・08が切られている。また、掘立柱建物跡とした中には、焼土や石皿を有するST08など、堅穴住居跡の柱穴の可能性が考えられる遺構があるが、ここで扱う。なお、ST03・09・11・12は欠番である。

ST01 [遺構：第31図 PL8]

位置：1区、Ⅱ H13・14・19グリッド。**構造**：柱穴の配置は1間×3間で、主軸がN60°E、梁行2.48m、桁行3.36mである。**出土遺物**：弥生土器小片が出土している。**時期**：検出状況から、弥生時代。

ST02 [遺構：第31図 PL8、石器：第87図]

位置：1区、Ⅱ I06・07・11グリッド。**重複関係**：SB04と切り合うが、新旧不明である。**構造**：柱穴の配置は1間×4間で、主軸がN43°E、梁行2.48m、桁行4.28mである。**出土遺物**：弥生土器小片と軽石製品S100がP9から出土している。**時期**：検出状況から、弥生時代。

ST04 [遺構：第31図 PL9、土器：第66図 PL24]

位置：1区、Ⅱ I13・18グリッド。**重複関係**：SD01に切られる。P3は一部かく乱されている。**構造**：柱穴の配置は1間×2間で、主軸はN45° E、梁行1.68m、桁行2.40mである。**出土遺物**：P2埋土上部から正位で出土した524は瓶（有孔鉢）で種子残渣が内外面にみられる。P7埋土上部からは壺528が出土している。**時期**：ピット内出土土器から栗林2式新段階に比定したい。

ST05 [遺構：第32図 PL9、土器：第66・67図 PL24]

位置：1・2区、Ⅱ I19グリッド。**検出**：P3を含む、断面観察の結果からは、竪穴住居跡にみられる壁の立ち上がりが観察された。このため、本址は竪穴住居跡と判断するが、整理経過を考慮して、本項で掲載してある。**構造**：柱穴の配置は1間×1間で、主軸はN20° E、梁行1.68m、桁行2.80mである。他と比べ、穴の形状が大きい。**出土遺物**：中央やや西寄りに一括土器がみられ、壺520、柳描波状文の台付甕523、赤彩壺527などがある。**時期**：出土遺物から栗林3式～後期の時期幅でとらえたい。

ST06 [遺構：第33図]

位置：1区、Ⅱ H20、Ⅱ I16グリッド。**重複関係**：SB03と切り合うが、新旧不明である。**構造**：柱穴の配置は1間×4間で、主軸はN72° E、梁行2.44m、桁行4.20mである。**出土遺物**：なし。**時期**：検出状況から弥生時代。

ST07 [遺構：第33図 PL9]

位置：1区、Ⅱ I12グリッド。**重複関係**：SD01に切られる。SB07と切り合うが、新旧不明である。**構造**：柱穴の配置は1間×5間で、主軸はN35° W、梁行2.48m、桁行5.68mである。**出土遺物**：弥生土器片が少量出土している。**時期**：検出状況から弥生時代。

ST08 [遺構：第33図 PL9、石器：第85図]

位置：1区、Ⅱ I13グリッド。**検出**：焼土が認められたが、柱穴検出面より浮いた状態で確認されている。竪穴住居跡が後世に削平され、ST05と同様に、柱穴が検出された可能性が考えられる。**重複関係**：SD01に切られる。**構造**：柱穴の配置は1間×1間で、主軸はN15° E、梁行2.16m、桁行2.56mである。**出土遺物**：輝石安山岩の石皿S354が出土している。**時期**：検出状況から弥生時代。

ST10 [遺構：第33図 PL9]

位置：2区、Ⅱ I18・23グリッド。**重複関係**：SD06と切り合うが、新旧不明である。**構造**：柱穴の配置は1間×2間で、主軸はN25° W、梁行2.24m、桁行3.20mである。**出土遺物**：弥生土器片が少量出土している。**時期**：検出状況から弥生時代。

ST13 [遺構：第21・22図 PL9、土器：第67図 PL24・25]

位置：2・3区、Ⅱ I19・20・24・25グリッド。**検出**：P5の北側で、一部竪穴住居跡の立ち上がりが検出され、本址は竪穴住居跡の柱穴と判断したが、整理経過を考慮して、本項で記述した。本書P37のSB13の記述も参照されたい。**重複関係**：SB13に切られる。一部かく乱されている。**構造**：柱穴の配置は1間×2間で、主軸はN65° E、梁行2.20m、桁行4.16mである。他と比べ、穴の形状が大きい。またSK093は、位置関係から本址ピットの可能性もある。**出土遺物**：P1から赤彩の施された壺093と口縁部下に柳描籬状文類

部に柳描線文が施された甕 094 が出土した。また P2・P5 と床面レベルから赤彩高杯 095 が、P5 脇の床面からは壺 092 が出土している。またミニチュア土器 564 は鉢 A とみられる。**時期**：出土遺物から栗林 3 式段階とみられる。

3. 土坑

検出された土坑 100 基は多くがピット状で、ここでは比較的規模の大きい土坑 6 基について記述する。検出面は、基本土層Ⅲ層下部からⅣ層にあたる。

SK001 [遺構：第 35 図 PL10、土器：第 67 図 PL25、石器：第 81 図]

位置：1 区、Ⅱ H09 グリッド。ST01 の北東にある。**埋土**：2 分層される。**構造**：長軸 168cm、短軸 102cm の長方形を呈する。断面径は鍋底状で、検出面からの深さは 29cm。**出土遺物**：1 層から栗林式の小破片が出土し、1 層下部から壺 502 の口縁部から頸部が出土した。胎土が白色緻密で、口縁部は緩く外反しており、本土坑も含めて他の栗林式土器とは著しく異なる。口縁部には 0 段多縄 LR (ℓ 3) 縄文が横方向に 4 列以上回転施文され、幅の広い I 文様帯が形成されている。頸部には 1 条の横走沈線文が施され、それ以下の頸部は無文である。これは駿河湾地方に分布する有束式の壺と考えられる (註 2)。1 層からは敲石 S111 も出土している。**時期**：栗林 2～3 式の段階の範疇とらえる。

SK003 [遺構：第 35 図 PL10、土器：第 67 図 PL25]

位置：1 区、Ⅱ I18 グリッド。SD06 に隣接する。北東側はかく乱を受ける。**埋土**：6 分層される。**構造**：長軸 190cm、短軸 78cm の長楕円形を呈する。断面形は鍋底状で、検出面からの深さは 32cm。**出土遺物**：埋土から外面に赤彩が施された蓋 503 が出土している。**時期**：出土遺物から、弥生時代中期。

SK010 [遺構：第 35 図、土器：第 67 図 PL27、土器片加工円板：第 71 図 PL27、石器：第 76 図]

位置：2 区、Ⅱ I17 グリッド。SK003 の南西にある。**埋土**：4 分層される。**構造**：長軸 208cm、短軸 160cm の楕円形を呈する。断面形は鍋底状で、検出面からの深さは 46cm。**出土遺物**：3 層から、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ 文様帯をもつ壺 505 が出土した。頸部横走沈線文の文様帯技法は b であり、胴部に沈線による連弧文 a が施されている。また、壺 506 は口縁部に柳描波状文、円形浮文が貼付され、甕 (もしくは台付甕) 507 は胴部にコの字重ね文、壺 508 は口縁部が縄文のみである。また、埋土から C 類の土器片加工円板が出土している。石器は打製石斧 S353 のほか、石鏃、碎片、剥片が出土した。**時期**：出土遺物から栗林 2 式新段階に比定する。

SK011 [遺構：第 36 図、土器：第 68 図 PL25、石器：第 80 図]

位置：2 区、Ⅱ H20、Ⅱ I16 グリッド。SB03 の南にある。**埋土**：6 分層され、埋土中位で焼土塊が認められた。**構造**：長軸 136cm、短軸 110cm の不整形円形を呈する。断面形は鍋底状で、検出面からの深さは 23cm。**出土遺物**：5 層から受口状口縁で頸部に 1 条の横走沈線文と横羽状沈線文を有する赤彩壺 509 が出土している。石器は黒曜石の石核 S224 が出土している。**時期**：出土土器から栗林 2～3 式の段階に比定する。

SK020 [遺構：第 36 図、土器：第 68 図 PL25]

位置：3 区、Ⅱ N05 グリッド。重複関係：SB14 と切り合うが、新旧関係は不明である。**埋土**：黒色土の単層で、多くの礫が混入する。**構造**：長軸 83cm、短軸 62cm の楕円形を呈する。断面形は鍋底状で、検

出面からの深さは22cm。**出土遺物**：埋土の下層から胴部が球形の台付甕510が出土している。頸部の櫛描直線文と胴部の細い櫛描波状文が横流れする構成から後期に入る時期か。**時期**：出土土器から弥生時代後期か。

SK024〔遺構：第36図 PL10、土器：第68図 PL25〕

位置：5区、II E16・21グリッド。SB20の北にある。**重複関係**：SD11に切られる。**埋土**：2分層される。**構造**：長軸234cm、短軸154cmの楕円形を呈する。断面形は不整形で、検出面からの深さは28cm。**出土遺物**：1層ないしは2層との境から壺181、櫛描縦羽状文の甕183などが出土した。**時期**：栗林2～3式の段階とみられる。

4. 焼土跡

検出面に焼土の広がりか認められた箇所が3地点あり、焼土跡として扱う。なお、整理作業以前にSF4とした焼土跡は、ST13に伴うものとして欠番とした。

SF1〔遺構：第36図〕

位置：3区、II I05・10グリッド。SB21の南にある。**構造**：長軸44cm、短軸18cmの不整形を呈する。地床炉跡か。**出土遺物**：なし。**時期**：検出状況から弥生時代。

SF2〔遺構：第36図、石器：第76図〕

位置：6区、II O01グリッド。SB14の東にある。**構造**：長軸80cm、短軸48cmの不整形を呈する。地床炉跡か。**出土遺物**：弥生土器片が少量とデイサイトの打製石斧S351が出土している。**時期**：検出状況から弥生時代。

SF3〔遺構：第36図〕

位置：3区、II I20、II J16グリッド。SB13の東にある。**構造**：長軸42cm、短軸40cmの円形を呈する。地床炉跡か。**出土遺物**：弥生土器片が少量出土している。**時期**：検出状況から弥生時代。

5. 溝跡

検出された溝跡は11条である。検出面は基本土層Ⅲ層下部からⅣ層にあたるが、耕作地境の段差などにより、全容を確認できない溝跡や切り合う溝跡の埋土が分け難いこともあった。各溝跡の時期的な把握は、調査区西壁の土層観察により、一定程度解釈できる。その結果、SD03→SD04→SD02の順で新しくなる。SD01とSD03は接するが、土層観察からは両溝跡は切り合う関係になく、分岐すると判断している。また、SD08は基本土層Ⅲ層中での掘り込みで、SD03(SD01)より古い段階の溝跡と理解し、弥生時代の竪穴住居跡と同時期の溝跡と考えている。SD12は耕作地の段差により、北側ではプランが確認できず、プランの確認できた南側部分では、SD11が重なるため、整理段階では、同一の溝跡であったと解釈した。以上のことから、溝跡の概要は以下の通りにとまとめる。

- ① SD08は弥生時代の竪穴住居群を囲む環濠と考えられる。
- ② SD01・03は古代以降の何らかの区画溝と考えられる。また、SD11・12は東西に湾曲して存在する点が似ているため、同様の溝跡と考えられる。
- ③ SD04・02は、SD01利用後にできた溝跡と考えられる。

以下、比較的規模の大きな溝跡について記述する。

SD01 [遺構：第43・44・46図 PL10、土器：第68図 PL25、石器：第76図]

位置：1区、II D04グリッドほか。SD03はSD01から分かれる溝跡と考えられる。**重複関係**：ST04・07・08を切る。**埋土**：は黒褐色土を主体とし、2分層される。南側の2層中には多量の礫が混入し、SD03も同様である。**構造**：1区北端から一部途切れながら、南に蛇行して伸びて南側で直角に曲がる。長さ79.5m、最大幅2.0m、深さ6～36cmである。断面形は鍋底状である。**出土遺物**：埋土から須恵器杯B446と灰釉陶器447が出土している。また、さほど高齢ではないウマの上顎第一切歯、ニホンジカの歯片、粘板岩の打製石斧S348なども出土している。また、寛永通宝M3が1点出土した。**時期**：寛永通宝が出土したことにより、近世とみられる。

SD08 [遺構：第45図 PL10、土器：第68図 PL25]

位置：1・3・5区、II D13グリッドほか。**埋土**：黒～黒褐色土を主体とする。**構造**：調査区北側に東西に湾曲して伸び、西側がSD01の手前で止まる。東側は調査区外に伸びる。長さ46.0m、最大幅3.0m、深さ31～99cmである。断面形は鍋底状である。**出土遺物**：埋土から頸部文様帯技法cの壺197、同技法cと推測される壺512、長大な無文の頸部をもつ壺199、口縁部の外反が弱い赤彩の壺515などが出土している。また、内外面に全面赤彩が施された鉢C198や赤彩ミニチュア土器の鉢A200もみられる。**時期**：土層観察および多様な壺の形態から栗林2～3式の段階ととらえる。

SD11・12 [遺構：第44・46図、土器：第68図 PL25]

位置：5・6区、II E11グリッドほか。**重複関係**：SD11・12は平面的に重なり合うが、同一の溝跡と考えられる。SK024を切る。**埋土**：にぶい黄褐色の砂礫層である。**構造**：南北に湾曲して伸びる、北側はプランが不明瞭となり消えてゆく。SD11で長さ40.0m、最大幅0.8m、深さ3～16cmである。断面形は皿状で、埋土はにぶい黄褐色の砂礫層である。**出土遺物**：埋土から頸部飾描波状文の甕194、口縁部まで櫛描文が施される甕195が出土している。**時期**：出土遺物は弥生時代であるが、南北に湾曲して伸びることなどから、古代以降の溝跡の可能性もある。

6. 遺構外出土の遺物

森平遺跡出土土器418kgのうち遺構外からの出土土器は約165kgに上る。ここでは、そのうち、器形・文様が判明したものを中心に全体の重量比約5%にあたる44個体を選択して掲載した。

縄文土器 [土器：第70図 PL26]

ほとんどが破片で、ごく少数出土した。まず後期称名寺式にあたるものは隆隆起線文の深鉢307、匝痕隆帯文をもつ深鉢240と内面に突起を有する浅鉢302、堀之内I式にあたるものは口唇部の波頂部が2箇所残存している深鉢236、加曾利B2式は鉢239である（註3）。これらは摩耗が比較的少ないうえ、5・6区の弥生の包含層より下層からとまって出土しており、弥生時代を中心とした包含層III層の下に、縄文時代の包含層が存在したと考えられる。

弥生土器 [土器：第69・70図 PL26・27]

各区からはほまんとなく弥生中期の土器が出土している。壺214は、I・II・IV文様帯を有し、頸部

に横走沈線文（頭部文様帯技法 a）、胴中央部から下半部には横走沈線文間に山形沈線文、その下位に沈線による縦羽状文の組み合わせによる重山形文に類似した特徴的な文様が描かれており、粟林 2 式新段階の壺と考えられる。このような文様構成自体は佐久市五里田遺跡などにもみられる（佐久市教委 1999）。粟林式の重山形文は通常 1、2 本の山形沈線文で区画を施し、その内部に交互に沈線を沿わせるが、こちらは沈線を 1 本ずつ組み合わせ、頂部で交差させていて重山形文とは異質である。このモチーフに類似したものに東北部の弥生時代中期後半にあたる円田式土器の典型的な壺がある。施文工具と施文部位に違いがみられるが、構成、条数等はかなり類似している（註 4）。この他の壺には赤彩が施された無文の 216 や、良好なミガキを伴う赤彩が施された長頸壺 310、口縁内面に山形沈線文が施される赤彩壺 306 が特徴的である。甕は、受け口状で口縁部と胴部に櫛描波状文を有する甕 229 や、口縁部に山形沈線文、胴部に櫛描波状文が施された甕 223・305、胴部に櫛描羽状文を展開する甕 529・453 がみられ、口縁部がかかるく外反する甕 224 もみられる。また、文様が施文されていない甕 304 の内外面には爪痕に類する痕跡もみられる。鉢 C530 は無文で、口縁部には 2 穴の孔がみられる。底部付近には指オサエ痕がある。台付甕には 211、303、539 が該当し、コの字重ね文が施され、円形浮文が添付されている。高杯は、頂部に縦刻み文のある凸帯が添付される 545 が出土しているが、杯部を欠損（もしくは故意の破損）し、その破断面がかなり摩耗した状態であった。一方 3・6 区から杯部 322 が出土していて、破断面が摩耗しているため 545 と完全に接合はできないが、非常に類似した法量と特徴がみられる。また、高杯の脚部 542 は SB07 の 442（第 56 図）に類似している。こちらも大きな逢かしが 5 箇所みられ、脚部内面中央から下方向に下がる突起の残欠があり、2 孔が穿たれていたと推測される。326 は後期に入る時期の甕とみられる。

土師器【土器：第 69・71 図 PL27】

1 区 II D25 グリットからは古墳時代後期以降の甕 210、5 区からは古墳時代中期の高杯 241・242、3・6 区から高杯 314・321 が出土している。

ミニチュア土器【土器：第 71 図 PL27】

遺構外から 4 点出土している。高杯の杯部 320、同脚部 317・328、尖底気味の鉢 319 がみられ、うち 319 は手づくね土器である。

土器片加工円板【土器：第 71 図 PL27】

遺構外からは 12 点出土している。松原遺跡（青木 2000）に準じて、両面穿孔がなされたものを A 類。片面から穿孔が行われたが途中で停止し孔が貫通していないものを B 類、穿孔がなされないものを C 類とした。このうち A 類は 219、550、556、559 で、556 と 559 は内外面から穿孔しているが他は一方方向のみからの穿孔である。B 類は 558 と 563、C 類は 555、557、560、561、562、571 が該当する。

金属器【PL34】

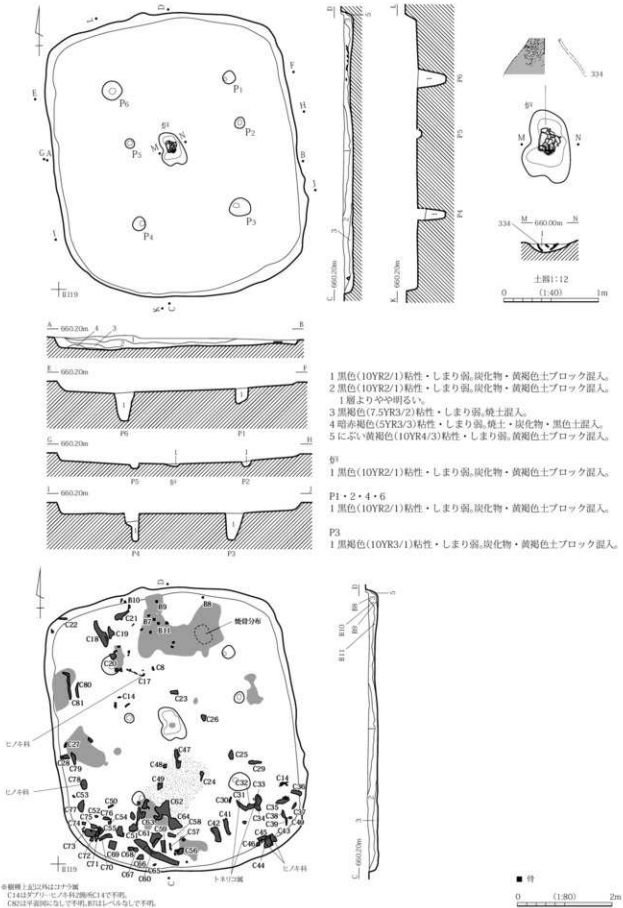
遺構外出土資料については、いずれも出土地不明もしくは検出面などである。また SB21 の南西側は遺跡の範囲外であり、混入の可能性も全くないとは言いが切れない。

【註 1】 小山俊夫氏のご教示による。

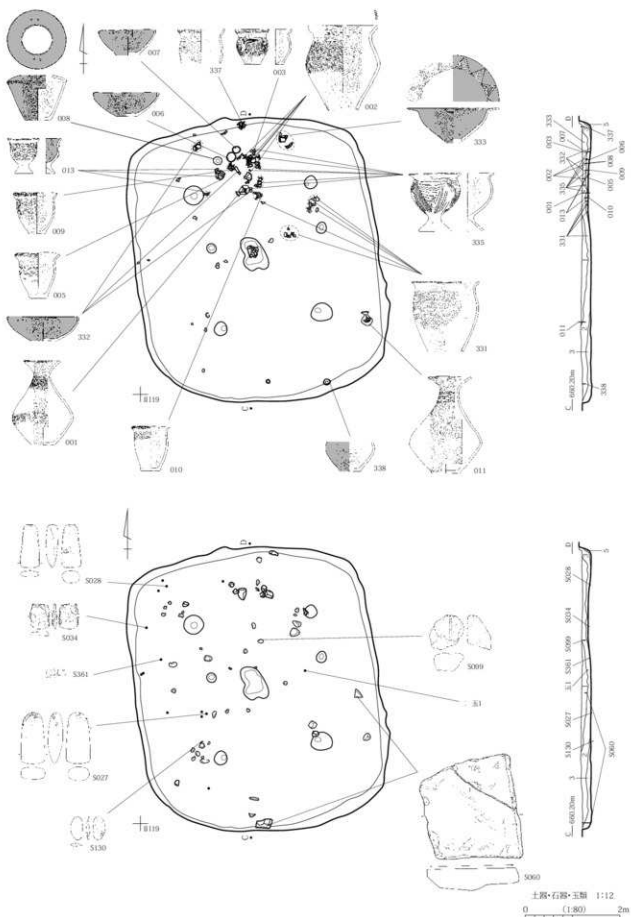
【註 2】 右川日出志氏のご教示による。

【註 3】 横田弘史主任調査員のご教示による。

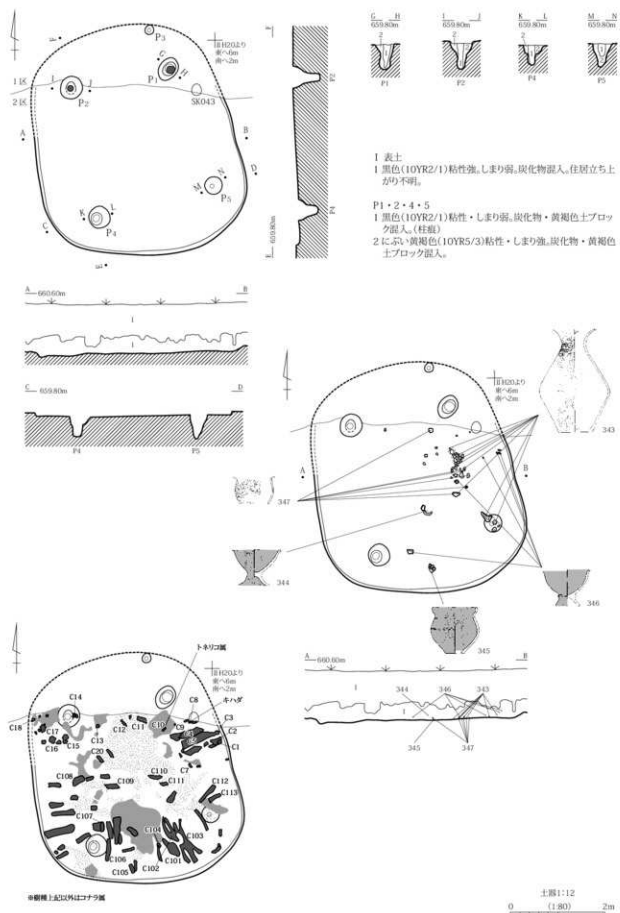
【註 4】 原藤隆氏のご教示による。



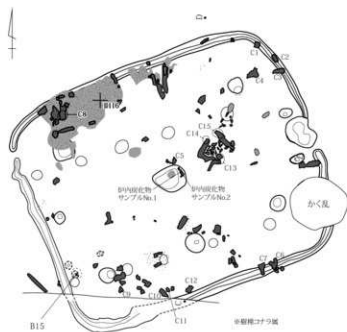
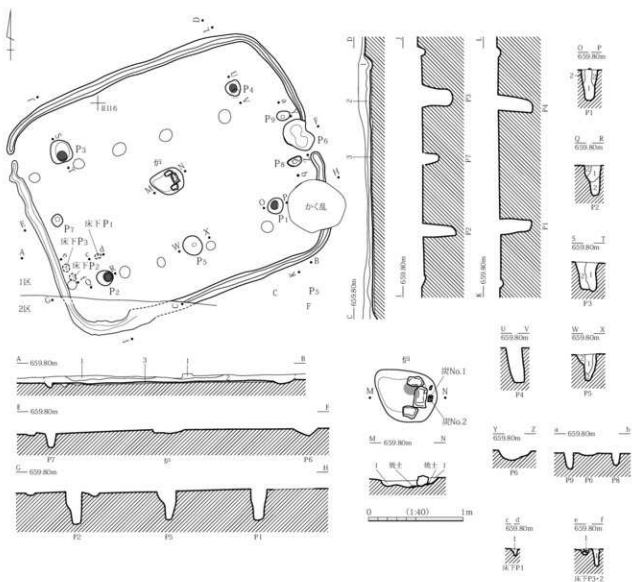
第6図 SB01 遺構図1



第7図 SB01 遺構図2



第8図 SB02 遺構図



- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物混入,黄褐色土ブロック混入。
- 2 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物多量混入,黄土ブロック・黄褐色土ブロック混入。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR4/3)粘性弱・しまり強,黒色土ブロック少量混入。(粘土)

井戸
1 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまり弱,黄土ブロック微混入,黄褐色土ブロック混入。

P1 ~ 3・5

1 黒色(10YR2/1)粘性弱・しまりなし,炭化物混入,2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック多量混入。

床下 P1

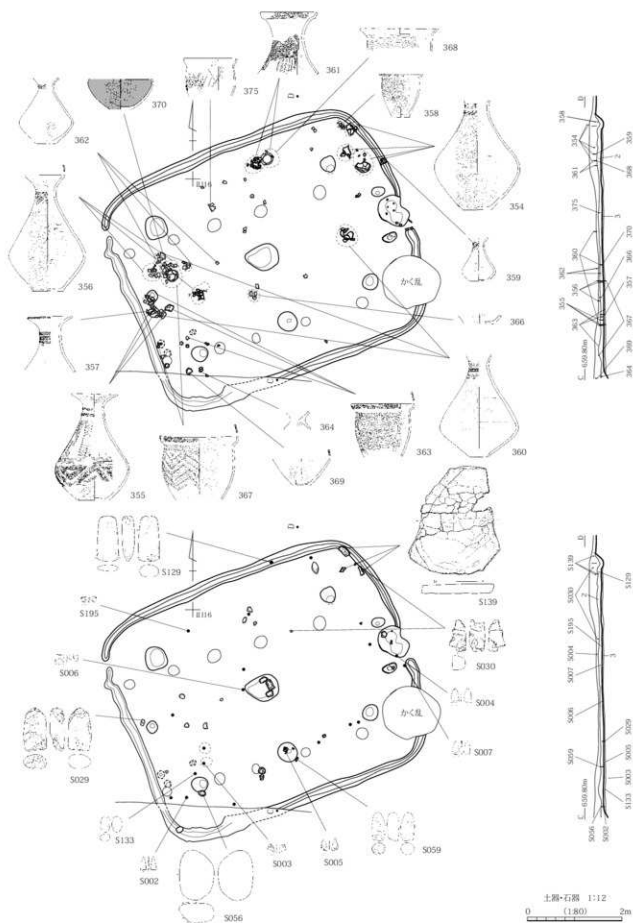
1 褐色(10YR4/1)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

床下 P2・3

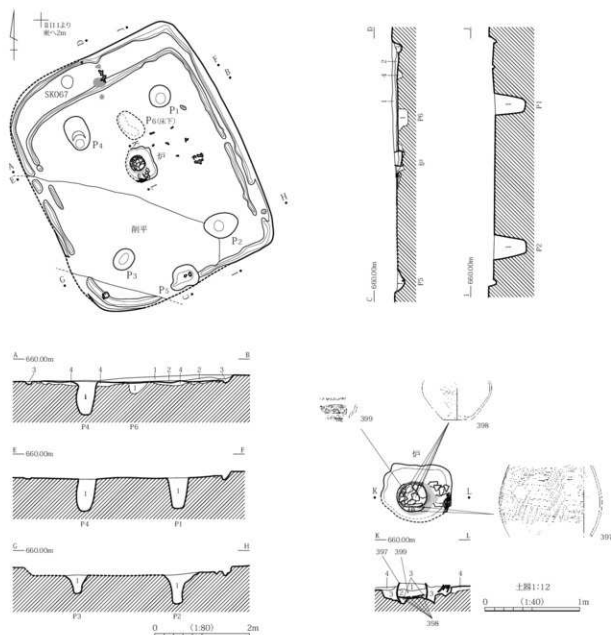
1 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまり弱,炭化物微量混入。

0 (180) 2m

第9図 SB03 遺構図1



第10図 SB03 遺構図2



- 1 黒色(10YR2/1)粘性弱,しまりあり,黄褐色土粒・炭化物粒混入。
 2 黒色(10YR2/1)粘性ややあり,しまりあり,黄褐色土粒増加,1層より暗い。
 3 黒褐色(10YR3/1)粘性強,しまり強,黄褐色土ブロック混入。
 4 黒褐色(10YR2/2)粘性あり,しまり強,黄褐色土ブロック多量混入。

BF

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性ややあり,しまりあり,黄褐色土ブロック・粒子・焼土粒子微量混入。
 2 黒色(10YR2/1)粘性強,しまりややあり,黄褐色土ブロック・粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量混入。
 3 に近い黄褐色(10YR4/3)粘性ややあり,しまり強,黄褐色土ブロックを主体に黒色土混入。
 4 黒褐色(10YR2/2)粘性あり,しまり強,黄褐色土ブロック多量混入。

P1～5

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまりあり,黄褐色土ブロック混入。

P6

- 1 黒灰色～黒褐色(10YR2/2)粘性・しまりあり,炭化物・黄褐色土ブロック混入。

第11図 SB04 遺構図



第12図 SB06 遺構図

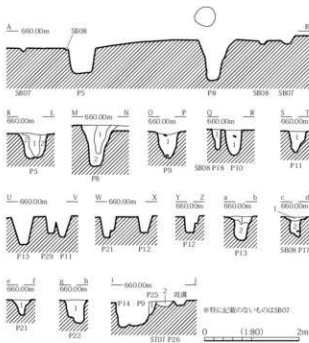
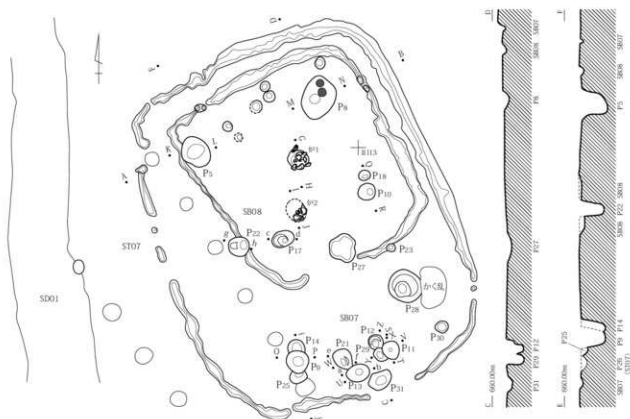


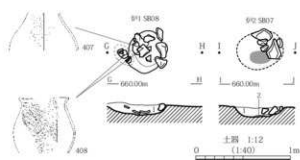
図1
1 掘床。

図2

- 1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱、焼土・炭化物混入。
- 2 赤褐色(5YR4/6)しまり強、火床。

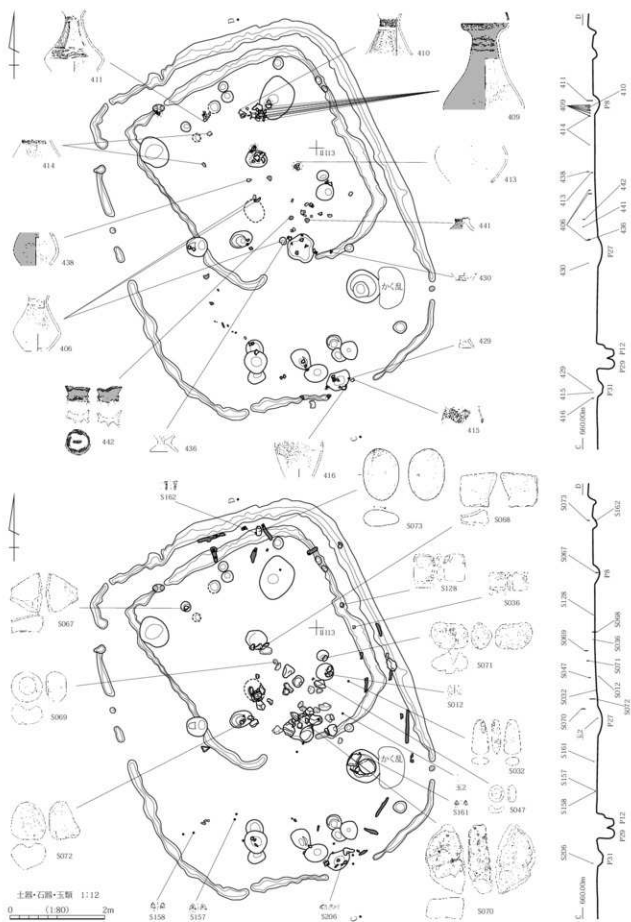
図5・8

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。
- 2 に示い黄褐色(10YR4/3)粘性弱、しまり強、黄褐色土ブロック多量混入。

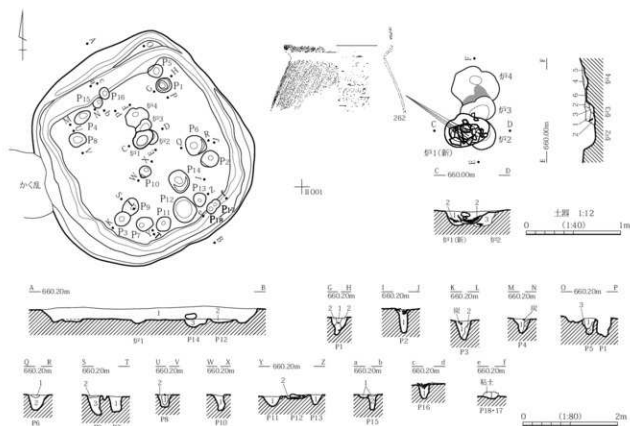


- 図9・10、SB08 P18
1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、炭化物混入。
- 図11
1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック・炭化物混入。
- 図13
1 黒褐色(10YR3/2)粘性弱、しまり強、黄褐色土ブロック多量混入。
2 暗褐色(10YR3/3)粘性・しまり弱。
- SB08 P17
1 黒色(10YR2/1)粘性弱、しまり強。
2 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック・炭化物混入。
- 図21
1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、炭化物混入。
- 図22
1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック・炭化物混入。
- 図25・ST07 P26
1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱。
2 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。

第13図 SB07・08 遺構図1



第14図 SB07・08 遺構図2



- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
 2 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。(P12)
 3 暗褐色(10YR3/3)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。(P14)

群1・2

- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
 2 黒色(10YR1.7/1)粘性・しまり弱,炭化物多量混入。
 3 暗褐色土(10YR3/4)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

群3・4

- 1 濃い黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強,黒色土粒混入。
 2 黒色(10YR2/1)粘性・しまりあり,炭・焼土粒混入。
 3 赤褐色(10YR4/6)粘性弱,しまり強,ガチガチの焼土。
 4 濃い黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強,黒色土粒子混入。
 5 黒色(10YR1.7/1)粘性・しまりあり,炭・焼土粒・灰混入。
 6 赤褐色(5YR4/6)粘性弱,しまり強。

P1

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
 2 灰黄褐色(10YR4/2)粘性弱,しまり強,黒色土ブロック混入。

P2

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。

P3

- 1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
 2 濃い黄褐色(10YR5/3)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

P4

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
 2 濃い黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック混入。

P5

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,ローム粒混入,炭粒微量混入。
 2 黒褐色(7.5YR3/2)粘性・しまり弱,焼土混入。
 3 暗褐色(10YR3/3)粘性弱,しまり強,黒色土ブロック混入。

P6

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物粒混入。
 2 濃い黄褐色(10YR3/3)粘性弱,しまり強,黒色土ブロック混入。

P7・9

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,炭化物・赤色粒・黄褐色土ブロック混入。
 2 濃い黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強,黒色土混入。(粘床)
 3 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

P8

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物混入。
 2 濃い黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強,黒色土ブロック混入。

P10

- 1 黒褐色(10YR3/2)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック混入。

P11～13

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。
 2 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。

P15

- 1 濃い黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強,黒色土混入。(粘床)
 2 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

P16

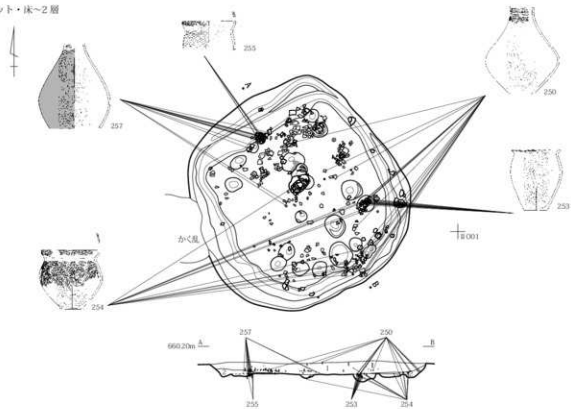
- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

P18・17

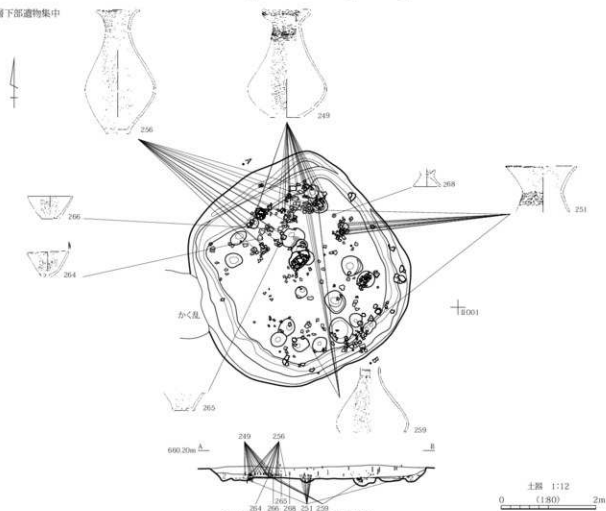
- 1 濃い黄褐色(10YR5/3)粘性・しまり強,灰白色粘土塊。

第15図 SB09 遺構図1

ピット・床-2層



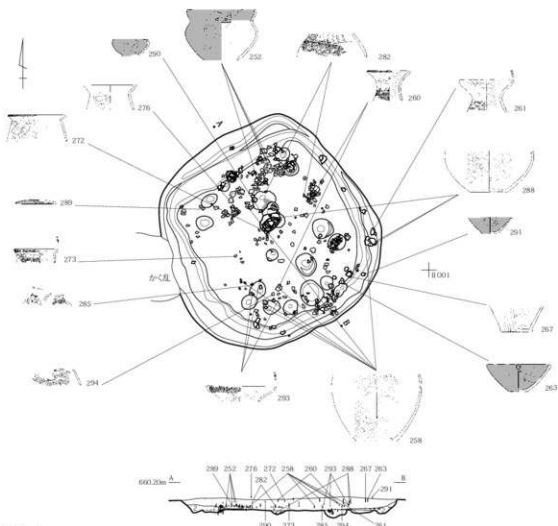
1層下部遺物集中



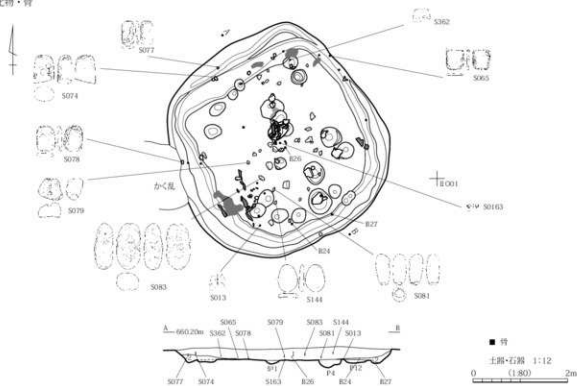
第16図 SB09 遺構図2

第4章 森平遺跡

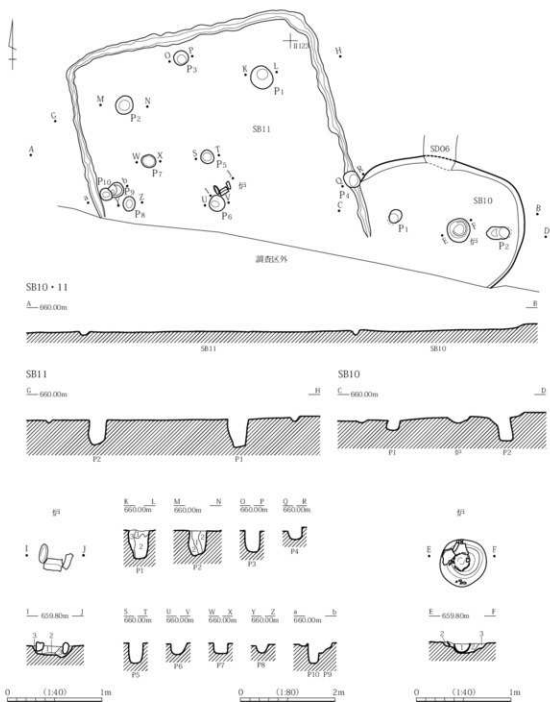
1層



石器・炭化物・骨



第17図 SB09 遺構図3



SB11 伊¹

- 1 黒色(10YR1.7/1)炭化物粒子混入、焼土・黄褐色土粒少量混入。
- 2 にふい赤褐色火床。
- 3 黒色(10YR2/1)焼土粒微混入、黄褐色土粒少量混入。

P1

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、焼土・炭化物混入。
- 2 褐灰色(10YR4/1)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。
- 3 におい黄褐色(10YR5/3)粘性あり、しまり強、黄褐色土ブロック混入。

P2

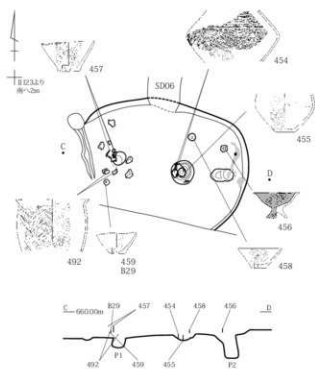
- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、炭化物・焼土混入。
- 2 におい黄褐色(10YR5/3)粘性弱、しまり強、黄褐色土ブロック混入。

SB10 伊¹

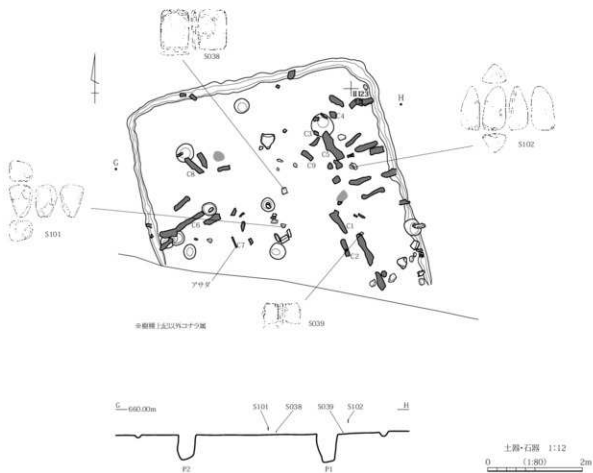
- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱、焼土・炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 2 黒色(10YR1.7/1)粘性・しまり弱、焼土・炭化物混入。
- 3 黒褐色(10YR2/3)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。

第18図 SB10・11 遺構図1

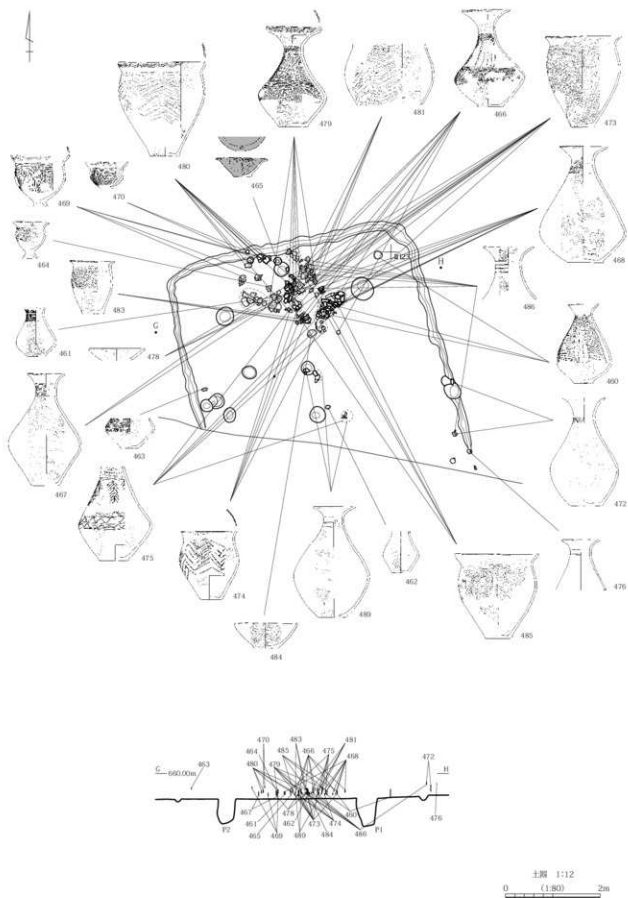
SB10



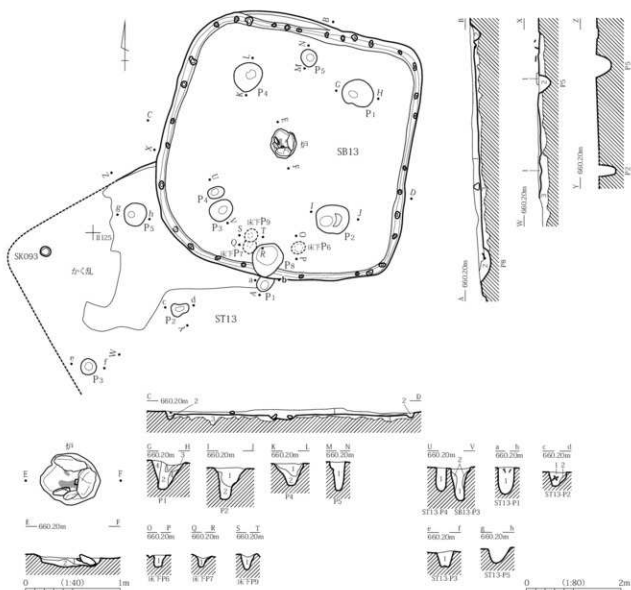
SB11



第19図 SB10・11 遺構図2



第20図 SB11 遺構図



SB13

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物・焼土・黄褐色土ブロック混入。
- 2 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱,炭化物・ローム粒混入。
- 3 暗褐色(10YR3/3)粘性弱,しまり強,粗砂および雜方土。

部

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物・焼土混入。
- 2 粘性なし,しまり弱,粗砂。

P1

- 1 褐色(7.5YR4/3)粘性弱・しまり弱,細粒の粘土粒主体。
- 2 黒色(10YR2/1)粘性弱・しまり弱,炭化物粒・ローム粒混入。
- 3 黒褐色(10YR2/2)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック混入。
- 4 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック主体。

P2

- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 2 灰黄褐色(10YR4/2)粘性やや弱・しまりあり,黄褐色土ブロック混入。

P3

- 1 黒色(10YR1.7/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 2 暗褐色(10YR3/3)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック混入。

P4

- 1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱,炭化物・焼土混入。
- 2 暗褐色(10YR3/3)粘性弱・しまり強,黄褐色土ブロック混入。

P5

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性弱・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

床下 P6

- 1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまりあり,黄褐色土ブロック混入。

床下 P7・9

- 1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

ST13

- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまり弱,炭化物・焼土混入。
- 2 P5 埋土。
- 3 黒色(10YR2/1)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック多量混入。(覆り方)

P1

- 1 黒色(10YR2/1)粘性やや弱,しまりあり,ローム粒混入。

P2

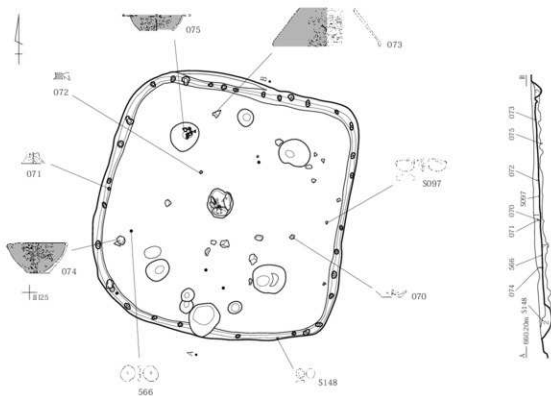
- 1 黒色(10YR2/1)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック混入。
- 2 暗褐色(10YR3/3)粘性弱,しまり強,黄褐色土ブロック混入。

P3・4

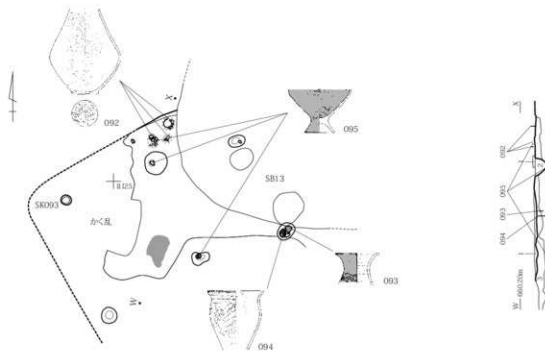
- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。

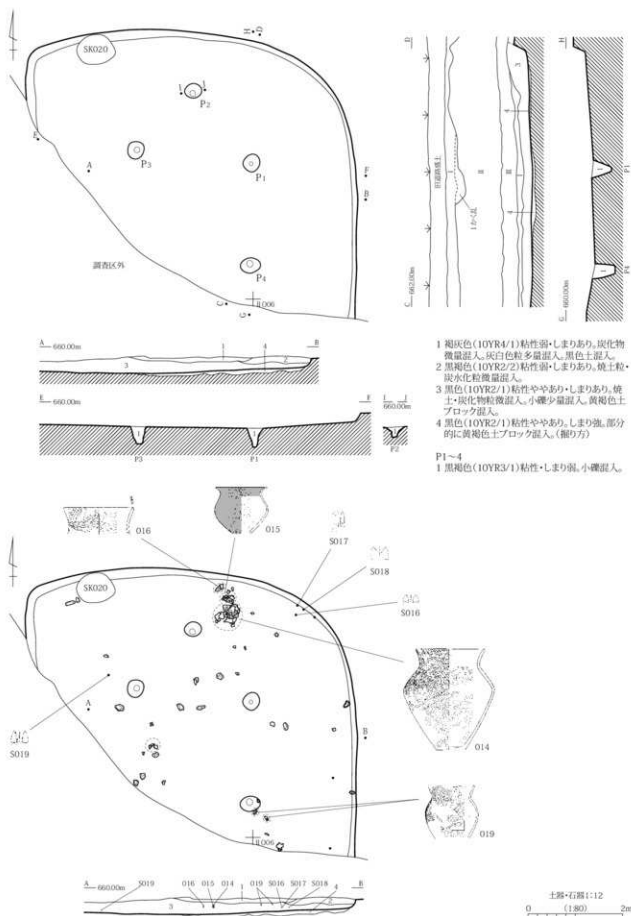
第 21 図 SB13・ST13 遺構図 1

SB13

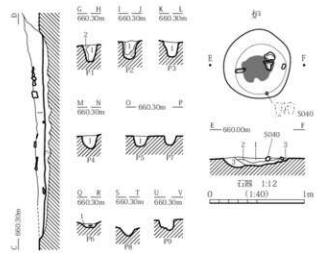
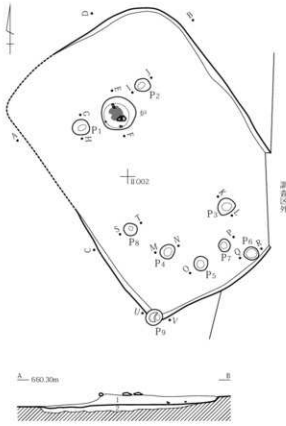


ST13

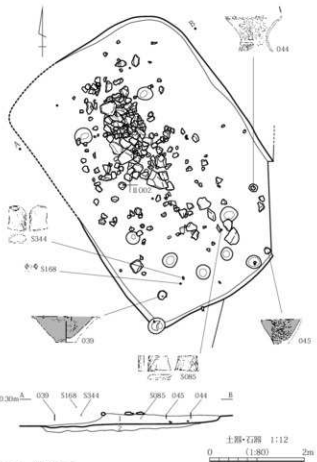
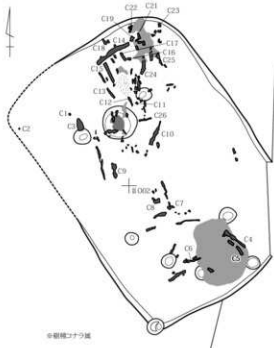




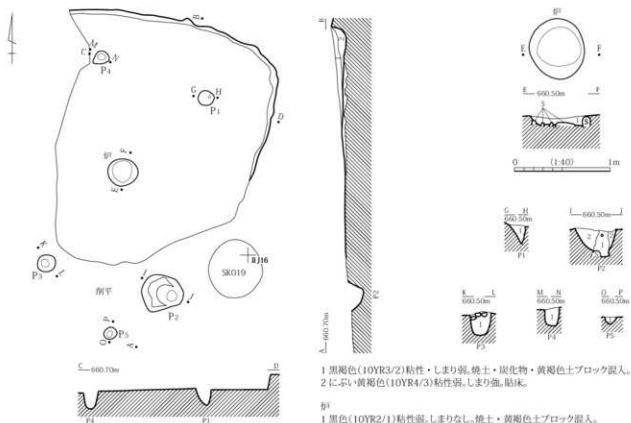
第23図 SB14 遺構図



- 1 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり弱、炭化物・バミ混入。層上部に礫あり。
- 2 黒褐色(10YR2/2)粘性強、しまり弱、黄褐色土ブロック混入。
- P1 1 黒褐色(7.5YR3/2)粘性・しまり強、炭化物混入。
- 2 赤褐色(5YR4/6)しまり強、火灰。
- 3 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり強、黄褐色土ブロック混入。
- P2 1 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり弱、炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 2 にふい・黄褐色(10YR5/3)粘性・しまり弱、灰白色～黄褐色土ブロック混入。
- P3 1 黒褐色(10YR3/1)粘性あり、しまり強、炭化物混入。
- 2 灰黄褐色(10YR4/2)粘性あり、しまり強、灰白色土混入。
- P4 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱、炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- P5 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、炭化物混入。
- P6 1 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり弱、炭化物混入。



第24図 SB15 遺構図



1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱, 焼土・炭化物・黄褐色土ブロック混入。
 2 にぶい・黄褐色(10YR4/3)粘性弱, しまり強, 粘球。

gF

1 黒色(10YR2/1)粘性弱, しまりなし, 焼土・黄褐色土ブロック混入。

P1・3・4

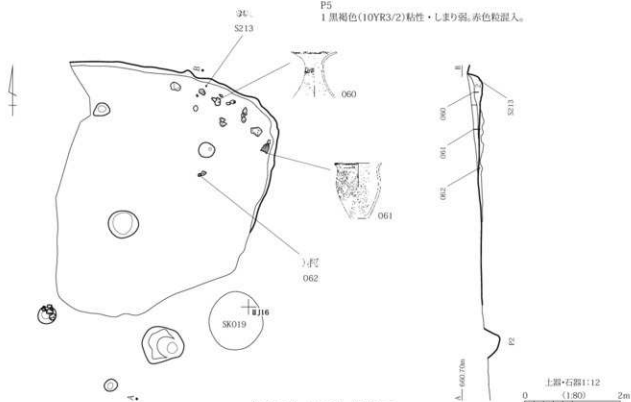
1 黒色(10YR2/1)粘性弱, しまりなし, 黄褐色土ブロック混入。

P2

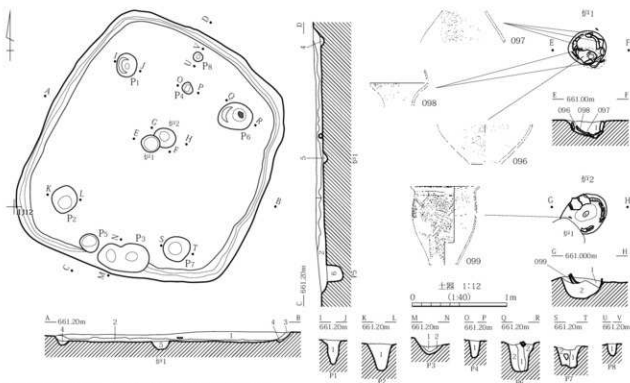
1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱, 黄褐色土ブロック混入。
 2 暗褐色(10YR4/4)粘性弱, しまり強, 黄褐色土ブロック混入。

P5

1 黒褐色(10YR3/2)粘性・しまり弱, 赤色粒混入。



第25図 SB16 遺構図



- 1 黒色(5YR1.7/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 2 黒色(5YR1.7/1)粘性・しまり弱,炭化物・炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 3 黒褐色(10YR2/2)粘性強,しまり弱。φ 1cm程度の礫混入。
- 4 暗褐色(10YR3/4)粘性弱,しまりなし,砂混入,周溝。
- 5 黒褐色(5YR2/2)粘性・しまり弱,焼土混入。
- 6 褐色(10YR4/6)粘性・しまり弱,小礫・黄褐色土ブロック混入。

S1

- 1 黒褐色(5YR2/2)粘性・しまり弱,焼土混入。

S2

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,炭化物混入。
- 2 黒褐色(10YR3/4)粘性・しまり弱。

P1・2

- 1 暗褐色(10YR3/4)粘性・しまり弱,砂・小礫混入。

P3

- 1 黒色(10YR1.7/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 2 褐色(10YR4/6)粘性・しまり弱,小礫・黄褐色土ブロック混入。

P4

- 1 黒色(10YR1.7/1)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。

P6

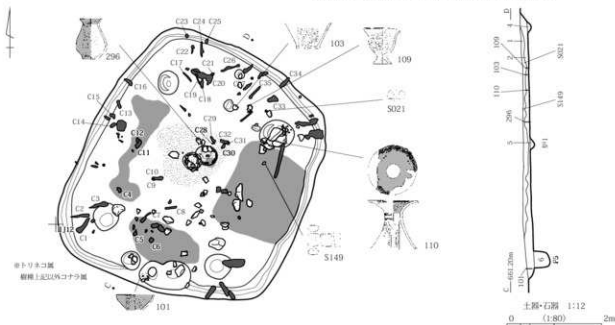
- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,炭化物混入。
- 2 に、黄褐色(10YR4/3)粘性弱,しまり強。

P7

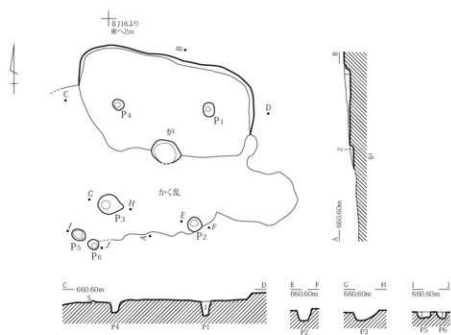
- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,炭化物・黄褐色土ブロック混入。
- 2 に、黄褐色(10YR4/3)粘性・しまり弱,暗褐色土混入。

P8

- 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱,黄褐色土ブロック混入。



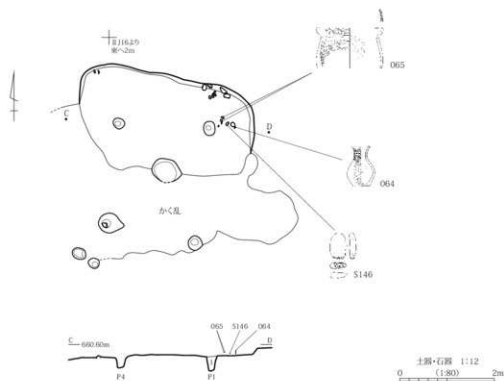
第26図 SB17 遺構図



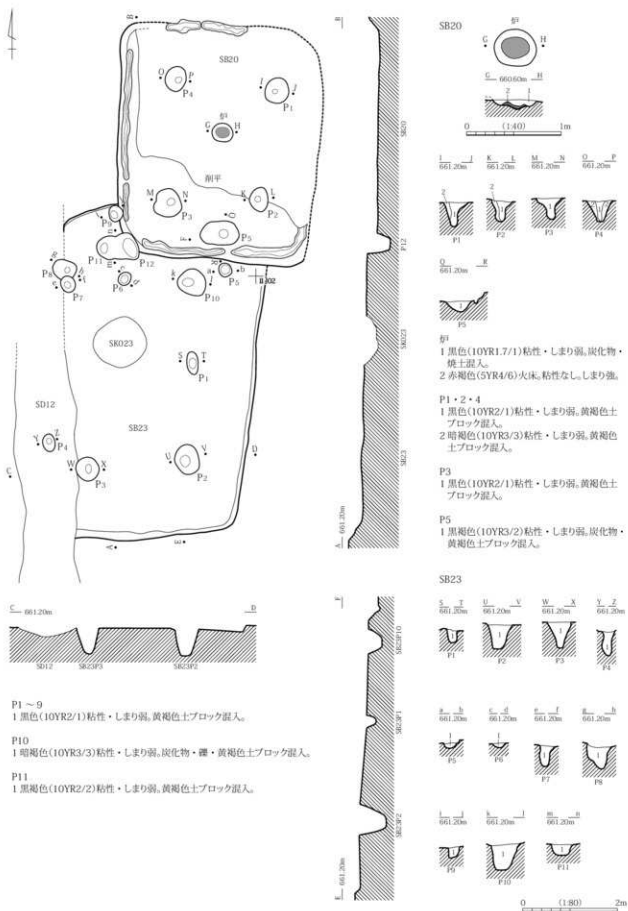
- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性なし、しまり弱、礫・黄褐色土ブロック混入。
 2 黒色(10YR2/1)粘性なし、しまり弱、礫土ブロック混入。

P1
 1 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。

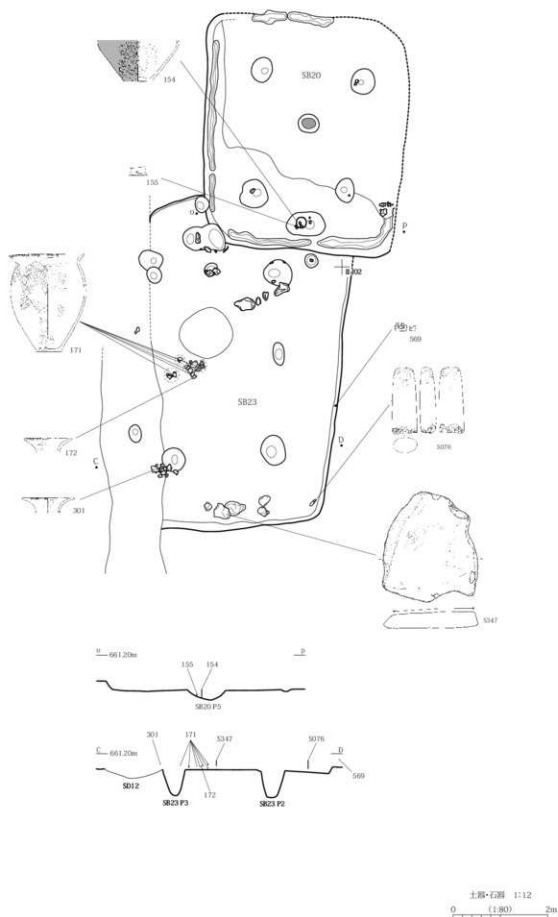
P5・6
 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。



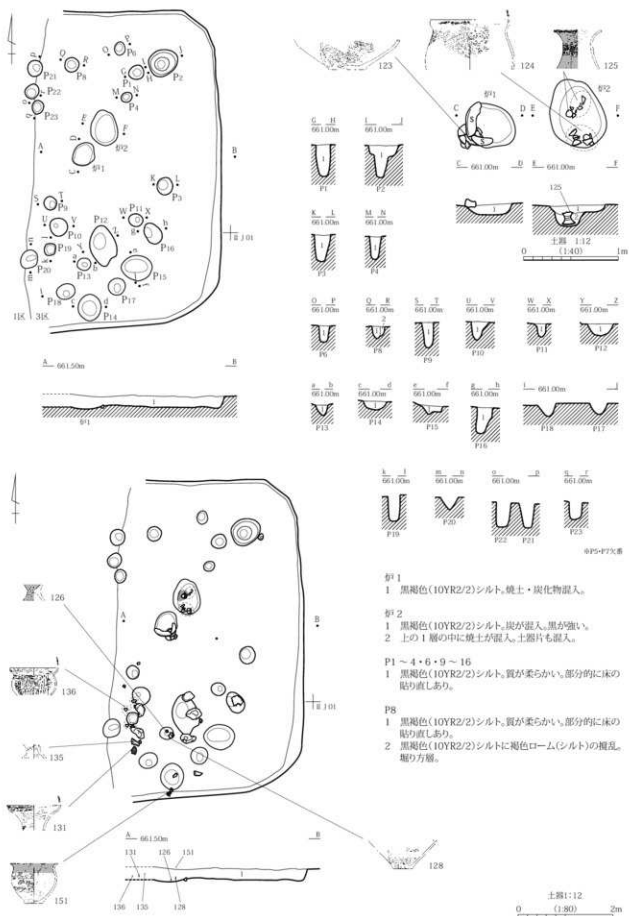
第27図 SB18 遺構図



第28図 SB20・23 遺構図1



第29図 SB20・23 遺構図2



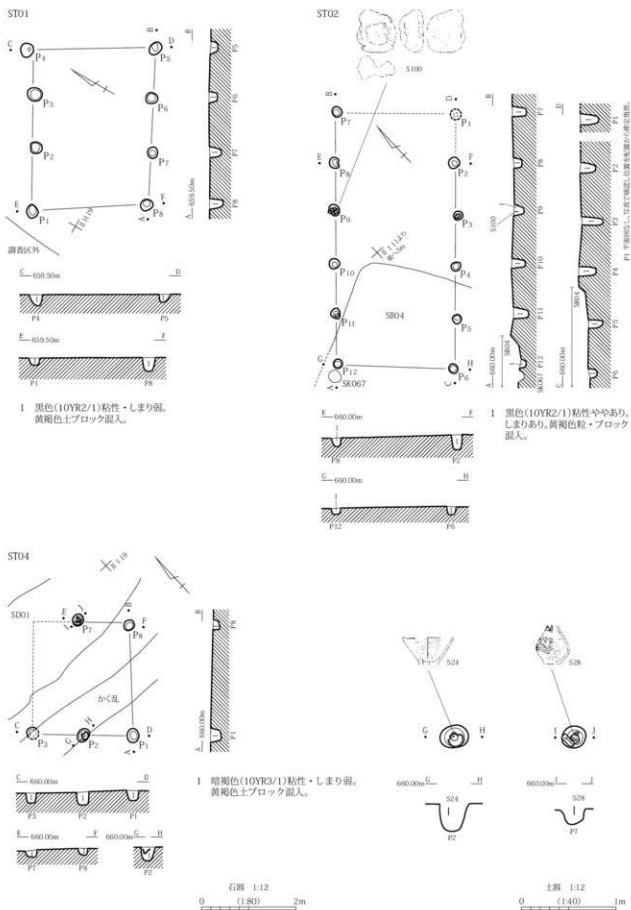
第30図 SB21 遺構図

P1
1 黒褐色(10YR2/2)シルト、焼土・炭化物混入。

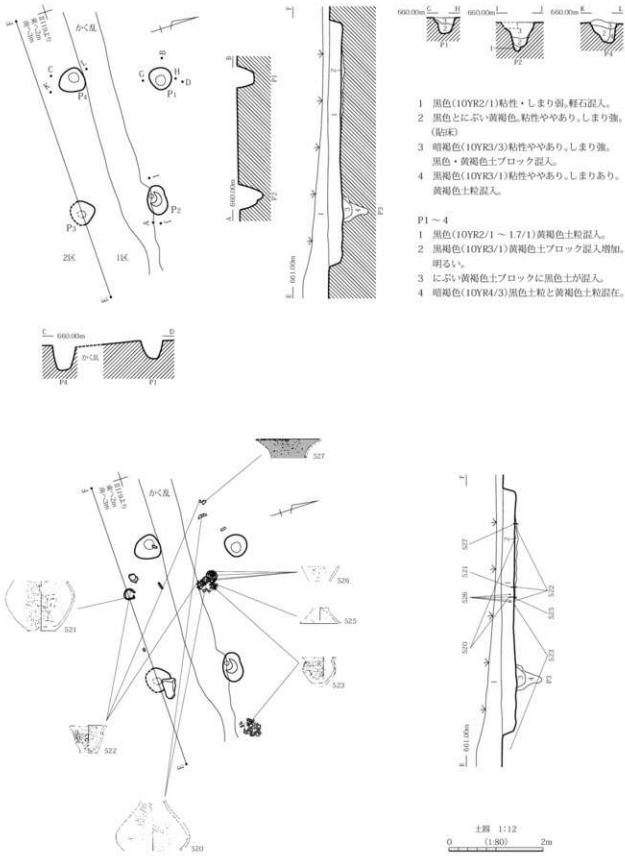
P2
1 黒褐色(10YR2/2)シルト、炭が混入、黒が強い。
2 上の1層の中に焼土が混入、土器片も混入。

P1～4・6・9～16
1 黒褐色(10YR2/2)シルト、質が柔らかい、部分的に床の底が直しあり。

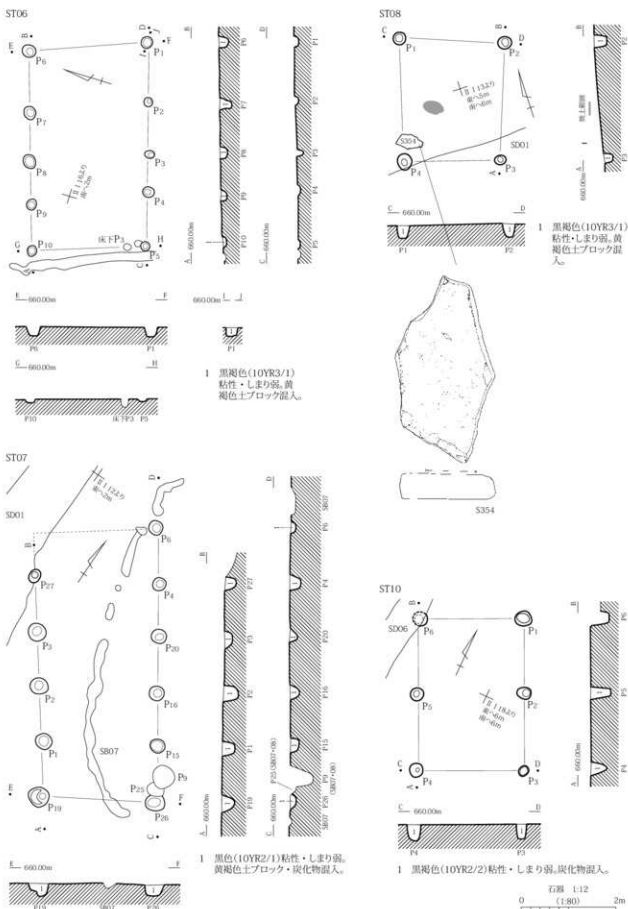
P8
1 黒褐色(10YR2/2)シルト、質が柔らかい、部分的に床の底が直しあり。
2 黒褐色(10YR2/2)シルトに褐色ローム(シルト)の粗乱堆積層。



第31図 ST01・02・04 遺構図



第32図 ST05 遺構図



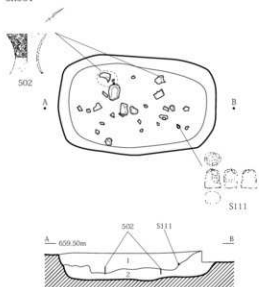
第33図 ST06～08・10 遺構図



第34図 ST 割付図

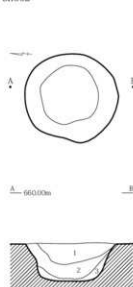
第4章 森平遺跡

SK001



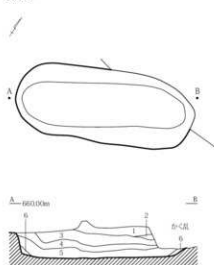
- 1 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり弱、炭化物・黄褐色土ブロック混入、土器片混入(黄入か)。
- 2 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。

SK002



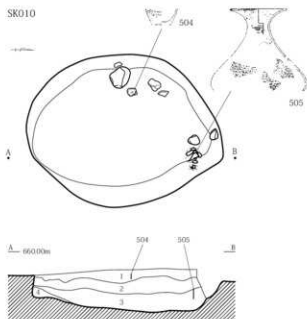
- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまり弱。
- 2 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり弱。
- 3 黒色(10YR1.7/1)粘性強、しまり弱、黄褐色土混入。

SK003



- 1 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。
- 2 に近い黄褐色(10YR4/3)粘性強、しまり弱、黄褐色粒に黒色粒が混在。
- 3 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり弱、黄褐色土ブロック混入。
- 4 に近い黄褐色(10YR4/3)粘性・しまり弱、黒色土混入。
- 5 黒色(10YR1.7/1)粘性強、しまり弱、黄褐色土ブロック混入。
- 6 に近い黄褐色(10YR4/3)粘性・しまり弱。

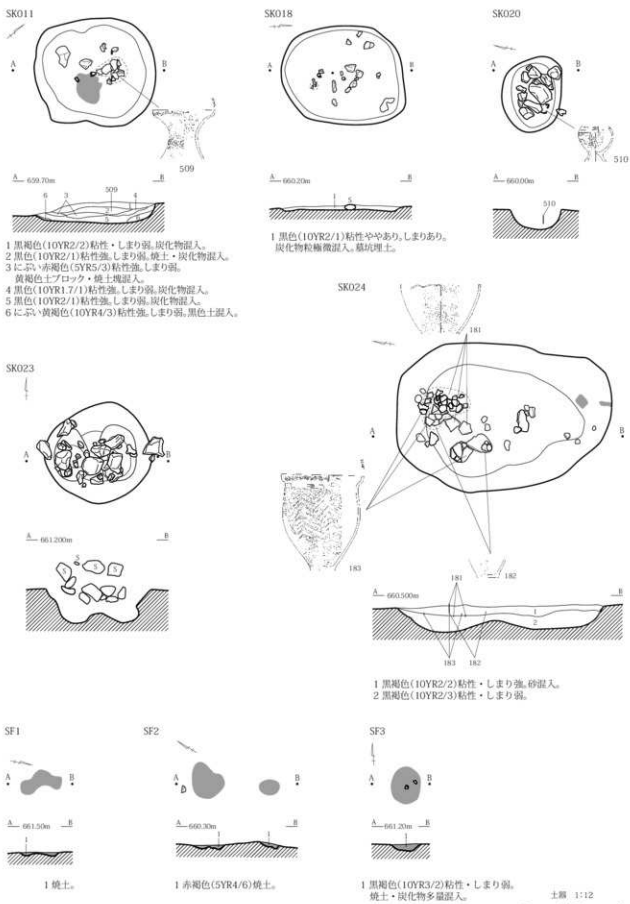
SK010



- 1 黒色(10YR2/1)粘性・しまり弱、黄褐色土ブロック混入。
- 2 黒色(10YR2/1)粘性強、しまり弱、炭化物混入。
- 3 黒色(10YR1.7/1)粘性強、しまり弱、炭化物混入。
- 4 に近い黄褐色(10YR5/3)粘性・しまり弱、黒色土ブロック混入。

土器・石器 1:12
0 61400 1m

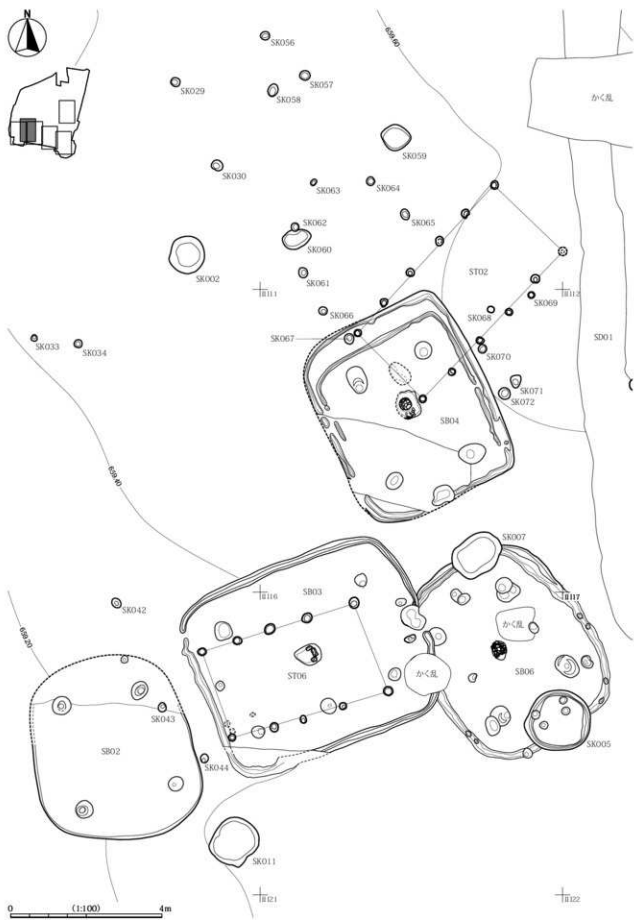
第35図 SK001～003・010 遺構図



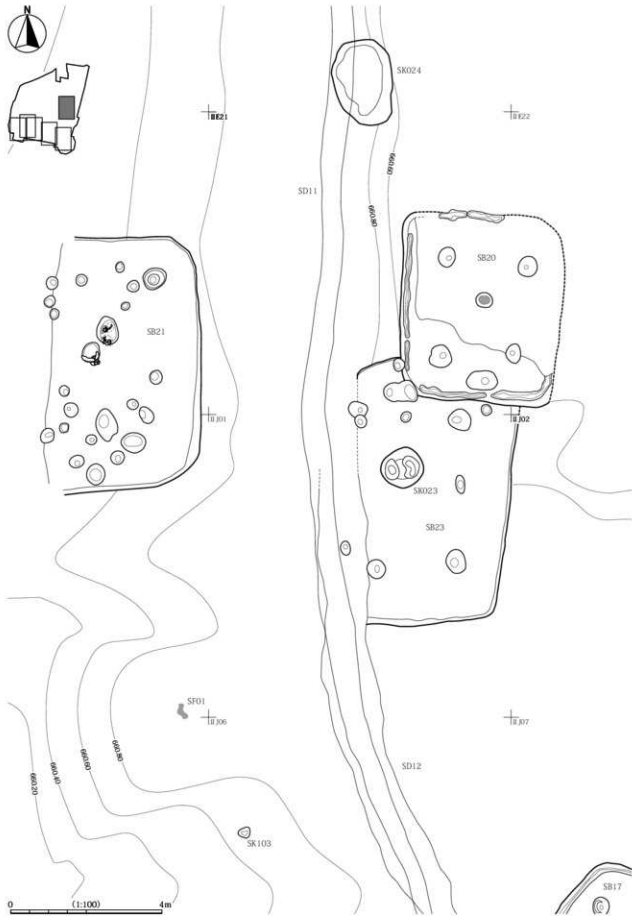
第36図 SK011・018・020・023・024・SF1～3 遺構図



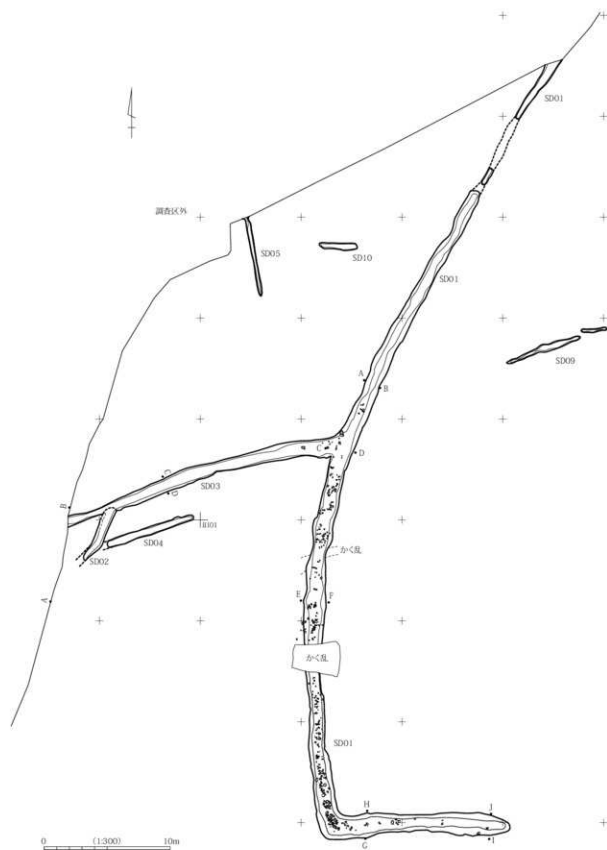
第37図 SK 割付図1



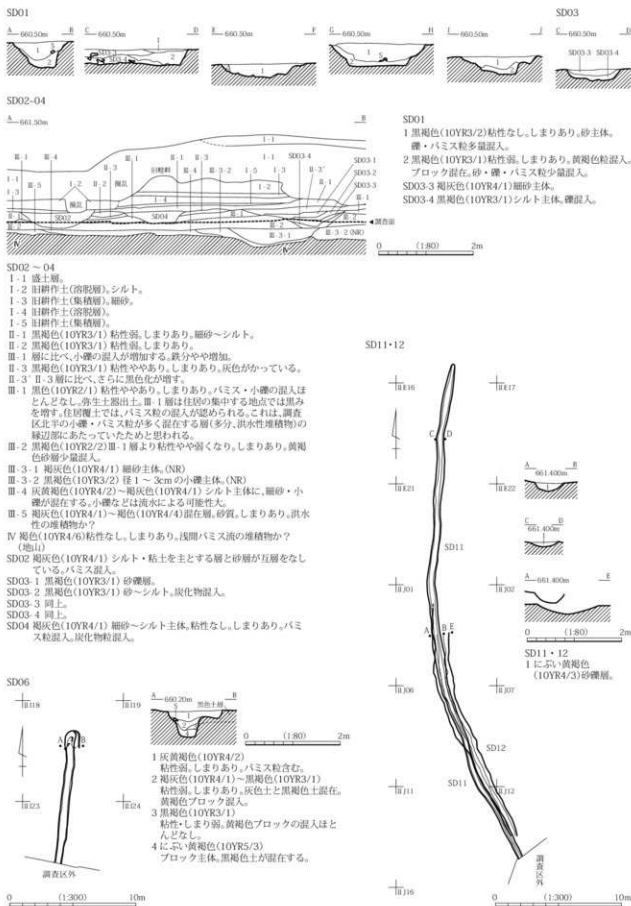
第38図 SK 割付図 2



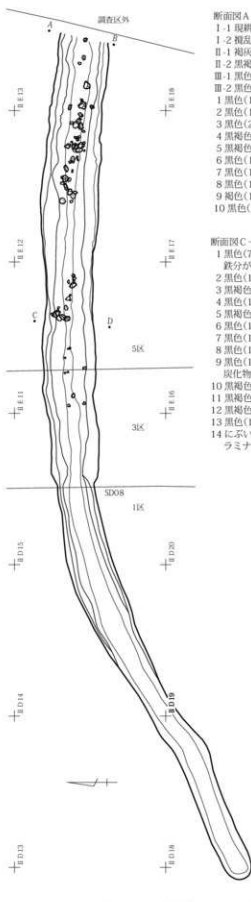
第42図 SK 割付図6



第43図 SD01～05・09・10 遺構図



第44図 SD01～04・06・11・12 遺構図

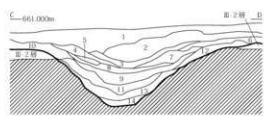
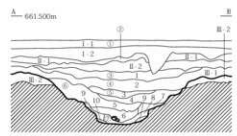


断面図A-Bの埋土

- 1 1 埋崩土。
- 1-2 掘乱および洪水砂層。
- 1-1 褐色(10YR4/1)粘性・しまりあり, 消炭層, 鉄分・軽石散入。
- 2 2 黒褐色(7.5YR3/2)粘性弱・しまりあり, マンガン集積, 軽石の混入増加。
- 3 1 黒色(10YR2/1)粘性弱・しまりあり, 軽石・礫などを多く含む(強土掘出土層)。
- 3-2 黒色(10YR1.7/1)粘性弱・しまりあり, 軽石の混入は減り礫はほとんど含まない。
- 1 黒色(10YR2/1)粘性強・しまりあり, 3-1層より灰色がかかる, 軽石較ど少量混入。
- 2 黒色(10YR2/1)3-1層との区分はできない。
- 3 黒色(2.5Y2/1)粘性・しまり強, 灰色がかかる, 粒子は細かい。
- 4 黒褐色(10YR2/2)3層に比べ軽石などの混入が増加し, 粘性がやや弱まる。
- 5 黒褐色(10YR2/2)4層よりさらに軽石の混入が増加し鉄分によってやや赤みがかかる。
- 6 黒色(10YR2/1)5層より強く大形の礫が混入。
- 7 黒色(10YR2/1)5-6層に比べ軽石の混入が増加。
- 8 黒色(10YR1.7/1)4-7層に比べ粘性が強まる, 軽石などの混入は再び減少する。
- 9 褐色(10YR4/4)粘性弱・しまりあり, 地山の黄褐色土に黒色が若干混入。
- 10 黒色(10YR2/1)粘性弱・しまりあり, 灰色がかかる, シルト~砂に近い, 混入物ほとんどなし。

断面図C-Dの埋土

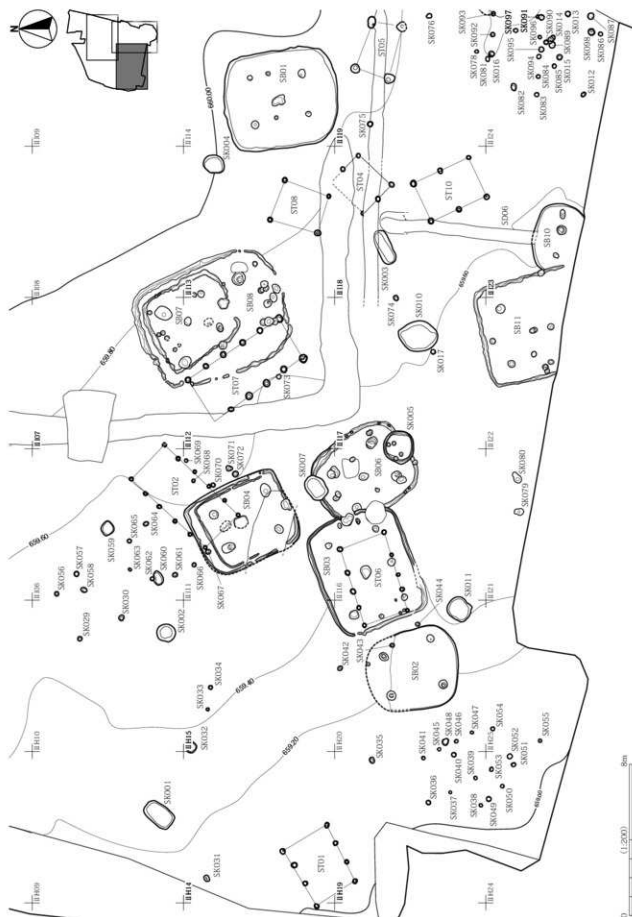
- 1 黒色(7.5YR2/1)粘性あり・しまり強, 径3~20mmの小礫を多量に混入する。
鉄分が集積しやや赤みをおびる, 瀬川側からの押し出しか。
- 2 黒色(10YR1.7/1)粘性・しまりあり, シルト主体, 1層に含まれていた小礫微量混入。
- 3 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまりあり, 細砂~シルト, 砂粒~径5mm以下の小礫(軽石)混入。
- 4 黒色(10YR1.7/1)2層に類似。
- 5 黒褐色(10YR2/2)粘性弱・しまりあり, 砂主体, 5層褐色色砂を多量に混入, 瀬川側の洪水砂か。
- 6 黒色(10YR2/1)4層に類似するがやや小礫の混入が増え鉄分の影響を受けている。
- 7 黒色(10YR1.7/1)4層に類似。
- 8 黒色(10YR2/1)粘性強・しまりあり, シルト~粘土質, 混入物非常に少ない。
- 9 黒色(10YR1.7/1)粘性強・しまりあり, 4層よりさらに黒みをおびる, 軽石・礫少量混入。
炭化物粒子微量混入。
- 10 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまりあり, 9層に小礫の混入が増加する。
- 11 黒褐色(10YR3/1)粘性・しまりあり, 9層や13層の粘質土に5層黄褐色砂が混入。
- 12 黒褐色(10YR2/2)粘性・しまりあり, 10層に類似。
- 13 黒色(10YR1.7/1)粘性強・しまりあり, 11層より粘質土の割合高く砂・地山砂ブロック混入。
- 14 5層黄褐色砂(10YR4/3)と黒色土(10YR1.7/1)混在層, 粘性弱・しまりあり。
ラミナ状を呈する部分あり。



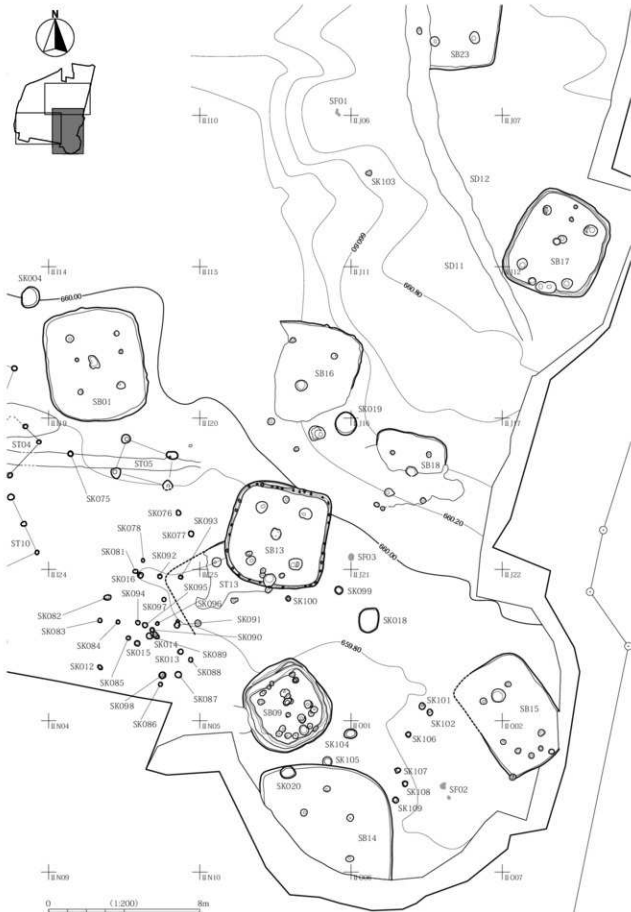
第45図 SD08 遺構図



第46図 SD (古代以降) 全体図



第47图 弥生時代遺構割付図1



第48図 弥生時代遺構割付図2



第49図 弥生時代遺構割付図3

第1表 竪穴住居跡一覧

図版No.	遺構	時期	地区	グラフィック	平面形	主軸方向	東西・南北 (m) 1:100縮尺	床面積 (㎡) (1は概算値)	長さ (cm)	炭化材 有無	発 見 有 無	方位	形跡	重積関係	その他	ピット 数
6・7	SD01	弥生中期	1	H113-14-19	隅丸 長方形	N7° W	5.20・6.04	25.72	28	有	有	中央	土器 埋没中	-	-	6
8	SD02	弥生中期	1-2	H20	隅丸 長方形	N11° W	4.28・(3.68)	(13.50)	10	有	無	-	-	SK043と切り合 うが新旧不明	-	5
9・10	SD03	弥生中期	1	H115-20 H111-16	隅丸 長方形	N110° W	6.30・5.20	25.83	16	有	有	中央	石埋中	SD06を切る SD06と切り合 うが新旧不明	-	12 (床下 土基 含む)
11	SD04	弥生中期	1	H111	長方形	N26° W	4a (4.41)・5.32 4a (3.90)・4.50	4a (19.88) 4b (15.81)	14	無	有	中央	土器 埋没中	ST02、SK067と 切り合うが 新旧不明	-	6
12	SD06	弥生中期	1	H111-12-16-17	隅丸 長方形	N32° W	4.54・5.40	14.56	12	無	無	中央	土器 敷き中	SD03に切られる SK005-007と切 り合うが 新旧不明	-	11
13・14	SD07	弥生中期	1	H107-08-12-13	隅丸 長方形	N22° W	6.20・7.92	38.90	18	有	有	中央やや 北(仰土)	石埋中	SD08、ST07を 切る	-	16
13・14	SD08	弥生中期	1	H107-08-12-13	隅丸 長方形	N22° W	4.08・4.68	15.16	-	有	有	中央(仰土)	石埋中	SD07に切られる	-	9
15・17	SD09	弥生中期	3	H125 H306	隅丸四角 形	N30° W	4.40・4.48	9.76	24	無	有	中央やや 北	土器 敷き中	-	-	18
18・19	SD10	弥生中期	2	H123	楕円形	N18° E	(3.44)・(2.40)	(6.78)	12	無	有	中央やや 南	土器 埋没中	SD06に切られる SD11と切り合 うが新旧不明	南 側表区外 (阪平)	2
18・20	SD11	弥生中期	2	H117-18-22-23	長方形	N14° W	5.44・(4.48)	(22.07)	-	有	有	中央?	石埋中	SD10と切り合 うが新旧不明	南 側表区外 (阪平)	10
21・22	SD13	弥生中期 ～前期	3	H120-25	隅丸長方形	N11° E	5.32・5.36	22.44	16	無	有	中央	石埋中	ST13を切る	-	9 (床下 土基 含む)
23	SD14	弥生後期	3	H105-10 H001-06	隅丸 長方形	N	(6.60)・(5.28)	(29.28)	32	無	無	-	-	SK020-105と切 り合うが 新旧不明	東・南 側表区外	4
24	SD15	弥生後期	6	H121-22 H001-02	隅丸 長方形	N32° W	(4.12)・(6.16)	(22.19)	22	有	有	中央北	地味中	-	西側 側表区外	9
25	SD16	弥生中期	3	H115-29 H111	隅丸 長方形	N17° E	(4.56)・(5.32)	(18.47)	24	無	無	中央	地味中	-	1-3区域	5
26	SD17	弥生中期	6	H107-12	隅丸 長方形	N22° E	4.88・5.44	19.35	22	有	無	中央	土器 埋没中	-	-	8
27	SD18	弥生中期	3-6	H116	隅丸 長方形	N7° E	(3.76)・(2.04)	(6.52)	12	無	無	中央	地味中	-	-	6
28・29	SD19	弥生中期	5	H121-22	隅丸 長方形	N	(4.32)・(4.88)	(5.17)	20	無	無	中央	地味中	SD23を切る	-	5
30	SD21	弥生中期	3	H125 H305	隅丸 長方形	N	(4.00)・(6.64)	(24.21)	24	無	無	仰土 中央付近 仰土 中央付近 よりやや 北	仰土 石埋中 仰土 土器埋 没中	-	1-3区域	21
28・29	SD23	弥生中期	5-6	H121-22 H101-02	隅丸 長方形	N	(3.92)・7.12	(21.92)	40	無	無	-	-	SD30、SK022、 SD12に 切られる	-	12

第2表 掘立柱建物跡一覧

図版No.	遺構	時期	地区	グラフィック	平面形	主軸方向	梁行 (m)	桁行 (m)	面積 (㎡)	土器 有無	石器 有無	重積関係	その他
31・34	ST01	弥生	1	H113-14-19	1×3間	N60° E	2.48	3.36	8.33	有	無	-	-
31・34	ST02	弥生	1	H106-07-11	1×5間	N43° E	2.48	5.36	13.29	有	有	SD04と切り合 うが新旧不明	P9石器有
31・34	ST04	弥生中期	1	H113-18	1×2間	N45° E	2.08	2.40	4.99	有	無	SD01に切られる	P2-7土器有
32・34	ST05	弥生中期 ～前期	1-2	H119	1×1間	N30° E	1.68	2.80	4.70	有	無	-	竪穴住居跡

第4章 森平遺跡

調査No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	主軸方向	壁行 (m)	桁行 (m)	面積 (㎡)	土器有無	石器有無	重載関係	その他
33-34	ST06	弥生	1	H20 H116	1×4間	N72°E	2.44	4.20	10.25	無	無	SB03と切り合うが新旧不明	-
33-34	ST07	弥生	1	H112	1×5間	N35°W	2.48	5.68	14.09	有	無	SD01に切られる SB07と切り合うが新旧不明	-
33-34	ST08	弥生	1	H113	1×1間	N15°E	2.16	2.56	5.53	無	有	SD01に切られる	壁穴付足跡
33-34	ST10	弥生	2	H118-23	1×2間	N25°W	2.24	3.20	7.17	有	有	SD06と切り合うが新旧不明	-
21-22	ST13	弥生中期	2-3	H119-20-24-25	1×2間	N65°E	2.20	4.16	-	有	有	SB13に切られる	壁穴付足跡 P1-2-5土器有

第3表 土坑一覧

調査No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土器有無	石器有無	重載関係
35-37	SK001	弥生中期	1	H109	長方形	竪底状	168	102	29	有	有	-
35-37	SK002	弥生	1	H110	円形	竪底状	98	90	40	無	無	-
35-40	SK003	弥生中期	1	H118	長楕円形	竪底状	190	78	32	有	無	-
40	SK004	弥生	1	H113	円形	竪底状	116	96	25	有	無	-
38	SK005	弥生	1	H116-17	円形	不整形	176	158	24	有	有	SD06と切り合うが新旧不明
38	SK007	弥生	1	H111	長方形	不整形	138	102	24	無	無	SD06と切り合うが新旧不明
35-39	SK010	弥生中期	2	H117	楕円形	竪底状	208	160	46	有	有	-
36-38	SK011	弥生後期	2	H20、H116	不整形円形	竪底状	136	110	23	有	有	-
40	SK012	弥生	2	H124	楕円形	不整形	29	20	21	有	無	-
40	SK013	弥生	2	H124	円形	混合形	29	27	28	有	無	-
40	SK014	弥生	2	H124	不整形円形	不整形	42	24	31	有	無	-
40	SK015	弥生	2	H124	円形	混合形	30	28	25	有	無	-
40	SK016	弥生	2	H124	円形	混合形	30	29	26	有	無	-
39	SK017	弥生	2	H117	円形	陥没	26	24	26	有	無	-
36-41	SK018	弥生	3	H21	楕円形	不整形	138	104	14	有	無	-
41	SK019	弥生	3	H115-20、H111-16	円形	陥没	122	112	14	有	無	-
36-41	SK020	弥生後期	3	N05	楕円形	竪底状	83	62	22	有	無	SB14と切り合うが新旧不明
36-42	SK023	弥生	5	J01	円形	不整形	114	100	37	有	有	SK23を切る
36-42	SK024	弥生中期	5	E16-21	楕円形	不整形	234	154	28	有	無	SD11に切られる
38	SK029	弥生	1	H110	円形	?	24	22	11	無	無	-
37	SK030	弥生	1	H110	円形	?	32	28	18	無	無	-
37	SK031	弥生	1	H114	楕円形	?	28	26	14	無	無	-
37	SK032	弥生	1	H114-15	円形	?	28	26	13	無	無	-
37	SK033	弥生	1	H115	円形	?	18	16	17	無	無	-
37	SK034	弥生	1	H115	円形	?	22	20	12	無	無	-
37	SK035	弥生	1	H119	楕円形	?	34	24	11	無	無	-
37	SK036	弥生	2	H119	円形	?	24	24	10	無	無	-
37	SK037	弥生	2	H119	円形	?	16	14	15	無	無	-
37	SK038	弥生	2	H119	円形	?	20	18	10	無	無	-
37	SK039	弥生	2	H119	円形	?	18	18	23	無	無	-
37	SK040	弥生	2	H119	円形	?	24	24	9	無	無	-
37	SK041	弥生	2	H119	円形	?	20	18	16	無	無	-
37	SK042	弥生	1	H20	楕円形	?	26	22	16	無	無	-
37	SK043	弥生	1	H20	円形	?	24	20	21	無	無	SB22と切り合うが新旧不明
37	SK044	弥生	2	H20	円形	?	24	20	21	無	無	-
37	SK045	弥生	2	H20	円形	?	18	16	14	無	無	-
37	SK046	弥生	2	H20	円形	?	20	18	10	無	無	-
37	SK047	弥生	2	H20	円形	?	18	16	7	無	無	-
37	SK048	弥生	2	H20	円形	?	28	22	15	無	無	-
37	SK049	弥生	2	H24	円形	?	26	26	27	無	無	-
37	SK050	弥生	2	H24	円形	?	20	20	14	無	無	-

第2節 遺構と遺物の出土状況

図版No.	遺構	時期	地区	グリップ	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土器 有無	石器 有無	重要関係
37	SK051	弥生	2	#H24	円形	?	26	20	30	無	無	-
37	SK052	弥生	2	#H24	円形	?	28	24	18	無	無	-
37	SK053	弥生	2	#H24	円形	?	24	18	23	無	無	-
37	SK054	弥生	2	#H25	円形	?	20	20	10	無	無	-
37	SK055	弥生	2	#H25	円形	?	18	16	36	無	無	-
38	SK056	弥生	1	#I06	円形	?	24	22	16	無	無	-
38	SK057	弥生	1	#I06	円形	?	28	26	18	無	無	-
38	SK058	弥生	1	#I06	楕円形	?	34	26	11	無	無	-
38	SK059	弥生	1	#I06	円形	?	60	66	14	無	無	-
38	SK060	弥生	1	#I06	楕円形	?	76	48	15	無	無	SK062と切り合うが新旧不明
38	SK061	弥生	1	#I06	円形	?	28	24	30	無	無	-
38	SK062	弥生	1	#I06	円形	?	22	20	18	無	無	SK060と切り合うが新旧不明
38	SK063	弥生	1	#I06	楕円形	?	18	14	17	無	無	-
38	SK064	弥生	1	#I06	円形	?	24	22	22	無	無	-
38	SK065	弥生	1	#I06	楕円形	?	30	22	38	無	無	-
38	SK066	弥生	1	#I11	円形	?	22	20	15	無	無	-
38	SK067	弥生	1	#I11	円形	?	28	24	12	無	無	SK04と切り合うが新旧不明
38	SK068	弥生	1	#I11	円形	?	20	16	10	無	無	-
38	SK069	弥生	1	#I11	円形	?	18	18	10	無	無	-
38	SK070	弥生	1	#I11	円形	?	24	22	15	無	無	-
38	SK071	弥生	1	#I11	円形	?	34	24	18	無	無	-
38	SK072	弥生	1	#I11	円形	?	32	30	15	無	無	-
39	SK073	弥生	1	#I12	円形	?	26	26	16	無	無	-
39	SK074	弥生	2	#I17-18	円形	?	30	24	19	無	無	-
40	SK075	弥生	1	#I19	円形	?	30	28	10	無	無	-
40	SK076	弥生	2	#I19	円形	?	28	24	12	無	無	-
40	SK077	弥生	2	#I19	円形	?	32	28	11	無	無	-
40	SK078	弥生	2	#I19	円形	?	20	16	8	無	無	-
39	SK079	弥生	2	#I21	不整形	?	50	34	47	無	無	-
39	SK080	弥生	2	#I21	円形	?	43	40	62	無	無	-
40	SK081	弥生	2	#I24	円形	?	28	20	19	無	無	-
40	SK082	弥生	2	#I24	楕円形	?	40	26	22	無	無	-
40	SK083	弥生	2	#I24	円形	?	24	22	15	無	無	-
40	SK084	弥生	2	#I24	円形	?	22	20	11	無	無	-
40	SK085	弥生	2	#I24	円形	?	24	20	11	無	無	-
40	SK086	弥生	2	#I24	円形	?	24	20	19	無	無	-
40	SK087	弥生	2	#I24	円形	?	36	32	21	無	無	-
40	SK088	弥生	2	#I24	楕円形	?	24	20	10	無	無	-
40	SK089	弥生	2	#I24	円形	?	34	28	8	無	無	-
40	SK090	弥生	2	#I24	円形	?	24	24	10	無	無	-
40	SK091	弥生	2	#I24	不整形	?	44	28	17	無	無	-
40	SK092	弥生	2	#I24	円形	?	24	24	9	無	無	-
40	SK093	弥生	2	#I24	円形	?	24	22	13	無	無	ST13のビットの可能性がある
40	SK094	弥生	2	#I24	円形	?	24	22	14	無	無	-
40	SK095	弥生	2	#I24	円形	?	28	26	38	無	無	-
40	SK096	弥生	2	#I24	円形	?	30	18	12	無	無	-
40	SK097	弥生	2	#I24	円形	?	22	20	32	無	無	-
40	SK098	弥生	2	#I24	円形	?	36	34	22	無	無	-
41	SK099	弥生	3	#I25	円形	?	43	40	16	無	無	-
41	SK100	弥生	3	#I25	円形	?	27	24	15	有	無	-
41	SK101	弥生	6	#J21	円形	?	36	30	17	有	無	-
41	SK102	弥生	6	#J21	円形	?	29	28	43	有	無	-
42	SK103	弥生	3	#I06	不整形	?	31	26	12	無	無	-
41	SK104	弥生	3	#N06, #O01	楕円形	?	67	48	16	無	無	-
41	SK105	弥生	3	#N06	円形	?	56	48	22	無	無	SB14と切り合うが新旧不明
41	SK106	弥生	3	#O01	円形	?	28	28	28	無	無	-
41	SK107	弥生	3	#O01	不整形	?	28	24	27	無	無	-
41	SK108	弥生	3	#O01	円形	?	29	24	24	無	無	-
41	SK109	弥生	3	#O01	円形	?	32	30	39	無	無	-

第4表 焼土跡一覧

図版No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土器 有無	石器 有無	遺構関係	その他
36	SF1	焼土	3	#105-10	不整形	焼土のみ	44	18	-	無	無	-	-
36	SF2	焼土	6	#100	不整形	焼土のみ	80	48	-	有	有	-	-
36	SP3	焼土	3	#1 20, #116	円形	焼土のみ	42	40	-	有	無	-	-

第5表 溝跡一覧

図版No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長さ (m)	最大幅 (m)	深さ (cm)	土器 有無	石器 有無	遺構関係	その他
43-44	SD01	近世	1	#D04-06-09-12-13-17-18-22 #102-06-07-12-13-15-17-18-19	縦行し直角に曲がる	溝底状	79.5	20	6~36	有	有	ST04-07-08を切る	エッジのウマの東有 SD03と分岐
43-44	SD02	古代以降	1	#C25 #H04-05	湾曲	溝状	4.5以上	0.9	5~13	有	有	SD01-04と切り合いが新旧不明	-
43-44	SD03	古代以降	1	#C24-25 #D21-22, #H04	直線的	溝状	19.5	1.3	8~30	有	有	SD02と切り合いが新旧不明	SD01と分岐
43-44	SD04	古代以降	1	#C25 #H05	直線的	溝底状	7.6以上	0.7	6~28	有	無	SD02と切り合いが新旧不明	-
43	SD05	古代以降	1	#D41	直線的	?	6.5	0.4	5~18	有	無	-	-
44	SD06	古代以降	1-2	#I18-23	直線的	不整形	10.5	1.1	20~55	有	有	SH10を切る ST10と切り合いが新旧不明	-
45	SD08	近世中期	1-3-3	#D13-14-15-17-18-19 #E11-12-13	湾曲	溝底状	46.0	3.0	31~99	有	有	-	-
43	SD09	古代以降	1	#D19-20	直線的	溝底状	8.4	0.7	5~21	有	無	-	-
43	SD10	古代以降	1	#D12	直線的	?	3.0	0.6	9~13	無	無	-	-
44	SD11	古代以降	5-6	#E11-16-21 #J01-06-11-12	湾曲	溝状	40.0	0.8	3~16	有	無	SK024を切る	SD12と重なり合う
44	SD12	古代以降	6	#J01-06-11-12	湾曲	?	19.6	1.4	15~36	有	無	SD23を切る	SD11と重なり合う

第6表 樹種同定結果

試料番号	遺跡記号	遺構名	管理番号**1	観察見など**2	樹種	備 考
1	DMR	SB01	C8	ミカン樹状	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
2	DMR	SB01	C14	樹状不明	ヒノキ科	-
3	DMR	SB01	C17	樹状不明	ヒノキ科	-
4	DMR	SB01	C18	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
5	DMR	SB01	C19	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
6	DMR	SB01	C20	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
7	DMR	SB01	C21	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
8	DMR	SB01	C22	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
9	DMR	SB01	C23	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
10	DMR	SB01	C24	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
11	DMR	SB01	C25	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
12	DMR	SB01	C26	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
13	DMR	SB01	C27	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
14	DMR	SB01	C28	柱目状	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
15	DMR	SB01	C29	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
16	DMR	SB01	C30	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
17	DMR	SB01	C31	ミカン樹状	トネリコ属	-
18	DMR	SB01	C32	ミカン樹状	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
19	DMR	SB01	C33	柱目状	トネリコ属	-
20	DMR	SB01	C34	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
31	DMR	SB01	C35	ミカン樹状	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
22	DMR	SB01	C36	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	放射性炭素年代測定試料
23	DMR	SB01	C37	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
24	DMR	SB01	C38	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-
25	DMR	SB01	C39	樹状不明	コナラ属コナラ亜属コナラ類	-

試料番号	遺跡記号	遺構名	管理番号※1	観察所見など※2	形状	備 考
26	DMR	SB01	C40	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
27	DMR	SB01	C41	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
28	DMR	SB01	C42	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
29	DMR	SB01	C43	楕円板状	ヒノキ科	—
30	DMR	SB01	C44	楕円板状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
31	DMR	SB01	C45	楕円板状	ヒノキ科	—
32	DMR	SB01	C46	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
33	DMR	SB01	C47	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
34	DMR	SB01	C48	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
35	DMR	SB01	C49	分銅材	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
36	DMR	SB01	C50	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
37	DMR	SB01	C51	分銅材	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
38	DMR	SB01	C52	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
39	DMR	SB01	C53	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
40	DMR	SB01	C54	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
41	DMR	SB01	C55	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
42	DMR	SB01	C56	楕円板状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
43	DMR	SB01	C57	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
44	DMR	SB01	C58	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
45	DMR	SB01	C59	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
46	DMR	SB01	C60	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
47	DMR	SB01	C61	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	放射線測定年代測定試料
48	DMR	SB01	C62	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
49	DMR	SB01	C63	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
50	DMR	SB01	C64	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
51	DMR	SB01	C65	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
52	DMR	SB01	C66	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
53	DMR	SB01	C67	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
54	DMR	SB01	C68	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
55	DMR	SB01	C69	楕円板状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
56	DMR	SB01	C70	分銅材	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
57	DMR	SB01	C71	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
58	DMR	SB01	C72	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
59	DMR	SB01	C73	楕円板状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
60	DMR	SB01	C74	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
61	DMR	SB01	C75	楕円板状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
62	DMR	SB01	C76	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
63	DMR	SB01	C77	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
64	DMR	SB01	C78	形状不明	ヒノキ科	—
65	DMR	SB01	C79	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
66	DMR	SB01	C80	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
67	DMR	SB01	C81	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
68	DMR	SB01	C82	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
69	DMR	SB02	C01	楕円板状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
70	DMR	SB02	C02	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
71	DMR	SB02	C03	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
72	DMR	SB02	C04	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
73	DMR	SB02	C05	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
74	DMR	SB02	C06	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
75	DMR	SB02	C07	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
76	DMR	SB02	C08	ミカン類状	キハダ	—
77	DMR	SB02	C09	楕円板状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
78	DMR	SB02	C10	形状不明	トネリコ属	—
79	DMR	SB02	C11	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—
80	DMR	SB02	C12	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	—

第4章 森平遺跡

試料番号	遺跡記号	遺構名	管理番号※1	観察所見など※2	特徴	備 考
81	DMR	SB02	C13	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
82	DMR	SB02	C14	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
83	DMR	SB02	C15	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
84	DMR	SB02	C16	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
85	DMR	SB02	C17	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
86	DMR	SB02	C18	榎目類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
87	DMR	SB02	C101	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
88	DMR	SB02	C102	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
89	DMR	SB02	C103	榎目類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
90	DMR	SB02	C104	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
91	DMR	SB02	C105	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
92	DMR	SB02	C106	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
93	DMR	SB02	C107	榎目類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
94	DMR	SB02	C108	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
95	DMR	SB02	C109	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
96	DMR	SB02	C110	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
97	DMR	SB02	C111	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
98	DMR	SB02	C112	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
99	DMR	SB02	C113	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	放射線炭素年代測定試料
100	DMR	SB03	C01	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
101	DMR	SB03	C02	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
102	DMR	SB03	C03	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
103	DMR	SB03	C04	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
104	DMR	SB03	C05	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
105	DMR	SB03	C06	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
106	DMR	SB03	C07	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
107	DMR	SB03	C08	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	放射線炭素年代測定試料
108	DMR	SB03	C09	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
109	DMR	SB03	C10	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
110	DMR	SB03	C11	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
111	DMR	SB03	C12	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
112	DMR	SB03	C13	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
113	DMR	SB03	C14	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
114	DMR	SB03	C15	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
115	DMR	SB03	※内 C01	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
116	DMR	SB03	※内 C02	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
117	DMR	SB11	C01	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
118	DMR	SB11	C02	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
119	DMR	SB11	C03	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
120	DMR	SB11	C04	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
121	DMR	SB11	C05	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	放射線炭素年代測定試料
122	DMR	SB11	C06	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
123	DMR	SB11	C07	芯持丸木	アヤギ	--
124	DMR	SB11	C08	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
125	DMR	SB11	C09	榎目類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
126	DMR	SB15	C01	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
127	DMR	SB15	C02	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
128	DMR	SB15	C03	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
129	DMR	SB15	C04	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
130	DMR	SB15	C05	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
131	DMR	SB15	C06	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
132	DMR	SB15	C07	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
133	DMR	SB15	C08	榎目類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
134	DMR	SB15	C09	形状不明	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--
135	DMR	SB15	C10	ミカン類状	コナタ属コナラ亜属コナラ属	--

試料番号	遺跡記号	遺構名	管理番号※1	観察所見など※2	形状	備考
136	DMR	SB05	C11	柱目痕状	コナク属コナク草属コナク草	—
137	DMR	SB05	C12	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
138	DMR	SB05	C13	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
139	DMR	SB05	C14	ミカン類状	コナク属コナク草属クヌギ草	放射性炭素年代測定試料
140	DMR	SB05	C15	柱目痕状	コナク属コナク草属コナク草	—
141	DMR	SB05	C16	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
142	DMR	SB05	C17	柱目痕状	コナク属コナク草属コナク草	—
143	DMR	SB05	C18	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
144	DMR	SB05	C19	ミカン類状	コナク属コナク草属クヌギ草	—
145	DMR	SB05	ピット (北西)	内部 形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
146	DMR	SB05	C21	ミカン類状	コナク属コナク草属クヌギ草	—
147	DMR	SB05	C22	柱目痕状	コナク属コナク草属コナク草	—
148	DMR	SB05	C23	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
149	DMR	SB05	C24	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
150	DMR	SB05	C25	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
151	DMR	SB05	C26	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
152	DMR	SB07	C01	ミカン類状	トネリコ属	—
153	DMR	SB07	C02	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
154	DMR	SB07	C03	柱目痕状	コナク属コナク草属コナク草	—
155	DMR	SB07	C04	柱目痕状	コナク属コナク草属コナク草	—
156	DMR	SB07	C05	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
157	DMR	SB07	C06	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
158	DMR	SB07	C07	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
159	DMR	SB07	C08	ミカン類状	コナク属コナク草属クヌギ草	—
160	DMR	SB07	C09	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
161	DMR	SB07	C10	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
162	DMR	SB07	C11	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
163	DMR	SB07	C12	ミカン類状	コナク属コナク草属クヌギ草	—
164	DMR	SB07	C13	形状不明	コナク属コナク草属クヌギ草	—
165	DMR	SB07	C14	ミカン類状	コナク属コナク草属クヌギ草	—
166	DMR	SB07	C15	形状不明	コナク属コナク草属クヌギ草	—
167	DMR	SB07	C16	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
168	DMR	SB07	C17	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
169	DMR	SB07	C18	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
170	DMR	SB07	C19	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
171	DMR	SB07	C20	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	放射性炭素年代測定試料
172	DMR	SB07	C21	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
173	DMR	SB07	C22	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
174	DMR	SB07	C23	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
175	DMR	SB07	C24	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
176	DMR	SB07	C25	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
177	DMR	SB07	C26	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
178	DMR	SB07	C27	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
179	DMR	SB07	C28	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
180	DMR	SB07	C29	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
181	DMR	SB07	C30	形状不明	コナク属コナク草属クヌギ草	—
182	DMR	SB07	C31	形状不明	コナク属コナク草属クヌギ草	—
183	DMR	SB07	C32	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	—
184	DMR	SB07	C33	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
185	DMR	SB07	C34	ミカン類状	コナク属コナク草属コナク草	—
186	DMR	SB07	C35	形状不明	コナク属コナク草属クヌギ草	—
187	DMR	SB07	ピット (北)	形状不明	コナク属コナク草属コナク草	放射性炭素年代測定試料

※1 第4章第2節遺構図に掲載した管理番号。

※2 試料受領時の炭化材の形状等の観察所見。

第3節 遺物

1. 土器

本遺跡から土器は約418kg出土し、そのうち約252kgが遺構から出土したものである。そこで、遺構内の出土地が明確である個体のみを選択して掲載し、遺構外出土土器で補足した。出土総量に対する図化率は約27%である。なお、その出土状況は第2節で報告し、本項ではそれらの属性を「土器観察表」として一覧表化した(表7)。以下に観察表の大項目の順序に従って、必要に応じて解説を行う。

(1) 番号情報

管理番号：発掘調査後に時期等が判別できる個体を優先的に資料化するために「管理番号」を付した。管理番号は1～571まで付与されていて、出土総量418kgのうち約126kgにあたる。本書ではこのうち、遺構出土土器237点、遺構外出土土器44点(合計約113kg)について掲載・報告した。

(2) 出土遺構情報

注記層位：調査段階に付与された出土位置情報である。「P」は土器を指し、その他はそれぞれ遺構内の位置情報を示す。

推定層位：個々の遺物レベルを基に、遺物の垂直分布図を作成した。そして遺物の垂直方向の位置を、断面図を作成した部分の層位と照合し、遺物の「推定層位」を割り出し、その層位を記載した。またその際、床面レベルに比定される「推定床」出土の資料は「床面」と記載した。土器図版(第51図～71図)は遺構毎に「推定床」、「推定層位」における廃棄時期の古い個体から順に組み、前節の出土位置の説明もその順に行った。

(3) 土器基本情報

時期：森平遺跡出土土器の主体は弥生時代中期にあたる栗林式である。近年長野市松原遺跡・榎田遺跡や中野市柳沢遺跡等の調査に伴って資料が充実している。さて、栗林式土器の編年は笹澤浩氏のⅠ式・Ⅱ式(笹沢1971)とⅠ式の細分により確立され(笹沢1996)、その後3型式4段階区分(寺島1993)へと展開した。やがて装飾帯の概念(上田1995・貫田2000)を加えつつ「栗林1式」・「栗林2式古段階」・「栗林2式新段階」・「栗林3式」の4時期区分(石川2002・2012)が提唱された。一方、千曲川の上流域にあたる佐久地方でも佐久考古学会による編年が行われ、栗林式は「中期後半古相」、「中期後半中相」、「中期後半新相」、「中期後半最新相(従前の栗林直後形式)」に細分された(小山1990b)。これに加え、相次ぐ大規模集落の調査・報告(佐久市教委1994・1997他)等をもとに、5段階に区分された(馬場2006)。これら一連の研究を受けて従来の編年観の統合(寺島2013)が図られている。その背景には、複数の編年案間の共通性が高く、それぞれの段階の対比が容易であったことがあげられる。そこで、本書では今までの成果を踏まえ、弥生時代中期前葉から後葉にかけての栗林式を石川編年を基準に佐久地方の土器編年に対応させ、以下の4段階でとらえた。

〔1式〕(佐久考古学会の中期後半古相)

〔2式古段階〕(佐久考古学会の中期後半中相)

〔2式新段階〕(同上)

〔3式〕(佐久考古学会の中期後半新相・中期後半最も新しい様相)

そして栗林2式古段階から後期前半までの土器が認められる(第72図)ことを確認し、遺構ごとこれらの出土状態を第4章第2節に記した。ここでは本遺跡における各時期の特色の概略を整理する(第72図)。また、文様(賛田2000)の呼称、Ⅰ～Ⅳの文様帯区分(上田1995)ともに松原遺跡出土土器の分析をもとに記述を進める。

【栗林2式古～新段階】この段階にはⅡ文様帯からⅢ文様帯にかけて装飾が連続するもの(2+4・5)(石川2002)が主流であるが、Ⅱ文様帯が無文化したものとみられる。本段階の指標とされる松原遺跡SB260・1146ではⅡ文様帯以下に横方向の分帯線が重畳しながらⅢ・Ⅳ文様帯へと連なる個体が主流である。そこで本遺跡では沈線によりⅡ文様帯以下に文様が描かれる壺454をこの段階にあてる。また、この段階の甕は頸部に櫛歯横線文と波状文が重畳(石川同)、櫛歯の波状文を重畳し垂下文で区切る手法が認められる(馬場2006)等とされ、本遺跡の386の特徴に一致する。

【栗林2式新段階】この段階には壺の無文化の進行、全面赤彩の小形壺の登場、甕の縦羽状文などが特徴とされる(石川同)。またこの時期の指標とされる松原遺跡SB409・1135出土土器にはⅡ文様帯に懸垂舌状文が施される個体が増える。本遺跡のSB11埋土から出土した土器には、Ⅱ文様帯に懸垂舌状文(355・460)や沈線文(479)が施される壺、Ⅱ文様帯以下が無文の壺(第60図472・489)があり、この段階に比定される。また、甕は櫛歯波状文と垂下文(483)、櫛歯縦羽状文(408)のものや、赤彩の無頸壺008、赤彩鉢006・007・370がみられる。

【栗林3式】この段階の壺の特徴は口縁の内湾の度合いが緩くなる、頸部のⅡ文様帯およびその直下に鋸歯文が配される、頸部の横線文が短く途切れる、などの特徴がみられる(石川同)。本遺跡でも壺の口縁部が緩い受け口状になり(409)、頸部が太いもの(第58図-249)が増加する。また、甕は胴部の櫛歯羽状文の左右の対称性が失われたり、頸部に櫛歯状文が配されるものが(009)増加し、その他にコの字重ね文の台付甕136がみられる。高杯344や鉢A263・鉢B039・鉢C345等、赤彩の施されたものはさらに増加する。

【後期前半】中期後半最も新しい様相(小山1990b)に後続する土器群は「後期前半古相」とされ、長野市吉田高校グラウンド遺跡に対比される周防畑B遺跡Y2号住居跡出土土器を指標とする一群である。壺は「いちじく形」の器形、頸部への文様集中、赤彩化の進行で特徴づけられる。甕は胴上位が強く張り、頸部櫛歯状文・胴部櫛歯文、横羽状文がみられる。本遺跡では、胴上位が強く張り出す甕014、密接に施文された横羽状文の甕019がみられる。

器種:器種区分は松原遺跡の図版(青木2000)とその解説(直井2012)に従い、壺・甕・台付壺・高杯・鉢・無頸壺・甕(有孔鉢)を認定した。さらに壺・甕は口縁部形態と胴部最大径の位置で細分が可能であり(直井同)これが時期の指標ともなる。代表的な資料をあげると、壺の口縁部には大きくラッパ状に開くもの(第51図-001)、受け口部分に段がつくもの(第53図-361)、緩い受け口状のもの(第56図-409)の3形態が存在する。また甕には、短く開く口縁(第51図-331)、受け口状の口縁(第51図-002)の2者とも認められる。鉢は、一般的な鉢A(第51図-006)、口縁部に屈曲点があり外に大きく開く朝顔形の鉢B(第52図-333)、頸部が広く括れをもつが赤彩がなされる鉢C(第52図-345)(青木2000)を分類した。壺・甕ともに受け口状口縁の個体は栗林3式に多く、赤彩も増える傾向にある。

(4) 土器詳細情報

文様：栗林式の文様表出技法には、竹管などを用いた浅い沈線文、カエデの枝などを用いたと考えられる籐状工具による櫛描文（徳永 1996）、縄文の3者がみられる。また器面を横断する沈線文の文様要素（費田 2000）は、横走（第 64 図 - 110）、波状（第 51 図 - 001）、山形（第 53 図 - 355）がみられ、同一の効果を狙った櫛描文にはそれぞれ直線文（第 56 図 - 410）、波状文（第 51 図 - 009）等がみられる。また、器面を縦断する要素には垂下沈線文（第 60 図 - 479）、櫛描垂下文（第 51 図 - 009）等があり、要素を組み合わせた単位文様には重三角文（第 53 図 - 355）、連弧文 a（第 60 図 - 479）、ならびに沈線（第 61 図 - 474）・櫛描（第 63 図 - 019）による羽状文、沈線によるコの字重ね文（第 51 図 - 003）等がみられる。縄文は LR が最も多く実測個体の 73%、RL が 5%、ゼロ段多条が 4% を占める。このうち特に、横走沈線文の文様表出技法の観察方法として、通常の沈線（頭部文様帯技法 a）、沈線上部に段をもつもの（同 b）、押し出し突帯（同 c）、貼り付け凸帯（同 d）を区分・記載した（青木 2000）。栗林式土器の主要な文様は縄文土器のように横方向に展開するため、4つの文様帯（上田 1995）に大きく区分される。本遺跡の資料を概観すると、Ⅰ文様帯に LR 縄文、Ⅱ文様帯は縄文地文 + 横走沈線文 a・波状・山形等の沈線文、Ⅲ文様帯は無文、Ⅳ文様帯に縄文 + 沈線もしくは無文、という組み合わせの壺は SB01（第 51 図 - 001・第 52 図 - 011）、SB09 等、一方Ⅱ文様帯に横走沈線文 b・c、Ⅲ文様帯に懸垂舌状文等、Ⅳ文様帯に沈線による重三角文・連弧文等の文様が入る壺は SB03・08・11（第 60 図 - 479・466）等に見られ、前者が栗林 3 式、後者が 2 式を特徴付けるものと考ええる。この他、時期が下るに従って、文様表出技法は沈線から櫛描へ、Ⅱ文様帯要素は縦位から横位主体へ、頭部文様帯技法は b・c から a へと変化する傾向がある。

種子圧痕：土器の内外面に、初痕を含む種子圧痕が観察できる個体は 81 点みられた。

赤彩：赤彩のみられる個体は、壺 44 点、高杯 16 点、鉢 21 点、甕 2 点、蓋 2 点、筒形土器 1 点に及び、このうち剥落によって赤彩部位が特定できないものを除き、赤彩範囲をスクリーントーンで示した。この他に土器成形時に赤色顔料が付着した 7 点がある。

胎土：出土土器の胎土は、風化した斜長石が多量に入り、火山ガラス・高温型石英とその他の岩片がみられるものを 1 類、輝石が多く火山ガラスが少なく風化した斜長石が 1 類よりも少ないものを 2 類とした。さらに風化した黄褐色粒子が含まれかつ色調がおもに 10YR8/6 の白色系の胎土を 3 類とした。そのうち 249・250・251・252・253・254・255・334・335・344 の 10 点はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託して胎土分析を実施している（第 8 章第 1 節 3 参照）。

2. 石器

792 点の石器が出土した。竈穴住居跡の埋土から検出された石器が 582 点となる。竈穴住居跡の時期等から石器の大部分は弥生時代中期に属すと考えられる。遺跡全体の器種組成は太型蛤刃石斧 12 点、扁平片刃石斧 16 点、扁平片刃石斧未製品 1 点、柱状片刃石斧 2 点、打製石斧 24 点、磨製石鏃 17 点、磨製石鏃未製品 21 点、石鏃 31 点、石鏃未製品 3 点、石鏃 6 点、楔形石器 56 点、磨り切り具 2 点、スクレイパー 4 点、2 次加工のある剥片 9 点、微細剥離のある剥片 1 点、剥片 432 点、砕片 66 点、石核 19 点、石髄 5 点、磨石 9 点、みがき石 12 点、砥石 4 点、石皿 18 点、台石 1 点、軽石製品 10 点、凹石 4 点、敲石 4 点、原石 3 点となる（第 9 表）。

石材組成は黒曜石 247 点、緑色岩類 12 点、緑色凝灰岩 59 点、チャート 19 点、緑色岩片 64 点、粘板岩 176 点、アイサイト 117 点、頁岩 22 点、凝灰岩 1 点、ホルンフェルス 1 点、ガラス質黒色安山岩 4 点、石英 3 点、玉髓 1 点、流紋岩 1 点、透閃石岩 1 点、砂岩 23 点、軽石 10 点、細粒砂岩 1 点、細粒花崗岩 1 点、輝石安山岩 23 点、安山岩 6 点となる（第 10 表）。

(1) 大型蛤刃石斧 [第73・74図]

大型蛤刃石斧の石材はすべて緑色岩類である。この石材は長野市榎田遺跡の磨製石斧製作跡で確認された緑色岩類と同質で、岩石学的には玄武岩もしくは輝緑岩に分類されるという(町田1999)。産地は長野盆地千曲川右岸の榎田遺跡東側の山地周辺と考えられている。すべてが製品もしくは製品の破片であり、剥片類などの他の緑色岩類が検出されないため、遺跡外で製作されたものが持ち込まれたと考えられる。

すべての大型蛤刃石斧の欠損面以外の器面全体は、研磨面または敲打面で覆われており、礫面や素材主要剥離面、器体整形のための二次剥離面が認められない。敲打調整後に研磨が施されており、研磨方向は同一面でも多方向が確認できる。

S027・028・032・129は完形である。平面形は基部より刃部が幅広となる撥形を呈し、刃部は中央付近が緩やかに膨らむ弧状を呈する。横断面形は楕円形、あるいは隅丸の方形を呈する。S129には側縁に面を作出する意図が認められるものの側面と表表面の境は新移的である。刃部の縦断面形は表裏対称形の両刃となる。

S029・030・075・076は欠損した大型蛤刃石斧を石槌として再利用した石器と思われる。刃部があった器体下側縁に平らな面(以下、下面と記す)がある。S029・076は下面が敲打面、S030・075は磨り面となっている。S075には表表面下端に下面からの剥離がみられ、その剥離開始部は下面の磨り面に切られているため、当初の下面には敲打面があって、その後、磨り面が形成されたと考えられる。石皿のようなものの上で何かを磨り潰すための道具であろうか。S076の下面は敲打痕が認められるが、敲打面の形成は部分的である。他と比べて転用後の使用頻度が低いであろうか。また、S076の表面の基部近くに凹形的な敲打による凹部が存在する。

S029・033には比熱であろうか研磨面が褐色あるいは黒色に変化した部分が認められる。また、S075の岩石の気泡や鉱物痕のような細かい凹部に褐色の物質が入り込んでいる。

(2) 扁平片刃石斧 [第74～76図]

石材は大型蛤刃石斧と異なり緑色凝灰岩が主体となる。小形品にチャートや玉髄がみられる。器面の大部分が研磨面で覆われているため素材の形状は明確にならないが、礫面はみられないことから、板状に削れやすい岩石から剥離した剥片を素材としていると思われる。周縁に平坦な剥離を施して器体整形を行った後に、研磨により最終形状が整えられており、大型蛤刃石斧にみられる敲打調整は確認できない。

左右側縁及び基部には平坦面が研磨によって作り出されており、扁平で定角的な断面形を呈する。平面形は左右側縁が平行する幅広の長方形を呈しており、基部幅より刃部幅の方が広いものが多い傾向はあるが、その差はさほど大きくない。刃部は表面側からの研磨を多く施すことにより、表側が凸となる片刃が作出されている。刃部平面形は直線的なものが多いが、S034・041・077は刃部中央付近が凸となる弧状を呈している。刃部側から見た刃部稜線は刃部中央がわずかに裏面側に近くなる傾向はあるが直線的稜線が主体となる。

S077・078については刃部中央が裏面に偏り、刃部左右端が表面に偏る丸ノミ状を呈している。

(3) 柱状片刃石斧 [第77図]

2点の柱状片刃石斧はチャートを石材としている。器体全面が研磨面で覆われているため、素材や研磨以外の整形加工について読み取ることができない。平面形は細長い長方形を呈し、基部と側縁には研磨により定角的な面が作出されている。刃部は表面の研磨を多く施すことにより、表面が凸となる片刃が作出されている。小形の扁平片刃石斧と石材、側縁加工、刃部加工等が共通することから、小形で幅が狭い扁

平片刃石斧として理解できる。

(4) 打製石斧 [第76図]

灰白色、灰色、暗灰色のデイスイトが打製石斧の主要な石材となる。デイスイトは打製石斧に特化した石材で、他の器種にはほとんど用いられない。他には黒色の粘板岩が用いられる。節理により板状に割れるデイスイトを素材とする場合が多い。

左右側縁に平坦な剥離を施して器形を整形している。刃部への加工傾度は左右側縁とあまり変わらないが、基部への加工は粗い。平面形はS087のような撥形を基本とするようだが規格性は低い。いわゆる「石罫」的な大形製品はほとんどなく、欠損も目立つ。S353は緑色凝灰岩で扁平片刃石斧の石材と共通している。整形が粗いため、扁平片刃石斧の未製品の可能性も考えられる。

SB09ではデイスイトの剥片類が集中出土しており打製石斧の製作が行われているようだが、他では明確な製作痕跡は認められない。

(5) 磨製石鏃・磨製石鏃未製品 [第77～79図]

緑色片岩、緑色凝灰岩、粘板岩が石材として用いられる。3者はいずれも板状節理をもつが、中間的な石材が存在し分類が困難であった。以下の基準で3者を分類した。光沢をもつ節理面を有する石材を緑色片岩とした。緑色片岩は暗緑灰色から黒色の色調をなす。節理に光沢がなく色調が黒色の石材を粘板岩に、緑灰色、暗緑灰色、黒色の石材を緑色凝灰岩とした。

緑色片岩と粘板岩は他の器種であまり用いられない。緑色凝灰岩は扁平片刃石斧に用いられるものよりも変成していない。そのため、緑色片岩、粘板岩、変成の度合いの低い緑色凝灰岩の大部分が磨製石鏃に関するものと考えられる。ただし、緑色片岩と緑色凝灰岩については全体数及び礫面付の剥片数の少ないことから、遺跡内での製作はあまり行われていなかったと考えられる。

粘板岩については、剥片類に残されている滑らかな礫面から原石は扁平な円礫と判断できる。これらを節理方向で薄く割れるように、挟んで打ち割っているようだ。粘板岩の楔形石器あるいは打製石斧に分類した石器の破片に磨製石鏃製作のための分割剥片との判断が難しいものがある。

薄く割れた剥片の表裏面は節理の影響により平たく平行となる。この平たい面を研磨して両面が研磨された薄い板状の素材ができあがる。その素材を摩り切り具等を用いて磨り切って分割し、さらなる研磨で鏃形に整形し、最後に尖孔を施して完成に至る。

S004には滑らかな礫面が残されている。

S019には切りきれっていない溝状の磨り切りの痕が残されている。およそ1mmの溝幅は砥石の砥面の幅を示す。同様にS015の茎への整形に用いられた砥石の幅も狭いことがうかがえる。

S013には開き切らない尖孔痕が残されている。表裏の尖孔痕の位置は微妙にずれており、別々に尖孔を行い目測を誤った可能性がある。S017の裏面にも位置がずれて開けなおした尖孔がみられる。

S022の表下側縁には石斧の刃部のような研磨がみられるため、片刃石斧の未製品の可能性がある。小形幅広のS011・012・015のような形態と、細長いS017・020・023が認められる。なお、S015には茎が作りだされている。

(6) 石鏃 [第79・80図]

黒曜石が石材として用いられることが多く、チャートが少数混じる。遺跡に持ち込まれている黒曜石のほとんどが石鏃に関わるものと考えられる。

器体の大部分が2次剥離で覆われているが、残された1次剥離面及び礫面の状況から、小形の剥片を素材としている。楔形石器とした器種と石鏃の素材剥片は同一の可能性が高い。平坦で細かい剥離を表裏両面に施して器体整形を行っている。平面形は三角形を呈し、基部は茎を有して凸となるものと、挟れるものがある。横断面形は凸レンズ形を基本とする。

標準的な大きさは長さ3.5cm程度だがそれ以上の規格は見られず、2cm前後の小さなものがあつた。形態的には縄文時代の石鏃との区別が困難である。

(7) 石鏃 [第80図]

6点の石鏃すべてが黒曜石を石材としている。いずれも、先端部が器体の大部分を占める石鏃で、素材、加工は石鏃と共通する。形態の規格性は低い。

(8) 楔形石器 [第80図]

楔形石器とした56点の内、黒曜石が49点を占める。明確に楔として機能した石器はなく、多くが石鏃の素材あるいはその素材剥離のための残核と考えられる。残存している礫面の状況から、原石は大きくても楔形石器の倍程度しかなかったと考えられる。小形の原石を台に乗せて、挟み割った結果がこの器種と思われる。細かな整形を目的とした2次剥離は認められない。

4点の粘板岩の楔形石器は磨製石鏃の素材に関わる可能性がある。

(9) 磨り切り具 [第81図]

剥片の直線的な縁辺に磨痕が残されている石器が2点確認されている。用途としては磨製石鏃の磨り切りが想定される。

S130は砂岩の直線的な剥片の末端が磨れて摩耗している。実測図では摩耗痕を縁辺に直交する方向で表現しているが、方向が観察できるわけではない。磨り切りの痕であれば、直交ではなく並行方向に摩耗の線状痕が見えるはずだが方向は読み取れない。刃部反対側の右側縁には傾度は低いが敲打の痕跡がみられ、弱い縁辺の潰れと、わずかな剥離が残されている。

S093は右側縁が磨り切りの刃部と考えられるが摩耗痕は不明瞭である。

(10) 石核 [第80図]

黒曜石の小形原石あるいは、粘板岩を台の上で挟み割って薄い板状に分割する石核が認められる。

S224は黒曜石の石核である。楔形石器や剥片類に残される礫面の観察から、この石核が遺跡に持ち込まれた原石の最大に近い大きさと考えられる。遺跡に持ち込まれた黒曜石は長径5cmを上回るサイズはなく、小形ばかりとなっている。

(11) 石槌 [第81図]

砂岩、輝石安山岩の棒状円礫の一端に平たい敲打面もしくは磨面がある石器を石槌とした。石皿の上で対象物を潰し磨る道具と考えられる。現代の金槌の金属部のような形状を呈している。

砂岩のS059・118・120・121には機能面に磨面があり、輝石安山岩のS081・111の腹部には敲打凹部が認められる。S149は上下両面全体が磨面で覆われており、敲打面は認められない。S059・081は熱を受けているようだ。

(12) 磨石 [第82図]

片手で持てる大きさと磨面を有する礫石器を磨石とした。

S101は上面、S102は下面に平坦な磨面をもつ。石槌的な機能も考えられるが、平坦面に敲打は認められない。

S146の右側縁の平坦面に敲打面とそれを上書きする磨面が認められる。下端にも敲打痕が集中しているが平坦面は形成されていない。

(13) みがき石 [第83図]

チャートや頁岩などの滑らかな礫面をそのままみがき面として利用したと考えられる。土器の表面をみがかうために利用されたことが想定される。表面全体が光沢をもつ滑らかなみがき面で覆われている。

S131・133・134は扁平な球状を呈する。S148の表裏には並行する扁平面があり、碁石状を呈している。

(14) 砥石 [第83図]

S058とS344は砥石とした。両者が有する砥面は非常に滑らかで平滑である。扁平で砥ぎによると考えられる線状痕が多方向にみられる。

(15) 石皿 [第83～85図]

扁平で広い磨面を持ち、手に持って使うのが困難と思われる大きさの石器を石皿とした。輝石安山岩と砂岩の扁平礫が選択されている。

S068には皿部の緑的な部分が見られるが、他には意図的な整形は認められない。S060の表面はほぼ全面が磨面となるが、ところどころに楔が当たったような線状の傷の集中部が認められる。S139は熱を受けた影響で破砕したと思われる。

(16) 軽石製品 [第86・87図]

軽石の一部に機能部と考えられる球状や溝状の凹部を有する石器である。S047・069・072・080・100は球状の凹部が認められる。凹部が加工により整形されたのか、使用の結果形成されたのかははっきりしない。

S070・079・099は溝状あるいは傷のような凹部を有している。溝状の凹部が加工により整形されたのか、使用の結果形成されたのかは不明である。

(17) 凹石 [第88図]

S092は表面中央に敲打による大きな凹部が形成されている。S083は表裏及び左右側縁に複数の凹部が縦列している。

3. 玉類 [第88図]

玉類は、すべて管玉であり、石製3点、土製2点の計5点である。石製のうち1点は緑色凝灰岩の玉類未製品で、II 102グリッドで出土した。長さ41mm、幅18.5mm、厚さ12mm、重量12.99g。玉1はSB01より出土した。緑色凝灰岩製、長さ7mm、幅5mm、厚さ3mm、重量0.15g。玉2はSB07で出土した。頁岩製、長さ16mm、幅・厚さ3mm、重量0.12g。玉3・4は土製、SB07・08の床下で出土した。玉3は、長さ17mm、幅・厚さ3mm、重量0.15g。玉4は、長さ19.4mm、幅・厚さ2.7mm、重量0.13g。

4. 人骨・動物骨

森平遺跡の人骨と動物骨はすべて遺構から出土した。鑑定は、京都大学名誉教授茂原信生氏、総合研究大学院大学准教授本郷一美氏、獨協医科大学技術員櫻井秀雄氏にさせていただき、次の所見を得た。

(1) 人骨 [第50図]

弥生時代中期栗林2式の竪穴住居跡であるSB10の床面に伏せられてい瓶459(有孔鉢)の内部から歯が出土した。歯の状態は、象牙質は失われていて、歯冠だけが残っていた。歯冠の舌側面では近心、遠心の辺縁隆線がよく発達していて、唇側面はくぼんでいる。典型的なシャベル型切歯である。また、この歯は唇側面もややくぼんでおり、内側も外側もくぼんでいるダブルシャベル型の切歯である(写真1)。上顎中切歯近遠心径は9.0mmで、現代日本人の男性の平均値8.67mmや女性の平均値8.55mm(権田1959)よりやや大きく、縄文時代人の男性の平均値8.51mm(MaTSumura.1989)よりかなり大きい。渡来系弥生時代人や現代日本人にみられる特徴であり、シノドント型の切歯である。咬耗は切縁に軽度のみられるが、さほど高齢ではなからう。



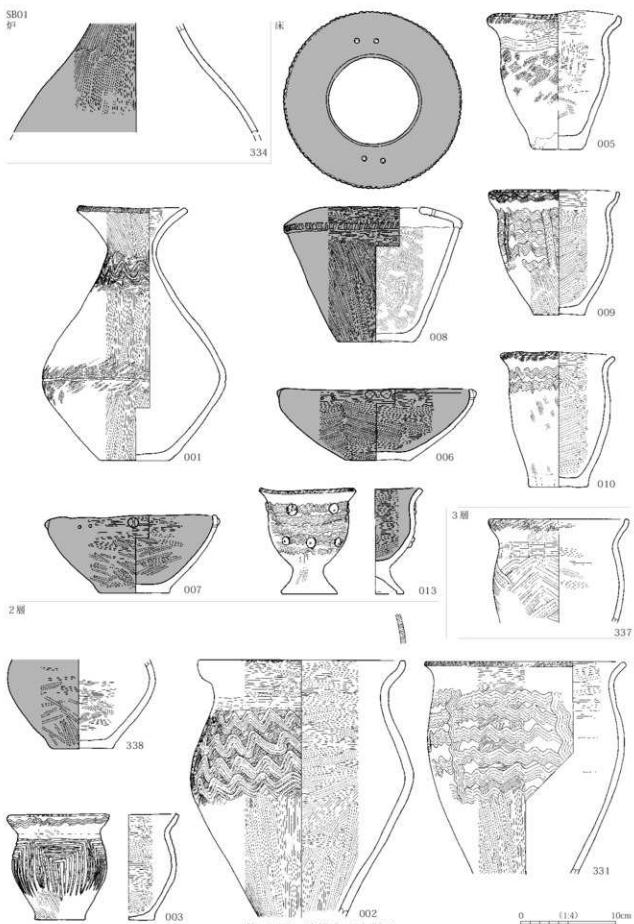
第50図 SB10出土人骨下顎歯写真

(2) 動物骨 [第12表]

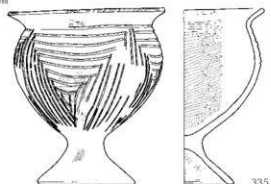
森平遺跡から出土した動物骨は哺乳類で、第12表のとおりである。弥生中期の住居跡出土の骨は焼かれたものや破片を含め、44サンプルが同定されている。種名が同定されたものは偶蹄目シカ科ニホンジカが多く、偶蹄目イノシシ科イノシシが少数、奇蹄目ウマ科ウマが1点出土した。弥生時代中期の竪穴住居跡10軒からは主にニホンジカが出土し、SB03、SB07とSB09からはイノシシが出土した。また古代の溝SD01からウマの上顎右第一切歯が出土している。

5. 金属器 [PL34第13表]

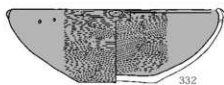
本遺跡から出土した金属器は第13表のとおりである。遺構外出土資料については、いずれも出土地不明もしくは検出面などである。またSB21の南西側は遺跡の範囲外であり、混入の可能性も全くないとは言いが切れない。よってSD01溝から出土したM3の寛永通宝以外は、時期を特定することは難しい。



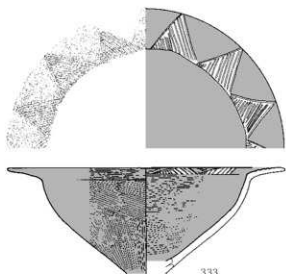
SB01
2層



335

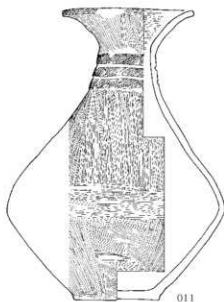


332



333

1層



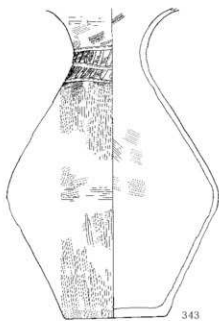
011

埋土

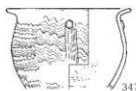


341

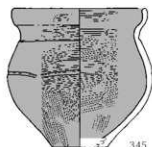
SB02
1層



343



347

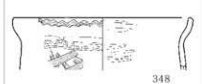


345

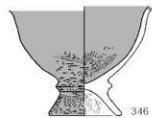


344

埋土



348

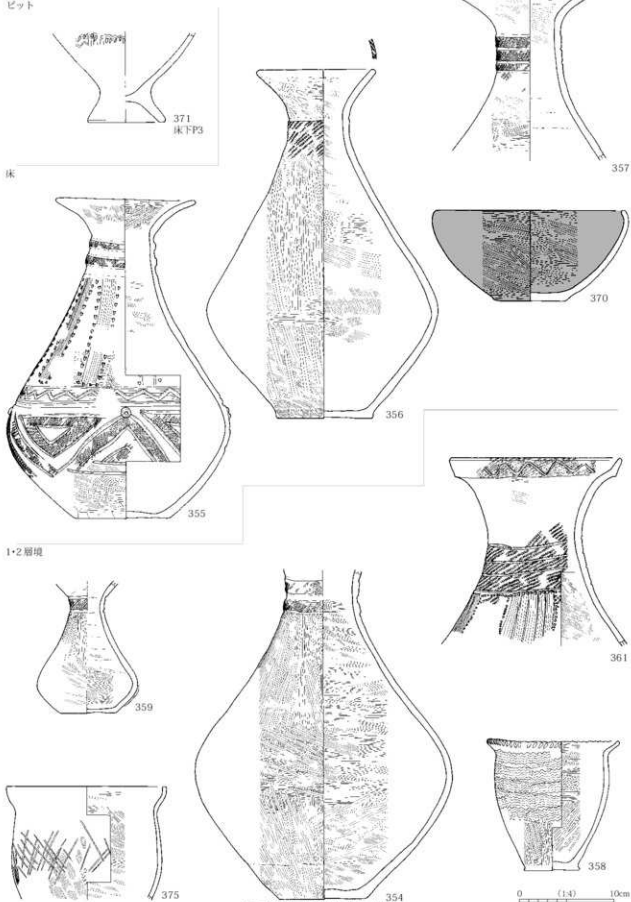


346

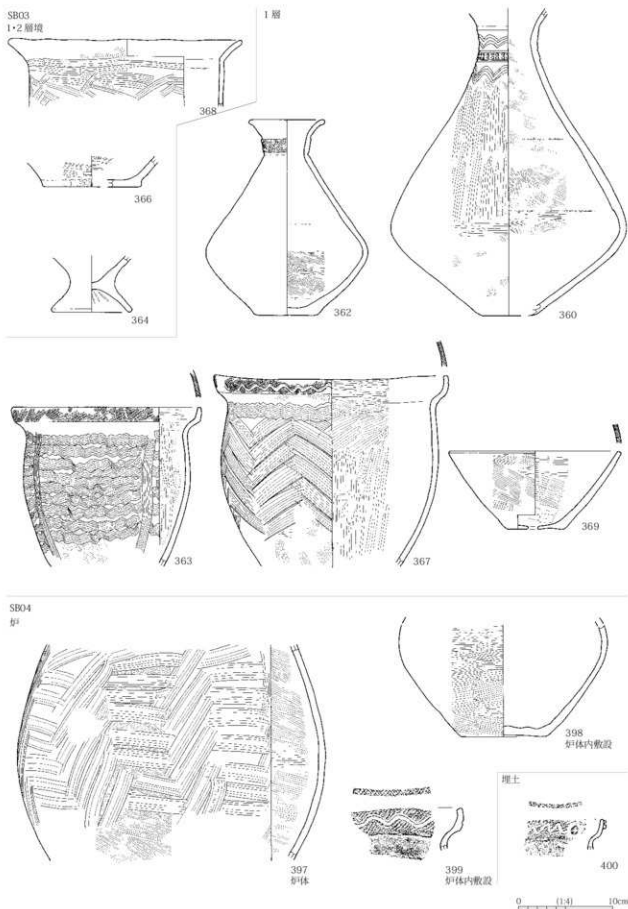
第52図 遺構出土土器2

0 (1:4) 10cm

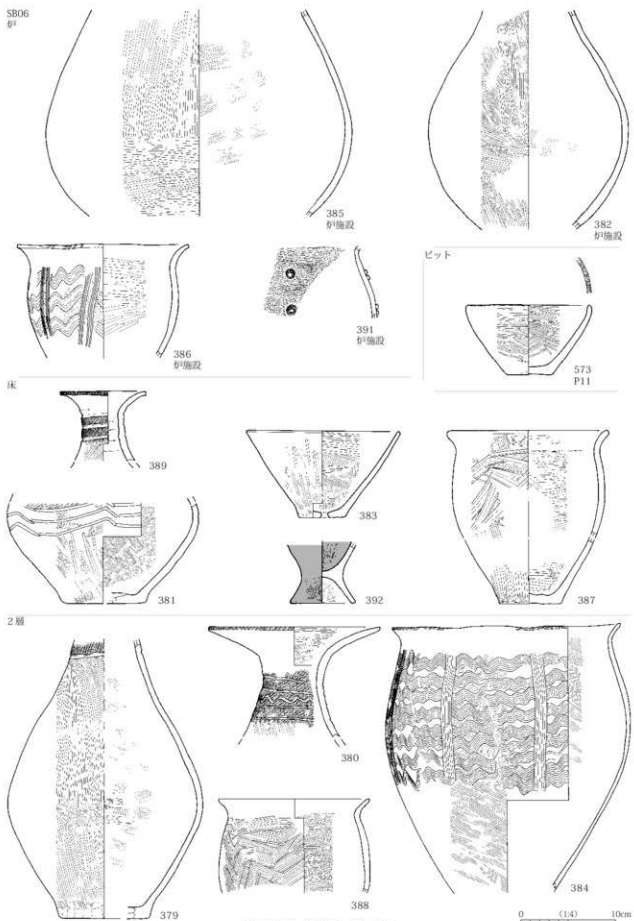
SB03
ビット



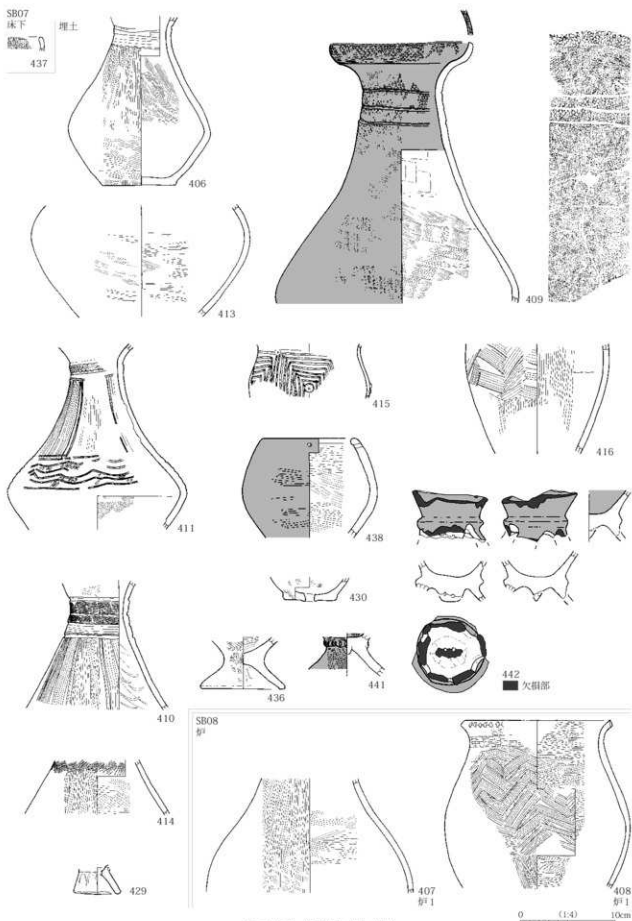
第53図 遺構出土土器3



第54図 遺構出土土器4



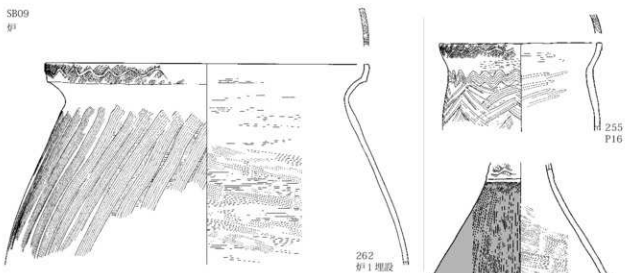
第55図 遺構出土土器5



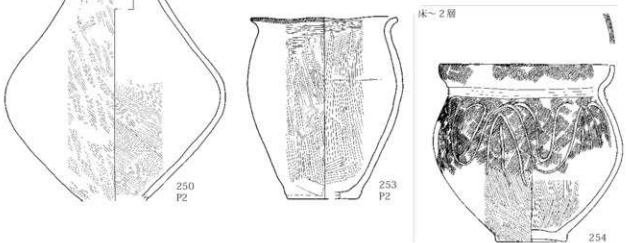
第56図 遺構出土土器6

第4章 森平遺跡

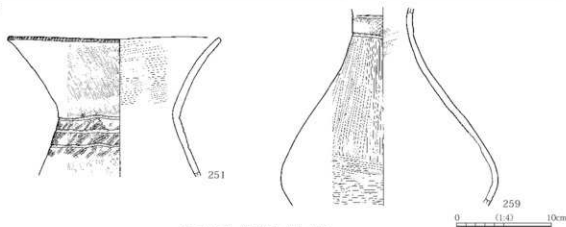
SB09
砂



ピット

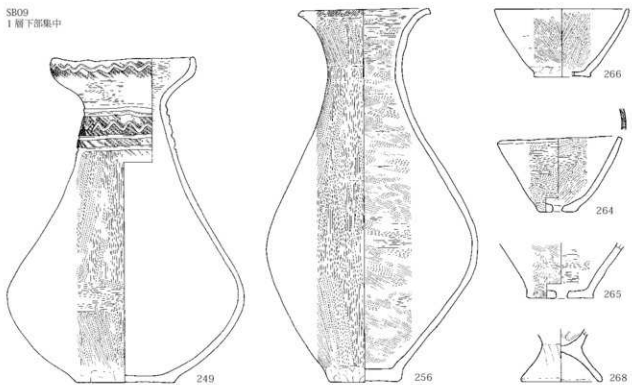


1層下部集中

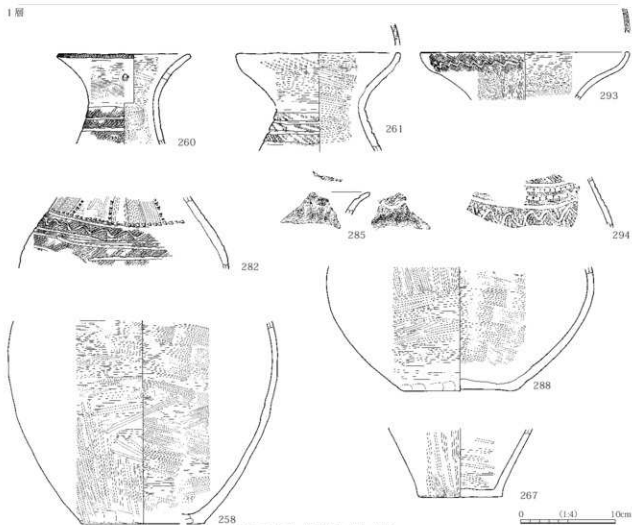


第57図 遺構出土土器7

SB09
1層下部集中



1層

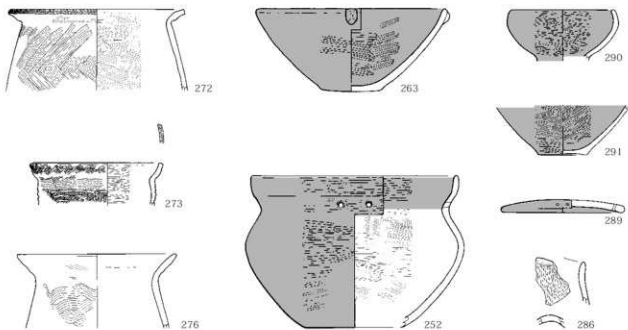


第58図 遺構出土土器8

第4章 森平遺跡

SB09

1層

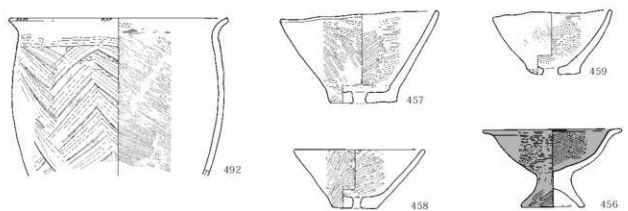


SB10

II



埋土最下部



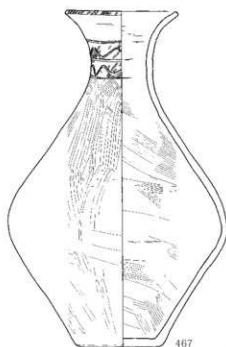
0 (1:4) 10cm

第59図 遺構出土土器9

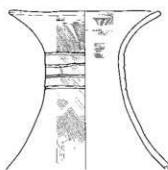
SB11
埋土



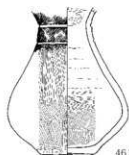
460



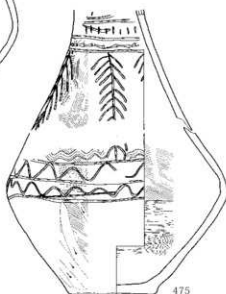
467



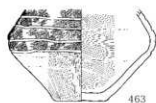
486



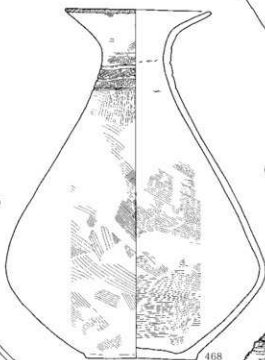
461



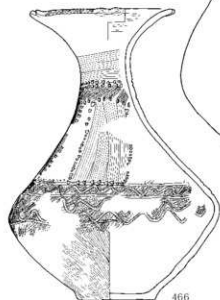
475



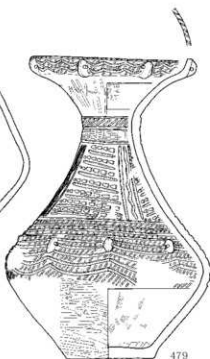
463



468



466

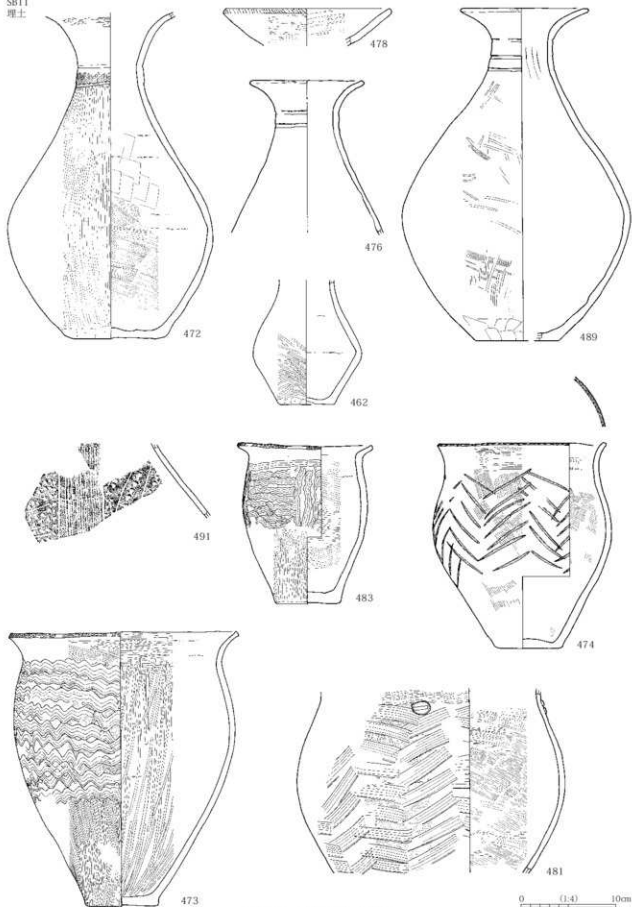


479

0 (1:4) 10cm

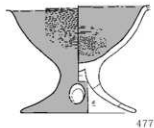
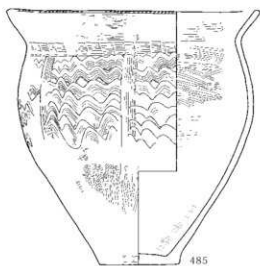
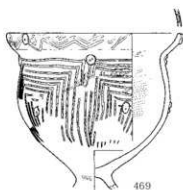
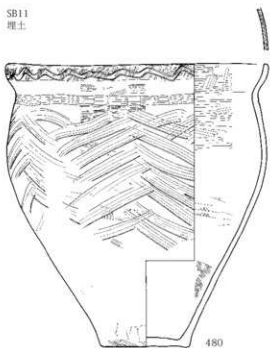
第60図 遺構出土土器10

SB11
埋土



第61図 遺構出土土器 11

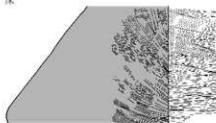
SB11
埋土



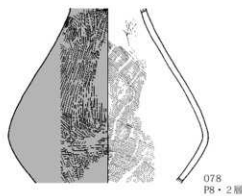
SB13
ビット



床



埋土



0 (1:4) 10cm

第62図 遺構出土土器12

第4章 森平遺跡

SB13

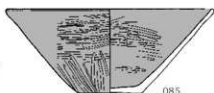
床



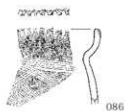
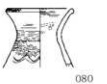
3層



トレンチ

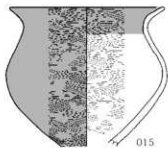
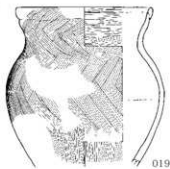
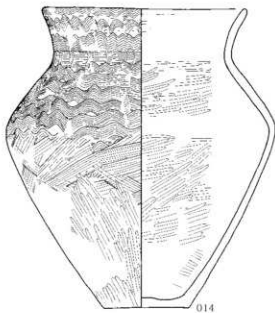


横出面



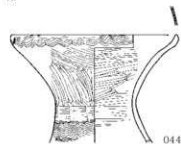
SB14

3層



SB15

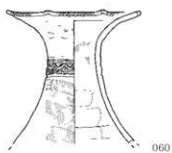
床



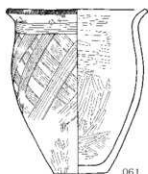
0 (1:4) 10cm

第63図 遺構出土土器13

SB16
床



060

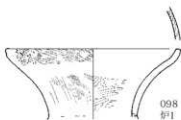


061



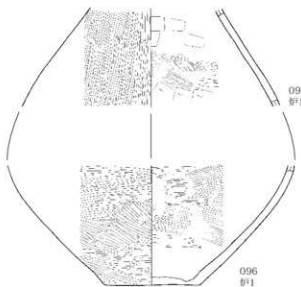
062

SB17
甗



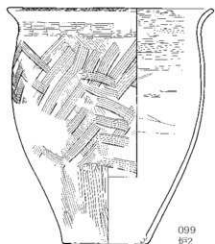
098

甗1



096

甗1



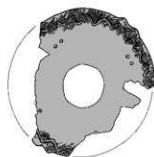
099

甗2

097

甗1

床



110



109



296

2層



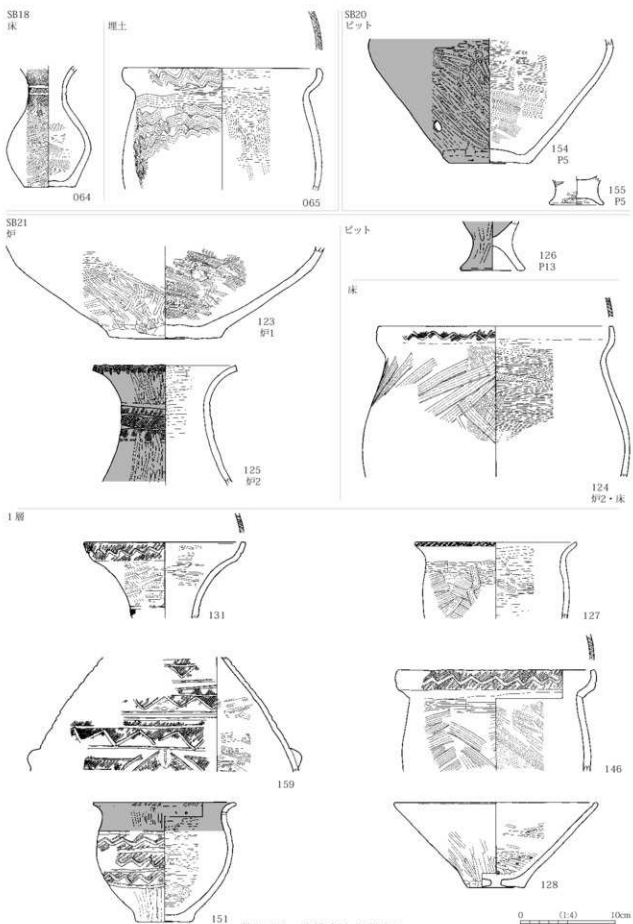
103



101

0 (1:4) 10cm

第64図 遺構出土土器 14

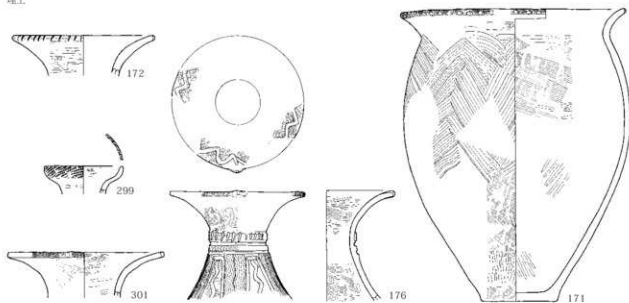


第65図 遺構出土土器15

SB21
1層



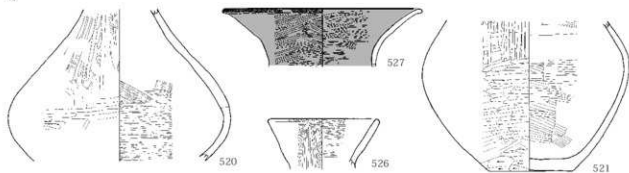
SB23
埋土



ST04
ピット



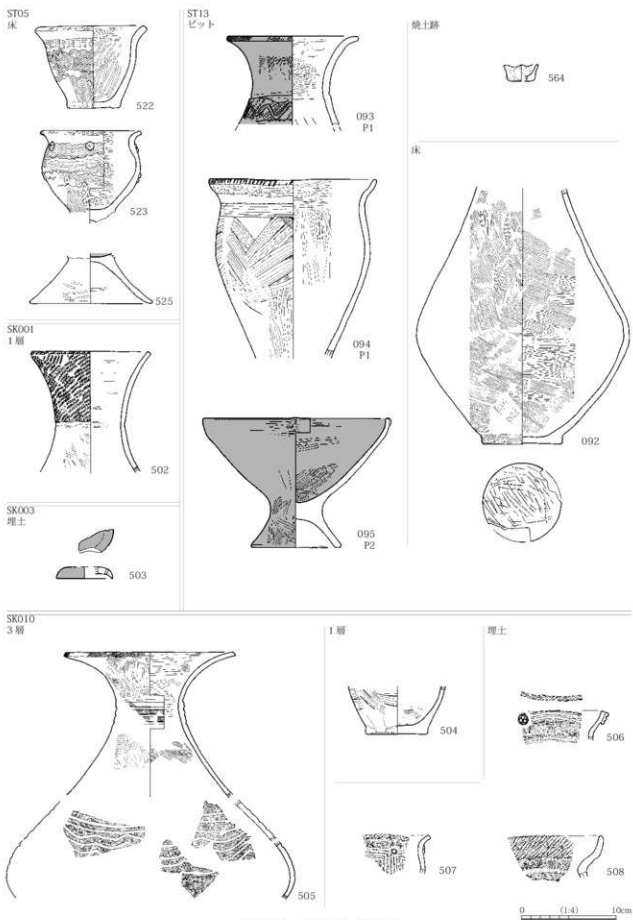
ST05
床



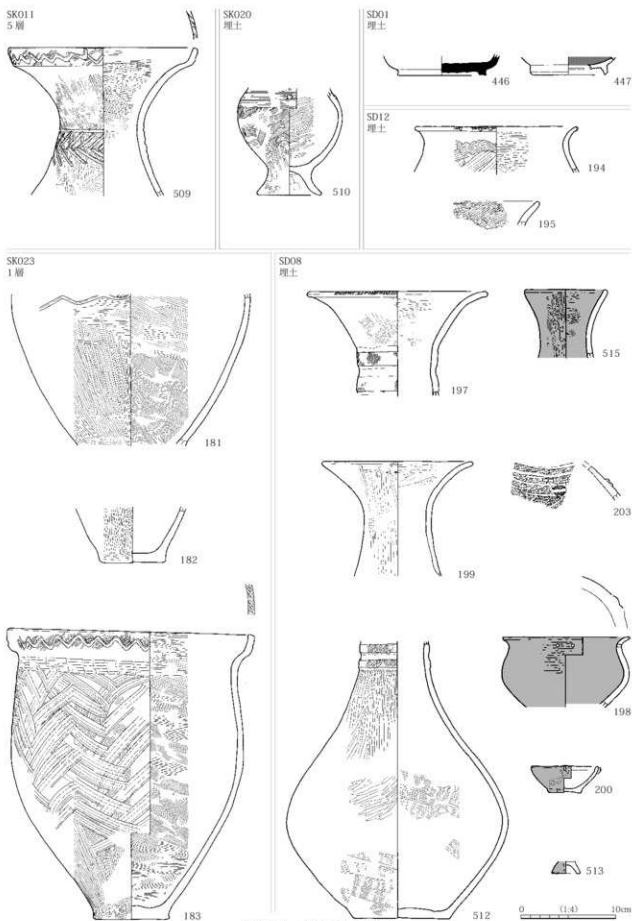
第66図 遺構出土土器16

0 (1:4) 10cm

第4章 森平遺跡

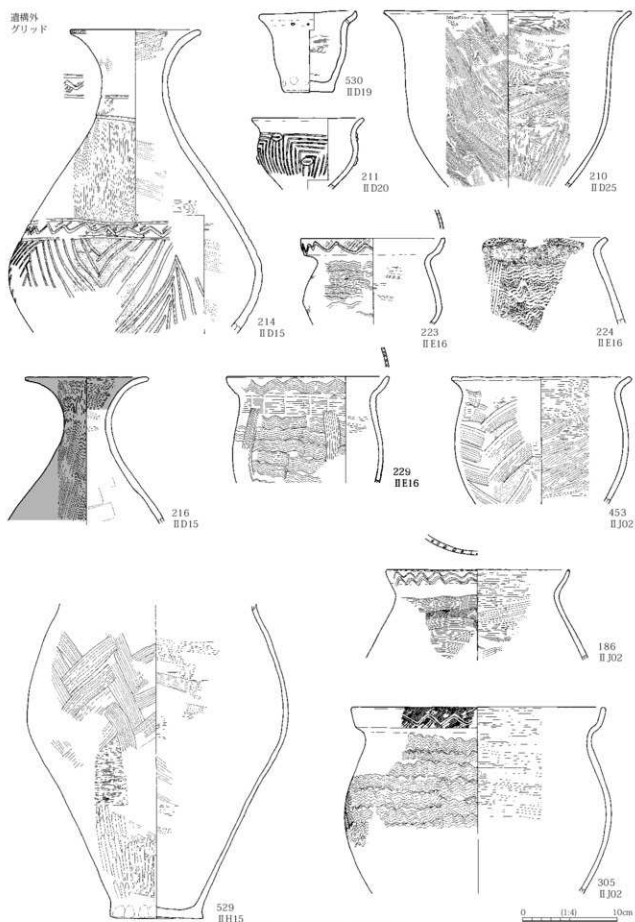


第 67 図 遺構出土土器 17



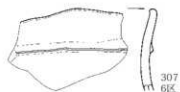
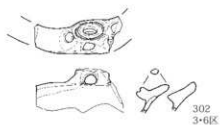
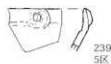
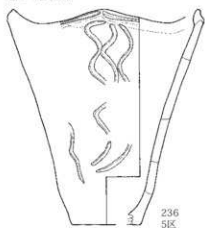
第68図 遺構出土土器18

遺構外
グリッド

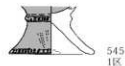
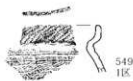
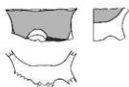


第69図 遺構外出土土器1

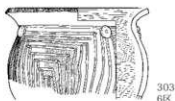
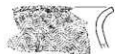
遺構外
地区 縄文土器



遺構外
地区 弥生土器



■ 欠損部

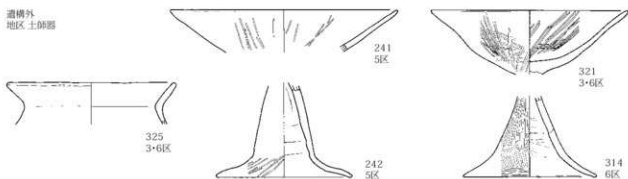


0 (1:4) 10cm

第70図 遺構外出土土器2

第4章 森平遺跡

遺構外
地区土師器

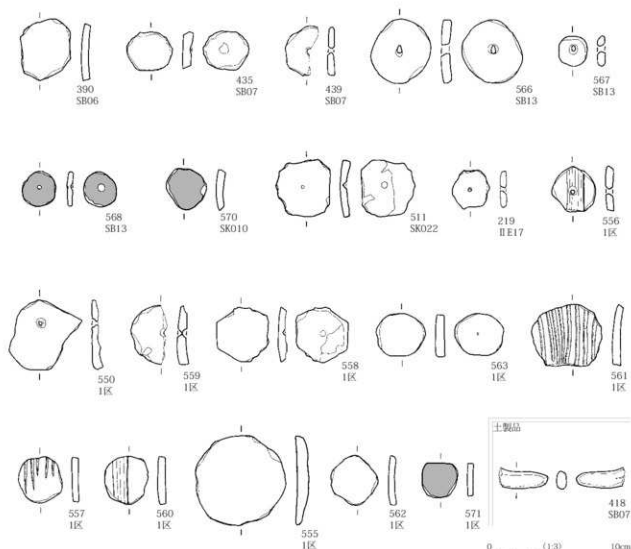


遺構外
地区 ミニチュア土器

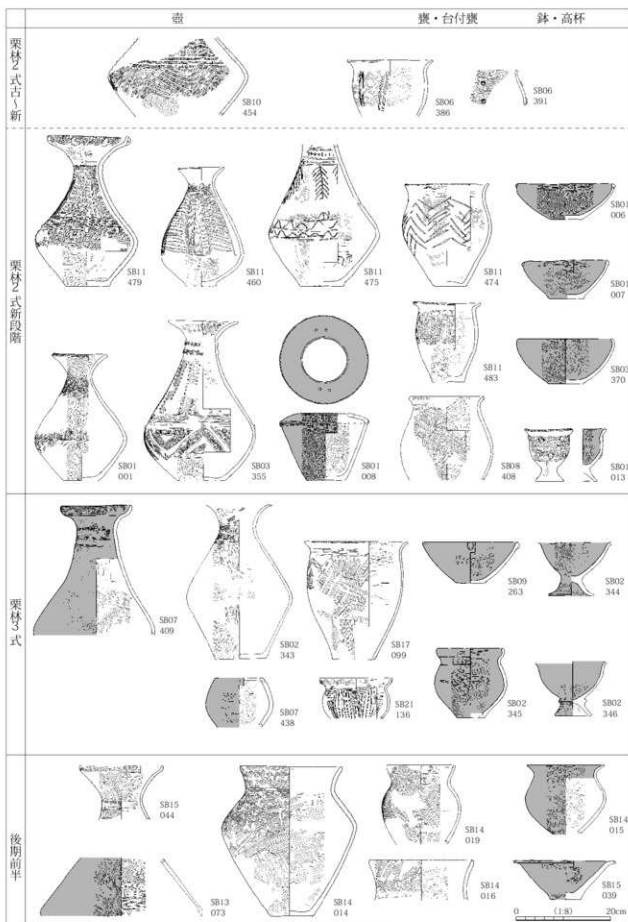


0 (1:4) 10cm

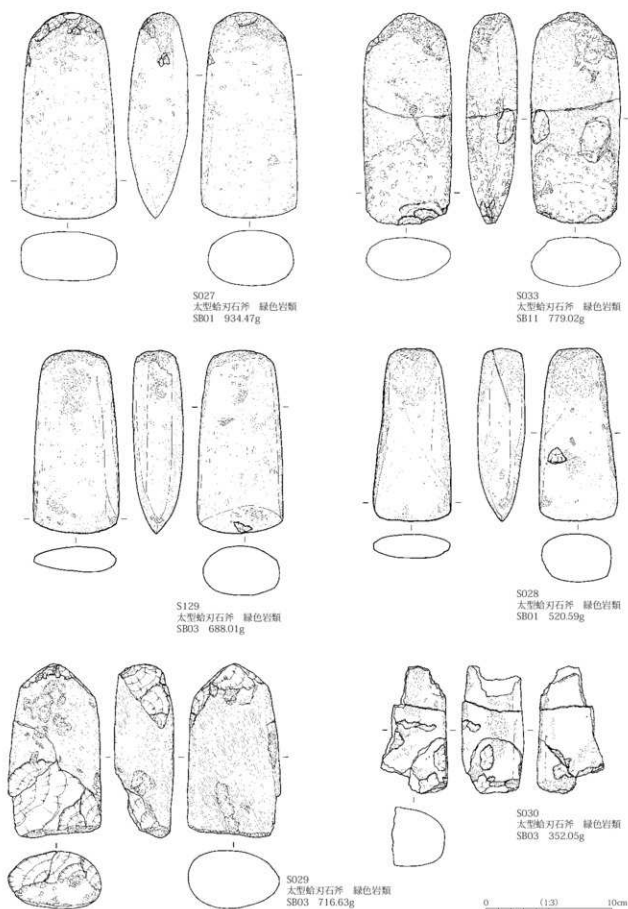
土器片加工円板



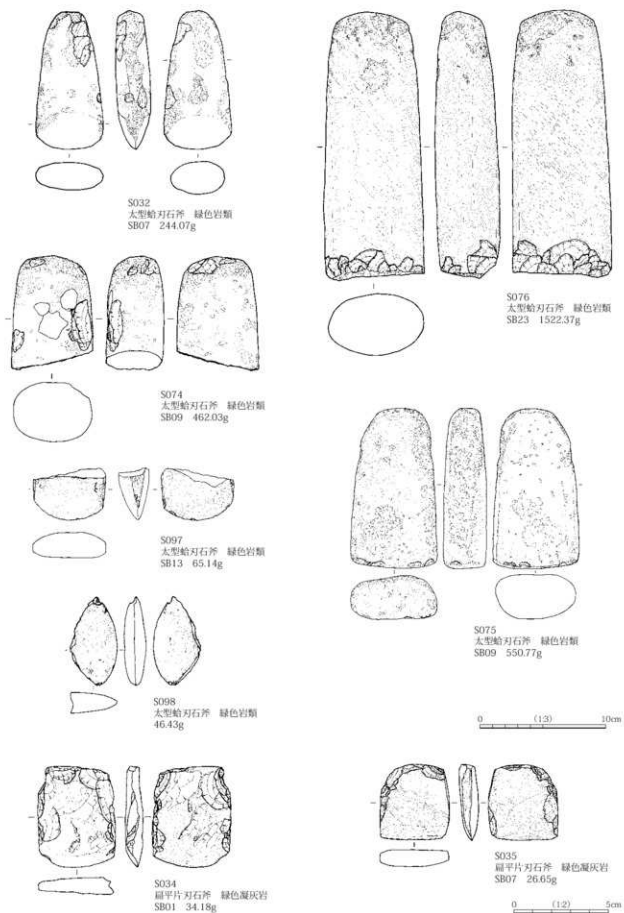
第71図 遺構外出土土器 3・土器片加工円板・土製品



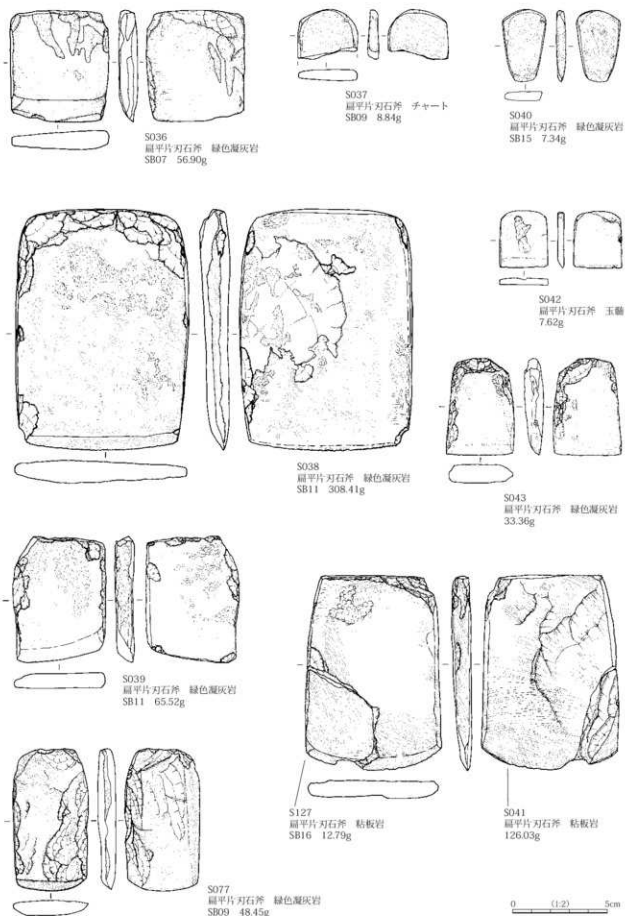
第72図 土器変遷図



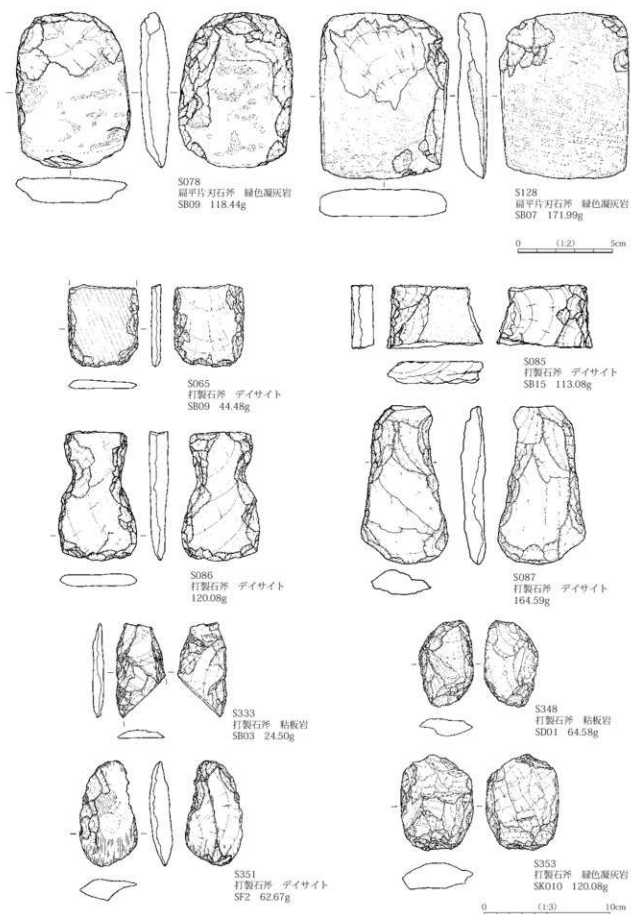
第73図 弥生時代石器実測図1(大型蛤刃石斧1)



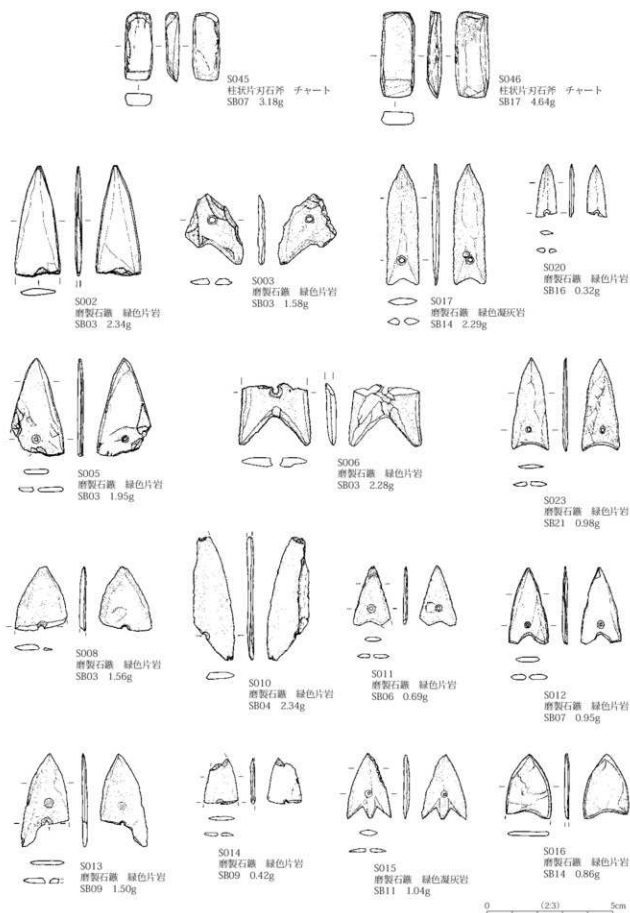
第74圖 弥生時代石器実測圖2（大型蛤刃石斧2・扁平片刃石斧1）



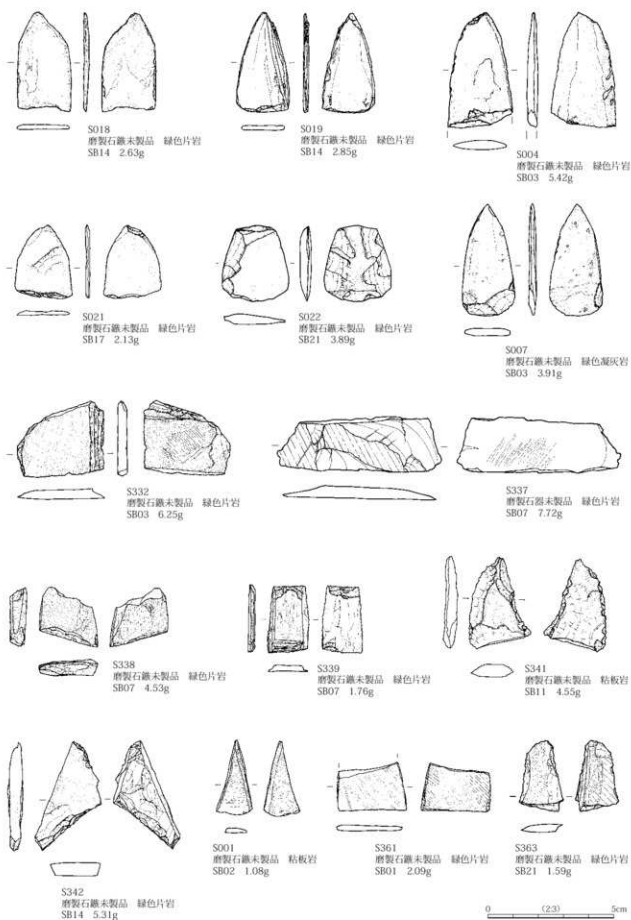
第75圖 弥生時代石器実測圖3(扁平片刃石斧2)



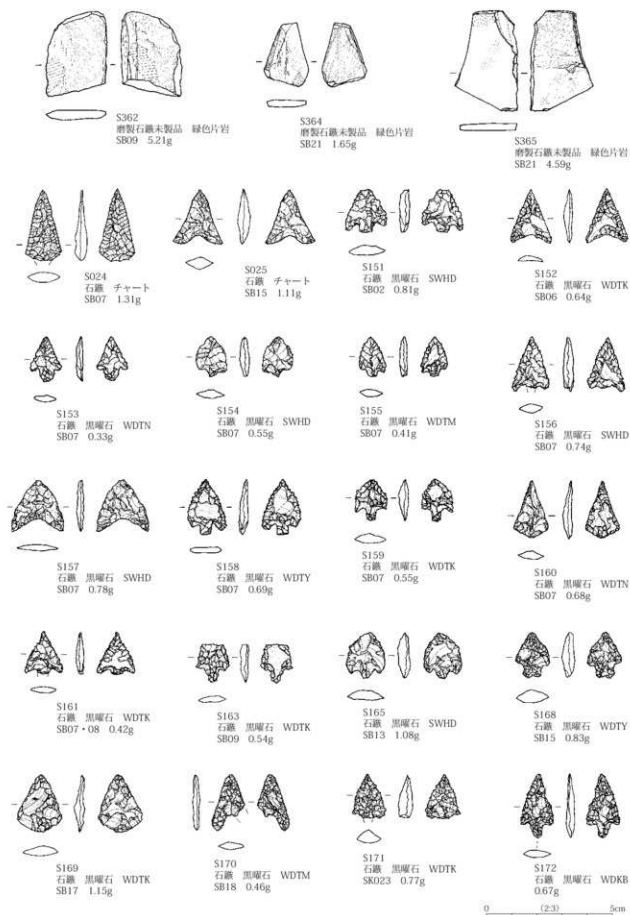
第76図 弥生時代石器実測図4 (扁平片刃石斧3・打製石斧)



第77図 弥生時代石器実測図5 (柱状片刃石斧・磨製石鏃)



第78圖 弥生時代石器実測図6（磨製石鏃未製品1）

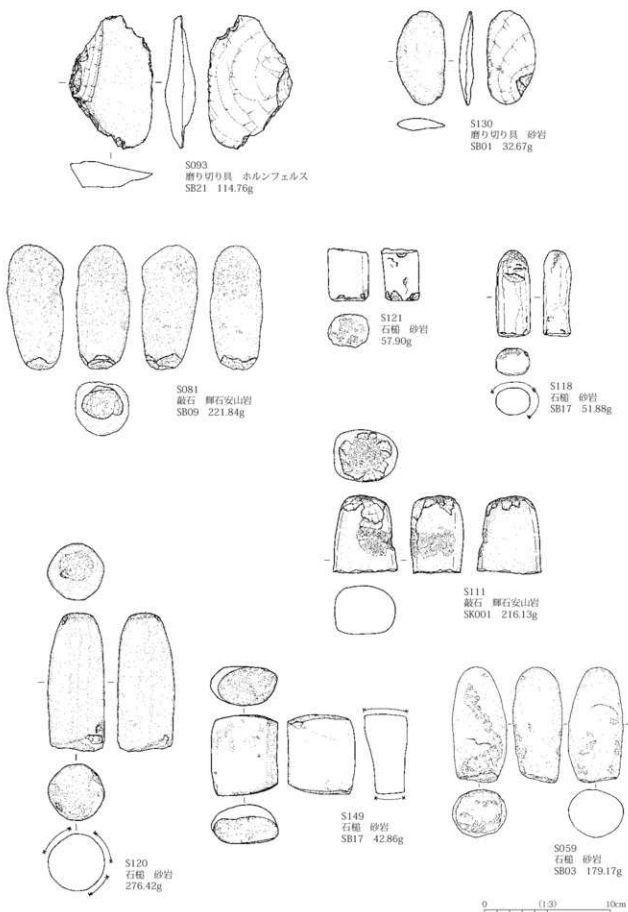


第79図 弥生時代石器実測図7(磨製石鏃未製品2・石鏃1)

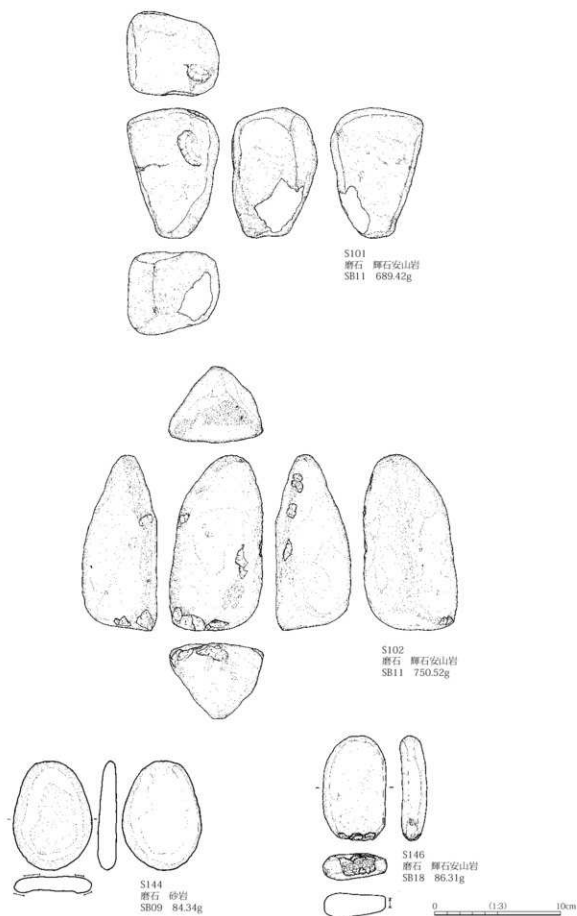


0 (2.3) 5cm

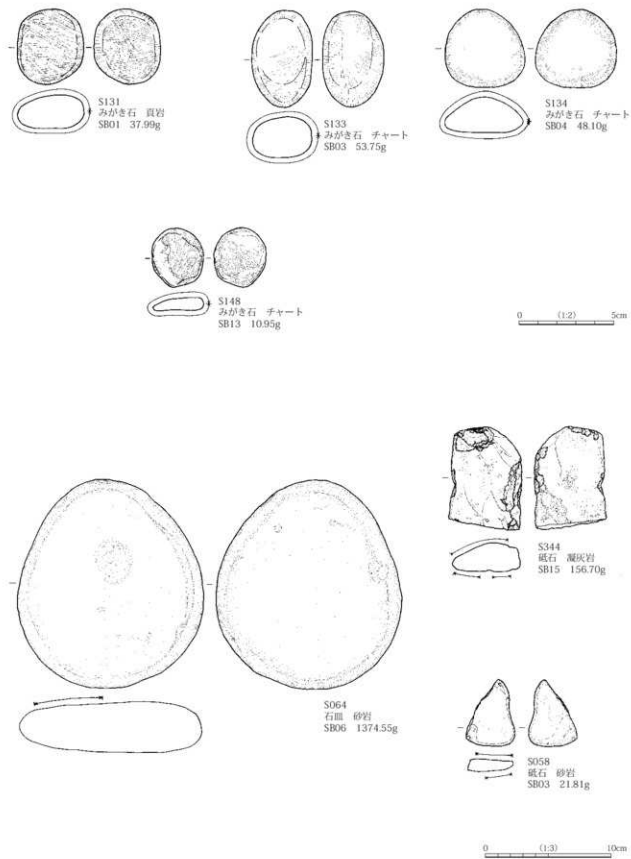
第80図 弥生時代石器実測図8（石鏃2・石鏃・楔形石器・石核）



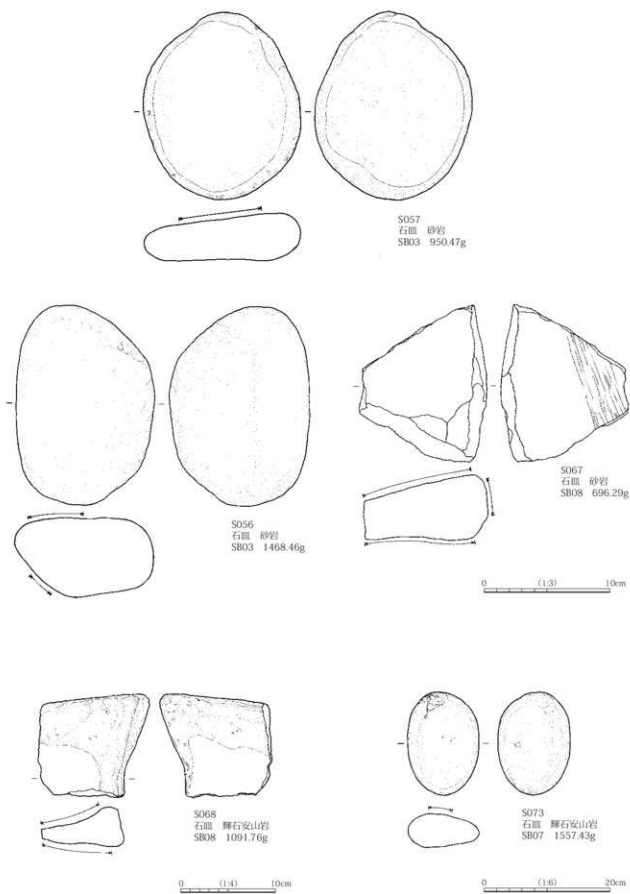
第81図 弥生時代石器実測図9 (磨り) 切り具・敲石・石槌



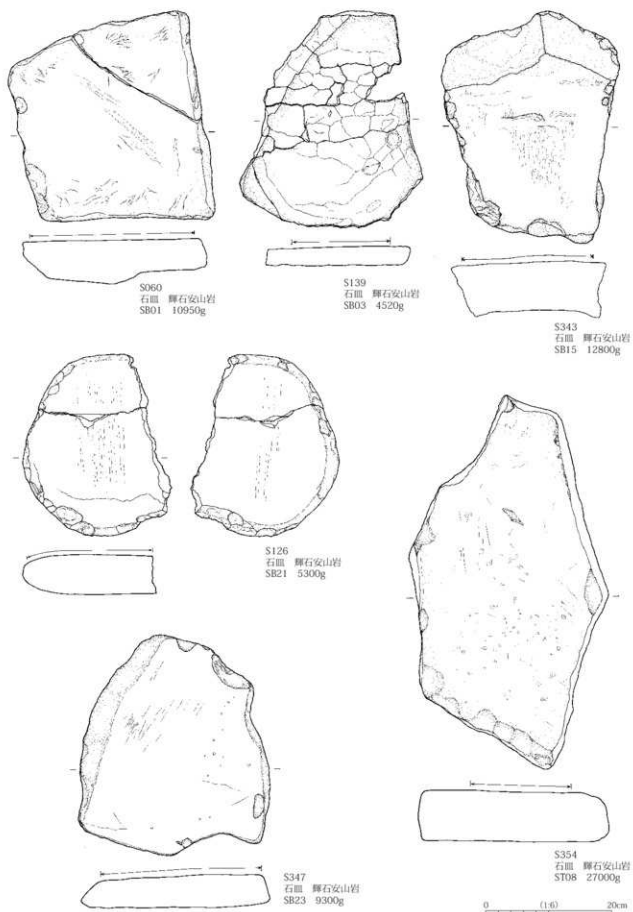
第82図 弥生時代石器実測図10(磨石)



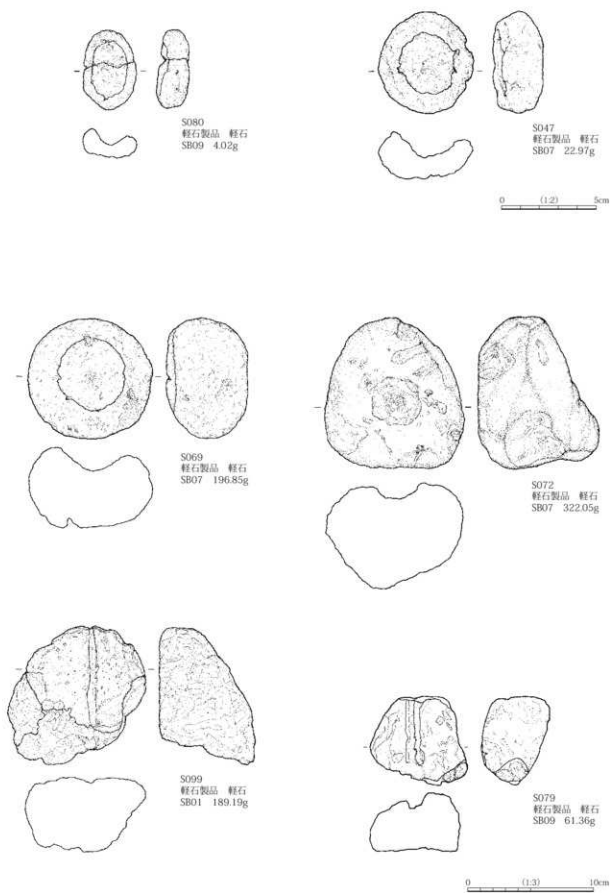
第 83 図 弥生時代石器実測図 11 (みがき石・砥石・石皿 1)



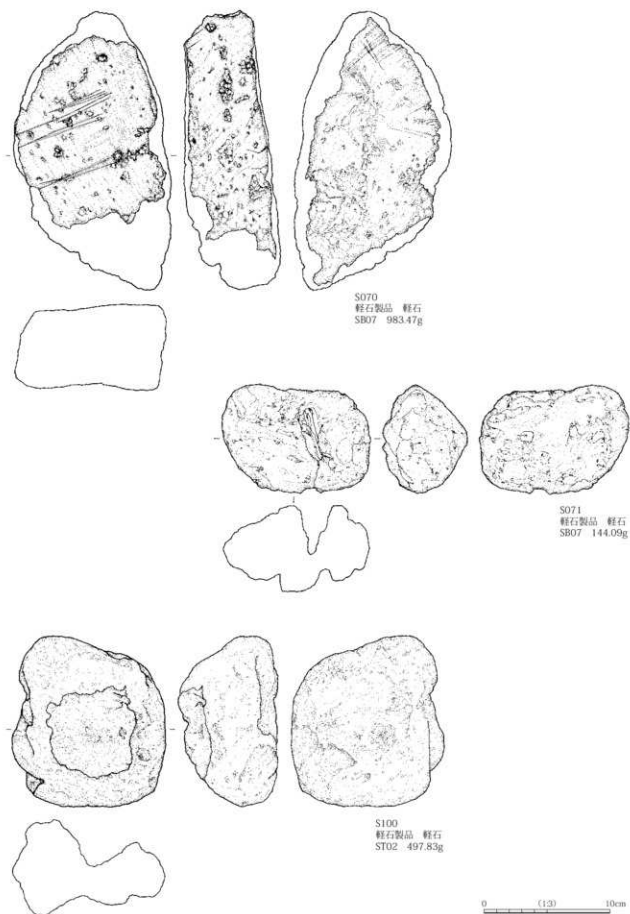
第84图 弥生時代石器実測图12 (石皿2)



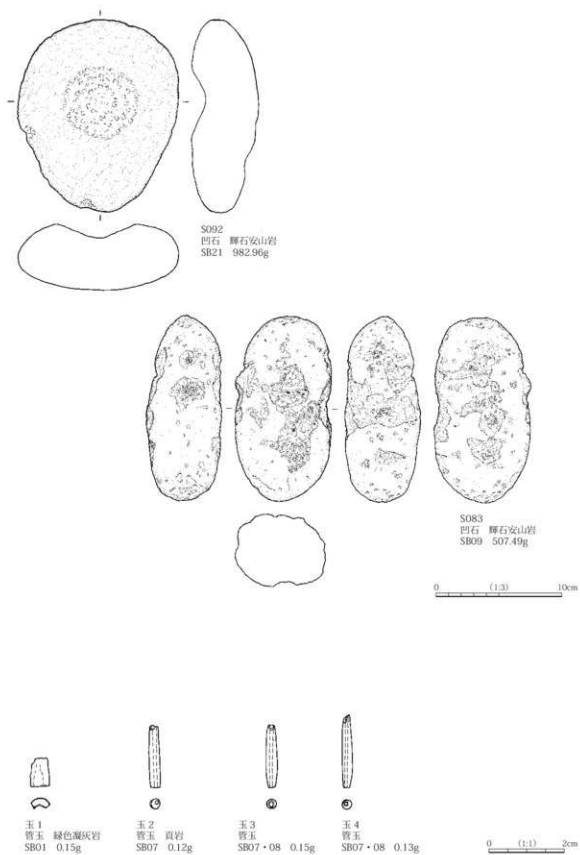
第85图 弥生時代石器実測图13(石皿3)



第86図 弥生時代石器実測図14 (軽石製品1)



第87図 弥生時代石器実測図15 (軽石製品2)



第88圖 弥生時代石器実測図16（凹石）・玉類実測図

第7表 土器観察表

土器の種類		土器の形状		土器の重量		土器の観察		土器の用途		土器の出土状況	
種別	数量	形状	重量	出土位置	出土位置	出土位置	出土位置	出土位置	出土位置	出土位置	出土位置
31	11	001 S200	715	112	7.2	285	1350(100)707	1350(100)707	1350(100)707	1350(100)707	1350(100)707
31	12	002 S200	715	239	-	285	1350(100)707	1350(100)707	1350(100)707	1350(100)707	1350(100)707
31	17	003 S200	726	302	5.4	119	272(100)66	272(100)66	272(100)66	272(100)66	272(100)66
31	11	004 S200	729	332	5.6	142	485(100)766	485(100)766	485(100)766	485(100)766	485(100)766
31	11	005 S200	730	396	6.7	74	402(100)84	402(100)84	402(100)84	402(100)84	402(100)84
31	11	006 S200	731	219	2.2	82	423(100)84	423(100)84	423(100)84	423(100)84	423(100)84
31	11	007 S200	734	302	7.9	141	271(100)49	271(100)49	271(100)49	271(100)49	271(100)49
31	11	008 S200	735	122	3.4	120	401(100)26	401(100)26	401(100)26	401(100)26	401(100)26
31	11	009 S200	737	223	6.4	141	448(100)24	448(100)24	448(100)24	448(100)24	448(100)24
32	12	011 S200	743	326	8.6	204	3420(100)274	3420(100)274	3420(100)274	3420(100)274	3420(100)274
32	11	010 S200	747	97	3.6	168	211(100)18	211(100)18	211(100)18	211(100)18	211(100)18
32	12	012 S200	747	239	-	223	429(100)66	429(100)66	429(100)66	429(100)66	429(100)66
32	12	013 S200	747	236	8.6	77	382(100)84	382(100)84	382(100)84	382(100)84	382(100)84
32	12	014 S200	747	290	-	112	429(100)66	429(100)66	429(100)66	429(100)66	429(100)66
32	12	015 S200	747	163	9.6	183	272(100)84	272(100)84	272(100)84	272(100)84	272(100)84

第4章 森平遺跡

番号	地上遺構位置		土器・瓦器位置			土器・瓦器種類		土器・瓦器数量		調査方法	調査者	調査年次	調査内容
	種別	形状	時期	種類	数量	所在地	数量	所在地					
56	141	S307	562	563	564	565	566	567	568	1199	1199	1199	調査対象外。遺構位置不明
56	15	S307	569	570	571	572	573	574	575	341	341	341	調査対象外。遺構位置不明
56	416	S307	587	588	589	590	591	592	593	1346	1346	1346	調査対象外。遺構位置不明
56	429	S307	597	598	599	600	601	602	603	1673	1673	1673	調査対象外。遺構位置不明
56	430	S307	607	608	609	610	611	612	613	3812	3812	3812	調査対象外。遺構位置不明
56	436	S307	617	618	619	620	621	622	623	1572	1572	1572	調査対象外。遺構位置不明
56	437	S307	627	628	629	630	631	632	633	2273	2273	2273	調査対象外。遺構位置不明
56	438	S307	637	638	639	640	641	642	643	1647	1647	1647	調査対象外。遺構位置不明
56	161	S307	647	648	649	650	651	652	653	1316	1316	1316	調査対象外。遺構位置不明
56	162	S307	657	658	659	660	661	662	663	1473	1473	1473	調査対象外。遺構位置不明
56	467	S309	717	718	719	720	721	722	723	2026	2026	2026	調査対象外。遺構位置不明
56	168	S309	727	728	729	730	731	732	733	1347	1347	1347	調査対象外。遺構位置不明
56	172	S309	737	738	739	740	741	742	743	233	233	233	調査対象外。遺構位置不明
57	16	S310	747	748	749	750	751	752	753	1073	1073	1073	調査対象外。遺構位置不明
57	201	S310	757	758	759	760	761	762	763	412	412	412	調査対象外。遺構位置不明

第4章 森平遺跡

番号	出土品目録		出土品目録		出土品目録		出土品目録		調査・分析	備考	取土
	種別・ID	品名	材質	形状・寸法	重量	位置	出土状況	説明			
58	206	S209	銅	板	15.3	2862.0	128.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	272	S209	銅	8.4	91.0	13.4	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	273	S209	銅	板	4.2	27.0	27.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	276	S209	銅	板	17.7	69.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
58	282	S209	銅	板	7.3	159.0	12.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
58	286	S209	銅	板	12.3	14.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	288	S209	銅	14.3	19.0	282.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
58	288	S209	銅	板	13.0	103.0	107.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	289	S209	銅	14.6	20.0	284.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	290	S209	銅	15.4	30.0	108.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	291	S209	銅	板	15.2	96.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
58	292	S209	銅	板	13.0	126.0	107.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
58	294	S209	銅	板	15.4	15.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	644	S210	銅	13.5	307.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	450	S210	銅	6.0	12.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	456	S210	銅	8.4	387.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	457	S210	銅	7.0	9.0	438.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	458	S210	銅	4.6	6.0	25.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚
59	18	459	S210	銅	5.6	20.0	2703.0	2703.0	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚	銅板(小銅板) 1枚

計畫序號	計畫名稱			計畫經費		計畫執行時間		計畫地點		主辦/協辦單位	計畫目標	預期效益	預期產出	預期影響	預期成果	預期經費
	類別	代號	名稱	單位	金額(千元)	起/迄	地點	金額(千元)								
60	01	602	S010	94.7.26.~94.8.13	248	94.8.13	臺南市	248	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
60	19	600	S010	94.7.24.~94.8.22	460	94.8.22	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
60	01	600	S010	94.8.13	460	94.8.13	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
61	01	602	S010	94.7.13.~94.7.13	270	94.7.13	臺南市	270	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
60	01	600	S010	94.8.20.~94.8.20	178	94.8.20	臺南市	178	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
62	21	600	S010	94.7.23.~94.7.23	460	94.7.23	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
62	20	600	S010	94.7.24.~94.7.24	460	94.7.24	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
60	19	600	S010	94.7.27.~94.8.30	460	94.8.30	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
60	20	600	S010	94.7.22.~94.7.22	460	94.7.22	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
60	19	600	S010	94.7.24.~94.8.22	460	94.8.22	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
62	21	600	S010	94.7.19.~94.8.22	460	94.8.22	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1
62	01	600	S010	94.7.17.~94.8.22	460	94.8.22	臺南市	460	1	臺南市	1	1	1	1	1	1

第4章 養牛遺種

番号	品名	生産地域	品種	時期	飼料	育成率	上記項目の数値	土壌改良履歴	収量	飼料消費	飼料効率	備考	取士
種別	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛
種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別	種別
66-23	136	5820	黒毛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛
66-24	136	5820	黒毛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛
66-25	136	5820	黒毛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛
66-26	136	5820	黒毛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛
66-27	136	5820	黒毛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛
66-28	136	5820	黒毛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛	乳牛

番号	地上建物の概要		土地取得経緯		土地取得額		取得面積		用途		権利・支障		備考	取手		
	種別	用途	取得年月	権利	取得額(千円)	取得面積(㎡)	取得権利	取得面積(㎡)	種別	内容	取得額(千円)	取得権利				
68	20	194	1912	建土	1820	147	2400	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
68	-	195	1912	7	建土	3650	253	1512	2015	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	-	196	1912	1912	建土	3820	93	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	20	210	1912	1912	建土	2560	184	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	20	211	1912	1912	建土	1130	73	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	20	214	1912	1912	建土	1380	109	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	-	216	1912	1912	建土	1280	153	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	20	223	1912	1912	建土	1500	190	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	-	224	1912	1912	建土	-	91	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	20	229	1912	1912	建土	1660	111	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	20	235	1912	1912	建土	2820	195	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	-	237	1912	1912	建土	1860	133	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
69	-	239	1912	1912	建土	102	39	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
70	20	238	1912	1912	建土	1910	72	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912
70	20	239	1912	1912	建土	-	145	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912	1912

第4章 養正遺跡

番号		地上遺跡位置		土壌調査位置		土壌調査結果		土壌調査値		検出物質		調査結果		備考	取土
標高 (m)	位置	時期	種類	面積 (㎡)	埋没 (%)	検出 (%)	埋没 (%)	埋没 (%)	埋没 (%)	検出 (%)	検出 (%)	調査結果	取土		
70-26	240 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	152	35	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	古瓦の方向に3個調査し、	古瓦、灰瓦
70-26	202 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	129	96	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-26	207 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	163	111	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-26	208 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	126	21	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	230 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	146	29	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	204 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	116	20	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	206 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	126	24	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-26	214 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	84	110	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	232 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	174	97	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	233 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	160	57	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	232 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	131	23	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	232 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	143	97	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	234 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	142	22	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	233 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	153	49	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦
70-27	234 m 区	古瓦 遺跡	縄文・土器	154	106	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	調査部の埋没中にあって、	古瓦、灰瓦

第10表 遺構別石材組成表

遺構	加 磁石	緑 色 石 類	緑 色 凝 灰 石	チ ェ ー ト	緑 色 花 崗 岩	粘 土 質 花 崗 岩	ア イ サ イ ト	頁 岩	凝 灰 石	キ ル ン ブ ル ス	ボ ツ ス 地 帯 の 地 層 の 地 石 類 の 出 産 地 の 出 産 地 石 類	石 灰	三 層	武 蔵 石	造 田 石 類	砂 岩	凝 灰 石	凝 灰 砂 岩	凝 灰 土 質 石	櫻 石 穿 山 岩	安 山 岩	合 計	
SD01	6	2	27	1	4	5		2								2	1			2		52	
SD02	2					7											1				1		11
SD03	5	3	4	5	17	21		1							6					1	1	64	
SD04	6			1	1																		8
SD06	13		1		1	4									1						1		21
SD07	36	1	3	3	8	10		1									5						63
SD07-08	20		1		3	4		2			1	1									1	1	39
SD08	3				1	3										1					1		9
SD09	9	2	2	1	6	36	71				1	1				2	2			3		126	
SD09-14											1												1
SD10						1																	1
SD10-11						1	2																3
SD11	3	1	3		2	10	19								1					3		42	
SD13	9	1	1	2		3	1	1															18
SD14	4		1		9	6									1								21
SD15	3		2	3	3	7	1		1		1				1					1	2	35	
SD16	6		1		1																		8
SD17	4			1	1	3									1	2							12
SD18	3				1																1		5
SD20	1					2																	4
SD21	18		2		5	11		1		1										2		40	
SD23	5	1				2															1		9
SD01	9					5																	14
SD02							1																1
SD06	1																						1
SD08								1							1						1		3
SP2							1																1
SK001																						1	1
SK005	1																						1
SK010	12		1			4	1																18
SK011	1																						1
SK023	1																						1
ST02																	1						1
ST08																						1	1
ST10	1																						1
ST13																						1	1
遺構外	65	1	16	2	1	38	22	13				1	1			6		1		2	1	164	
合計	247	12	59	19	64	176	117	22	1	1	4	3	1	1	1	28	10	1	1	23	6	792	

第4節 小結

1. 遺構の変遷

今回の調査で検出された主な遺構は、弥生時代の竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡6棟、土坑100基、溝跡1条である。弥生時代の遺構は、古墳時代の遺物も含まれる可能性のあるⅢ-1層遺物包含層の下、Ⅲ-2層上面からⅣ層上面で確認され、弥生時代中期～後期におさまる。ここでは弥生時代中期～後期に帰属する遺構を、出土した土器の段階区分に基づき検討し、森平遺跡における遺構の変遷を概観する。

栗林2式古～新段階の遺構 [第89図]

竪穴住居跡は3軒、SB06・10・23である。うち、SB10は平面形が方形基調のプランの中において楕円形であることが注意される。掘立柱建物跡は1棟、ST07がある。切り合い関係と主軸方向がSB06と一致していることからこの段階とした。

栗林2式新段階の遺構 [第90図]

竪穴住居跡は6軒、SB03・08・09・11・16・17である。うちSB03・09・11・17は炭化材が検出されており、焼却による廃絶が考えられる。SB09は数回の建替えと主軸方向の一致から、栗林2式古段階から営まれた可能性もあろう。掘立柱建物跡は、ピット内に土器が埋納されたST04、主軸方向が概ね一致するST01・02・06が考えられる。ST06とSB03は、切り合い関係ははっきりしないが、ほぼ同位置なことから建物構造を含めた建替えが行われた可能性もあろう。土坑は、SK010がある。

栗林3式段階の遺構 [第91図]

竪穴住居跡は8軒、SB01・02・04・07・18・20・21・ST13である。うちSB01・02・07は炭化材が検出されており、焼却による廃絶が考えられる。SB04は主に北へ拡張、SB07はSB08から大きく拡張したものとみられる。掘立柱建物跡ST10は、主軸方向と周辺の遺構配置からこの段階とした。

栗林2～3式段階の遺構 [第89～91図]

土坑は、SK001・011・024がある。溝跡は、SD08がある。環濠と考えられるSD08の埋没時期は、出土土器から弥生時代中期後半とみられる。

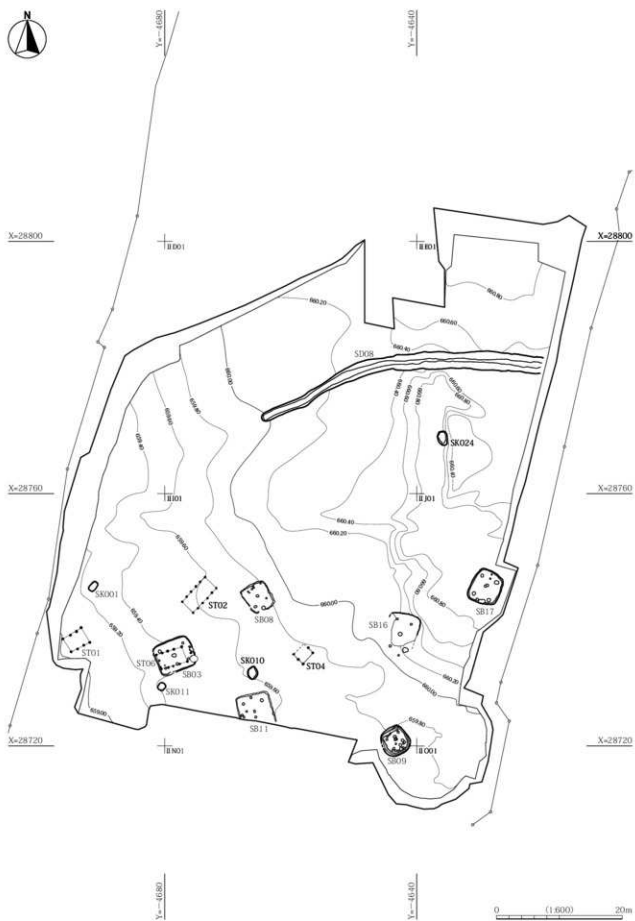
栗林3式～後期 [第92図]

竪穴住居跡は5軒、SB13・14・15・ST05・ST08である。土坑はSK020である。SK020はSB14と切り合うが確定できていないため、SB14のピット等付属施設の可能性もある。

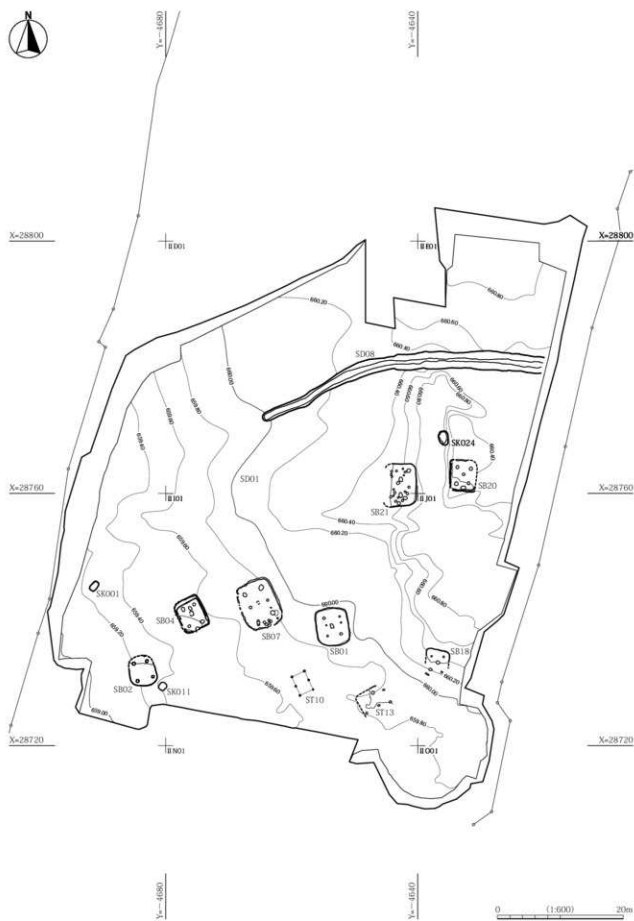
土器の段階別からみた遺構変遷は、栗林2式新段階から3式が中心の集落である。各段階内における竪穴住居跡の主軸方向の違いは、地形に沿うよう構築されているように生じているとみられる。ただし、大半の建物跡が南方向に出入口施設をもつに対し、栗林2式新段階のSB03は北東側に出入口施設をもつ点が他と異なる。このSB03周辺の掘立柱建物跡も同様に主軸が大きく東へ振れるため、これらは一つのグループとみることができよう。この栗林2式新段階が最も掘立柱建物跡が多くみられる。これら遺構の分布は、溝跡SD08より10m以上南に離れて構築され調査区南側に偏るため、集落の北東部を調査したと考えられる。このSD08は、東西に緩い弧状に伸びるが調査区内で途切れている。溝が途切れた先の地形は、南西へ向かい浅い谷状に下っている。これは、ちょうどSK001の土坑より15mほど北にあり注意を要する。洪水等で溝が削られたか、地形を利用した区画とみた場合、集落は台地の東へ偏る可能性があろう。



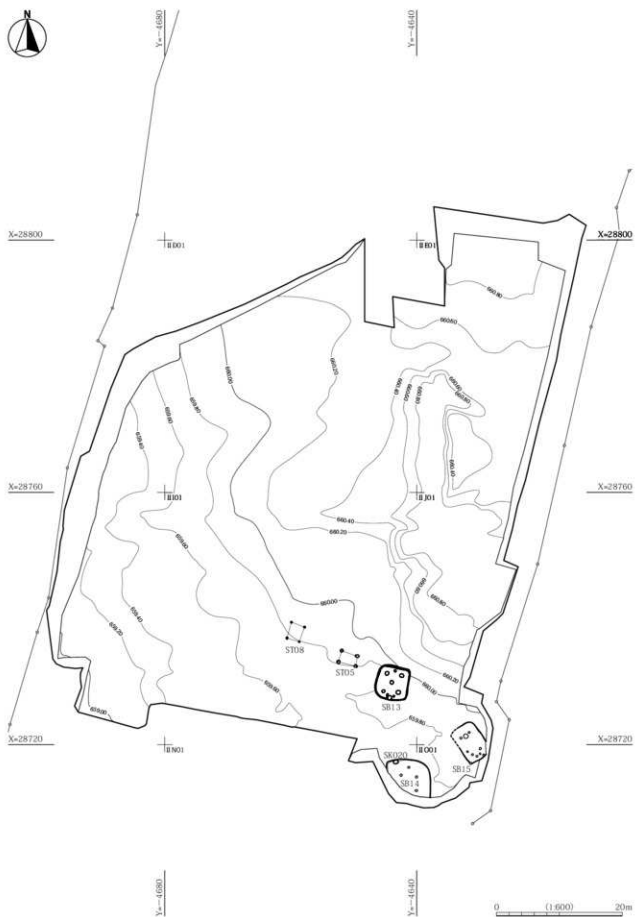
第 89 図 栗林 2 式古～新段階・栗林 2～3 式 遺構分布図



第90図 栗林2式新段階・栗林2～3式 遺構分布図



第91図 栗林3式・栗林2～3式 遺構分布図



第92図 栗林3式～後期 遺構分布図

2. 出土遺物からみた森平遺跡

森平遺跡では土器、石器、人骨、動物骨が出土した。ここでは、それら出土遺物のうち代表的な資料を整理する。

(1) 概観

森平遺跡出土の最古の土器は縄文後期称名寺式から堀之内式期で遺構外を中心に少数出土している。佐久平では浅間山麓や湯川左岸の山地、丘陵地帯にあたる東山地域を中心に縄文時代中期の集落遺跡が分布し、河川沿いの低地は狩猟場など短期的滞在の痕跡が認められるにすぎない。これらの土器もそのような傾向に一致するものと捉えられる。

弥生時代中期の粟林式期になり、初めて集落が展開する。しかも粟林2式古～新段階、粟林3式へと切り合いをもつほどに密集し、各時期1～数棟の掘立柱建物跡が伴う。住居跡には楕円形、隅丸方形などがあり、炉も石囲炉、土器敷炉、土器埋設炉と多様である。集落の開始期にあたる粟林2式期のSB10は、炉から胴部に重山形文が展開する壺が出土している。その床面レベルには3点の甌と1点の高杯が配置されており、そのうち伏せられた1点の甌内から1本の人間の歯が出土した。歯の形質学的な分析から、それは上顎中切歯でシャベル型の特徴をもつことが判明した。シャベル型は高身長・高顔で大きめの歯をもつ渡来系の人々をもつシノドント（中国型歯列）の特徴の一つである。特にこの切歯は、唇側面（外側面）にも窪みのあるダブル・シャベル型で、シャベル型の顕著な場合にみられる。このことから森平遺跡の地に当時すでに渡来系弥生人が居り、想像を逞しくすれば住居を廃絶する際にその歯を甌内に収納し、伏せて遺棄するといった行動が推測される。集落の発展期にあたる粟林2式新段階になると住居のなかにはSB09とSB11のように焼却による廃絶の際に土器が大量投棄されるものが現れる。うちSB09は小形であるが埋土1層下部の集中域を中心に壺・甌・鉢・甌など廃棄されている。また、SB11には松葉状の特徴的な文様が施された壺475がみられ、SB07には口縁部と頸部にオオバコの花茎を回転施文した壺409がみられる。つづく粟林3式にも焼却による廃絶は続き、特にSB01のほぼ床面レベルから佐久平でも類例が見あたらない台形形の側面形を呈する無頭壺008、内面に鮮やかな赤彩が施された台付甌013と多数の完形小形の甌を含む良好な一括資料が出土している。本遺跡の弥生時代の集落の終焉はSB13・SB14他で、弥生後期初頭の特徴をもつ赤彩の壺が出現する。佐久平でも隆盛を極めた箱清水式の成立の後に、この遺跡はその機能を終え、人々は別の地域に移動したのであろうか。この後森平遺跡に居住の痕跡は無く、古墳時代中期の土師器が少数出土し、森平の地は再び短期的滞在地として利用されることとなった。

(2) 土器各論

①疑似縄文が施された土器 [第93図]

SB07から出土した409は掲載土器のうち口縁部と頸部に疑似縄文が施されていた。ここでは本遺跡で唯一観察された疑似縄文土器について若干の考察を行う。

本土器は粟林3式で後が緩やかに立ちあがる受け口状口縁の壺である。この受け口部の口唇部から8mm程度下方に1本の櫛と推測される工具で横走沈線文が施され、その後その上から口縁部にかけてほぼ一周疑似縄文が横方向に回転施文され、口唇部にも施文されていた。ただ、全体の1/5程度は、沈線の上に疑似縄文が載り、沈線が消されている。頸部にも4.5cmの幅で疑似縄文が施され、2本の横走沈線文によって切られていた。これらの疑似縄文は石川日出志明治大学教授によってオオバコの花茎と認定された。

オオバコの分布は広く、日本国内全土に広がる。花茎の先に穂状にみられる子房の先端は尖って三角形を呈し、先端部と基部の左右に小さな窪みがある。このような原体の形態と、疑似縄文の圧痕を比較し

た結果、土器口縁部は、第93図のように穂先を下に向けて回転、口唇部は外に向けて回転、頸部は上に向けて回転していると結論づけられる。花が開花し、花糸が伸びるのは6月以降の夏季である。土器に見られる匠痕はまだ未開花の状態であるため、仮に採集後、すぐに施文したとすれば6月ころの作業が想像される。これは土器づくりの季節推測の手がかりとしても重要である。

オオバコの花茎が疑似縄文として確認された例は、北海道の縄文時代中・後期の土器（大沼1988）、本州の縄文晩期の例（阿部1990）があり、弥生時代の関東地方を中心に指摘されている（大沼2008）。近隣では岡谷市橋原遺跡、箕輪町箕輪遺跡があげられるが、佐久市北西久保遺跡、松本市県町遺跡など（大沼前掲）その可能性が指摘されている遺跡の土器の確認と比較は今後の課題である。縄文に代わってなぜオオバコが用いられたのか等、オオバコ回転の疑似縄文土器の性格とその広がりを今後の課題としたい。

② SK001 出土の有東式土器について [第94図]

SK001 出土の壺502（第67図）は、口縁部から頸部の資料で、頸下部から底部は出土していない（4章2節SK001参照）。この壺は、胎土が灰白色で、文様も、頸部に沈線を入れ、口縁部から頸部を区画して縄文施文されていることから栗林式土器の壺とは若干異なる雰囲気のある土器であったため、石川日出志明治大学教授のご教示をいただき有東式土器と確認されたものである。胎土が在地の土器と異なるため搬入品の可能性も考えられよう。

有東式土器は、駿河湾地方に分布する弥生時代中期後半の土器型式である（山田1996）。有東式土器と栗林式土器の共伴例は、有東式土器の分布する駿河湾地方では、静岡県静岡市川合遺跡から有東式土器に伴い栗林式土器が出土している（静岡県埋文1992）。また隣県の山梨県においては中巨摩郡甲西町の油田遺跡で確認されている。この遺跡は自然流路から有東式土器と栗林式土器が共伴して出土しており、比率は約4:6で栗林式土器がやや多く出土している。時期は栗林2～3式とみられ、弥生時代中期後半における静岡・長野両地域間の物流の中継地点となる拠点集落と捉えられている（山梨県教委1997）。森平遺跡から有東式土器が発見されたことにより、佐久から野辺山を越え、山梨県油田遺跡を中継し、静岡県駿河湾周辺地域とも交渉があったと考えられよう。

本出土例をもとに、頸部に沈線区画し口縁部に縄文を施文する壺について周辺遺跡での類例をみると、湯川上流約2kmの右岸台地上にある西一本柳遺跡に1例、湯川下流約1kmの右岸河岸段丘上の川原端遺跡に2例をみる（佐久市教委1999-2001）。また、千曲川下流右岸の長野市松原遺跡にも1例が確認できた（埋文センター2000）。これらは栗林式土器の中にあつて、I文様帯がII文様帯まで拡大している点が異なり、数少ないため類型化では対象とならなかった特徴をもつ土器と思われる。これらの類例の壺は、在地の土器の折衷であつて有東式そのものではないとみられるが、森平遺跡で有東式の壺が出土したことから、駿河湾系の壺とみておきたい。また森平遺跡から出土した壺の中には、在地にみられる櫛歯状工具による施文が主体的の中では異なるヘラ描沈線が施される壺が2例ある。

1区遺構外出土の壺548は、口縁部に刻み文があり、体部をヘラ描沈線を斜方向に施される（第70図）。SB11出土の壺474は、口唇部にLR縄文が、胴部にヘラ描沈線による縦羽状文の壺で、ほぼ完形品である（第61図）。これらのヘラ描沈線文は、山梨県油田遺跡で有東式とされる壺にみられ、駿河湾地方にみられるヘラで1条描きする横位羽状文壺にその系譜をもとめることもできよう。ただし、器形および縦羽状文である点は、在地の土器にみられる特徴であるため、直接的な静岡県との交渉というよりは、山梨県油田遺跡例などの有東式の壺を含めた、駿河湾系の壺との折衷型の壺とみておきたい。

今回出土したこれらの土器から、山梨・静岡県で出土する栗林式土器は、佐久を経由した可能性も示唆される。山梨・静岡県での弥生時代中期後半の土器のあり方を含め、詳細な検討は今後の課題としたい。

③脚内天井部に紐状突起の付く高杯について [第95図]

高杯の脚部内面の天井部に突起の付く高杯 442 (第56図)と542 (第70図)の2例が確認された。2例とも突起には2孔が穿たれ、脚部には5箇所透かしがある。突起部には、孔があることから紐などを通し、何かを吊るす機能を持たせたものと推測できる。2つの孔からみて、2個吊るす可能性もあろう。

同様の突起の付く高杯の類例は、松原遺跡に2例ある。ひとつは、SD29より出土したもので、脚部内面の天井部に突起で1孔が穿たれたものである。もう一つは脚部内面中位に2個1対となるように突起の付いた高杯である。これも突起は1孔穿たれている。SD29より出土した高杯について報告書では、「高杯に鈴のような機能が付したものであろうか」(青木2000)として、その機能についても推測されている。本例も、高杯脚部内に舌を吊るし、脚内面にあたることで音を鳴らす鐸の機能を持たせた高杯と考えられる。音の鳴る高杯の類例には、千曲市御屋敷遺跡で出土した弥生時代末頃の高杯がある。この高杯には、脚部内に円盤状の粘土を貼り付けて空間を作り出し、その中に丸玉2個が納められ、鈴の機能を持たせている。この鈴の機能を持たせた高杯は、篠ノ井遺跡群でも出土している(埋文センター1997)。

またこの高杯には、楕円形透かしが5箇所ある点でも粟林式土器の高杯では珍しい。楕円形透かし全体のわかるものにSB11の高杯477(第62図)があり、脚中程に大きく空けられていることがわかる。このことから、突起に何かを吊り、舌としたものが覗けるようになっており、視覚的な効果もあったと推測される。御屋敷遺跡例の鈴内部には丸玉が用いられていることから、この高杯には、勾玉や管玉などの玉類が吊るされていたのかも知れない。

音の鳴る高杯の類例は少ないものの、粟林式土器の段階には銅鐸にみるような、舌を吊した鐸の機能を持たせた高杯から、弥生時代後期以降の脚部内部を空洞化させ鈴の機能をもたせる変化をしているとも考えられる。そこで、この高杯の名称を「鐸高杯」として後期以降にみられる「鈴高杯」と区別し、粟林式でも2式新段階以降に登場するものと考えておきたい。

通常の高杯とも違うことから、音の鳴る高杯は特別な祭祀に用いられたと考えられる。この高杯が遺跡内での遺構との関係や、共存した土器などからどのような祭祀に用いられたのか等は、今後の課題である。

3. 森平遺跡の位置づけ

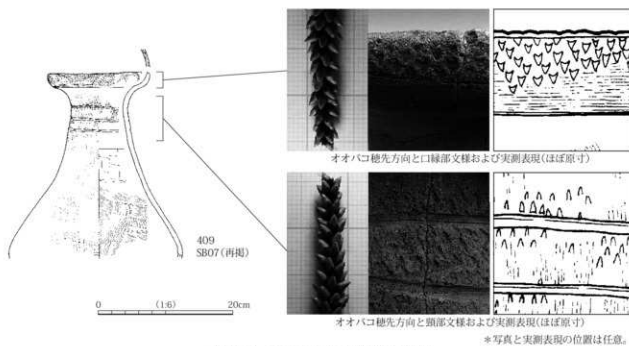
最後に遺跡の主体である弥生時代中期粟林式期における森平遺跡の位置づけを整理する。

弥生時代中期の遺跡分布を概観すると、北信地域へ偏在していた粟林1式の集落が、2式新段階になると上越地方から関東地方まで面的に広がり、かつ多数確認できる(工案2013)。例えば上越市吹上遺跡では粟林1式段階の出土土器の比率が小松式7割、粟林式2割であったのに対し粟林2式新段階以降になると粟林式が6～7割に増加するとされる(笹澤2006)。そして粟林2式新段階のもう一つの特徴は、短期間に拡大した巨大集落が出現することであり、その一つが、長野市松原遺跡であった。総計3,200箱にも上る大量の土器は、主に粟林2式古段階～3式であり、その膨張は短期間で急激である。これは縄文時代以降連続と続いていた小規模集落の生業や土器製作にも変化を喚起したと考えられる。松原遺跡から南へ8kmの千曲市屋代遺跡群ではこの時期、後背湿地の立木の焼却処理を伴う開墾が開始され(寺内1998)、土器胎土にも松原遺跡を流れる経川流域に由来する可能性のある粘土を新規に採用するという変化が起こる(水沢2007)。また、この時期に本格化する水田経営を支える木材伐採・加工具である磨製石斧の製作と流通が長野市榎田遺跡・松原遺跡の資料の分析を通じて捉えられ(町田1999、馬場2007)、それらを駆使した開墾によって低地の暖温帯針葉樹のモミ材が枯渇し、高地の冷温帯針葉樹のサワラ利用が促進された実態も、全国的にも大量に出土しかつ保存されている川田条里遺跡・石川条里遺跡などの大形木製品の樹種同定結果から明確に指摘されている(鈴木・能城1997)。

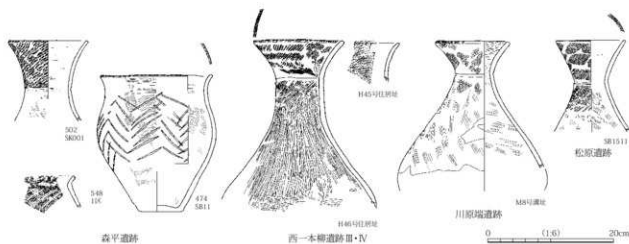
この大規模かつ急激な変化の中、佐久平でも巨大遺跡が湯川右岸の根々井地籍から岩村田地籍に集中して成立した。92軒の竪穴住居跡が発見された北西久保遺跡、その東に隣接し230軒以上の一本柳遺跡群西一本柳遺跡、西に隣接し43軒の鳴沢遺跡群五里田遺跡等がみられ、これらを面的に繋ぐと松原遺跡に匹敵する巨大遺跡として捉えられよう。森平遺跡はこの巨大遺跡群から直線距離で約1.7km、湯川の蛇行部へ向かって南下した第一河岸段丘上の沖積低地に立地する。集落中心のSB11から湯川までの距離は約70m、河床との比高差は7～8m。北側と湯川を挟んで南側には断崖があり、居住に適した場所とは言いがたい。同じ湯川流域でも川原瑞遺跡や対岸の根々井芝宮遺跡・寄塚遺跡群が台地上に立地するのに比べ、むしろ洪水の危険性が高く、実際に弥生後期以降に洪水に伴う土石流が集落へ流入した可能性もある。

前項で述べたように本書では栗林式2式新段階から3式を主体とする竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡6棟、土坑100基を報告した。森平遺跡は本書の調査地点の南東部が、佐久市教委によって平成18年度に調査されている（佐久市教委2009）。報告によれば、出土土器が少ないもののH1・H4～6号住居跡は栗林2式～3式の段階にあたり、本報告の集落の時期とほぼ重なる。実際には両調査の2倍の規模の50軒以上の住居と、当時の生産域が集落の南端から湯川までの空間に存在していた可能性が予測されている（小山2013）。集落を区画する溝であるSD08から出土したイネ属の珪酸体によりこの付近の湿地を利用して水田経営が始まっていた可能性がある。そして、今回実際にその存在が具体的に明らかになった渡来系弥生人が技術的基盤を担っていたとも予想されよう。

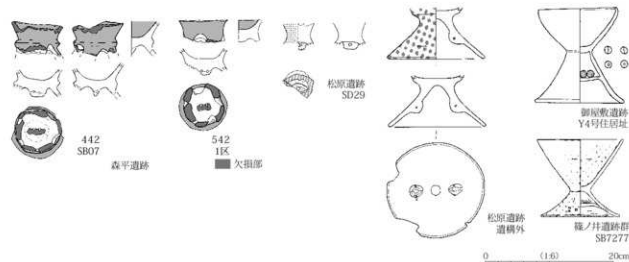
このような点から、河川汀線沿いという特殊な立地のメリットの第一は、湿地が稲作農耕の適地であったことと結論づける。そして第二の理由を加えるとすれば、それは湯川・千曲川の河川交通に依拠した物流であろう。森平遺跡からは、完形の太型蛤刃石斧や扁平片刃石斧、駿河湾地方との関係が予想される有東式土器など、物資の流通の結果もたらされたと考えられる遺物も存在した。激動の弥生中期にあって、長野盆地に多少遅れながらも、佐久平の高冷地の弥生人達は技術革新に目覚め、最先端の道具を調達しつつ稲作農耕社会を展開させていく。その一端が森平遺跡の調査から読み取れたことを確認し、小結とする。



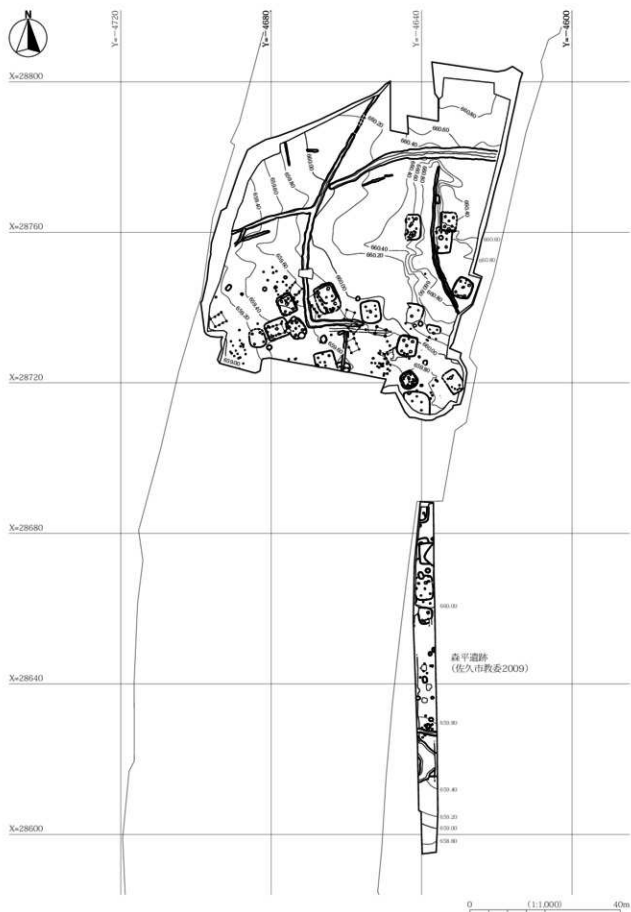
第93図 オオバコ文土器の施文方向



第94図 有東式土器とその類似例



第95図 鐸・鈴の機能をもつ高杯



第96図 森平遺跡遺構分布図

第5章 寄塚遺跡群

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1. 遺跡の概観

寄塚遺跡群は、湯川左岸の河岸段丘上に位置する。北を湯川、南を清津川及び千曲川に挟まれた東西に長い通称「中込ッ原」の台地縁辺部に相当し、遺跡の範囲は、県道上原猿久保線を中心に東西に細長く、標高は670mほどを測り、湯川との比高は約15～20mである（第1図）。

佐久市教委の埋蔵文化財包蔵地台帳（平成20年度時点）には、寄塚遺跡群（No.231）は弥生から中世の散布地と登録されているが、昭和56年の横和団地造成に伴う試掘調査では100軒を超過する弥生時代中期後半～平安時代の住居跡が検出されたとのことであり、そこでは寄塚古墳（No.239）も確認されている。平成17年度に佐久市教委によって実施された県道上原猿久保線改良工事に伴う発掘調査では、竪穴住居跡13軒（弥生時代中期後半10軒、古墳前期3軒、時期不明1軒）が検出され、中部横断自動車道の西側のみ分布し、より西側で密となっている。こうした状況から、横和団地を中心とした部分が該期の集落の中心部であったことが理解されよう。

なお、発掘調査の受委託契約及び調査段階では、寄塚遺跡群の南限は県道上原猿久保線であった（佐久市教委1984）。県道上原猿久保線の南側については、本遺跡の調査に先行して進めていた今井西原遺跡の調査で、遺構が北側にも連続することが確認されたため、今井西原遺跡として調査を進めた。したがって、現在の佐久市教委が保有する埋蔵文化財包蔵地地図で明示されている範囲と齟齬が生じているが（今井西原第1図）、本書では、調査段階の埋蔵文化財包蔵地範囲に基づいて報告する。

2. 調査の概要

調査対象地は、佐久市横和584番地ほかに所在する。平成16年8月23日から同年12月20日まで、県道上原猿久保線の北側、2,500mを対象に調査を実施した。調査で発生する排土を調査区外に搬出できないことや西側に高く積めない等の制約から、調査区を東西に二分し、排土置場を確保することとした。また、南に隣接する今井西原遺跡の調査成果から、トレンチ調査を経ずに、直接全面調査に入ることにした。

調査は西側から重機による表土剥ぎを行い、順次、遺構検出・調査を進めた。検出された遺構の部分状況等を勘案して、調査区の東側に排土をできるだけ積み上げることとし、遺跡の空中写真撮影を経た上で排土を西側へと移動し、残りの調査区の調査に着手した。検出された主な遺構は、弥生時代中期後半の竪穴住居跡と古代・中世の溝跡である。ただし、現在の畑地造成に伴う削平等が調査対象地全域に及んでおり、遺構の遺存状況は極めて悪く、本来、存在していた住居跡等の遺構が消滅してしまった可能性もある。

3. 基本層序

本遺跡の土層堆積は、3分層される。Ⅰ層は表土及び現耕作土、黒色を呈するⅡ層を掘り込んで弥生時代中期後半～古代・中世の遺構が構築されている。なお、Ⅱ層は畑地造成に伴って、部分的にしか遺存しない。Ⅲ層は地山で、当地域に普遍的に見られる浅間第一軽石流と見られるが、台地の端部に近いためか、若干様相が異なる。

第2節 遺構と遺物

寄塚遺跡群では、竪穴住居跡2軒、土坑6基、焼土跡1箇所、溝跡4条、不明遺構1基が検出された。いずれの遺構も現在の畑地造成に伴う削平等によって遺存状況が悪い。以下、遺構ごとに記述する。

1. 竪穴住居跡

SB01 [遺構：第3図 PL35、土器：第5図 PL36、石器：第5図 PL36]

位置：I M03・04・08・09グリッド。**重複関係：**北西部を1/3ほどかく乱され、SD01に切られる。**検出：**かく乱された土層を除去し、II層中で黒褐色土の落ち込みとして確認された。**埋土：**黒褐色土を基調とし、炭化物及び地山の黄褐色土を含む単一土層。**構造：**平面形は隅丸長方形と想定され、長方形に配された4本の支柱で上屋を支えていたと考えられる。壁際が深くなる凹凸のある浅い掘り方を伴い、南側の柱穴間は床面が堅く締まっている。炉は、床面が確認できた範囲に無く、かく乱された部分に存在していたと考えられる。堅緻な床を土間及び入口方向とすれば、床面中央から奥まった箇所には炉が構築されていたものと想定される。柱穴は3本検出され、いずれも径20cmほど、深さ80cm弱で、床面近くに掘り方を持つ。**出土遺物：**土器・石器とも出土量は少量である。土器は、いずれも粟林式土器と見られるが、無文部の小破片が多く、図示できたものは、壺・鉢・甕各1個体である。01は柳垂垂下文aが施された甕、02は鉢C(第4章第3節1)、03は壺もしくは鉢Cである。02と03はいずれも外面色調がN2/0黒で、内外に良好な磨きが施されている点で類似している。うち03には、胴中央部に三角形区画文を伴う柳垂波状文cが施されている。S14は複碑石安山岩製の石皿である。手のひらよりひとまわり大きな扁平礫をそのまま用いており、形状整形の加工は認められない。表面中央部付近には縦と斜め方向に何かをこすったような痕跡があり、周辺は磨られたためであろうか、やや光沢を持つ。裏面中央部付近も滑らかで磨り面の可能性が考えられる。**時期：**出土遺物から弥生時代中期後半、粟林2式古段階。

SB02 [遺構：第3図 PL35、土器：第5図 PL36、石器：第6図 PL36]

位置：I L05・10グリッド。2/3以上が調査区外。**重複関係：**SD03に切られる。**検出：**II層中で黒褐色土の落ち込みとして確認された。**埋土：**黒褐色土を基調とし、上下2層に分層される。壁際には地山の黄褐色土を含む暗褐色土が堆積する。**構造：**平面形は隅丸方形または長方形と想定され、方形に配された4本の支柱で上屋を支えていたと考えられる。壁際に周溝が巡り、床面は全体が堅く締まっている。柱穴は深さ50cm弱の1本確認されたのみであるが、SB01の柱穴と平面・断面形とも類似する。壁際が深くなる凹凸の少ない浅い掘り方を伴う。**出土遺物：**土器・石器とも出土量は極めて少量である。壺13は胴上半部から中央部に柳垂波状文と柳垂直線文が交互に配されている。類似した文様構成が根々井芝宮遺跡の粟林Ⅱ式古段階の一括資料中にもみられる。胴部がSB02埋土出土で、頸部はSD03埋土出土である。同一個体の破片はSD03埋土からの出土が多い。06は胴中央部に柳垂による宇字状文が施された壺、04はミニチュアの壺である。S03は太型蛤刃石斧の基部。基部平面形は四角く、刃部側ほど器体幅が太くなるため、全体平面形は楕形を呈すると考えられる。敲打調整後の研磨調整が確認できるが、器体表面がやや褐色化し剥落している部分がみられることから、被熱の可能性が高い。S19はスクレイパーとした石器である。大形で分厚い幅広剥片を素材としている。素材の打面周辺は破砕しているが、破砕折れ面からの加工が認められるため、この石器自体は完形で欠損はないと考えられる。やや細かい平坦な剥離層が下部から右側縁の両面に施され、刃のような縁辺が作出されている。また、上側縁周辺には表面だけにやや角度の

ある剥離が施されている。寸詰まりのわらじのような平面形となる。頁岩としたが、砂岩と呼べるような粒子が粗い部分が見られる石材となっている。**時期**：出土遺物から弥生時代中期後半、粟米2式古段階。

2. 土坑

[遺構：第3図、土器：第5図 PL36]

SK01～06の6基が検出され、その内5基は調査区南部（I M14・15グリッド）に集中する。調査区中央（I M04グリッド）のSK01を含め、規模・形状とも類似し、いずれも柱痕跡や焼土・炭化物等は確認されない。機能・用途は不明と言わざるを得ない。調査段階では、風倒木痕と判断していたものである。遺物は、SK01の底面から15が出土したほか、図示し得ない弥生土器の小片が埋土内から出土しているのみで、その他の土坑から遺物は一切出土していない。

3. 焼土跡

SF01 [遺構：第4図]

I M04グリッドのⅡ層中で焼土及び被熱痕跡が、1箇所確認され、SF01とした。焼土跡は長軸40cm、短軸32cmの不整楕円形の範囲に広がる。住居跡の炉の可能性も考えられたため、周囲を確認したが、柱穴等の住居跡に付随する施設は周囲に認められなかった。出土遺物等も認められず、時期等は特定できない。南端をSD01が切る。

4. 溝跡

溝跡の検出面は大きく二つに分かれ、Ⅱ層上面ではSD01、Ⅱ層中及びⅢ層では南接する今井西原遺跡へと続く3条の溝跡（SD02：DIN SD105、SD03：DIN SD106、SD04：DIN SD110）が検出された。

SD01 [遺構：第4図、土器：第5図 PL36]

位置：I M04・06グリッドほか。**埋土**：上下2層に分層され、水流痕跡は明確でない。**構造**：東西方向に直線的に走行し、西側は調査区外に及ぶ。今井西原遺跡で検出されているSD112・113と平行する。最大幅1.9m、深さ11～32cmで、断面形は皿状を呈す。何らかの区画溝の可能性もあるが、性格は明らかでない。**出土遺物**：図示した内耳鍋のほか、図示し得ない弥生土器小片が14片出土している。石器では黒曜石の原石1点、黒曜石製の楔形石器1点が出土。**時期**：検出面がⅡ層上面であること、底面から内耳鍋が出土していること等から、中世以降の所産と判断される。

SD02 [遺構：第4図]

位置：I L15グリッド。**埋土**：上下2層に分層されるが、下層は壘等の崩落土と考えられる。水流痕跡は明確でない。**構造**：北北西～南南東方向に直線的に走行し、北西側は調査区外に及ぶ。SD03（DIN SD106）と平行する。最大幅90cm、深さ34cmで、断面形は鍋状を呈す。何らかの区画溝の可能性もあるが、性格は明らかでない。**出土遺物**：図示し得ない弥生土器小片が4片出土したのみ。**時期**：今井西原遺跡側では縄文土器や古代の土器が出土しているが出土量は少ないため時期決定は難しいが、古代以降と把握しておく。

SD03 [遺構：第4図、土器：第5図 PL36]

位置：I M06・11グリッドほか。**重複関係**：SB02・SX01を切り、SD01に切られる。**埋土**：上下2層に

分層されるが、下層は壁等の崩落土を含む。水流痕跡は明確でない。**構造**：北北西-南南東方向に直線的に走行し、北西側は調査区外に及ぶ。SD02 (DIN SD105) と平行する。最大幅 1.7m、深さ 48cm で、断面形は鍋状を呈す。何らかの区画溝の可能性もあるが、性格は明らかでない。**出土遺物**：図示し得たのは 07 の須恵器杯体部のみで、弥生土器小片が 77 片出土している。接合はしないが多くが SB02 の 13 と同一個体である。黒曜石製の楔形石器が 1 点出土。**時期**：古代の遺物が含まれていること、SD02 と並走すること等から、古代以降と把握しておく。

SD04 [遺構：第 4 図、土器・石器：第 5 図 PL36]

位置：I M01・11 グリッドほか。**重複関係**：SX01 を切り、SD01 に切られる。**埋土**：上中下の 3 層に分層され、最下層は壁等の崩落土を含む。水流痕跡は明確でない。**構造**：北北西-南南東方向に弧状に走行し、北西側は調査区外に及ぶ。最大幅 1.8m、深さ 48cm で、弥生時代の集落を区画する溝の可能性もあるが、時期の特定も含め、検討を要する。**出土遺物**：図示した 3 個体の粟林式土器の甕のほか、図示し得ない弥生土器小片が 260 片強が比較的満遍なく分布している。石器では、図示した石鏃 S02 のほかに、剥片 2 点(頁岩・緑色凝灰岩)が出土。S02 は黒曜石の石鏃である。細身で先端幅が狭くスリムな印象を与えさせられる。茎痕が認められるが欠損している。縁辺は弱い鋸歯縁状に加工されている。石材の黒曜石は透明度が高く質が良い。**時期**：出土土器の主体は弥生時代中期の資料であるが、今井西原遺跡側で須恵器が 1 点出土しており、弥生時代中期の所産と断定はできない。

5. 不明遺構

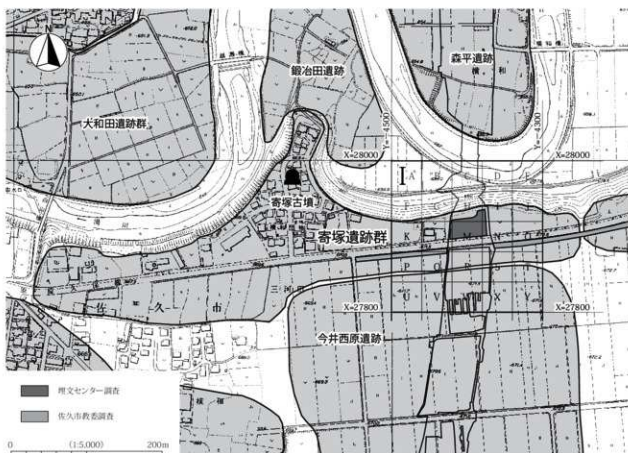
SX01 [遺構：第 4 図 土器：第 5 図 PL36]

I M11 グリッドの II 層中で、SD03・04 に切られる黒褐色土の落ち込みが検出された。埋土に焼土が含まれ、規模等から、竈穴住居跡の掘り方とも考えられる。ただし、床面や柱穴等、住居跡に付随する施設は検出されていない。出土遺物は、図示した不明土製品と図示し得ない弥生土器小片 6 片のみである。

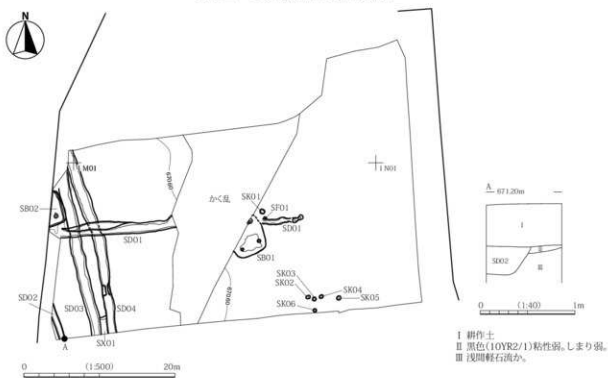
6. 遺構外出土の遺物 [土器・石器：第 5 図 PL36]

遺構外からは土器 433.4g が出土している。そのうち検出面から出土した 1 点 60.5g を図化掲載した。16 は弥生時代中期の甕である。

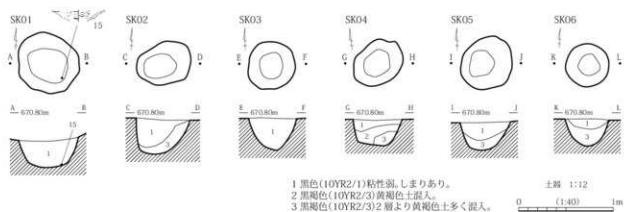
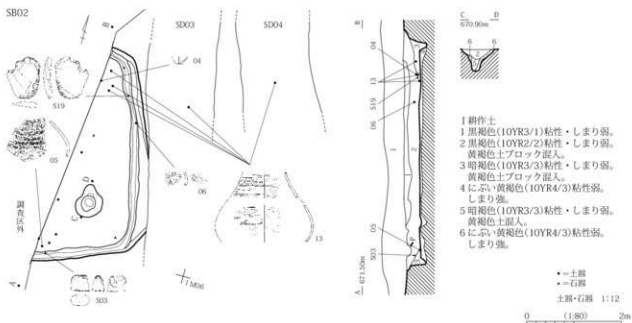
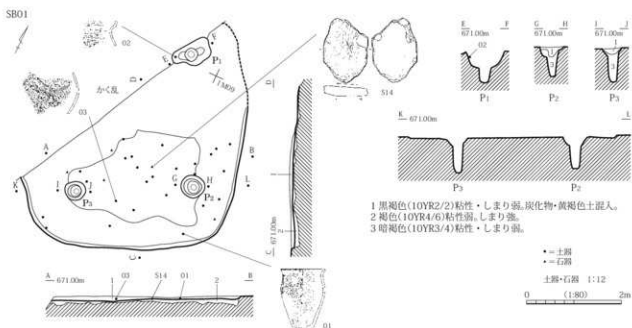
S04 は打製石斧で、節理で割れた薄い板状の石を材としており、表裏両面に節理面がみられる。平坦な剥離により周縁に加工が施されているが、剥離末端に階段状のステップが目立つことから、器体側縁方向からの打撃による加工と考えられる。基部の縁の右端に切り立った節理面のような面がみられるが、残存部が狭く左側が大きく欠損しているため、基部右端が残っていると断定は難しい。打製石斧としては細身なため、大形打製石斧の刃部右側の欠損部を再加工した可能性がある。下に置いた刃部とした部分の加工が粗いため、上下が入れ替わり基部となる可能性もある。



第1図 遺跡範囲図と地区設定図



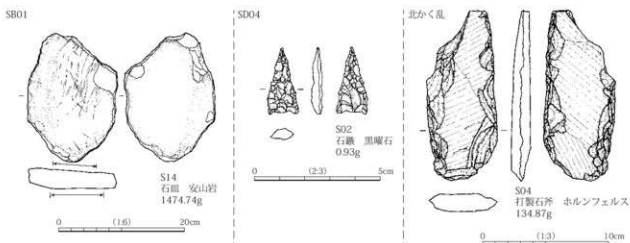
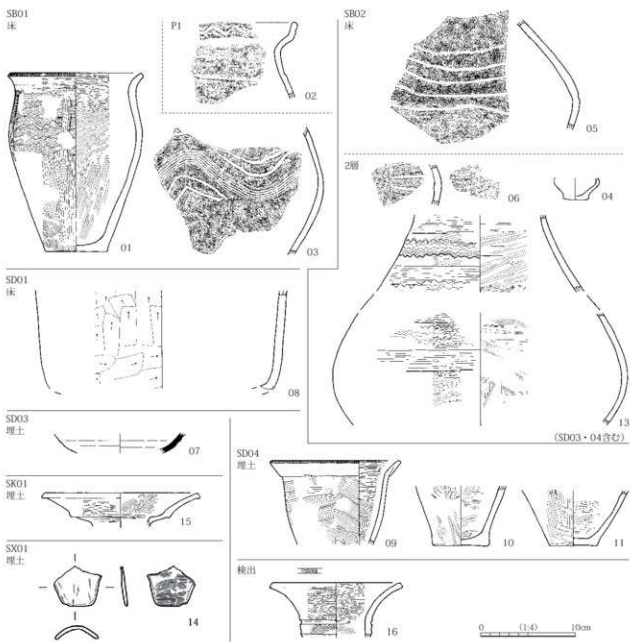
第2図 全体図・基本層序



第3図 SB・SK 遺構図

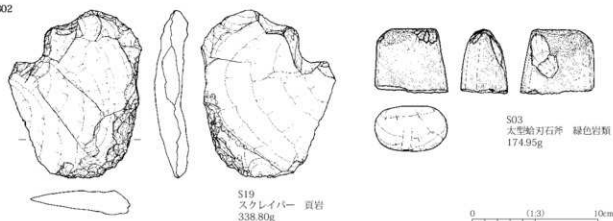


第4図 SF・SD・SX 遺構図



第5図 遺物図1

SB02



第6図 遺物図2

第1表 堅穴住居跡一覧

回廊 No.	遺構	時期	グリッド	平面形	主軸方向	東西-南北(m) (1は東西長)	床面積 (㎡) (1は床面積)	深さ (cm)	土壁総重量 (g)	石壁 (点数)	中位置	重後関係
3	SB01	弥生中期	1 M03-04-08-09	隅丸 長方形	N22° W	(4.56) × (4.48)	(13.49)	12	10762	14	中位置	SD01に切られる
3	SB02	弥生中期	1 L05-10	隅丸方形	N12° W	(2.24) × (4.40)	(4.65)	34	5552	5	中位置区外	SD03に切られる

第2表 土坑一覧

回廊 No.	遺構	時期	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土壁総重量 (g)	石壁 (点数)	重後関係
3	SB01	古墳前期	1 M04	円形	竪状	68	61	32	57.5	--	--
3	SB02	?	1 M14	楕円形	竪状	58	42	38	--	--	--
3	SB03	?	1 M14-15	円形	竪状	53	49	34	--	--	--
3	SB04	?	1 M15	楕円形	竪状	57	43	28	--	--	--
3	SB05	?	1 M15	円形	竪状	59	52	30	--	--	--
3	SB06	?	1 M14-15	円形	竪状	46	45	29	--	--	--

第3表 焼土跡一覧

回廊 No.	遺構	時期	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土壁総重量 (g)	石壁 (点数)	重後関係
4	SB01	?	1 M04	不整 楕円形	焼土のみ	40	32	--	--	--	SD01に切られる

第4表 溝跡一覧

回廊 No.	遺構	時期	グリッド	平面形	断面形	長さ (m)	最大幅 (m)	深さ (cm)	土壁総重量 (g)	石壁 (点数)	重後関係
4	SD01	中世以降	1 L10 1 M 01-02-04-06-07-09	直線形	溝状	20.7	1.9	11 ~ 32	470.7	3	SB01, SD03-04, SP01を 切る
4	SD02	古代以降	1 L15	直線形	溝状	4.9	0.9	34	31.6	--	--
4	SD03	古代以降	1 L05-10 1 M01-06-11	直線形	溝状	21.8	1.7	48	481.2	4	SB02, SB01を切る SD01に切られる
4	SD04	?	1 G25, 1 H21, 1 L05 1 M01-06-11	弧状	溝状	24.9	1.8	48	2730.1	4	SB01を切る SD03に切られる

第5表 不明遺構一覧

回廊 No.	遺構	時期	グリッド	平面形	断面形	長さ (m)	最大幅 (m)	深さ (cm)	土壁総重量 (g)	石壁 (点数)	重後関係
4	SB01	?	1 M11	?	?	2.5	0.9	20	39.8	--	SD03-04に切られる

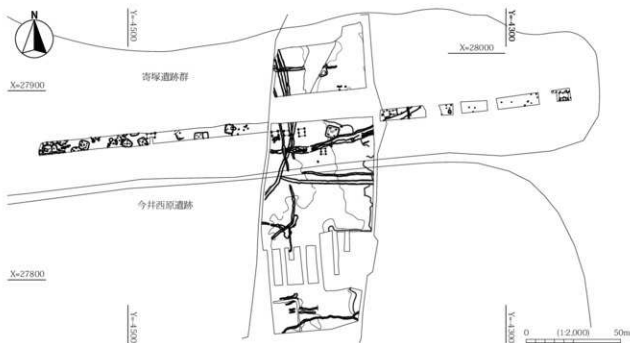
第3節 小結

今回の調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡と溝跡である。検出された2軒の竪穴住居跡は弥生時代中期後半栗林式期に属し、全体像がつかめないものの、方形を基調とし主柱穴も矩形に配されていたことが想定される。当該期の集落の中心部と想定される調査区西方で佐久市教委が調査した該期の竪穴住居跡と規模形状等が類似する。一連の集落に属する住居跡と判断される。

一方、溝跡は時期の特定が困難であるが、南接する今井西原遺跡から続くもので、一定の範囲を区画する意図で造られたものと考えられよう。集落の中心部をSD04は弧状に、SD02は方形に近い形状で、一定期間閉鎖していたと想定することも可能である。調査区から出土している土器も総量は少ないものの、栗林式土器が主体を占めている。全般的に遺構の遺存状況が悪く、溝跡の掘り込み面や埋土と自然堆積層との対比ができない等、情報量が少ないため、にわか判断できない状況であるが、留意事項として提示しておきたい(第7図)。

寄塚遺跡群は、佐久市教委が行った平成17年度の調査成果で明らかなるように、弥生時代中期後半及び古墳時代前期後半の集落遺跡である(佐久市教委2008b)。中部横断自動車道建設に係る今回の調査地点は、そうした集落、または遺跡の周縁部に位置し、検出された遺構の分布はまさにその状況を示していると言える。今回の調査区と後述する今井西原遺跡1区の北部域が、現在では寄塚遺跡群の範囲に含まれていることは、調査成果からも肯首される(第7図)。

弥生時代中期後半には、蛇行して西流する湯川左岸に沿う台地縁辺部に本遺跡や根々井芝宮遺跡などの集落が点在し、本遺跡の対岸には前述した森平遺跡が展開する。さらに、上流部には西一本柳遺跡や北西久保遺跡といった大規模な集落が営まれており、弥生時代においては県内でも有数な遺跡の密集地の一つといえる。各遺跡の発掘調査の成果も積み上げられてきており、佐久平における該期の社会構造や文化の諸様相を探求する上で、好資料となってきた。今回の調査も、そうした資料群に些少ではあるが、新たな資料と視点を加えることができたものと考えたい。



第7図 寄塚遺跡群・今井西原遺跡 遺構分布図

第6章 今井西原遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1. 遺跡の概観

今井西原遺跡は佐久市大字横和550-30番地ほかに所在し、千曲川右岸と湯川左岸に挟まれた台地に位置する。この台地上には、湯川に隣接する寄塚遺跡群と千曲川に隣接する今井宮の前遺跡があり、両遺跡に挟まれた台地中央部が今井西原遺跡で、標高は670m前後を測る。遺跡の立地する地点は、東から西へ緩やかに傾斜した一帯である。

昭和49年度には、佐久市教委によって、今回の調査区の西約200mの地点で緊急発掘が行われている。その際、古墳時代前期住居跡1軒、平安時代住居跡6軒、土坑1基、井戸跡1基などが調査された（佐久市教委1975）。このため今回の調査区でも佐久市教委の調査成果と同様な遺跡の状況が予測された。また、この地域は、近世初頭に市川五郎兵衛真親によって新田開発が行われたとされているが、それ以前の耕地開発については、不明な点が多い。なお、調査対象となった地区では、過去に調査が行われたことがなく、正確な遺跡範囲を確定できていなかったため、遺跡外とされていた寄塚遺跡群よりの地区と、今井宮の前遺跡よりの地区にトレンチを設定し、遺跡範囲の確認をあわせて実施した。この結果、遺跡範囲は、当初より拡大することとなり、とくに、寄塚遺跡群との遺跡範囲の境は、この時点で、県道上原狭久保線までとして、調査を実施した。

ちなみに、両遺跡範囲の境については、現在の佐久市教委が保有する埋蔵文化財包蔵地地図で明示されている範囲と異なっているが、混乱を避けるため、調査時点での遺跡範囲を基に報告する。

2. 調査の概要

発掘調査は平成16年度に実施した。調査面積は当初13,000㎡を予定面積としたが、調査の経過の中で遺跡範囲が拡大したことを受けて、調査対象面積も増加し、最終的には20,000㎡となった。

調査区は、南北に長く、その間に水路や道路があるため、調査進行の便宜上4つの区域を設定した（第2図）。県道上原狭久保線から約100m南にある水路までを1区、その水路からさらに南へ約100mの市道14-18号線までを2区、市道よりさらに100m南の水路までを3区、その水路より南の市道31-3号線までを4区とした。調査に当たっては、調査区が水田地帯の中にあるため、周囲の営農を考慮し、仮設畦畔の工事等を行ったうえで、調査に臨んだ。

これまでに、この地区での発掘調査がなく、掘削深度や堆積状況、遺跡の残存状況などは不明であった。そのため、確認トレンチの掘削を行い、堆積状況と遺構の確認面などの情報を収集した。堆積層は大きくⅠ～Ⅳ層に分かれた。この結果から、調査は、Ⅲ層上面で中世から近世の遺構の確認、Ⅲ層下面での弥生時代、古墳時代の遺構の確認、Ⅳ層上面での縄文時代の遺構の確認、合計3面の検出面での調査を実施した。しかしながら、実際には各層の堆積量が少なく、第2面・3面などを同時に調査した地区が多い。

前述のとおり、遺跡範囲については、遺跡外とされていた寄塚遺跡群側の地区（1区）と、今井宮の前遺跡側の地区（4区）にトレンチを設定し、遺跡範囲の確認を行った。この結果、1区では掘立柱建物跡や溝跡が確認されたため、調査範囲に含めることとなった。4区については、縄文土器を伴う溝跡1条（自

然流路跡)が確認されただけで、今井宮の前遺跡隣接地は圃場整備の削平が深く及んでいたため、上記の溝跡周辺の調査だけにとどめた。

3. 基本層序

今井西原遺跡の土層堆積は、4分層される。Ⅰ層は圃場整備後の表土・現耕作土、灰褐色を呈するⅡ層は中世から圃場整備以前の堆積層、黒色を呈するⅢ層は弥生時代～古墳時代の堆積層、Ⅳ層は地山である。Ⅰ層・Ⅱ層には、鉄分の集積化や容脱化が帯状に認められ、水田耕作による土壌化が見られる。Ⅲ層は黒褐色土でこの層を鍵層として調査を進めた(第2図)。

第2節 遺構と遺物

今井西原遺跡では、堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、溝跡28条、土坑12基が検出された。

このうち、堅穴住居跡と掘立柱建物跡は調査区北側の1区にまとまっている。溝跡は自然流路跡等と判断した18条も含んだ数である。土坑は1区に2基、2区に9基、4区に1基が認められた。以下、遺構ごとに記述する。

1. 堅穴住居跡

SB101 [遺構：第4図 PL37、土器：第11図 PL39、石器：第12図 PL40]

位置：1区、Ⅰ M24、Ⅰ R04 グリッド。SD111 に切られる。**検出**：Ⅳ層上面で黒色および黒褐色土の落ち込みとして確認した。**埋土**：壁際は地山起源の黄褐色土粒を含む暗褐色土が堆積し、住居跡中央部では黒褐色土が主体となる。中央部には床面に焼土が広がる。**構造**：南北 6.12m、東西 6.44m ほどの隅丸方形を呈する。主軸は N15° E。壁高は 29cm 前後で、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は壁際を除いて、堅緻となる。柱穴は P1～P4 の 4 本である。**炉**：床面中央部に焼土が認められ、この地点が炉跡と考えられるが、掘り込みは認められなかった。地床炉と推測される。**出土遺物**：01 は小形壺で、胴下半部に焼成後に開けられた穿孔がある。02 は高杯の杯部、03 が鉢で外面底面端部未整形のもの。04 は壺の底部、07 が高杯の脚部片である。34 はミニチュア土器の底部である。S22 は複輝石安山岩の磨石である。手のひら大の扁平な俵形円礫を整形せず、そのまま用いている。明らかな磨面は左側縁に認められるが、この磨面もさほど顕著ではない。表面と裏面一部について若干滑らかな面が認められるため、磨面として利用された可能性があるが、明確ではない。S23 は複輝石安山岩の台石で、S22 に隣接して出土した。表面以外は割れ面で、元々は巨大な礫であったと思われる。表面の磨痕は顕著で、一部は光沢を持つほどである。磨方向はあまりはっきりしない。表面の磨痕は上下左右の割れ面に回り込んでいるため、最終的にはこの形状で台石として用いられたと考えられる。裏面は上下左右の割れ面と比較して風化度が高く赤味を帯びているため、節理面の可能性も考えられる。また、裏面の細かい凸部は摩耗しているため、磨面として利用された可能性がある。**時期**：出土遺物から古墳時代前期。

2. 掘立柱建物跡

検出された4棟の掘立柱建物跡はすべて1区に所在している。柱穴の埋土は4棟ともⅢ層を基調とした

黒色土である。ST101～103は多少主軸方位がずれるものの並びや間隔からして一連の建物群の可能性が高い。柱穴掘り方の形状には乱れがあり、柱痕も明確でない。底面の柱痕から斜めに掘り方がなっている箇所もあり、柱の抜き取りが行われた可能性も考えられる。

柱穴からは小破片ながら弥生土器片が出土したが、遺構の時期決定は難しく、弥生以降の所産と考えられる。ただし、遺構の軸方向が古代以降の溝跡と考えられるSD105と同方位を示しているため、古代以降の可能性が高いと推測される。

ST101 [遺構：第5図 PL38]

位置：1区、I Q05、I R01 グリッド。**重複関係：**遺構範囲内にSD107・108が検出されたが新旧不明である。**検出：**IV層上面で確認した。**構造：**柱穴の配置は1間×2間の6本柱で、主軸はN10° W、梁行3.30m、桁行4.25mを測る。**出土遺物：**弥生土器小片が4点出土した。**時期：**古代以降か。

ST102 [遺構：第5図 PL38]

位置：1区、I M22、I R02 グリッド。**検出：**IV層上面で確認した。**構造：**柱穴の配置は1間×2間の6本柱で、主軸はN7° W、梁行3.16m、桁行3.75mを測る。**出土遺物：**弥生土器小片が8点出土した。**時期：**古代以降か。

ST103 [遺構：第5図 PL38]

位置：1区、I R01 グリッド。**検出：**IV層上面で確認した。**構造：**柱穴の配置は1間×1間の4本柱であり、主軸はN2° W、梁行2.68m、桁行2.68mを測る。**出土遺物：**弥生土器小片が1点出土した。**時期：**古代以降か。

ST104 [遺構：第5図 PL38、石器：第12図 PL40]

位置：1区、I R08・09 グリッド。**検出：**IV層上面で確認した。**構造：**柱穴の配置は1間×2間の6本柱であり、主軸はN3° W、梁行2.50m、桁行2.90mを測る。他のSTと比較して、柱間が狭い。**出土遺物：**S85は緑色凝灰岩の磨製石鏃である。全面が研磨面で覆われているため素材はわからない。また、研磨線状痕は一部に認められるが大部分ははっきりしない。長さ50mmと磨製石鏃としては大形で、平面形は左右側縁上半部に肩部が認められ、縦長の五角形に近い形状を呈している。基部は左右対称に「へ」の字状に抉られており、凹端部は隅丸となる。器体中央やや基部よりに穿孔がある。穿孔は表裏両面から施されている。**時期：**古代以降か。

3. 土坑

検出された土坑12基は多くがピット状で、ここでは比較的規模の大きい土坑2基について記述する。

SK101 [遺構：第5図、土器：第11図、石器：第12図 PL40]

位置：1区、I M25 グリッド。古墳時代前期のSB101の北東にある。**検出：**IV層上面で確認した。**埋土：**黒色土の単層。**構造：**長軸102cm、短軸68cmの不整な円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは13cm。**出土遺物：**弥生時代の甕28が土坑内東側から出土した。28は外面のみに輪積み痕が観察される。S02は黒曜石の石鏃である。全面が平坦で細かい剥離で覆われているため素材はわからない。平面形は縦長の二等辺三角形を呈し、基部中央に細い茎が作りだされているが、茎端部は欠損している。左右側縁は滑らかで鋸歯縁状を呈さない。横断面形は凸レンズ状を呈す。**時期：**弥生時代後期か。

SK102 [遺構：第5図]

位置：1区、I R13 グリッド。ST104の南西にある。**検出：**Ⅳ層上面で確認した。**埋土：**黒色土の単層で、礫が混入する。**構造：**長軸72cm、短軸40cmの不整な円形を呈する。断面形は段を持つ。検出面からの深さは38cm。**時期：**出土遺物がなく、時期決定ができない。

4. 溝跡

溝跡の検出面は大きく2つに分かれ、Ⅲ層上面および中位で確認した溝跡がSD111・112・113・114・201・202・203・205・207で、その他がそれ以下のⅢ層下部もしくはⅣ層上面での検出である。Ⅲ層が弥生時代から古墳時代の堆積層であることから、Ⅲ層上面で検出された溝跡は、古代以降に帰属する溝跡と考えられる。

SD105 [遺構：第3・6図 PL38]

位置：1区、I M21 グリッドほか。**重複関係：**SD110・111を切る。SD109・114と切り合が新旧不明である。**埋土：**黒褐色土を主体とする。**構造：**1区北端から南に伸びて、蛇行する。南に向かい浅くなり、一端途切れて、8mほどで続きが延びて、くの字に西に曲がり、先端で浅くなり消えてゆく。長さ70.0m、幅1.6m、深さ7～22cmを測る。断面形は鍋状を呈する。**出土遺物：**縄文時代、弥生時代、古代の土器片が少量出土した。**時期：**出土遺物が少なく時期決定は難しいが、古代の遺物が含まれることから古代以降の遺構と考えられる。本溝は、北に隣接する寄塚遺跡群でも続きが検出されている。何らかの区画溝の可能性もあるが、性格は明らかでない。

SD106 [遺構：第3・6図、土器：第11図 PL39]

位置：1区、I M21 グリッドほか。**重複関係：**SD111を切る。SD110と切り合が新旧不明である。**埋土：**黒色土を主体とする。**構造：**1区北端から南に伸びて、南に向かい浅くなり、消えてゆく。長さ19.5m、幅1.4m、深さ15cmを測る。断面形は皿状を呈する。**出土遺物：**弥生時代の土器片が少量出土した。14は壺の口縁部である。**時期：**出土遺物が少なく時期決定は難しいが、隣接するSD105と平行していることから、SD105と同様の古代以降の遺構と考えられる。北に隣接する寄塚遺跡群でも続きが検出されている。

SD109 [遺構：第3・6図]

位置：1区、I W06 グリッドほか。**重複関係：**SD105・114と切り合が新旧不明である。**埋土：**黒褐色土である。**構造：**SD105から南に伸びて、南に向かい浅くなり、消えてゆく。長さ14.0m、幅0.6m、深さ15cmを測る。断面形は鍋状を呈する。**時期：**出土遺物がなく、時期決定ができない。

SD110 [遺構：第3・6図 PL38、土器：第11図 PL39、石器：第12図 PL40]

位置：1区、I M21 グリッドほか。**重複関係：**SD105・111に切られる。SD106・113と切り合が新旧不明である。**埋土：**黒色土が主体である。**構造：**1区北端から南西に伸びて、調査区外へ。長さ44.0m、幅2.4m、深さ22～31cmを測る。断面形は鍋状を呈する。**出土遺物：**縄文土器4点、弥生土器375点、須恵器1点ほかが出土した。15は壺で口縁部に縄文、頭部に横走沈線文、横描直線文、押し引き文が施される。底面に穿孔がある。16は壺で口唇部、口縁部に縄文、口縁部にはさらに山形沈線文が施される。15・16は弥生時代中期の栗林式土器である。17・18は小形壺で、外面に一部煤が付着している。19は折

り返し口縁を持つ甕か。20は細身の甕で、外面は口縁部から胴下半部までナデが施される。22は壺の口縁部で、口縁部・頸部に縄文が施される。石器はS29の打製石斧が出土した。S29は斜長石を多く含む青灰色の安山岩の打製石斧である。節理に沿って分割した板状剥片を素材とし、左右側縁辺に平坦で末端にステップが目立つ剥離により左右縁の表裏に加工を施しており、基部端の一部に稜面を残している。基部幅より刃部幅が広い鉢形を呈するようだが、刃部側半分以上を欠損している。**時期**：出土土器の主体は弥生時代中期の資料であるが、須恵器の出土もことから、弥生時代中期の可能性があるととどめたい。

SD112 [遺構：第3・6図、土器：第12図 PL39]

位置：1区、I R 13 グリッドほか。SD113と並行する。**検出**：Ⅲ層上面で確認した。**埋土**：黒褐色土を主体とする。水流痕跡は不明確で、中間層に粗め戻しを思わせるブロックを多量に含む層がある。**構造**：東西に伸びる溝で、西に向かい浅くなり、消えてゆく。長さ38.5m、幅1.2m、深さ26cm前後を測る。断面形は鍋状を呈する。**出土遺物**：古代の土器片が少量出土した。25・26は須恵器の杯で、底面は回転糸切である。**時期**：検出面および出土遺物から、古代以降の遺構と考えられる。

SD113 [遺構：第3・6図]

位置：1区、I R 16 グリッドほか。SD112と並行する。**重複関係**：SD110と切り合うが新旧不明である。**検出**：Ⅲ層上面で確認した。**埋土**：黒色土および黒褐色土を主体とする。**構造**：東西に伸びる溝で、西に向かい浅くなり、消えてゆく。長さ48.5m、幅2.1m、深さ12～41cmを測る。断面形は鍋状を呈する。**出土遺物**：縄文時代、弥生時代、古代の土器片が少量出土した。また、動物骨が出土した。動物骨については、京都大学名誉教授茂原信生氏、総合研究大学院大学准教授本郷一美氏、獨協医科大学技術員櫻井秀雄氏に鑑定していただき、次の所見をいただいている。ウマの下顎臼歯の頰側、あるいは舌側面の歯片が3点ある。歯種は不明である。いずれも歯冠もエナメル質である程度の長さがあるので老齢な個体ではない。他に不明の骨細片もある。**時期**：出土遺物がなく、時期決定が難しいが、SD112と同様に古代以降の遺構と考えられる。

SD202 [遺構：第7・8図]

位置：2区、II L15 グリッドほか。**重複関係**：SD207と切り合うが新旧不明である。**検出**：Ⅲ層上面で確認した。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：東西に直線的に調査区外へ伸びる。長さ60.0m、幅2.0m、深さ10～15cmを測る。断面形は皿状を呈する。**出土遺物**：弥生時代の土器片が少量出土した。**時期**：検出面から、古代以降の遺構と考えられる。

SD203 [遺構：第7・8図、土器：第12図 PL40]

位置：2区、II G24 グリッドほか。**検出**：Ⅲ層中位から上面で確認した。**埋土**：黒褐色土である。**構造**：途中で途切れるが、東西に直線的に伸びる。長さ45.0m、幅2.3m、深さ6～27cmを測る。断面形は皿状を呈する。**遺物**：土器片が少量出土した。29は近世の前山焼灯明皿である。**時期**：出土遺物から、近世以降と考えられる。

SD205 [遺構：第7・8図]

位置：2区、II H13 グリッドほか。**検出**：Ⅲ層中位で確認した。**埋土**：黒褐色土である。**構造**：東西に直線的に伸びる。長さ17.0m、幅1.3m、深さ9cmを測る。断面形は皿状を呈する。**時期**：出土遺物がなく、

時期決定が難しいが、検出面から古代以降の遺構と考えられる。

SD207 [遺構：第7・8図]

位置：2区、II H08 グリッドほか。**重複関係**：SD208を切り、SD201・202・204と切り合が新旧不明である。**検出**：Ⅲ層上面で確認した。**埋土**：黒褐色土である。**構造**：南北に直線的に伸びる。長さ76.5m、幅1.8m、深さ5～7cmを測る。断面形は皿状を呈する。**出土遺物**：縄文時代、弥生時代の土器片が少量出土した。**時期**：出土遺物が少なく、時期決定が難しいが、検出面から古代以降の遺構と考えられる。

溝跡としたなかには、上記のほか自然流路跡が多数ある。

洪水性流路の可能性があるのでSD111で、埋土に砂層を多く含み、流水痕跡が残る。Ⅲ層中位の検出であることから、時期は古代以降の可能性が高い。出土遺物は縄文時代から古代の土器片、石器類が出土した。23・24は弥生時代の壺と甕の破片である。S01は黒曜石の石鏃である。全面が細かい剥離で覆われているため素材はわからない。平面形は細長い二等辺三角形を呈し、基部中央に茎が作りだされているが、茎端部は欠損している。左右側縁は鋭い鋸歯縁状を呈している。横断面形はレンズ状を呈する。S05は珪質頁岩の石鏃である。全面が平坦で細かい剥離で覆われているため素材はわからない。平面形は縦長の二等辺三角形を呈し、基部中央部には茎が作り出されている。左右側縁は細かい鋸歯縁状を呈すが、鋸歯部尖端は若干丸みを帯びている。横断面形はレンズ状を呈する。S35は頁岩のみがき石である。扁平な円礫を整形せずにそのまま用いている。表面に磨面が認められ、一部は光沢を帯びている。また、磨面には細かい線状痕がところどころ見られる。側面や裏面にも滑らかな面が認められ、機能面となった可能性も考えられるが明確ではない。

SD114からは、縄文時代から古代の土器片が少量出土した。27は土師器の杯である。

1区南側には、自然流路跡がまともである。SD101は2区にまで伸びて検出され、縄文土器、土師器、石器類が出土した。11・12は縄文土器で、11が深鉢で堀之内1式である。2区の北側には、SD101を含む、流路が数本検出された。SD204は2区の中央部にあり、少量の土器片が出土した。30は縄文土器片で、加曾利E式である。

3～4区は自然流路跡のみで、SD301・302からは、縄文土器片が少量出土した。31・32は縄文時代中期の土器片で、31が口縁部中空突起、32が深鉢で胴部沈線による区画内にRL斜め縄文が施される。

なお、金属器は、銭(寛永通宝)とキセルが遺構外で出土した(PL40)。

第1表 竪穴住居跡一覧

IRNo.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	主軸方向	東西・南北 (m)	検出深 (m)	深さ (cm)	土器総重量 (g)	石器 (点数)	方位	形態	重複関係
4	SD101	古墳前期	I	1M24, 1R04	隅丸方形	N15°E	6.44・6.12	34.25	29	17442	22	中央	地床跡	SD111に切られる

第2表 掘立柱建物跡一覧

IRNo.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	主軸方向	梁行 (m)	桁行 (m)	面積 (㎡)	土器総重量 (g)	石器 (点数)	重複関係
5	ST101	古代以降か	I	1Q05, 1R01	1×2間	N10°W	3.30	4.25	14.00	33.7	-	SD107・108と切り合が 新旧不明
5	ST102	古代以降か	I	1M22, 1R02	1×2間	N7°W	3.16	3.75	11.90	87.0	-	-
5	ST103	古代以降か	I	1R01	1×1間	N2°W	2.68	2.68	7.18	20.8	-	-
5	ST104	古代以降か	I	1R08-09	1×2間	N3°W	2.50	2.90	7.25	-	1	-

第3表 土坑一覽

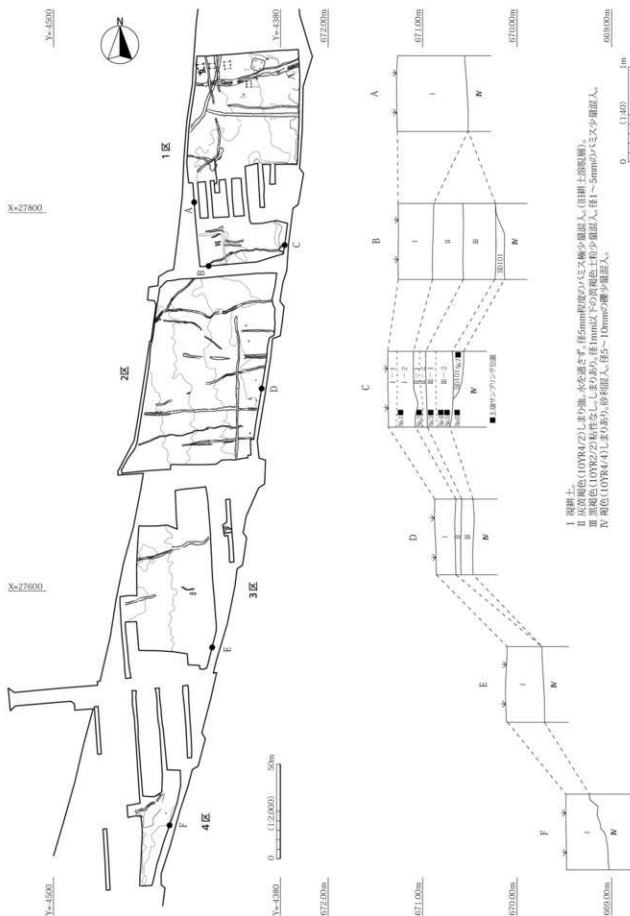
坑順 No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土層総重量 (g)	石器 (点数)	遺構関係
5	SK101	弥生前期前半	1	I M25	不整形	溝状	102	68	13	2226	2	-
5	SK102	?	1	I R12	不整形	小整形	72	40	28	-	-	-
8	SK201	?	2	II M23-24	円形	溝状	63	40	10	-	-	-
8	SK202	?	2	II M13	円形	溝状	44	29	14	-	-	-
8	SK203	?	2	II M14	円形	溝状	29	23	14	-	-	-
8	SK204	?	2	II M14	円形	溝状	26	23	12	-	-	-
8	SK205	?	2	II M09	円形	溝状	28	30	8	-	-	-
8	SK206	?	2	II M13	円形	溝状	26	31	18	-	-	-
8	SK207	?	2	II H18	円形	溝状	51	48	15	-	-	-
8	SK208	?	2	II H13	円形	溝状	61	53	28	-	-	-
8	SK209	?	2	II M08	円形	溝状	40	26	12	-	-	-
10	SK401	?	4	III L23	円形	溝状	54	46	21	-	-	-

第4表 溝跡一覽

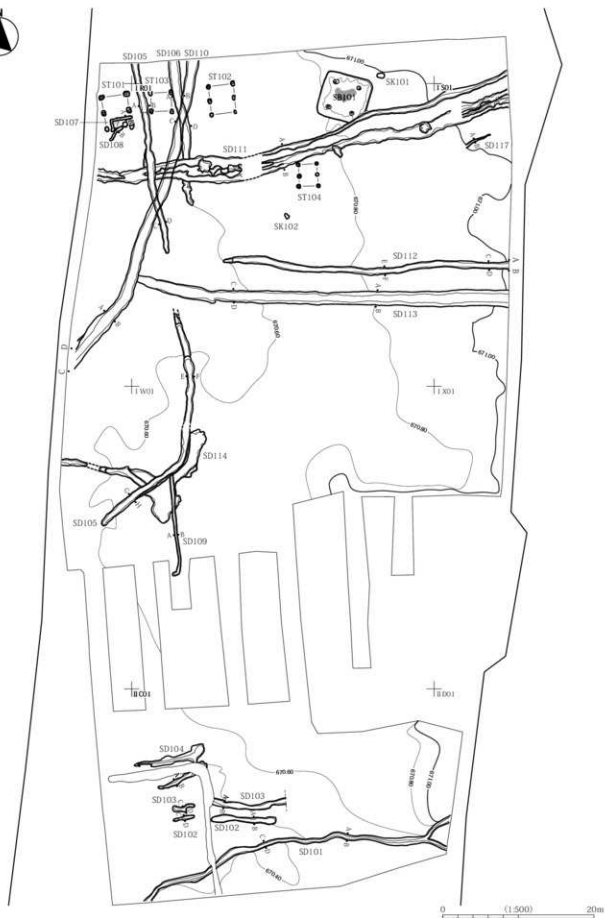
坑順 No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長さ (m)	最大幅 (cm)	深さ (cm)	土層総重量 (g)	石器 (点数)	遺構関係
3	SD101	弥生より古	1-2	I R24-25, II C12-13-14-15-16-17 II D11, II G03-04-06	蛇行	溝状	72.5	13	2 ~ 20	10038	3	SD206と合流
3	SD102	?	1	II C11-12-13	蛇行	溝状	11.5	12	6 ~ 12	-	-	-
3	SD103	?	1	II C06-07-08-11	蛇行	溝状	12.0	6.7	8 ~ 9	-	-	-
3	SD104	?	1	II C01-02-06-07	蛇行	溝状	9.5	6.7	11	123	-	-
3	SD105	古代以降	1	I M21, I R01-06-11-16-21-22 I V10-15, I W01-02-06	蛇行 (90°字に 曲がる)	溝状	70.0	16	7 ~ 22	1061	-	SD110-111を切る SD109-114と切り合うが断面不明
3	SD106	古代以降	1	I M21, I R01-06-07-11-12	蛇行	溝状	19.5	14	15	1434	-	SD111を切る SD110と切り合うが断面不明
3	SD107	?	1	I Q05, I R01	直線的に 曲がる	溝状	4.5	6.4	10	-	-	SD101と切り合うが断面不明
3	SD108	?	1	I Q05	蛇行	溝状	3.0	6.7	16	-	-	SD101と切り合うが断面不明
3	SD109	?	1	I W06-11-16	直線的	溝状	14.0	6.6	15	-	-	SD105-114と切り合うが断面不明
3	SD110	弥生中期	1	I M21-22, I Q15-20-25 I R01-02-06-11-16	蛇行	溝状	44.0	24	22 ~ 31	6797.0	-	SD105-111に切りれる SD106-113と切り合うが断面不明
3	SD111	古代以降	1	I N21-22, I Q10, I R03-04-05-06-07-08-09 I S01-02	蛇行	不整形	57.0	4.7	29	11850	25	SD101-SD110を切る SD105-106に切りれる
3	SD112	古代以降	1	I R12-13-15-18-19-20 I S11-12-16-17	直線的	溝状	38.5	12	25 ~ 27	2090	1	-
3	SD113	古代以降	1	I R16-17-18-19-20, I S16-17	直線的	溝状	48.5	21	12 ~ 41	1960	1	SD110と切り合うが断面不明
3	SD114	古代以降	1	I V09-10, I W01-02-06-07-11	蛇行	不整形	17.5	18	19	2560	6	SD105-109と切り合うが断面不明
3	SD117	?	1	I S01-06	蛇行	溝状	3.7	6.5	6	-	-	-
7	SD201	古代以降	2	II M25-23-24, II Q04-05 II R01-02-03	直線的	溝状	38.0	14	3 ~ 11	20	-	SD207-210と切り合うが断面不明
7	SD202	古代以降	2	II L15-17-18-19-20 II M11-12-13-14-16-17-18-19	直線的	溝状	60.0	20	10 ~ 15	1550	2	SD207と切り合うが断面不明
7	SD203	奈良以降	2	II C24-25, II E21-22-23-24-25	直線的	溝状	45.0	23	6 ~ 27	1315	-	-
7	SD204	縄文中期後半 - 奈良	2	II M01-02-03-04-06-07, II L09-10	蛇行	溝状	44.0	14	6 ~ 13	2845	-	SD207と切り合うが断面不明
7	SD205	古代以降	2	II H13-14-15	直線的	溝状	17.0	13	9	1940	1	-
7	SD206	弥生より古	2	II G07-08-09-10-12 II H01-04-05-06-07-08	蛇行	溝状	64.5	21	20 ~ 30	-	1	SD101と合流 SD109と切り合うが断面不明
7	SD207	古代以降	2	II H08-12-13-18-23 II M03-08-13-18-23 II R02-03-08	直線的	溝状	26.5	18	5 ~ 7	1270	-	SD208を切る I SD201-202-204と切り合うが断面不明
7	SD208	弥生より古	2	II L22-23-24-25, II M21-22-23 II Q01-02	蛇行	溝状	58.0	10	2 ~ 8	1260	-	SD207に切りれる
7	SD209	弥生より古	2	II G07-12-13-14-15 II H16-17-22	蛇行	溝状	36.4	11	8 ~ 10	-	-	SD206と切り合うが断面不明
7	SD210	?	2	II Q05, II R01-02	直線的	溝状	15.8	6.5	6 ~ 10	-	-	SD201と切り合うが断面不明
7	SD211	?	2	II L12-13	蛇行	溝状	7.5	12	9	-	-	-
9	SD301	縄文後期	3	III A05, III H01-02-05	蛇行	溝状	19.0	15	20	3223	-	-
9	SD302	弥生より古	3	II W02-06-07 II V09-10-11-12-13-14	蛇行	溝状	54.0	20	26	4534	3	-
9	SD303	?	3	II V24-25	蛇行	不明	5.7	6.8	-	-	-	-
9	SD304	?	3	II W07	蛇行	溝状	4.0	6.8	10	-	-	-
10	SD401	弥生より古	4	III L17-18-21-22	蛇行	溝状	17.5	15	20	-	1	-



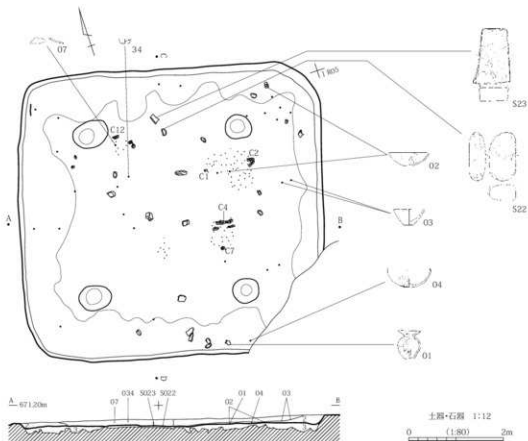
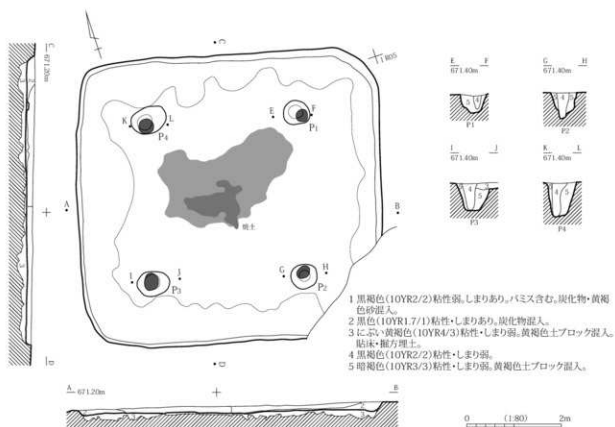
第1図 遺跡範囲図と地区設定図



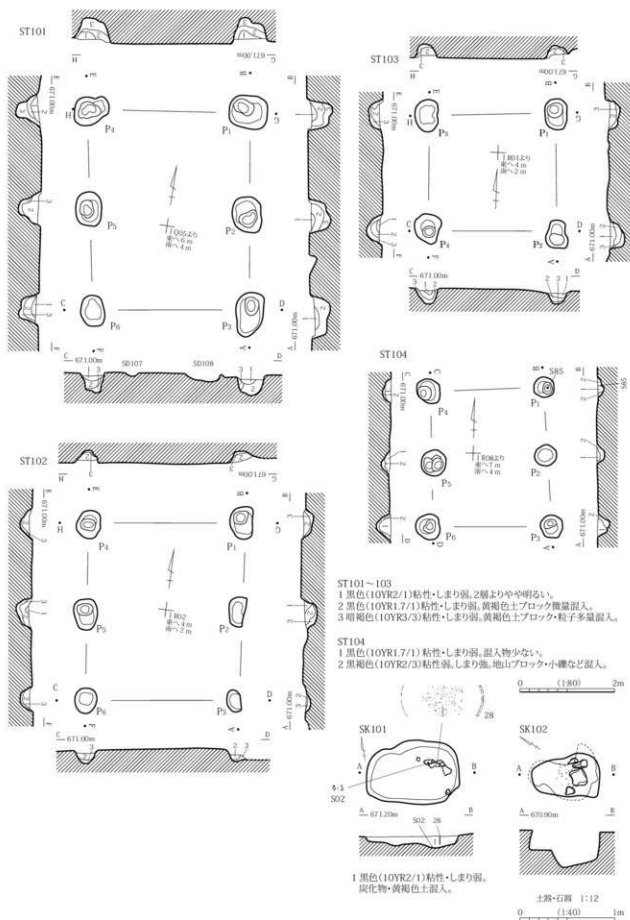
第2図 全体図・基本層序



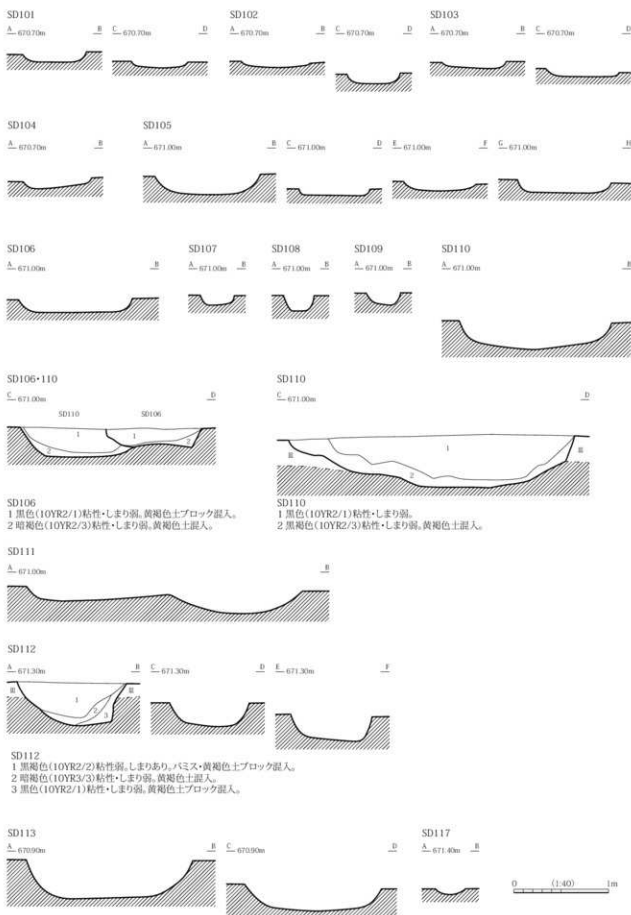
第3図 1区 全体図



第4図 SB101 遺構図



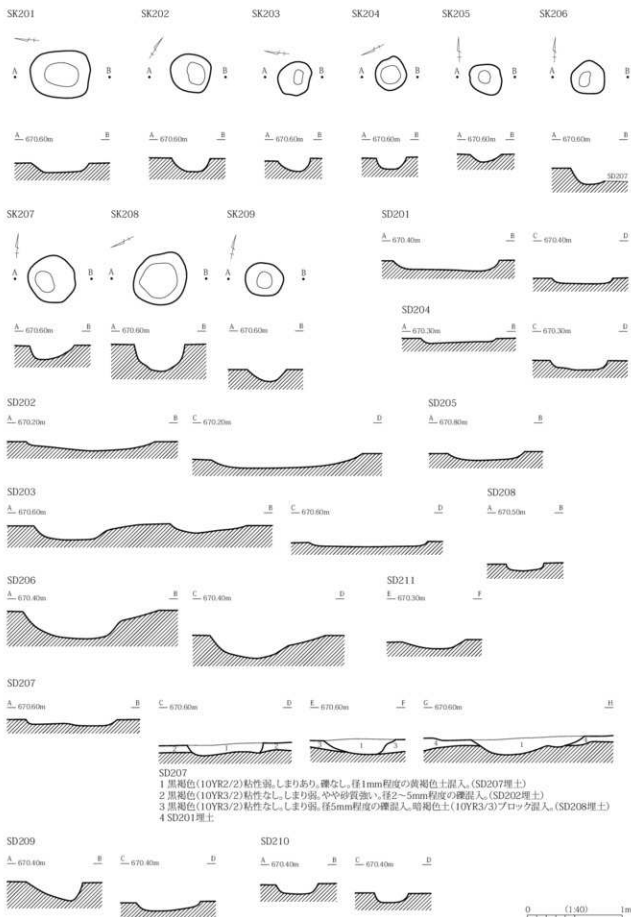
第5図 1区 ST・SK 遺構図



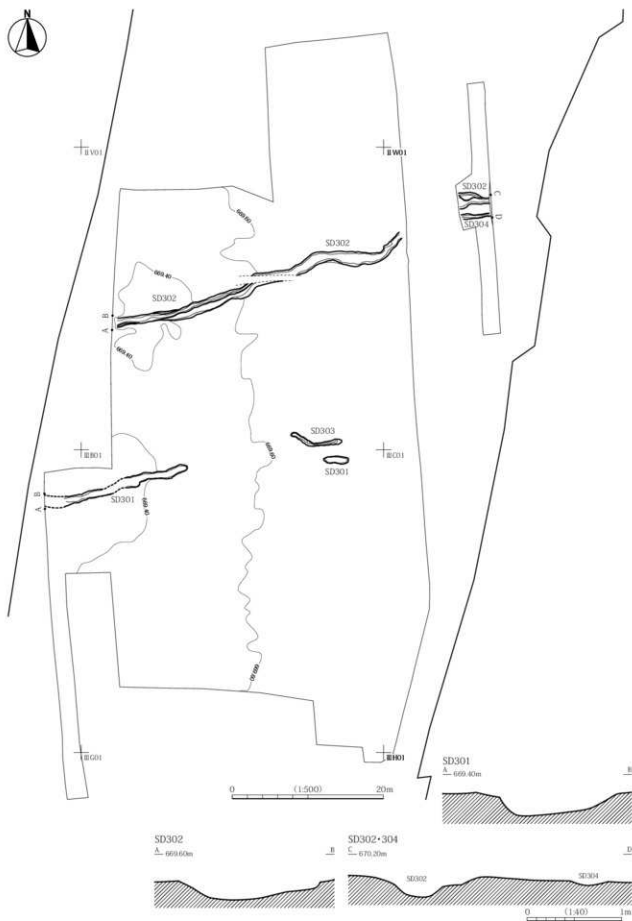
第6図 1区 SD 遺構図



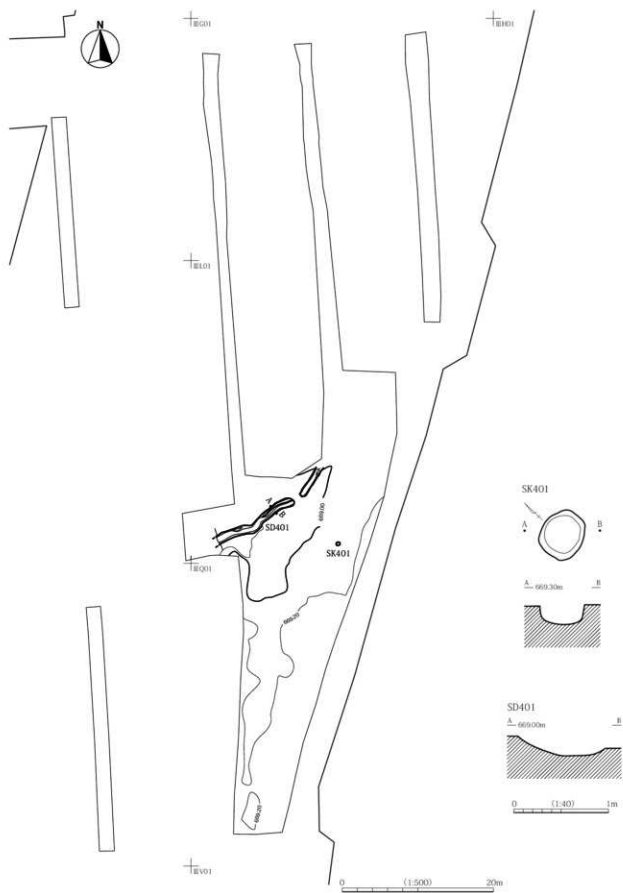
第7図 2区 全体図



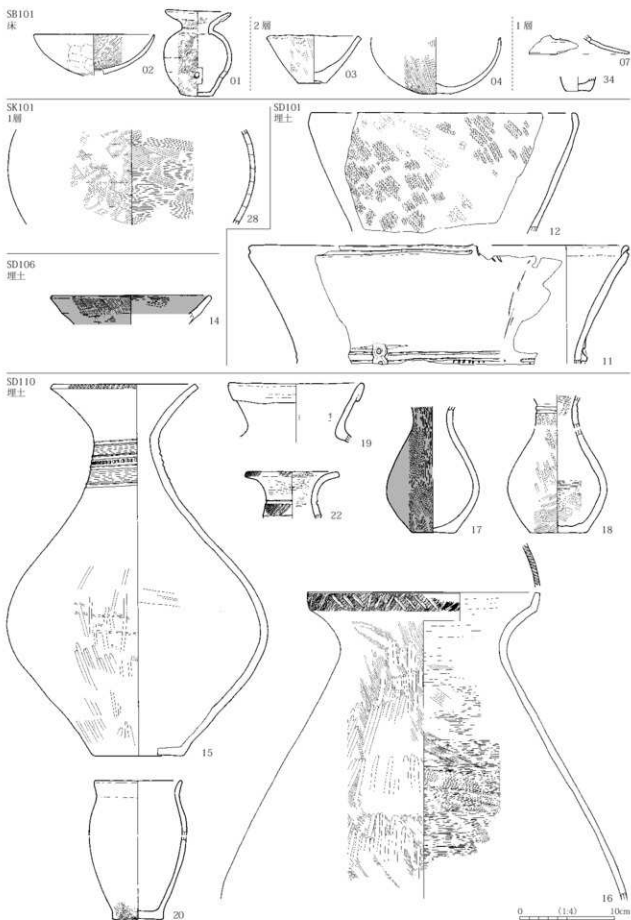
第8図 2区 SK・SD 遺構図



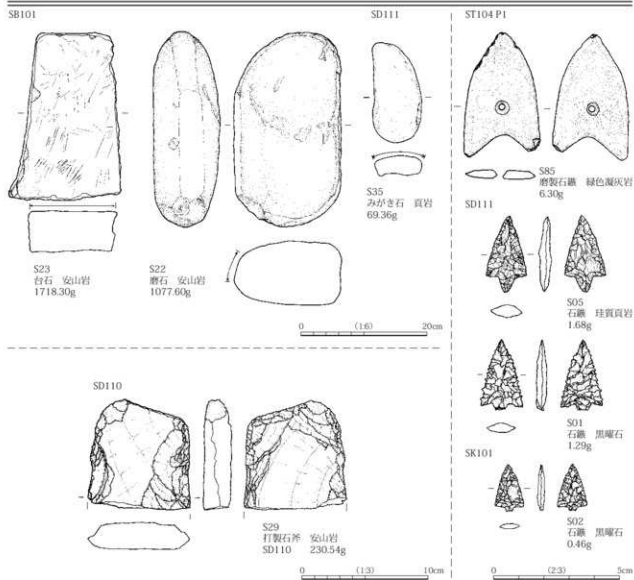
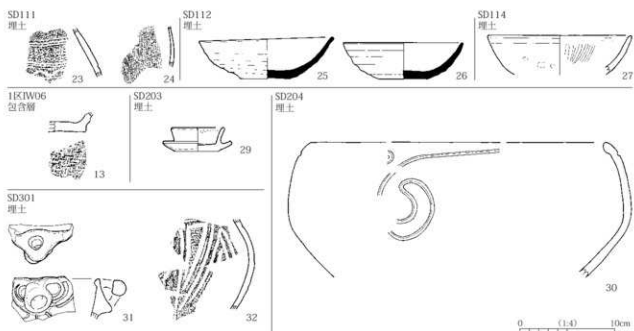
第9図 3区 全体図・SD 遺構図



第10図 4区 全体図・SK・SD 遺構図



第11図 遺物図1



第12図 遺物図2

第3節 小結

今井西原遺跡では昭和49年に佐久市教委による調査がなされているが、遺跡の状況はほとんど不明であった。今回の調査により、古墳時代前期の竪穴住居跡、古代と考えられる掘立柱建物跡、古代以降の区画性を持った溝跡、多数の自然流路跡などが検出されたことから、今井西原遺跡の一端が明らかにされた。調査区は南北に長いが、遺構の配置には偏りがある。竪穴住居跡、掘立柱建物跡は1区北端にまとまる。2～4区では、溝跡と土坑のみが検出されているが、3・4区の溝跡は自然流路跡である。

縄文時代は主に自然流路跡から少量の遺物が出土した。中期後半～後期の土器や石鏃、打製石斧などが見られ、短期的なキャンプ地としての利用が想定される。弥生時代は、SD110から中期の土器が多数出土しているが、溝跡がこの時期に帰属するか明瞭ではない。この溝跡は隣接する寄塚遺跡群でも検出され、弧状を呈して調査区外へ伸びてゆくため、環濠とすれば集落の中心は、調査区外西側と考えられる。

古墳時代は前期(4世紀代)の竪穴住居跡1軒が検出された。その後、古代の遺物を伴う溝跡がつかれるまで、遺構の空白地となる。古代以降では溝跡と掘立柱建物跡4棟が検出されている。調査において、水田跡を確認できなかったが、水田開発がはじまるのは、近世と考えられる。台地中央部付近に東西方向の直線的な水路の掘削が行われており、近世陶磁器が出土している。近隣に中世の今井城跡も存在することから、一部の水路は中世に掘削された可能性もあろう。なお、植物珪酸体分析からは栽培植物のイネ属の植物珪酸体は、I～III層の土層から検出される傾向が指摘されたが、中世以前の水田開発の具体的なありようは不明である(第8章第2節参照)。

以上、今回の調査では古墳時代と平安時代の小規模な集落の状況が明らかにされた。また、当地の水田開発時期は近世の可能性が示唆された。今後、隣接する寄塚遺跡群、今井宮の前遺跡の調査成果と併せて、佐久平における該期の様相を探求する上で、新たな資料を提供したといえよう。

第7章 今井宮の前遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1. 遺跡の概観

今井宮の前遺跡は佐久市中央地域の今井地区に所在し、千曲川と滑津川が合流する河岸段丘上に位置する(第1図)。標高は670m内外で、千曲川との標高差は28mを測る。『佐久市志歴史編(一)原始古代』の遺跡一覧表によると、佐久市遺跡番号235、所在地は佐久市今井宇宮の前・面(旧公園では西と表記)・居屋敷・前田であり、種別は包蔵地、時代は平安時代から中世、備考には分布多いとある。遺跡範囲は中世の屋敷平城である今井城跡(遺跡番号236)をコの字状に取り囲むように指定されている(佐久市1995)。本遺跡内にある今井集落は、今井城跡の東北に隣接し、中世特有の村落形態を残しているといわれている(佐久市1993)。

今井宮の前遺跡に発掘調査履歴はない。今井城跡は平成21年度に佐久市教委が発掘調査を行っている(第1図)。調査範囲は小字名で「城」と呼ばれている本郭部分の24㎡で、土坑1基、ピット28基が検出された。土坑は弥生時代、ピットは中世建物の柱穴の可能性が考えられている。出土遺物は弥生土器片、中世または近世の陶磁器類(15世紀末の在産土銅片、かわかけ、18世紀の瀬戸・美濃の香炉片、常滑の壺か壺の破片など)、敲石、磨石、鉄釘(角釘)がある。(佐久市教委2010)。

2. 調査の概要

今回の調査範囲は遺跡全体では西側にあたり、新海宮境内と今井城跡との間をほぼ南北に縦断する(第2図)。用地内は主に水田に利用され、一部に宅地と畑地がある。また調査範囲北側で市道31-3号線と13-1号線が交わる。調査は17～19年度に実施した。調査区は市道や農道、水田畦などから1～5区に分けた。17年度は18年2～3月に南西範囲(1～3区)5,000㎡についてトレンチ調査(12本・1,081㎡)を行い、堆積状況と遺構分布、遺構の確認面などの情報を入手した。その結果から、面調査を必要と判断した南端(3区)について、部分的に表土剥ぎを実施した。

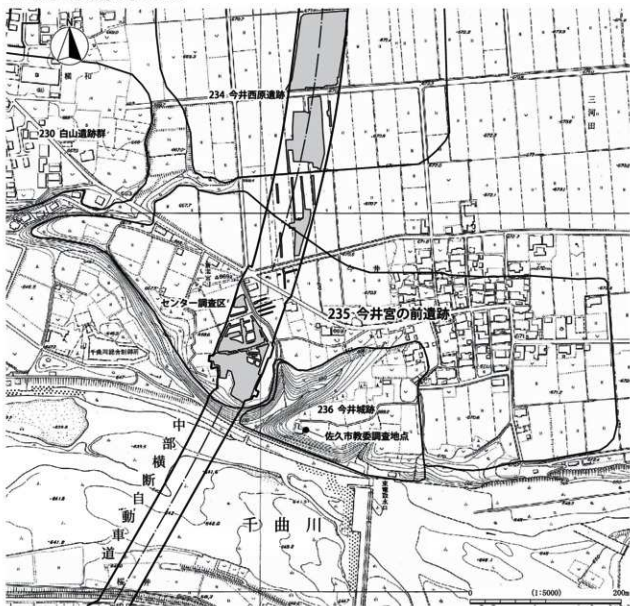
翌18年度の調査範囲は5,000㎡である。4～6月に3区の表土剥ぎと遺構調査を並行して行った。また1・2区では17年度トレンチと直行する南北方向にトレンチを掘削し、遺構範囲の北限を捉えた。その結果2区南側で遺構が確認され、その周辺についても表土剥ぎと遺構調査を実施した。1区についても地層の乱れがあった範囲を面調査したが、風倒木痕に起因するもので遺構は検出されなかった。調査に当たっては周囲の営農を考慮し、仮設畦畔の工事等を行った。また19年2月には5区についてもトレンチ調査(4本・73㎡)を行った。その結果、遺物包含層より須恵器壺片1点が出土するのみで、遺構は確認されず、面調査の必要はないと判断した。土層観察と図化、トレンチ位置の測量等を行って、調査を終了した。

19年度は4～5月に4区3,000㎡についてトレンチ調査を実施した。トレンチ4本・99㎡を掘削した結果、遺物包含層から土師器の杯らしき土器片と近世皿片各1点が出土するのみで、遺構は確認されず、面調査の必要はないと判断した。土層観察と図化、トレンチ位置の測量等を行い、調査を終了した。また4・5区の調査結果を踏まえ、遺跡を横断する市道についても調査不要と判断し、全ての調査を終えた。

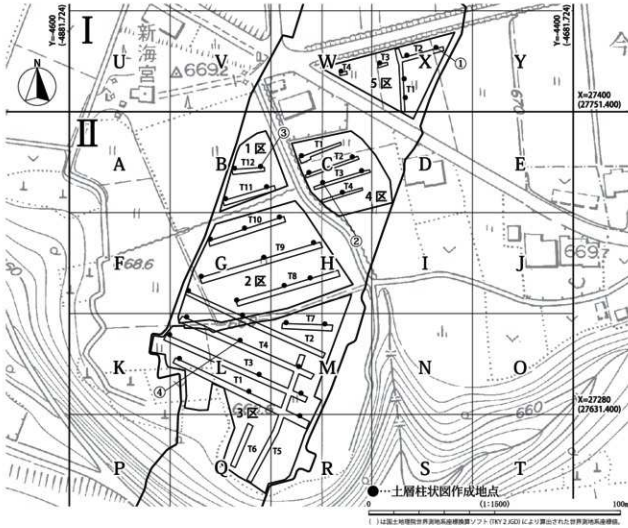
3. 基本層序

トレンチ調査の際、壁面の土層観察を行い、堆積状況について各トレンチ1～3地点、合計38地点で土層柱状図を作成した（第3図）。調査範囲は千曲川に向かうように北から南へ緩やかに傾斜し、最南端は千曲川の段丘崖となる。基本土層は大きく4層に分けられる。Ⅰ層は表土、耕作土であり、どの地点も水田に利用され、水田土壌化している。Ⅱ層は粘性の強い黒色土である。水田利用以前の旧表土であったと推定される。Ⅲ層は暗褐色から灰黄褐色土で、土質はⅡ層とⅣ層との中間的な様相であり、漸移層と位置づける。Ⅰ～Ⅲ層からは散漫ながら遺物が出土する。Ⅳ層はにぶい黄褐色の砂層である。本層がいわゆる地山と呼ばれる層にあたり、Ⅳ層上面を遺構検出面とした。

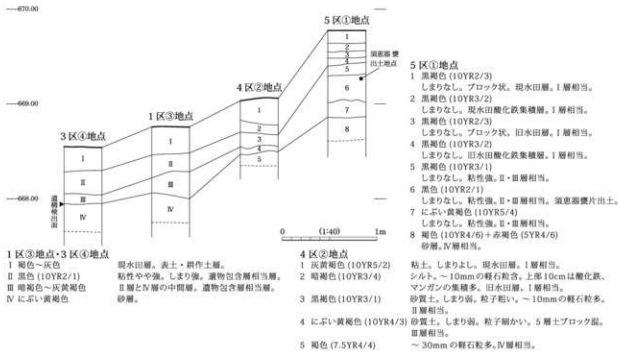
遺構調査で3区SK002周囲の基盤層断面を観察したところ、地表下1.6mまで砂礫層が続くことを確認した。砂礫層は砂粒や含有物の差異から幾層にも分層可能で、酸化した鉄分が硬く集積する層もある（第13図）。また2区中央部をトレンチ状に深く掘り下げた地点でも地表下1.6mまで砂礫層を確認した。なお調査終了後、5区において本工事の切り土掘削前面を観察した際も、地表下10数mまで砂礫層が連続していることを確認できている。



第1図 周辺地形図と調査範囲



第2図 トレンチ配置と調査区の設定



第3図 基本土層柱状図

第2節 遺構と遺物

今井宮の前遺跡では、掘立柱建物跡1棟、杭列跡(柵跡)2列、土坑96基を検出した。なおI層を掘いだ時点で溝跡と認定した痕跡のうち、遺物の出土した溝跡については便宜上、溝跡の遺構番号SDを付した。その後、整理段階で検討した結果、一部は風倒木痕の周縁部に帯状に落ち込んだ黒褐色土であること、一部は近代(近世)に整備された農業用水の溝跡と判断し、遺構から除いた。

遺構は全て半截し、その土層断面について、図化と写真撮影を行った。その後完掘し、平面図化と写真撮影を行った。また必要に応じて遺物の出土状況も記録した。本報告では遺構分布図(第6図)と遺構の分布状況に合わせて作成した遺構分布拡大図(第7～10図)、個別遺構図(第11～18図)を提示した。また写真図版(PL41～48)については、特徴的な遺構について掲載した。以下、遺構ごとに記述する。

1. 掘立柱建物跡

2区の南西隅、3区の土坑群からやや離れた地点で掘立柱建物跡1棟を検出した。2区で唯一の遺構である。各ピットについて、調査段階で建物の柱穴と想定したが確定には至らなかったため、土坑番号を付した。整理段階でそれらを1棟の建物に伴う柱穴と判断し、改めてST01と登録した。なお土坑番号をそのままピット番号としてある。各ピットの詳細は表に記した(第2表)。

ST01 [遺構：第11図]

位置：2区、II G22、II L02グリッド。**検出：**IV層上面にて検出。ピット5基SK123～127について、その配置から上屋を一とする掘立柱建物跡の柱穴と認識した。長軸をほぼ東西方向にとる2×1間の建物で、本来、南東隅にあったピットはトレンチ調査により消失したと考えられる。**重複関係：**なし。**埋土：**SK123は黒褐色土が中央に入る。他のピットは黒褐色土の単層である。**構造：**2×1間の平面長方形で、主軸はN86°E。規模は北辺で桁行4.40m。梁行1.23mである。**柱間：**桁行SK127-126/2.48m、SK126-124/1.92m、SK125-123/1.80m。梁行SK126-125/1.20m、SK124-123/1.23m。**ピット：**深さは10～34cm。南西隅のSK123は他より平面的に大きく深く、平面形も楕円形である。他4基は円形の小ピットで単層である。SK127の底面は平坦で、他は丸みをもつ。柱痕跡はない。底面標高は地形的に高い位置にある北東隅のSK127が最も高く、低い位置にある南西隅のSK123が最も低い。**出土遺物：**なし。**時期：**出土遺物がなく、周囲に関連する遺構もないため、時期決定ができない。

2. 杭列跡(柵跡)

調査時点で3区のII Lグリッド地点の土坑群から、土坑5基がほぼ直線状に並ぶ部分を2箇所見出した。整理段階で再検討したが、二つの土坑列は1mほど離れて並ぶものの、軸線がややずれていて、同じ建物とは認めなかった。そのためそれぞれを杭列跡(柵跡)として、遺構記号SA01とSA02とした。なお調査時に付けた土坑番号をそのままピット番号としてある。各ピットの詳細は表に記した(第3表)。

SA01 [遺構：第12図 PL45、土器：第20図 PL49]

位置：3区、II L08・09・13・14グリッド。**検出：**IV層上面にて検出。ピット5基SK052、053、055、057、060が西北西から東南東の方向に並ぶ。いずれも柱穴状の土坑であり、杭または柱が据えられたピット列と想定した。南にSA02と並ぶ。**重複関係：**なし。**埋土：**いずれも黒褐色土の単層である。**構造：**

全長5.4m。ピット間の距離は北から0.78/1.20/1.56/1.86m。主軸はN61°W。ピットの平面形は円形が4基、方形が1基。北西隅のSK052が直径38cmと最も大きく、南東隅のSK060が直径10cmと最も小さい。深さは16～24cmで、中央のSK055、057が24cmで最も深い。**出土遺物**：SK055から15世紀後半～16世紀初頭のかわけ（口縁部～底部1/3）が1点出土している（第20図・PL49～7）。**時期**：土器1点のため確定はできないが、15世紀後半～16世紀初頭頃とする。

SA02 [遺構：第12図 PL45]

位置：3区、II L08・09・13・14グリッド。**検出**：IV層上面にて検出。柱穴状のピット5基SK067、066、069、062、064が西北西から東南東の方向に並ぶ。北にSA01と並ぶ。**重複関係**：なし。**埋土**：いずれも黒褐色土の単層である。**構造**：全長6.6m。ピット間の距離は北から2.40/1.80/1.02/1.38m。主軸はN71°W。ピットの平面形は円形が3基、方形が2基。南東隅のSK064が直径36cmと最も大きく、その北西隅のSK062が直径18cmと最も小さい。深さは20～26cm。**出土遺物**：なし。**時期**：隣接するSA01と関連性を考えて、15世紀後半～16世紀初頭頃と推測する。

3. 土坑

検出された土坑96基はすべて3区で検出された。その分布は3区でも南西から南側の、千曲川の段丘崖寄りに偏っている。

土坑のうち4基は長径が2mを越す大形土坑である。それ以外は掘立柱建物跡や杭列跡のピットに似た柱穴状の小形の類と、長径1m前後の中形の類である。ここでは大形土坑とそれ以外の小・中形土坑に分けて、記述する。また各土坑の詳細は別表に記した（第4表）。

(1) 大形土坑

長径が2mを越す土坑4基は3区の中央で、やや直線状に分布する。最も大きなSK002が3区西寄りにあり、そこから27mほど南東側に離れてSK117とSK118が隣り合う。そこから更に南東に15m離れてSK121がある。形態は大きく2つに分けられる。1つは円形ですり鉢状の形態でSK002が当てはまる。1つは楕円形で土坑下部が有段状に深く落ち込む形態でSK117・118・121が当てはまる。そのうち、下部形状を見ると、SK117・118は円形に落ち込み、SK121は略方形に落ち込み違いがある。以下、遺構ごとに記述する。

SK002 [遺構：第13図 PL45・46]

位置：3区、II L11グリッド。**検出**：南側一部は17年度のトレンチ調査で確認した。面調査により、IV層上面にて検出。当初西側張り出し部を別土坑（SK003）としたが、調査を進めていくなかで、本土坑に伴う部分と認識した。**埋土**：最下部の4層には黒褐色の砂質シルトに褐色土と暗褐色土が薄く間層として入る。3層は粘性のある暗褐色砂質シルトで、2層は白色砂粒や軽石粒を含む黒褐色砂質シルトである。最上部の1層にはいび黄褐色砂質シルト。また2層と3層上部には大小の河原礫が多量に入っている。**構造**：長径442cm、短径420cmの不整形円形を呈し、断面はすり鉢状で深さは125cmある。底面は丸く非常に小さい。また南西側面には、ほぼ全面に10～40cmほどの大きさの平坦な河原礫が乱積みされている。礫と掘り方の間には砂質シルトが入っていたが、堆積状況までは捉えていない。石積みの外側には長径70cm、深さ20cmほどの浅い落ち込みが張り出し、その上面に平石2点が飛び石状に並ぶように検出された。**周囲の地層**：完掘後に土坑周囲の基盤層断面を重機で掘削し、観察した。周囲は幾層にも連続する

砂礫層からなっているが、その間にある硬くしまった酸化鉄の集積層（Ⅳ-5層）が確認された。集積層は遺構検出面下80cmで、2～10cmほどの厚さで水平に堆積し、本土坑に掘り抜かれている。集積層の下は脆い砂礫層が続くが、本土坑の底部周辺に限定して砂礫層にグライ化（a層）と鉄分・マンガン集積（b層）が広がる。土坑埋土にはこうした変色作用は観察されていない。このことは土坑が埋没する以前に、地下水位が上がり底部に水が溜まる時期と水位が下がって乾いている時期とが繰り返されていたことを推察させる。なお調査時にも集積層上面から地下水が浸み出し、底部に水が溜まることがあった。**出土遺物**：埋土から磨減した土師器片1点、下層からモモらしき種子が出土している。**時期**：近世前半か。

SK117 [遺構：第14図 PL47]

位置：3区、Ⅱ L19・20・24 グリッド。**検出**：南側一部は17年度のトレンチ調査で確認した。面調査により、Ⅳ層上面にてSK118・119と合わせて検出。前後関係や堆積状況を明らかにするため先行トレンチを掘削した後、完掘した。**重複関係**：SK118と接し、土層観察からSK118に切られる可能性が高いが、明確ではない。上部に近代（近世）の溝跡がある。**埋土**：底部から中位までは砂の混じる暗褐色粘土の12層が厚く堆積し、その上に暗褐色土の10・11層、最上部ににぶい黄褐色土と褐色土の混じる9層が水平に堆積する。**構造**：上面は長径296cm、短径256cmの楕円形を呈し、断面は有段形で深さは90cmある。底面は平坦で小礫が点在する。完掘後、SK002と同じく本土坑とSK118の周囲も重機で掘削し、SK002同様に周囲の基盤層を確認したところ、同じように集積層を掘り抜き、底部付近の砂礫層にグライ化による変色と鉄分などの集積が認められた。**出土遺物**：なし。**時期**：近世前半か。

SK118 [遺構：第14図 PL47]

位置：3区、Ⅱ L19 グリッド。**検出**：東側一部は17年度のトレンチ調査で確認した。面調査により、Ⅳ層上面にてSK117・119と合わせて検出。**重複関係**：SK119に切られる。SK117を切る可能性が高い。**埋土**：6層に分層する。底面には砂混じりの褐色粘土の8層が薄く堆積し、その上に暗褐色粘土の7層、黒褐色砂の6層がある。上部には粘土混じりの砂層である4・5層が薄く堆積する。上部にはⅢ層と似た2層土が乗る。**構造**：上面は長径204cm、短径188cmの楕円形を呈し、断面は有段形で深さは80cmある。底面は平坦である。形態は二回りほど小振りだが、SK117によく似る。**出土遺物**：なし。**時期**：近世前半か。

SK121 [遺構：第14図 PL48、陶器：第20図 PL49、石器：第20図 PL49]

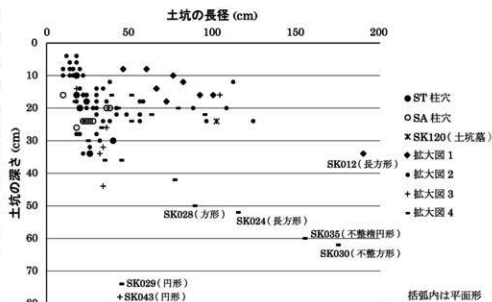
位置：3区、Ⅱ M21 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面にて検出。**重複関係**：南側上部は旧水路（近代）に壊されている。**埋土**：黒褐色土の2層が全体に堆積し、上部に暗褐色土の1層が薄く乗る。2層には石臼の破片や陶器碗、大小の河原礫などが密に重なり合っている。**構造**：上面は長径264cm、短径176cmのやや不整な楕円形を呈し、断面は有段形で深さは62cmある。土坑下部は略方形に掘りくぼむ。全体の形態はSK117やSK118に似る。また他の大形土坑同様に基盤層を確認したところ、ほぼ同じ所見が得られた。**出土遺物**：石臼片4点や石鉢、礫などに混じって2層土内から17世紀前半の陶器碗14（PL49-8）が出土している。また上層からは18～19世紀前半の備前産、磁器の染付碗（PL49-9）が出土している。石臼と石鉢については、出土遺物の頂で触れる。**時期**：2層出土の陶器碗片を根拠として、17世紀前半、近世前半頃の土坑と考える。

(2) 小・中形土坑

小・中形土坑の類とした土坑は92基である。そのうち、確実に性格を捉えられたのは人骨1体が屈葬

された土坑墓のSK120のみである。また遺物が出土した土坑は14基あるが、土器や陶磁器は小片で、後世に混入した可能性も否めず、それを根拠として時期や土坑の性格を捉えにくい状況である。埋土も差異が少なく、時期分類などの目安とはならなかった。

そこで土坑の法量と分布範囲の関係性をみるため、散布図グラフ



第4図 土坑の法量と分布範囲

を作成した(第4図)。分布範囲は28.8×19.8mに画した遺構分布拡大図1～4(第7～10図)を利用して、それぞれの範囲内にある土坑に分類記号を付け、長径を横軸、深さを縦軸とした。また建物跡ST01と杭列跡SA01・02のピットと土坑墓SK120についても分類記号を変えて、グラフ上に点を落とした。

このグラフと遺構分布拡大図を併せてみていくと、拡大図1エリアには平面形が大きく、浅い土坑が散漫に分布している。また拡大図2エリアには最も多くの土坑が分布する。特に北西部の杭列跡(SA01・02)周辺にはその柱穴によく似た小形土坑が群在し、組むことはできなかったが何らかの建物が存在した可能性がある。また中央から東部分の大形土坑SK117・118および土坑墓SK120付近には土坑墓と同サイズで浅い中形の土坑がまとまる。拡大図3エリアと4エリアでは段丘崖近くに土坑が分布し、柱穴状の小形土坑以外に他エリアでは見られない中形で深い土坑がある。以下、特徴的な土坑について記述する。

SK007 [遺構：第15図 PL48]

位置：3区、II L06グリッド。調査範囲の最も西寄り。**検出**：IV層上面にて検出。**埋土**：黒褐色土の単層で、中央底面に偏平な河原礫がある。**構造**：長径76cm、短径76cmの円形で、断面は皿状で深さは10cmと浅い。**出土遺物**：なし。**時期**：不明である。周囲に同サイズで円形や方形の土坑が分布するが、関係性は捉えられなかった。

SK024 [遺構：第17図 PL48]

位置：3区、II R11・16グリッド。調査区の最も南寄りで、千曲川の段丘崖に近い。**検出**：IV層上面にて検出。**埋土**：底部から上部まで褐色粒子を含む黒褐色土が厚く堆積し、表層に黄褐色粒子を含む暗褐色土が薄く堆積する。**構造**：長径114cm、短径72cmのやや角のとれた長方形を呈し、断面は鍋状で深さは52cmある。底部は平坦で、側面はやや垂直気味に立ち上がる。**出土遺物**：なし。**時期**：不明。形状から陥し穴あるいは土坑墓の可能性はある。本土坑の西側にあるSK028も形態が良く似る。

SK032 [遺構：第18図、陶器：PL49]

位置：3区、II Q14グリッド。千曲川に近い調査区の南寄りにあたり、SK035が南に接する。**検出**：IV

層上面にて検出。北側一部がかく乱を受けている。**埋土**：褐色土ブロックの混在する暗褐色土の単層である。**構造**：長径94cm、短径72cmの整った長方形を呈し、断面は鍋状で深さは22cmとやや浅い。底部は平坦である。**出土遺物**：埋土から16世紀前半（大濠1期）の陶器丸皿の小片が出土（PL49-1）。**時期**：中世、16世紀前半と推定される。

SK035 [遺構：第18図]

位置：3区、II Q14・19グリッド。千曲川に近い調査区の南寄りにあたり、SK032が北に接する。**検出**：IV層上面にて検出。北側の上面を近代（近世）の溝跡にかく乱されている。**埋土**：4層に分層する。最下部にふい黄褐色土、次に暗褐色土がやや薄く堆積し、中央部に黒褐色土がやや厚くあり、上部にふい黄褐色土がある。**構造**：長径154cm、短径136cmの不整楕円形を呈し、断面は鍋状で深さは60cmある。底部はやや傾斜し、東壁は緩く開く。**出土遺物**：埋土上層から古代の黒色土器らしい小片が出土。**時期**：不明。

SK043 [遺構：第17図]

位置：3区、II R07グリッド。調査区の最も東南寄り。SK042が西に隣接する。**検出**：IV層上面にて検出。**埋土**：黒褐色土の単層である。**構造**：長径44cm、短径40cmの円形を呈し、断面は柱状で深さは78cmときわめて深い。底部は丸く、やや東側に寄る。**出土遺物**：埋土から中世の内耳鍋の底部小片が出土している（PL49-5）。**時期**：中世と推定される。本土坑とSK042は隣り合うように並ぶ。近くにあるSK044・045、SK046・047、SK049・050といった柱状の土坑3組も同じく隣り合うように検出された。しかしながら方向が一定ではなく、建物などとしては組めず、相互の関係性については不明である。なおSK046からは暮らしき青銅製品の破片が出土している。

SK119 [遺構：第14図 PL47]

位置：3区、II L19グリッド。**検出**：IV層上面にて検出。**重複関係**：大形土坑SK118を切る。**埋土**：黒褐色土の単層である。**構造**：長径96cm、短径96cmの楕円形を呈し、断面は皿状で深さは24cmと浅い。底面は平坦である。**出土遺物**：埋土からシカ歯片、炭化物、種実が出土する。**時期**：本土坑が切る大形土坑SK118が近世前半と推定され、少なくともそれ以後と考えられる。

SK120 [遺構：第17図 PL48]

位置：3区、II L20グリッド。大形土坑SK117が西側にある。**検出**：IV層上面にて検出。**埋土**：底面に黒褐色土（3層）が薄く堆積し、人骨は本層内から検出されている。その上に暗褐色土がやや厚く堆積している。**構造**：長径102cm、短径74cmの南北に軸を持つ不整長方形を呈し、鍋状で深さは24cmと浅い。**出土遺物**：人骨は北壁際に歯（骨1）、その南に真直ぐで細い形状の骨（骨2）、やや西側にやや歪み太い骨（骨3）、最も南側に真直ぐでやや細い骨（骨4）が並ぶ。また人骨の東壁際には二つに割れた偏平な安山岩とやや丸い多孔質の安山岩が出土した。骨は脆弱性が高く、歯以外を取上げることはできなかった。形質人類学の茂原信生氏による歯の鑑定によって、かなり若い10歳代後半の個体であると同定された。鑑定結果の詳細は出土遺物の項に記した。骨などの出土状況から頭位を北にし、東側を向いた屈葬状態で埋葬されたのではないかと推測される。また安山岩はかなり骨に近い位置から出土しているものの、一緒に埋葬されたものなのか、あるいは墓標の役割があったものなのかは判断できない。**時期**：周囲の土坑の出土遺物や重複関係などからすると、近世と考えられるが推定の域を出ない。

4. 出土遺物

上述したように遺構に伴う遺物が極めて少ないため、表土および遺物包含層などから出土した遺物についても概観し、遺跡を評価する一助としたい。なお、個別の観察表はDVDに収めてある。

(1) 土器・陶磁器

本調査で出土した土器・陶磁器は合計159点、1,474.7gである(註1)。地区別では2区と3区の出土量が大半を占め、1・4・5区は1、2点ずつ出土したのみである。出土量の偏りは面調査の有無にも関わらず、遺構が南側段丘崖寄りの3区と2区南西隅に偏ることと符合する結果と考える。

時代別にみると、縄文土器はSK042の後期前半(堀之内1式期)の浅鉢(PL49-4)1点である。弥生土器は3区トレンチ内から出土した中期後半(粟林式期)の赤彩された高杯(PL49-19)のほか、中期後半から後期所産と思われる土器が7点あり、土器片加工門板も1点ある。古墳時代と推定できる土器はない。古代の土師器と須恵器は26点、334.6gである。須恵器が少なく、ロクロナデの残る黒色処理された杯が複数点あることなどから、平安時代に該当する土器が多いことが推測される。

中世の陶磁器は18点、245.8gで、内耳鍋が11点とその主体を成す。時期はSA01出土のかわらけ(第20図・PL49-7)をはじめ、15世紀後半～16世紀前半内の後半期にはほぼ当てはまる。近世の陶磁器は51点、371.7gである。その大半が近世末(18C末～19C前)であるが、大形土坑SK121出土の瀬戸・美濃産の陶器碗(第20図・PL49-8)など17世紀前半の陶磁器も3点ある。近代・現代の陶磁器は27点、140.6gである。表土と遺物包含層以外では、2・3区検出面で確認された浅い溝跡内から近代の磁器碗片2点が出土している。この溝跡はやや西に傾く東西南北方向に区画配置され、近世末の陶磁器も一定量出土するが、埋土の土質とこの近代陶磁器出土を根拠に、近代の用水の役割を持つ溝跡と推定した。

(2) 石器・石製品

27点出土している。内訳は石臼(安山岩)4点、石鉢(安山岩)2点、砥石(凝灰岩)1点、磨製石器(粘板岩)1点、打製石斧(安山岩)1点、剥片(チャート、安山岩、粘板岩)9点、石核(チャート)1点、原石(黒曜石)8点である(註2)。SK121からまとまって出土した石臼4点と石鉢1点以外、遺構外からの出土である。以下、一括出土したSK121の石臼と石鉢について記述する。

SK121 出土の石臼・石鉢 [第20図 PL49]

石臼はいずれも安山岩で、割れた状態で礫などとともに投棄されていた。S6は茶臼の上臼で厚みがある。目は四分割で刻みは細く浅い。すり合わせ面はよく摩耗する。芯棒受穴・供給口は円筒状で内面は滑らかである。挽手穴は長方形に彫り窪む。S4は茶臼の下臼部片である。すり合わせ面は摩耗し、目が僅かに残る。またすり合わせ部に残る窪みは台石として転用された敲打痕の可能性がある。S6・S4ともに白面の推定径は20cm内外で、組み合わせで使用された可能性がある。S5は粉挽臼の上臼で、白面の推定径は31cm。上面外側に縁が残る。挽手穴と供給口は長方形である。芯棒受穴が3段に彫り窪むのは調整・修理の痕跡と考える。ふくみ部には幅20mmほどの浅い溝跡が巡る。目はその溝跡から外側へ放射状に刻まれている。白面は使用により、よく摩耗している。S7も粉挽臼の上臼片で、白面の推定径30cmである。厚みは薄く、使用によるすり減りといえる。上面には縁が巡り、くぼみは平坦である。白面は摩耗するが、目は深い。目の一部に重複する部分があり、修繕した痕跡と考える。目の区画は不明。供給口は長方形である。石鉢は気泡が多く、軽量の安山岩を使用。外面は削りと打ち欠きによって整形され、内面は逆門錐状に深く、やや摩耗する。全体の3割程度の破片で、推定される外径は20cm程度である。なお土坑の時

期は磯群内出土の陶器碗片から17世紀前半と推定する。

(注1) 陶器部類の鑑定については、市川隆之主任調査研究員の協力を得た。

(注2) 石器・石製品の分類と同化・計測については、谷和隆調査研究員の協力を得た。

(3) 人骨・動物骨

骨はSK119よりシカの歯、SK120より人骨1体分が出土した。整理段階で京都大学名誉教授の茂原信生氏(形質人類学)を招聘し、それぞれの鑑定を依頼した。以下に個々の鑑定結果を記す。なおSK120出土骨は歯以外の取上げが不可能であったため、歯のみの鑑定である。

SK119 出土のシカの歯

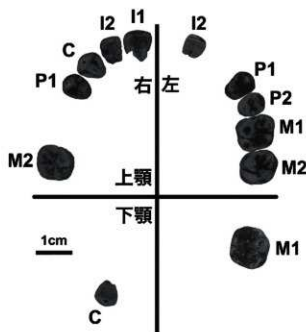
シカの臼歯の破片である。上下顎は不明である。

SK120 出土の人骨の歯

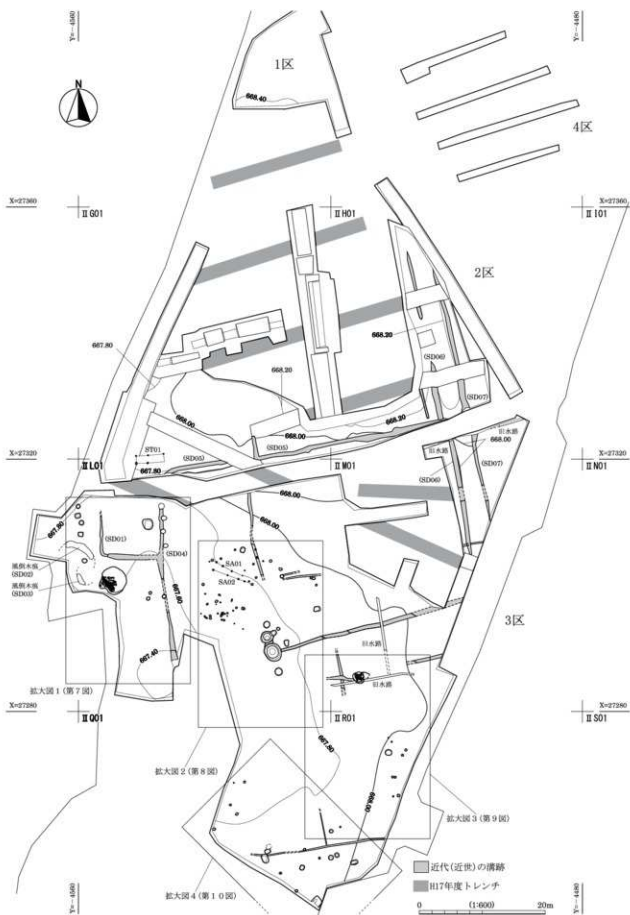
歯根は失われ、歯冠のエナメル質のみが残っている。12本のほぼ完形の歯冠があり、ほかに下顎切歯の歯冠片1本を含む数本分の歯の破片がある(第1表・第5図)。咬耗はさほど進んでいない。下顎切歯や第1大臼歯には軽度の咬耗がみられるが、第2大臼歯にはほとんど咬耗はない。また、第3大臼歯は出土していないので、まだ萌出していない可能性がある。これらを考え合わせると、かなり若い個体、すなわち10歳代後半であろう。性別は不明である。

第1表 SK120 出土人骨の上顎歯計測値

遺跡名	No.	性別	I 1		I 2		C		P 1		P 2		M 1		M 2		M 3		
			m-d	bl	m-d	bl	m-d	bl	m-d	bl	m-d	bl	m-d	bl	m-d	bl	m-d	bl	
今井宮の前遺跡	SK120	右	不明	8.2		6.2		7.6	8.4	6.6	8.7					9.7	11.1		
		左			6.2				6.8	9.3	6.5	8.5	10.0	11.6		9.7	11.3		
現代日本人 (豊田 1969)		♀		8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79
		♂		8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50

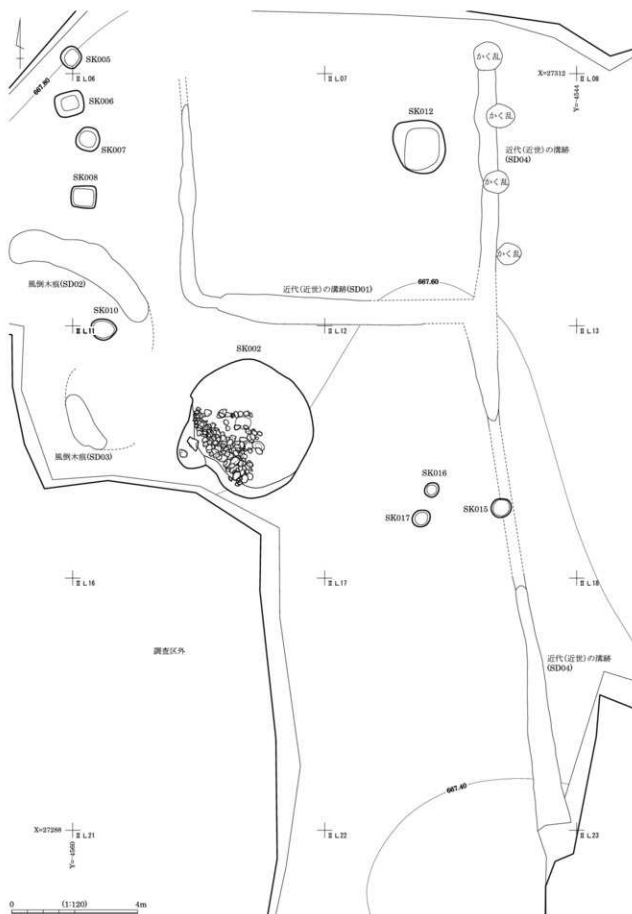


第5図 SK120 出土人骨の歯

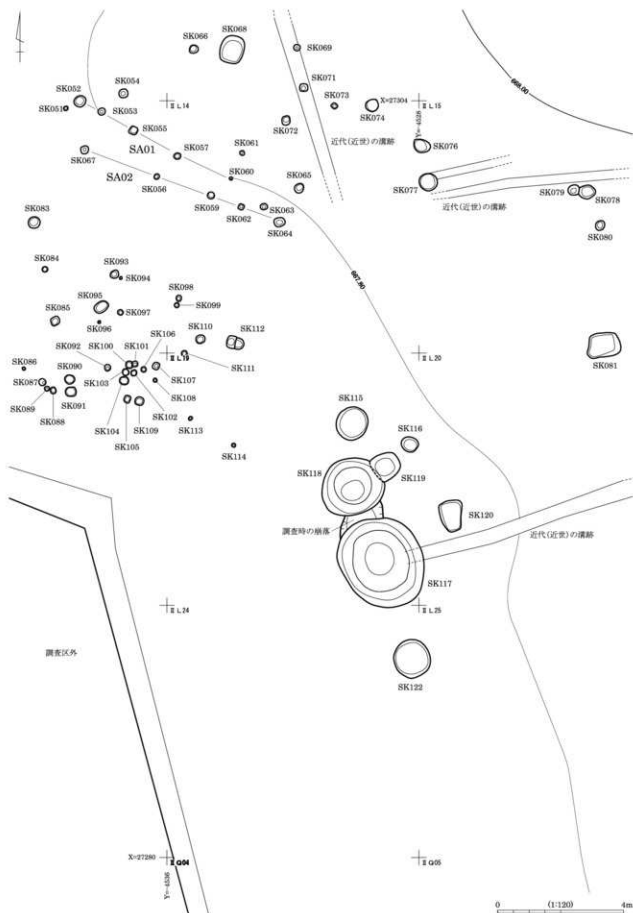


第6図 遺構分布図

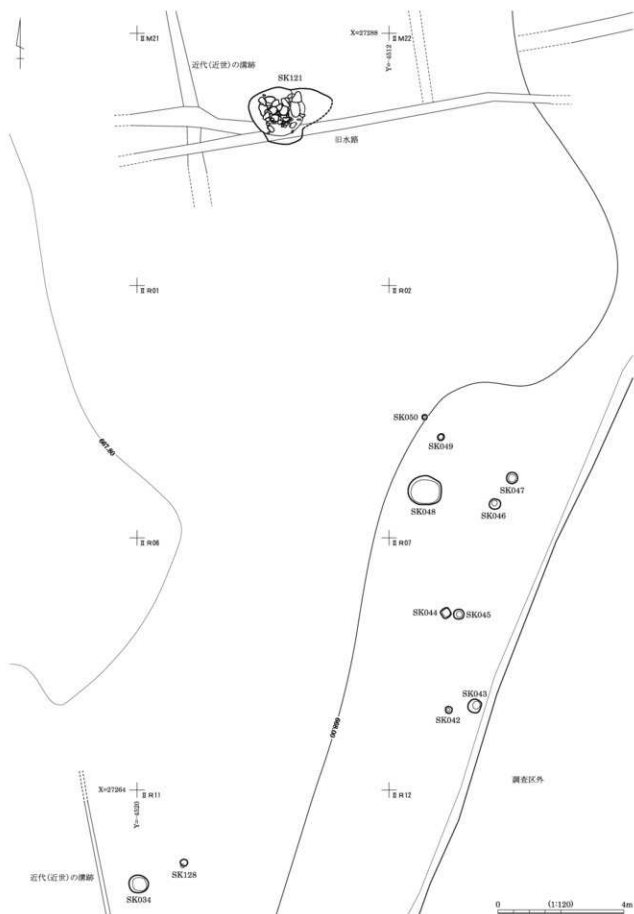
第7章 今井宮の前遺跡



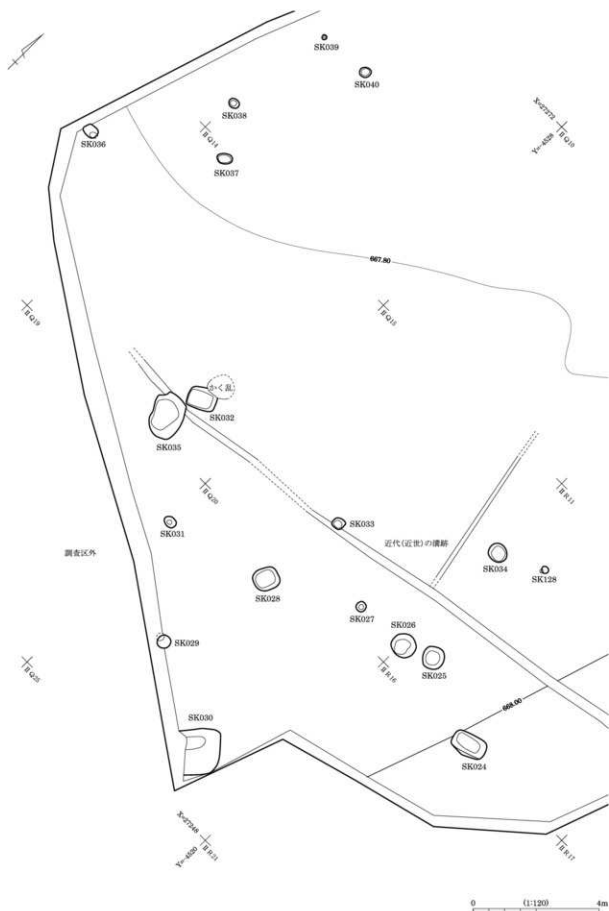
第7図 遺構分布拡大図1



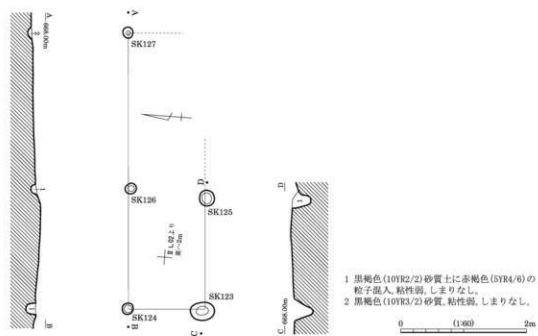
第8図 遺構分布拡大図2



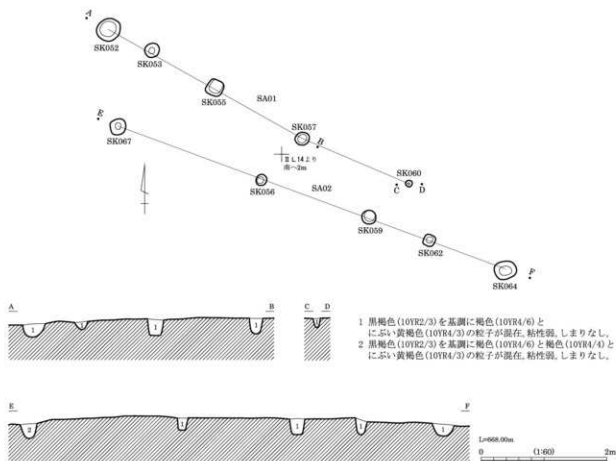
第9図 遺構分布拡大図3



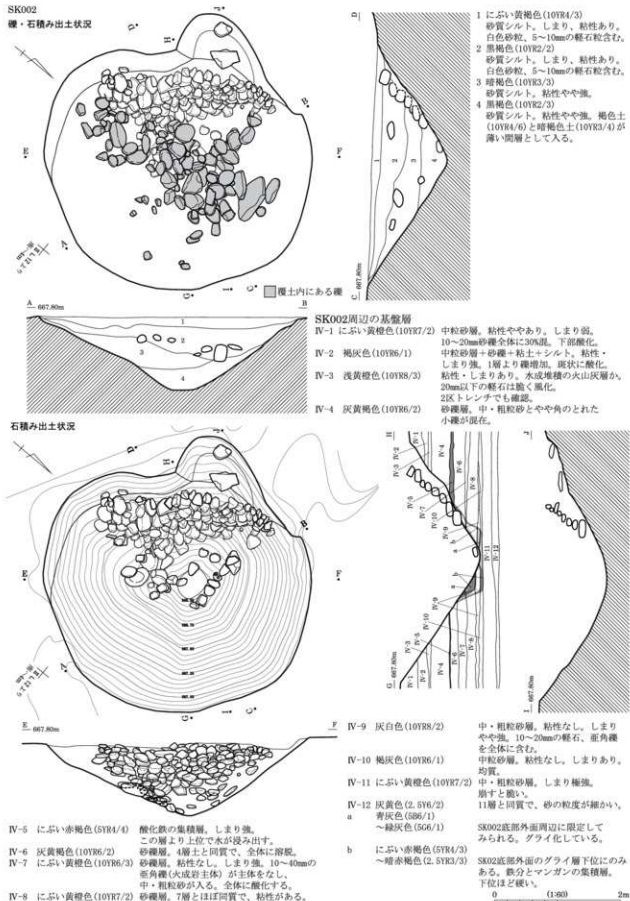
第10図 遺構分布拡大図4



第11図 遺構図1(掘立柱建物跡ST01)

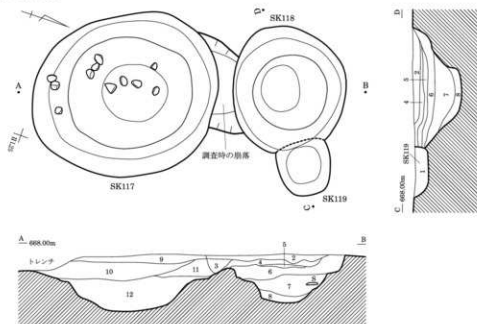


第12図 遺構図2(杭列跡SA01・02)



第13図 遺構図3(大形土坑1)

SK117・118・119



SK119

1 黒褐色(10YR2/2) 粘性・しまりなし。

SK118

2 黒褐色(10YR2/3)と褐色(10YR4/6)の粒が均一に混入、パミス含む。

粘性なし、しまり強。

3 黒褐色(10YR2/3)に褐色(10YR4/4)の小ブロック混在。

粘性・しまりなし。

4 褐色(10YR4/4)の砂層に灰黄褐色(10YR4/2)の粘土混入。

粘性・しまりなし。

5 褐色(10YR4/4)の砂層に暗褐色(10YR3/3)混入、粘性・しまりなし。

6 黒褐色(10YR2/2)の砂層、粘性・しまりなし。

7 暗褐色(10YR3/3)の粘土、粘性弱、しまりなし。

8 褐色(10YR4/4)の砂混じりの粘土、粘性・しまり弱。

SK117

9 ぶい・黄褐色(10YR4/3)と褐色(10YR4/6)が均一に混じる。

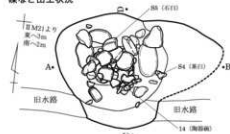
粘性・しまりなし、パミス含む。

10 暗褐色(10YR3/3)に褐色(10YR4/6)のブロック点在。

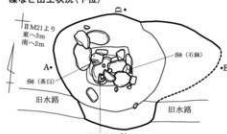
11 暗褐色(10YR3/4) 粘性あり、しまりなし、水分多い(にじみ出る)。

SK121

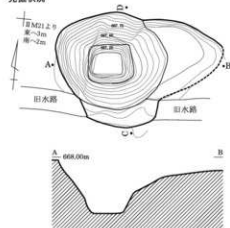
礫など出土状況



礫など出土状況(下位)



完掘状況



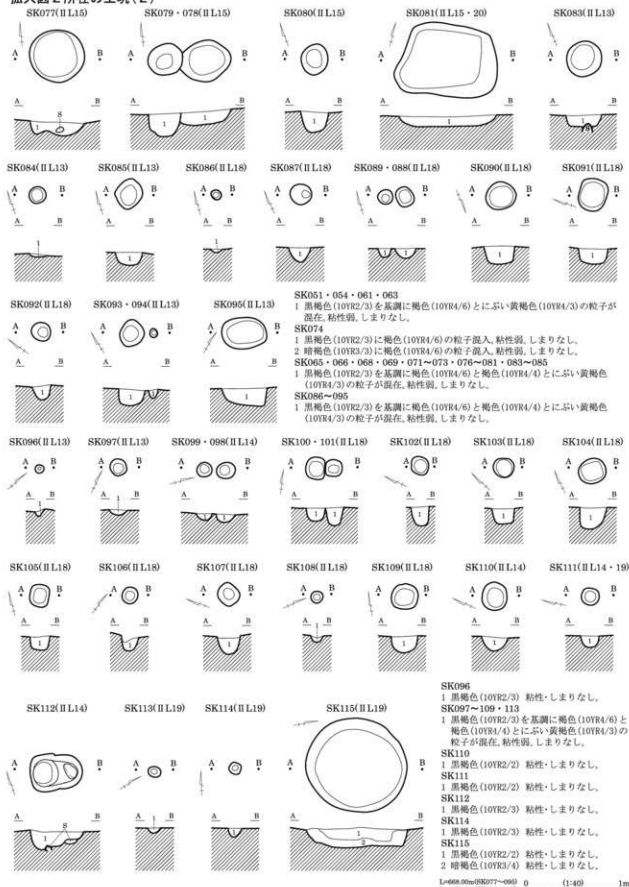
1 暗褐色(10YR3/4)に赤褐色(5YR4/8)の粒子混入。

2 黒褐色(10YR2/3)に赤褐色(5YR4/8)の粒子混入。

0 (1:60) 2m

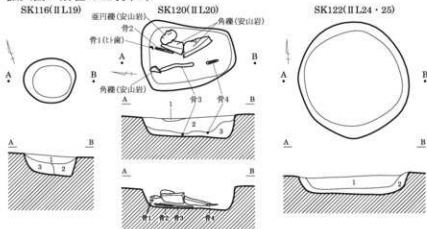
第14図 遺構図4(大形土坑2)

拡大図2 所在の土坑(2)



第16図 遺構図6(小・中形土坑2)

拡大図2 所在の土坑(3)



SK116

- 1 暗褐色(10YR3/3)に褐色(10YR4/6)の砂粒が混入。しまりなし。
- 2 暗褐色(10YR2/3) 粘土。しまりなし。
- 3 黒褐色(10YR3/2) 粘性弱。しまりなし。

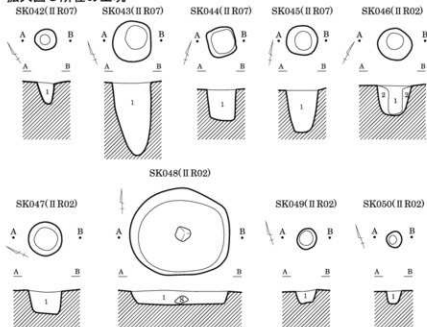
SK120

- 1 1にぶい・黄褐色(10YR4/3)に褐色(10YR4/6)の粒子が混入。粘性・しまりなし。
- 2 暗褐色(10YR2/4)に明赤褐色(5YR5/6)の粒子が混入。粘性・しまりなし。
- 3 黒褐色(10YR2/3) 粘性弱。しまりなし。

SK122

- 1 暗褐色(10YR3/3)に褐色(5YR4/6)が混入。粘性なし。しまりあり。
- 2 褐色(10YR4/4)の砂質土。しまりなし。

拡大図3 所在の土坑



SK042

- 1 黒褐色(10YR2/3) 粘性なし。しまりあり。炭化物混入。

SK043

- 1 黒褐色(10YR3/2) 粘性・しまりなし。

SK044・045

- 1 黒褐色(10YR3/2)に褐色(10YR4/6)のブロック混入。粘性・しまりなし。

SK046

- 1 1にぶい・黄褐色(10YR4/3)に褐色(10YR4/6)が粒状に混入。粘性・しまりなし。
- 2 黒褐色(10YR3/2) 粘性・しまりなし。

SK047

- 1 黒褐色(10YR2/3) 粘性なし。しまりあり。

SK048

- 1 1にぶい・黄褐色(10YR4/3)に白砂粒混入。粘性・しまりなし。

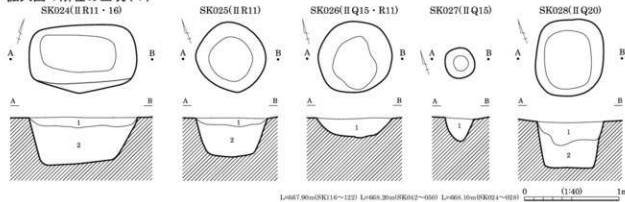
SK049

- 1 褐色(10YR4/4)と暗褐色(10YR3/3)が均一に混入。

SK050

- 1 黒褐色(10YR2/3) 粘性なし。しまりあり。

拡大図4 所在の土坑(1)



SK024・025

- 1 暗褐色(10YR3/3)に黄褐色(10YR5/6)粒子混入。
- 2 黒褐色(10YR2/3)に褐色(10YR4/6)粒子混入。

SK026

- 1 暗褐色(10YR3/4)に褐色(10YR4/6)混入。

SK027

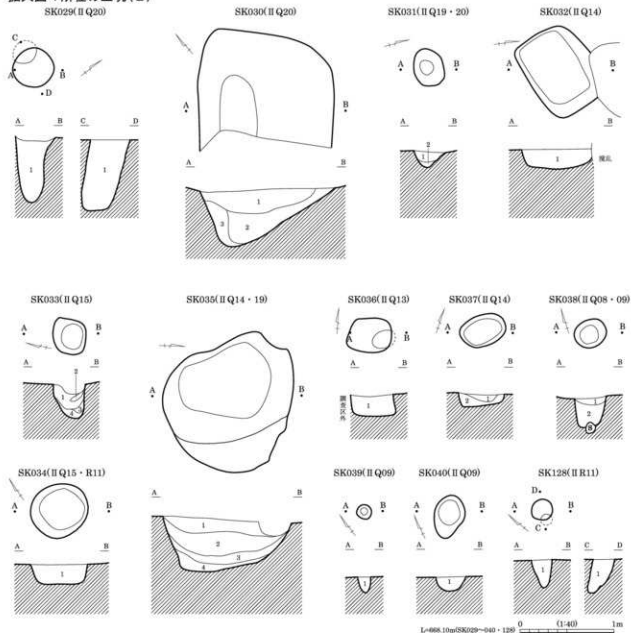
- 1 黒褐色(10YR2/3)に褐色(10YR4/6)のブロック混入。

SK028

- 1 暗褐色(10YR3/3)に黄褐色(10YR5/6)のブロックとバミス混入。
- 2 黒褐色(10YR2/3)に褐色(10YR4/6)の大きなブロック混入。

第17図 遺構図7(小・中形土坑3)

拡大図4 所在の土坑(2)



SK029

1 黒褐色(10YR2/3)に褐色(10YR4/6)の大きな塊混入。

SK030

- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘性なし、しまり強。
- 2 黒褐色(10YR3/2) 粘性・しまりなし。
- 3 暗褐色(10YR3/4) 粒子混入、粘性なし。

SK031

- 1 黒褐色(10YR2/3)に明黄褐色(10YR6/6)の塊混入、粘性・しまりなし。
- 2 黒褐色(10YR2/3)に褐色(10YR4/6)が散在、粘性・しまりなし。

SK032

- 1 暗褐色(10YR3/4)に褐色(10YR4/6)の小ブロック混在、粘性・しまりなし。

SK033

- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘性・しまりなし。
- 2 褐色(10YR4/6) 粘性・しまりなし。
- 3 褐色(10YR4/4) 粘土質、しまり弱。
- 4 暗褐色(10YR3/4) 粘性・しまりなし。

SK034

- 1 暗褐色(10YR3/3)に褐色(10YR4/6)粒子混入、粘性・しまりなし。

SK035

- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3) パミス含む。
- 2 暗褐色(10YR2/2) 粘性・しまりなし。
- 3 暗褐色(10YR3/3) 粘性・しまりなし。
- 4 にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性・しまりなし。

SK036

- 1 暗褐色(10YR3/4)に褐色(10YR4/6)の塊混入。

SK037

- 1 暗褐色(10YR3/4)に褐色(10YR4/6)散在、粘性弱、しまりなし。

SK038

- 2 褐色(10YR4/4) 粘性・しまりなし。

SK038

- 1 暗褐色(10YR3/4)に褐色(10YR4/6)散在、パミス含む。

SK039

- 2 暗褐色(10YR3/4) 粘性・しまりなし。

SK040

- 1 暗褐色(10YR3/4) 粘性・しまりなし。

SK128

- 1 暗褐色(10YR3/4)に褐色(10YR4/6)散在、パミス含む、粘性・しまりなし。

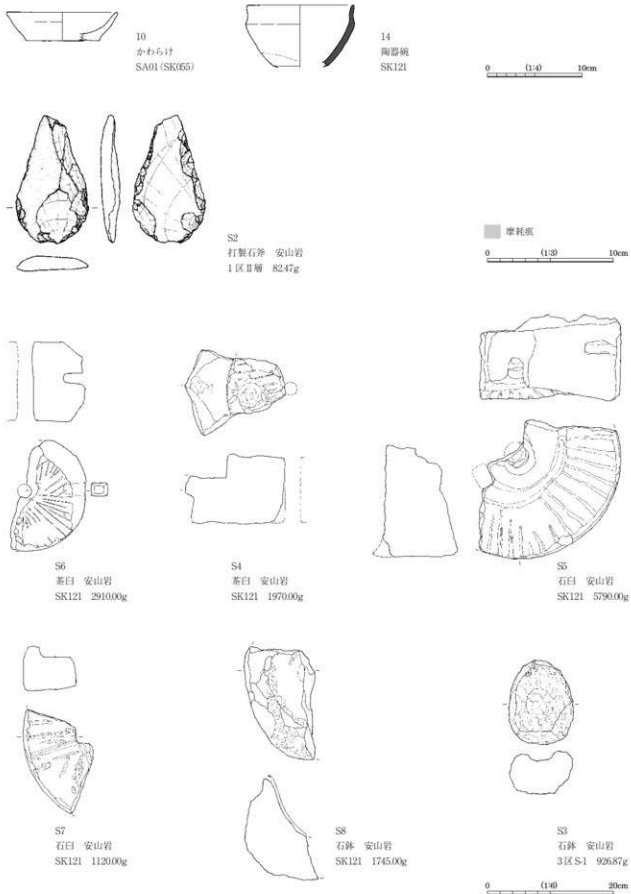
SK128

- 1 黒褐色(10YR2/3) 粘性・しまりなし。

第18図 遺構図8 (小・中形土坑4)



第19図 旧公園と遺構・溝などの照合図



第20図 出土遺物

第2表 掘立柱建物跡ピット一覧

図版No.	遺構	ピット番号	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物
11	ST01	SK123	不明	2	II L02	楕円形	柱穴状 底部丸	40	30	30	なし
11	*	SK124	*	2	II G22	円形	柱穴状 底部丸	18	18	16	なし
11	*	SK125	*	2	II L02	円形	柱穴状 底部丸	26	24	24	なし
11	*	SK126	*	2	II G22	円形	柱穴状 底部丸	20	18	20	なし
11	*	SK127	*	2	II G22	円形	溝状 底部平	16	16	10	なし

第3表 杭列跡ピット一覧

図版No.	遺構	ピット番号	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物
12	SA01	SK002	中後前期か	3	II L08 - 13	円形	溝状 底部平	38	38	20	-
12	*	SK003	*	3	II L13	円形	柱穴状 底部丸	24	24	18	-
12	*	SK005	*	3	II L13	方形	溝状 底部平	26	26	24	10のかわらけ (15C後半~16C初)
12	*	SK007	*	3	II L14	円形	柱穴状 底部丸	22	22	24	-
12	*	SK090	*	3	II L14	円形	柱穴状 底部丸	10	10	16	-
12	SA02	SK006	*	3	II L13	円形	柱穴状 底部丸	20	18	20	-
12	*	SK099	*	3	II L14	円形	溝状 底部平	24	24	24	-
12	*	SK092	*	3	II L14	方形	柱穴状 底部丸	18	18	26	-
12	*	SK094	*	3	II L14	方形	柱穴状 底部丸	36	30	20	-
12	*	SK067	*	3	II L13	円形	柱穴状 底部丸	28	26	24	-

第4表 土坑一覧

図版No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物	特 記
13	SK002	前置期平か	3	II L11	不整形円形	すり鉢状	442	420	125	1土師器(古代の)、燧石(モモカ)	大形土坑
15	SK005	不明	3	II K05 - II L01	方形	溝状 底部平	72	66	18	-	-
15	SK006	*	3	II K10 - II L06	長方形	溝状	100	92	16	-	-
15	SK007	*	3	II L06	円形	溝状	76	76	10	-	-
15	SK008	*	3	II K10 - II L06	方形	溝状 底部平	92	88	16	-	-
15	SK010	*	3	II L06 - 11	楕円形	溝状	82	68	12	-	-
15	SK012	*	3	II L07	長方形	溝状 底部平	190	160	34	-	-
15	SK015	*	3	II L12	円形	溝状 底部平	66	60	14	-	-
15	SK016	*	3	II L12	円形	溝状 底部平	46	46	8	-	-
15	SK017	*	3	II L12	円形	溝状 底部平	60	52	8	-	-
17	SK024	*	3	II R11 - 16	長方形	溝状 底部平	114	72	32	-	-
17	SK025	*	3	II R11	円形	溝状 底部平	76	74	42	-	-
17	SK026	*	3	II Q15 - II R11	円形	溝状	78	74	20	-	-
17	SK027	*	3	II Q15	円形	柱穴状 底部丸	32	32	26	-	-
17	SK028	*	3	II Q20	方形	溝状 底部平	88	76	50	-	-
18	SK029	*	3	II Q20	円形	柱穴状 底部丸	44	42	74	-	-
18	SK030	*	3	II Q20	不整形方形	不整すり鉢状	174	160	62	-	-
18	SK031	*	3	II Q19 - 20	楕円形	柱穴状 底部丸	42	34	20	-	-
18	SK032	中後後期か	3	II Q14	長方形	溝状 底部平	94	72	22	2陶器丸皿(中後後期)	-
18	SK033	不明	3	II Q15	方形	柱穴状 底部丸	44	38	36	-	-
18	SK034	*	3	II Q15 - II R11	円形	溝状 底部平	62	58	22	-	-
18	SK035	*	3	II Q14 - 19	不整形円形	溝状 底部稍凹	154	136	60	3黑色土器鉢か(古代)	-
18	SK036	*	3	II Q13	円形	溝状 底部平	50	40	24	-	-
18	SK037	*	3	II Q14	楕円形	溝状 底部平	50	34	16	-	-
18	SK038	*	3	II Q08 - 09	円形	溝状 底部平	34	30	36	-	-
18	SK039	*	3	II Q09	円形	柱穴状 底部丸	16	16	18	-	-
18	SK040	*	3	II Q09	楕円形	柱穴状 底部丸	38	34	16	-	-
-	SK041	中後後期か	3	-	-	-	-	-	-	4内耳鉢(中後後期)、5内耳鉢(中後後期)、6灰釉陶器(小瓶(平安時代)	地点不明。
17	SK042	不明	3	II R07	円形	柱穴状 底部丸	22	22	24	7織文段彫(類之内1式)	-
17	SK043	中後後期か	3	II R07	円形	柱穴状 底部丸	44	40	78	8内耳鉢(中後)	-
17	SK044	不明	3	II R07	方形	溝状 底部平	32	30	34	-	-
17	SK045	不明	3	II R07	円形	柱穴状 底部丸	34	34	44	-	-

第7章 今井宮の前遺跡

図版 No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物	特 記
17	SK046	近世か	3	II B02	円形	柱穴状 底部丸	34	34	32	M3青銅製尊小	-
17	SK047	近世後半か	3	II B02	円形	竪状 底部平	36	36	26	9組器台付碗 (18～19C 前半)	-
17	SK048	不明	3	II B02	楕円形	竪状 底部平	104	92	16	-	-
17	SK049	*	3	II B02	円形	竪状 底部平	22	22	16	-	-
17	SK050	*	3	II B02	円形	竪状 底部平	18	16	14	-	-
15	SK051	*	3	II L13	円形	竪状 底部平	16	16	8	-	-
15	SK054	*	3	II L08	円形	竪状 底部平	30	30	14	-	-
15	SK061	*	3	II L14	円形	柱穴状 底部丸	18	16	28	-	-
15	SK063	*	3	II L14	円形	柱穴状 底部丸	24	22	18	-	-
15	SK065	*	3	II L14	円形	竪状 底部平	32	30	30	-	-
15	SK066	*	3	II L09	円形	竪状 底部平	28	26	20	-	-
15	SK068	*	3	II L09	長方形	皿状	88	76	20	-	-
15	SK069	*	3	II L09	円形	柱穴状 底部丸	22	22	34	-	-
15	SK071	*	3	II L09	方形	柱穴状 底部傾斜	26	24	32	-	-
15	SK072	*	3	II L14	方形	竪状 底部平	30	28	28	-	-
15	SK073	*	3	II L14	方形	竪状 底部平	30	18	28	-	-
15	SK074	*	3	II L09・14	方形	竪状 底部平	42	40	22	-	-
15	SK076	*	3	II L14・15	楕円形	皿状	56	44	22	-	-
16	SK077	*	3	II L15	円形	底部不整形	58	56	18	-	-
16	SK078	*	3	II L15	楕円形	皿状	56	44	18	-	11 葉 (不明), 12 陶化境或土器 (不明)
16	SK079	*	3	II L15	円形	底部有段	38	34	24	13 内耳輪 (発生の可能性あり)	-
16	SK080	*	3	II L15	円形	底部傾斜	34	28	24	-	-
16	SK081	*	3	II L15・20	長方形	皿状	112	80	12	灰化物	-
16	SK083	*	3	II L13	円形	竪状 底部平	38	38	12	-	-
16	SK084	*	3	II L13	円形	皿状 底部平	18	18	4	-	-
16	SK085	*	3	II L13	方形	竪状 底部平	34	28	14	-	-
16	SK086	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	12	10	4	-	-
16	SK087	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	24	22	16	-	-
16	SK088	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	22	18	10	-	-
16	SK089	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	16	16	10	-	-
16	SK090	*	3	II L18	円形	竪状 底部平	42	30	28	-	-
16	SK091	*	3	II L18	円形	竪状 底部平	36	30	18	-	-
16	SK092	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	22	20	16	-	-
16	SK093	*	3	II L13	円形	竪状 底部平	30	26	18	-	-
16	SK094	*	3	II L13	円形	柱穴状 底部丸	10	8	10	-	-
16	SK095	*	3	II L13	楕円形	竪状 底部傾斜	48	34	22	灰化物	-
16	SK096	*	3	II L13	円形	柱穴状 底部丸	10	10	8	-	-
16	SK097	*	3	II L13	円形	皿状	18	18	6	-	-
16	SK098	*	3	II L14	円形	皿状	30	18	8	-	-
16	SK099	*	3	II L14	円形	皿状	16	16	8	-	-
16	SK100	*	3	II L18	円形	竪状 底部平	24	20	16	-	-
16	SK101	*	3	II L18	方形	柱穴状 底部丸	20	18	20	-	-
16	SK102	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	20	18	20	-	-
16	SK103	*	3	II L18	円形	竪状 底部平	24	22	16	-	-
16	SK104	*	3	II L18	方形	柱穴状 底部丸	30	26	22	-	-
16	SK105	*	3	II L18	方形	竪状 底部平	24	20	16	-	-
16	SK106	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	18	18	18	-	-
16	SK107	*	3	II L18	方形	柱穴状 底部丸	24	22	20	-	-
16	SK108	*	3	II L18	円形	柱穴状 底部丸	14	14	8	-	-
16	SK109	不明	3	II L18	方形	柱穴状 底部丸	30	28	20	-	-
16	SK110	*	3	II L14	楕円形	柱穴状 底部丸	30	26	16	-	-
16	SK111	*	3	II L14・19	円形	柱穴状 底部丸	30	18	14	-	-
16	SK112	*	3	II L14	楕円形	底部不整形	56	40	22	-	-
16	SK113	*	3	II L19	円形	柱穴状 底部丸	14	12	6	-	-
16	SK114	*	3	II L19	円形	柱穴状 底部丸	14	14	10	-	-
16	SK115	*	3	II L19	楕円形	皿状 底部平	108	96	20	-	-
16	SK116	*	3	II L19	楕円形	竪状 底部傾斜	56	48	24	-	-
14	SK117	近世前半か	3	II L19・20・24	楕円形	底部有段	296	256	90	-	大形土坑
14	SK118	近世前半か	3	II L19	楕円形	底部有段	304	188	80	-	大形土坑

図版 No.	遺構	時期	地区	グリッド	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物	特 記
14	SK119	近東前中以降か	3	II L19	楕円形	皿状	96	96	24	シタ炭片、炭化物、種実	—
17	SK120	近東前中以降か	3	II L20	不整長方形	皿状 底部平	102	74	24	ヒト糞、骨	—
14	SK121	近東前中か	3	II M21	楕円形	底部有段	264	176	62	14 陶器類 (17C 前半)、15 陶器 余存陶 (18～19C 前半・上層 出土)、54 石臼 (黒白ワ)、53 石臼 (上)、96 石臼 (黒白上)、 57 GEI (上)、58 石臼、炭化物 類	大形土坑
17	SK122	不明	3	II L24・25	楕円形	皿状 底部平	124	118	24	—	—
18	SK128	*	3	II R11	円形	柱穴状 底部丸	24	22	30	—	—

* 圖3柱建物跡と杖列跡のピットと認定した土坑については、第2表掘立柱建物跡ピット一覽、第3表杖列跡ピット一覽を参照のこと。

* 整理段階で遺構ではないと判断し、登録から外した土坑 (SK001SK003SK004SK009SK011SK013SK014SK018SK019SK020SK021SK022SK023SK026SK027SK029SK032)。



第3節 小結

1. 時代ごとの概要

今井宮の前遺跡はこれまで発掘調査がなされていないため、遺跡の状況はほとんど不明であった。今回の調査により、南側の千曲川段丘崖寄りに小規模ながら中世から近世の遺構が存在することがわかってきた。遺構に伴う遺物がごく限られるため、推定の域を出ないが、表土や遺物包含層、検出面出土の遺物についても視野に入れながら、時代ごとに概観することとしたい。

縄文時代から平安時代まで明確な遺構は検出されていない。縄文時代では後期堀之内1式の浅鉢片(PL49-4)と打製石斧(第20図・PL49-20)が出土している。土器はビット状土坑から出土したが、摩滅して混入の可能性が高い。打製石斧は1区II層出土である。また段丘崖際に並ぶ長方形で深い土坑2基(SK024・028)は形状から縄文時代の陥し穴とも考えられるが、断定できない。

弥生時代は中期後半から後期の土器片が散漫に出土している。ちなみに浸食谷を挟んで東に隣接する今井城跡の調査では中期から後期に比定される土坑1基が検出されている(佐久市教委2010)。

古墳時代については遺物も出土せず、古代では平安時代と推定される土器片が出土している。

中世としては、杭列跡SA01から15世紀後半～16世紀初頭のかわけが出土している。この周辺には同規模の杭列跡SA02、円形や方形のビット状土坑が群在する。これらのビットや土坑は小さく浅い場合が少なくないが、これは後世の開田などによって旧地形が削平された影響によるものだろう。削平により消失したビットも複数あったと考えられる。内耳鍋や天目茶碗片などが出土していることも考慮し、この一帯には中世後半(15～16世紀代)の建物跡が存在していたと想定したい。なお今井城跡の調査においても同様なビット群の調査が行われ、調査面積から建物全体は把握できていないが建物跡2棟が存在した可能性を示している。建物跡の所属時期は検出時に出土した土鍋、かわかけ、常滑甕片といった陶磁器類などから、おおそ中世後期と推定され、本遺跡との関連性が問われる。

近世としては、大形土坑SK121が出土陶器から、17世紀前半頃の所産と推定される。ほかの大形土坑3基についても当該期の所産としておきたい。これら大形土坑は、基盤層に形成された地下水の浸透が阻まれるほど硬く締まる鉄分集積層を掘り抜いている点、底部外側の砂層にグライ化作用による変色がある点から、鉄分集積層上部に保有された地下水を溜める、いわゆる井戸の一種であったと考える。ただ基盤は砂礫層主体で浸透性が高く、恒常的な貯水は難しいことから、一時的、季節的な利用に限られていたと思われる。

4基のうち、すり鉢状の土坑SK002南西側面にある石積みは、水を汲み上げる際に側面が崩れることを防ぐ目的で積み上げられたのではないだろうか。土坑外側には石積みに向かう位置に平石2枚が踏み石状に並び、石積みとともに水汲みに関わる一連の動作を想像させる(第13図・PL46)。また土坑底部から割れた石臼や石鉢が礫と重なり合って出土したSK121と似た事例として、中世後期の集落遺跡、飯綱町表町遺跡がある。表町遺跡SK16は長径86cm、深さ38cmの楕円形土坑で、底部から割れた茶臼や欠損した石鉢が礫とともに出土している。調査者は土坑を浅い井戸と想定し、底部配石と推察している(中野2009)。

土坑墓SK120から屈葬状態でみつかった被葬者は、歯の鑑定から10代後半であることが明らかになった。埋葬時期の決定は難しいが、周囲にある土坑群の重複関係などから大形土坑より新しい、17世紀前半以降としておく。本土坑周辺には同規模の土坑が点在する。骨や遺物の出土はなく確証を得ないが、同様の墓である可能性もある。

2. 旧公園との照合

発掘調査後、近世の井戸跡や墓跡、近代の溝跡について手がかりを得るため、今井地区の旧公園との照合を試みた(第19図)。旧公園は佐久市取税課資産税係に保管されている、明治23(1890)年6月調製の「高瀬村大字今井拾番字西全図・拾壹番字宮ノ前全図」である。図番号が字ごとに振られているが、図は1枚で作製されている。大判の和紙に地割や番地、地目が墨書され、道は赤、水路は青で示されている。縮尺は約600分の1で軸装されている。

字宮ノ前・字西の北は字五反田と字万五郎田、東は字居屋敷、南東は字城、南西は大字成瀬に接する。字居屋敷は今井集落、字城は今井城跡の一部に該当する。調査区の1・3区と4区を分ける道が字界にあたり、北東側の4・5区は字西、南西側の1・2・3区は字宮ノ前である。

遺構や溝跡のみであった2・3区部分では、旧公園作成時には大半が田地に利用され、北西上流部から回されている用水路も細かく整備されている。段丘崖に近い西側と南側には畑地が多く、崖際に墓地が点在する。旧公園と現在の都市計画図や公園を比べると、新海宮境内や農道の位置に変わりはないが、田地の地割は現在までに拡張されていたり、分筆されて細かくなっていたりする部分がある。

調査で検出された旧水路や近代の溝跡、中近世の遺構との関係を見ていくと、旧水路は旧公園の水田地割とほぼ合致することがわかる。旧水路は幅30cmほどで検出面からの深さは10～20cmである。砂質に富む地山へ水が逃げない工夫なのか、底面には幅9cm×長さ30cm(3×10寸)に揃えた樹皮付きの杉板を敷き並べ粘土が貼られていた。また旧公園の地割と近代溝跡の南北軸は、どちらも西に10度前後傾いていて、ほぼ同じであって、西側では一部が旧公園の地割と重なる部分も見受けられる。近代溝跡は旧水路に切られていることから、機能を停止したのは旧公園の作製された明治23年以前と推察する。また出土遺物の検討から近代と比定しているが、溝跡に伴う水田開発自体は近世にまで遡る可能性もある。

大形土坑やピット群、墓地については、旧公園にその痕跡は見出すことはできなかった。それは近世から近代の水田開発で大きく土地利用が変化したことを示しているのかもしれない。

近年は広範囲に基盤整備が進み、以前の字界や地割、土地利用の情報を現地でも得ることは難しくなっている。そのため、旧公園や絵図に遺された地図情報と遺跡の内容を照合することは有用であり、必要性が増している。今回は発掘調査後の照合となったが、事前調査として実施することがより有効であろう。

以上、今回の調査では中世から近世、近代の段丘崖際における土地利用の様相が、おぼろげながら明らかになった。今後、今井城跡を中心とした中世社会や、近世以降の水田開発などを探求する上で、新たな資料を提供したといえよう。



第8章 自然科学分析

第1節 森平遺跡の自然科学分析

1. 黒曜石産地推定

森平遺跡に持ち込まれた黒曜石の産地を知るために、遺跡から出土した黒曜石181点の蛍光X線分析装置を用いた産地推定を実施した。分析は望月明彦氏に委託して行ったが、同氏の分析では現代の採取地点との照合により、長野県の産地は4エリア14の産地群に分類されている。

分析可能な法量を持つ黒曜石の大部分にあたる181点を分析の対象とした。産地群組成は諏訪星ヶ台群84点、和田鷹山群15点、和田小深沢群11点、和田土屋橋北群19点、和田土屋橋西群31点、和田土屋橋南群10点、和田芙蓉ライト群5点、蓼科冷山群2点、浅間千ヶ滝群3点、推定不可1点となった。

第1表に堅穴住居跡別の産地群組成を示した。堅穴住居跡の大部分は弥生時代中期に属すると考えられるが、埴土に縄土器が混入したり、弥生時代後期と考えられる堅穴住居跡が存在することから、すべての遺物が弥生時代中期として断定できる状況にはない。しかし、遺跡全体の遺物包含比率は弥生時代中期が最も高くなることから、黒曜石も弥生時代中期が主体と考える。分析数が多いSB07は諏訪星ヶ台群が最も多く、和田土屋橋西群、和田土屋橋北群と続く。堅穴住居跡個々の分析数が少なく言い切れることは難しいが、森平遺跡全体で見ても諏訪星ヶ台群が最も多く、和田土屋橋西群、和田土屋橋北群が続き、共通する組成が読み取れる。

13遺跡ある弥生時代の黒曜石産地分析事例では、すべてで諏訪星ヶ台群が過半数を上回り、圧倒的多数を誇る遺跡の存在も目立つ（谷ほか2013）。森平遺跡で注目すべきは和田土屋橋西群、和田土屋橋北群、和田土屋橋南群（以下、3者を一体として和田土屋橋群と記す）の存在にある。これに、和田鷹山群、和田小深沢群を含めた5つの産地群の原石は、長和町の男女倉川の同一地点で採取することが可能である。質も良く似通っていることから、弥生人にとっては5つの産地群ではなく、1つの産地として認識していた可能性がある。これら和田土屋橋群らの比率が諏訪星ヶ台群に並ぶことは、諏訪星ヶ台群が圧倒する他の遺跡とは別の黒曜石入手の仕組みがあったのではないだろうか。

第2表に器種別の産地群組成を示したが、諏訪星ヶ台群と和田土屋橋群の利用状況は同じといえよう。

最後に礫とした3点の浅間千ヶ滝群に触れる。これらは直径1~2cmと小形で、気泡や球類を多く含んでおり、明確な剥離面が確認できないことから、石器ではなく礫片と判断した。この他に堅穴住居跡から検出された礫16点に黒曜石が含まれていた。これらは拳大~人頭大の円礫・亜角礫もしくはそれらの礫片で、分析した黒曜石よりさらに質が悪い。SB03では輝緑石として用いられていたが、いずれも剥離面を持たない。遺跡に隣接する湯川で採取可能であり、これらは剥片石器の石材としてではないと判断した。礫石器の素材（礫としての利用も含む）として持ち込まれたか、もともと自然の状態でも遺跡内に存在した礫と考えられる。

第1表 竪穴住居跡別黒曜石産地群組成

遺構	分析数	SWHD	WDTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDTM	WDHY	TSTY	AMST	鑑定不可
SD01	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SD02	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SD03	5	2	0	0	1	1	1	0	0	0	0
SD04	6	3	2	0	0	1	0	0	0	0	0
SD06	13	7	0	2	2	2	0	0	0	0	0
SD07	50	18	4	3	7	14	3	0	0	1	0
SD09	8	3	1	0	0	0	1	3	0	0	0
SD11	3	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0
SD13	6	3	1	0	0	1	1	0	0	0	0
SD14	4	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0
SD15	3	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0
SD16	4	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0
SD17	3	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0
SD18	3	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0
SD20	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SD21	16	4	0	0	1	5	2	1	1	2	0
SD23	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
SB 134	49	27	5	5	7	3	0	1	0	0	1
合計	183	84	15	11	19	31	10	5	2	3	1

※ SWHD：諏訪原+台群、WDTY：和田山群、WDKB：和田小深沢群、WDTK：和田土屋橋北群、WDTN：和田土屋橋西群、WDTM：和田土屋橋南群、WDHY：和田若草ヶ丘群、TSTY：豊科山群、AMST：浅間ヶ丘群

※ SD05で登録されていた石部はSD06に統合、SD07・08とSD08で登録されていた石部はSD07に統合

第2表 器種別黒曜石産地群組成

器種	分析数	SWHD	WDTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDTM	WDHY	TSTY	AMST	鑑定不可
石鏃	36	10	4	2	6	2	2				
石鏃未製品	3					1	1	1			
楔形石部	43	23	5		3	7	2	1	2		
石鏃	6	4	1	1							
瓦割片	8	5	1	1		1					
割片	73	35	2	5	6	17	5	3			
砕片	7	2		1	2	1					1
石核	9	5	1		1	2					
原石	3		1	1	1						
礫	3									3	
合計	181	84	15	11	19	31	10	5	2	3	1

※ R 割片：2次加工のある割片

2. 古植生・植物利用と竪穴住居跡の年代

森平周辺の古植生や植物資源利用、遺構の年代観の検討を目的とした自然科学分析をバリノ・サーヴェイ(株)に委託した。そこで、ここでは花粉分析、植物珪酸体分析、出土炭化材の同定、年代測定の順にその概要を紹介する。

(1) 周辺の環境

対象とした試料はSD08で深さ1m程度の弥生時代中期栗林2～3式期の溝跡である。その堆積物とその上位に堆積する基本土層から土壌7点を採取した(第3表・第4章第45図)。

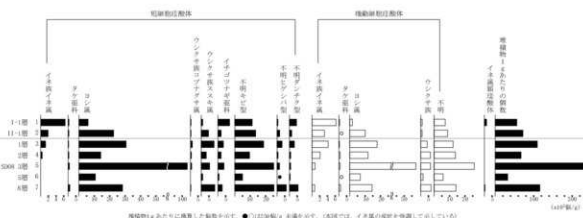
花粉分析では現耕作土以外ではほとんど花粉化石が検出されなかった。

植物珪酸体分析では、層毎に検出量に差があり、保存状態が不良であるがヨシ属をはじめとして、タケ亜科、コブナグサ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、ウシクサ属が検出された。ヨシ属含量値の優勢から、湯川の蛇行部に立地する本遺跡が、河川の増水や氾濫によって度々湿地化していたと解釈できる。その一方で、ススキ属等開けた場所を好む植物の存在は、本遺跡が居住地として利用されてきた経過と合致している。

また栽培植物であるイネ属は、現耕作土のI層以外では稲作の基準といわれる(杉山2000) 1gあたり5,000個を超える植物珪酸体は検出されていないが、SD08の8層で葉部に形成される短細胞珪酸体(約1,100個/g)や機動細胞珪酸体(約700個/g)、初穀に形成される顆粒酸体(約400個/g)が検出された。このことやSB09-17の処理土からイネの胚乳や穎が検出されたことなどから、当該期のイネの利用や周辺での稲作の可能性が指摘された。遺跡南側の低地は、その候補地となるかもしれない。佐久平には弥生時代の大遺跡が密集しているものの、水田跡の調査が未だに行われていないため、今後の調査が期待される。

第3表 植物珪酸体含量表(個/g)

分類群	試料名	S1008						
		1層 1	II層 2	1層 3	2層 4	3層 5	5層 6	8層 7
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ胚イネ属	6,200	1,900	1,300	400	-	-	-	-
タケ亜科	400	400	300	400	800	-	1,100	
シシ風	5,900	25,600	30,700	14,300	103,400	10,700	28,300	
ウシクサ族コブナダ亜属	400	400	1,300	600	800	-	400	
ウシクサ族ススキ属	1,000	4,700	8,400	3,300	5,500	1,000	8,800	
イネゴフナギ亜科	7,600	2,100	3,500	2,100	3,000	700	2,800	
不明ヒビ型	11,300	13,500	18,700	9,600	25,300	5,000	25,400	
不明ヒゲナシ型	600	1,700	3,200	600	1,600	300	6,000	
不明ツルナシ型	4,700	1,500	3,200	800	800	300	5,700	
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ胚イネ属	6,200	3,200	4,200	2,100	800	-	700	
タケ亜科	400	200	300	800	800	100	1,100	
シシ風	1,700	10,100	17,700	11,900	57,600	6,800	14,500	
ウシクサ族	1,000	900	4,300	4,300	4,300	1,500	6,700	
不明	7,200	8,800	12,300	13,800	30,000	5,800	14,100	
珪化組織片								
イネ属短細胞	1,400	-	-	-	-	-	400	
合計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	38,300	48,900	70,700	32,300	142,000	18,300	78,400	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	16,500	23,100	38,700	31,900	91,500	14,300	37,100	
珪化組織片	1,400	0	0	0	0	0	400	
総計	56,200	72,000	109,400	67,100	233,600	32,400	115,900	



第1図 植物珪酸体含量図

(2) 植物利用の状況

①炭化材の様相

本遺跡では火災や廃絶後の火入れにより、床面や床面から浮いて炭化材が出土する事例が多い。そこで弥生人の木材利用の傾向を把握するために、SB01（栗林3式）から68点、SB02（同）から31点、SB03（同2式）から17点（炉内炭化物2点を含む）、SB11（同）から9点、SB15（同3式）から26点（ピット内出土1点を含む）、SB17（同2式）から36点（ピット内1点を含む）の合計187点の炭化材の樹種同定を実施した。その結果（DVD参照）、コナラ属コナラ亜属コナラ節が164点（87.7%）と多数を占め、次いでクスギ節が12点（6.4%）、この他にヒノキ属、アサダ、キハダ、トネリコ属が確認された。コナラ節は重硬で強度があり、過去の周辺遺跡の調査でも西一本柳遺跡（（株）古環境研究所2005）や根々井芝宮遺跡（バリノ・サウヴェイ（株）1998）の竪穴住居の9割以上を占める建築部材として使われていることから、弥生時代中期の佐久地方における最も一般的な建築部材であったことが解る。この他、河畔林を構成するアサダ、クスギ節、トネリコ属や割け易く耐水性が高いヒノキ科など、入手しやすく強度も確保できる素材を利用したと考えられる。

これらの住居跡別出現状態は第4表の通りであり、その出土位置は住居跡毎に第4章2節に示した。また、SB17の炉内出土炭化材は2点ともコナラ節であり、これらが燃料材としても利用されていたことが判明した。

第4表 竪穴住居跡別炭化材種類構成

分類群	SB01		SB02		SB03		SB11		SB15		SB17		合計
	床面	床面	床面	炉内	床面	床面	床面	床面					
計集群													
ヒノキ科	5												5
広葉樹													
アサダ													1
クスギ節													4
コナラ節	61	29	15	2	8	22	27	8	12				164
キハダ	1												1
トネリコ属	2												4
合計	68	31	17	2	9	26	36						187

②種実の様相

SB09の炉1、SB15の炉埋土、同炉外周、SB17の炉埋土から土壌を採取し、0.5mmメッシュの篩を用いて水洗選別を行った。その結果弥生時代中期栗林2式期のSB09からはイネの胚乳8点と穎1点、タデ属の果実1点、同SB17からはイネ胚乳14点、アカザ科1点、メハジキ属1点が検出された（第5表）。このことは、イネの食糧資源としての利用を示すと同時に、胚乳や穎が炉内から出土した背景にはイネの植物体が燃料材等として利用された可能性を示唆するものである。

第5表 種実同定結果

分類群	部位	状態	篩目とその3			
			SB09 炉1その3	SB15 炉埋土 2	SB15 炉外周 3	SB17 炉埋土
草本類	イネ	胚乳*	2	-	-	3
		定形	1	-	-	11
		破片	6	-	-	-
	タデ属	穎	1	-	-	-
		葉実	1	-	-	1
		種子	-	-	-	1
メハジキ属	葉実	1	-	-	1	
炭化材	炭化	最大径	0.271g	0.197g	0.057g	0.231g
		3mm >	9mm	13mm	10mm	10mm
		2 - 1mm	0.307g	0.169g	0.032g	0.223g
		1mm	0.015g	0.009g	0.003g	0.025g
不明炭化物	炭化	4mm >	1			
		4 - 2mm	16.059g	7.036g	9.923g	42.966g
粒選	炭化	2 - 1mm	14.126g	7.009g	7.812g	27.471g
		1 - 0.5mm	28.399g	7.062g	6.076g	19.014g
		合計	102.226g	100.716g	100.633g	100.921g

*SB17-SB17より確認されたイネ胚乳は放射性炭素年代測定試料として使用。

(3) 竪穴住居跡の年代

前項で分析対象とした7軒の住居跡 (SB01・02・03・09・11・15・17) から出土した炭化材8点と炭化種実(イネ胚乳)2点を分析対象として放射性炭素年代測定を実施した。所定の前処理を行い、NEC製コンパクトAMS・1.5SDHで測定し、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIBREV5.02を用いて暦年校正を実施した。その結果は第6表の通りである。SB01・02・03・09の炭化材、P6以外のSB17の試料はともに紀元前2世紀から紀元前1世紀に集約された。出土土器からこれらの住居跡は弥生時代中期後半の栗林2〜3式にあたり、南関東地方の弥生中期後半の宮ノ台式が炭化材や土器付着物から紀元前2〜前1世紀にあたること(国立歴史民俗博物館2007)とも合致する。またSB15は紀元前1世紀から紀元1世紀の幅となっている。本住居跡は、弥生時代後期にあたるため(第4章2節1)、今回の年代測定結果と整合する。一方栗林2式にあたるSB11とSB17のP6炭化材は紀元前4世紀中頃〜紀元前3世紀初頭の年代が出されており、課題を残している。

第6表 放射性炭素年代測定および暦年校正結果

試料	暦年年代 (y±1σ)	暦年校正用 (y±1σ)	±1σ (%)	暦年校正年代 (cal)			相対比	Code No.
				σ	2σ	σ		
SB01 炭化材 C36 (コナラ跡)	2,115 ± 20	2,116 ± 21	-27.67 ± 0.16	σ	cal BC 182 - cal BC 107	cal BP 2131 - 2,056	1,000	10233 - 1
				2σ	cal BC 200 - cal BC 87	cal BP 2149 - 2,036	0,920	
					cal BC 78 - cal BC 55	cal BP 2027 - 2,004	0,680	
SB01 炭化材 C61 (コナラ跡)	2,110 ± 20	2,111 ± 21	-25.56 ± 0.12	σ	cal BC 176 - cal BC 101	cal BP 2125 - 2,050	1,000	10233 - 2
				2σ	cal BC 197 - cal BC 87	cal BP 2146 - 2,036	0,897	
					cal BC 79 - cal BC 55	cal BP 2028 - 2,004	0,103	
SB02 炭化材 C121b (コナラ跡)	2,105 ± 20	2,107 ± 21	-27.30 ± 0.10	σ	cal BC 172 - cal BC 97	cal BP 2121 - 2,046	1,000	10233 - 3
				2σ	cal BC 194 - cal BC 85	cal BP 2143 - 2,024	0,876	
					cal BC 80 - cal BC 54	cal BP 2029 - 2,003	0,124	
SB03 炭化材 C08 (コナラ跡)	2,130 ± 20	2,129 ± 21	-25.05 ± 0.12	σ	cal BC 190 - cal BC 154	cal BP 2148 - 2,103	0,701	10233 - 4
				2σ	cal BC 137 - cal BC 114	cal BP 2086 - 2,063	0,299	
					cal BC 344 - cal BC 323	cal BP 2293 - 2,272	0,048	
SB09 型1号の3 炭化種実(イネ胚乳)	2,070 ± 20	2,068 ± 20	-24.89 ± 0.15	σ	cal BC 205 - cal BC 90	cal BP 2154 - 2,029	0,825	10233 - 5
				2σ	cal BC 73 - cal BC 59	cal BP 2022 - 2,006	0,026	
					cal BC 111 - cal BC 45	cal BP 2060 - 1,994	1,000	
SB11 炭化材 C03 (コナラ跡)	2,300 ± 20	2,308 ± 21	-25.78 ± 0.11	σ	cal BC 167 - cal BC 39	cal BP 2136 - 1,988	0,994	10233 - 6
				2σ	cal BC 7 - cal BC 5	cal BP 1956 - 1,954	0,006	
					cal BC 355 - cal BC 336	cal BP 2304 - 2,285	0,194	
SB15 炭化材 C14 (ヤマブシ跡)	2,025 ± 20	2,027 ± 20	-27.86 ± 0.13	σ	cal BC 331 - cal BC 287	cal BP 2280 - 2,238	0,477	10233 - 7
				2σ	cal BC 253 - cal BC 303	cal BP 2182 - 2,152	0,230	
					cal BC 362 - cal BC 368	cal BP 2311 - 2,217	0,610	
SB17 炭化材 C20 (コナラ跡)	2,100 ± 20	2,102 ± 20	-25.50 ± 0.13	σ	cal BC 265 - cal BC 198	cal BP 2214 - 2,147	0,390	10233 - 8
				2σ	cal BC 47 - cal AD 1	cal BP 1996 - 1,949	1,000	
					cal BC 92 - cal BC 67	cal BP 2041 - 2,016	0,071	
SB17 炭化材 C20 (コナラ跡)	2,100 ± 20	2,102 ± 20	-25.50 ± 0.13	σ	cal BC 62 - cal AD 27	cal BP 2011 - 1,923	0,922	10233 - 9
				2σ	cal AD 42 - cal AD 47	cal BP 1,908 - 1,903	0,007	
					cal BC 169 - cal BC 94	cal BP 2118 - 2,043	1,000	
SB17 炭化材(ビツト)9 (コナラ跡)	2,200 ± 20	2,202 ± 19	-25.12 ± 0.11	σ	cal BC 183 - cal BC 52	cal BP 2132 - 2,001	1,000	10233 - 10
				2σ	cal BC 357 - cal BC 342	cal BP 2306 - 2,291	0,148	
					cal BC 325 - cal BC 284	cal BP 2274 - 2,233	0,460	
SB17 炭化材(ビツト)9 (コナラ跡)	2,200 ± 20	2,202 ± 19	-25.12 ± 0.11	σ	cal BC 255 - cal BC 248	cal BP 2294 - 2,197	0,049	10233 - 9
				2σ	cal BC 234 - cal BC 204	cal BP 2183 - 2,153	0,543	
					cal BC 361 - cal BC 270	cal BP 2310 - 2,219	0,596	
SB17 半埋土 炭化種実(イネ胚乳)	2,085 ± 25	2,087 ± 23	-25.68 ± 0.12	σ	cal BC 160 - cal BC 133	cal BP 2109 - 2,082	0,323	10233 - 10
				2σ	cal BC 117 - cal BC 87	cal BP 2066 - 2,036	0,393	
					cal BC 78 - cal BC 55	cal BP 2027 - 2,004	0,284	
				σ	cal BC 173 - cal BC 46	cal BP 2122 - 1,965	1,000	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIBREV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用

2) 計算には表に示した元々の値を使用している。

3) 暦年校正曲線と暦年校正プログラムが改正した場合の再計算と比較が行いやすいように、1項目を丸めている。

4) 検出比に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である

5) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、検出比に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

3. 胎土分析

はじめに

湯川沿いの沖積低地に立地する森平遺跡では、弥生時代中期粟林式期の集落から発掘当初の計測重量で418kgにのぼる土器が出土した。特にSB09の南壁際の浅い凹みであるP17から粘土塊が採取された。そこで、この粘土と土器胎土の比較を目的としてバリノ・サーヴェイ（株）に胎土分析を委託した。

(1) 分析試料

分析試料は12点である。SB09 P17から出土した粘土塊を2箇所サンプリングして試料No.1・2とした。また試料No.3（第4章第58図-249）、試料No.4（第4章第57図-250）、試料No.5（第4章第57図-251）、試料No.6（第4章第59図-252）はSB09から出土した鉢、試料No.7（第4章第57図-253）、試料No.8（第4章第57図-254）、試料No.9（第4章第57図-255）は同SBから出土した甕である。また試料No.10はSB02から出土した高杯（第4章第52図-344）、試料No.11はSB01から出土した台付甕（第4章第52図-335）、試料No.12はSB01から出土した壺（第4章第51図-334）で、分析部位は第7表のとおりである。

(2) 分析の方法

出土した粘土と土器の比較のために同一試料に対し、土器胎土に含まれる碎屑物（粒径1/64～4mm）の分析（光学顕微鏡観察）と、粘土（1/246mm未満）を含む胎土全体の化学組成分析を実施した。それぞれの分析方法は次のとおりである。

①碎屑物の分析方法

試料をダイヤモンドカッターで切断研磨して薄片を製作し、偏光顕微鏡下で観察した。その際メカニカルステージを0.5mm間隔で移動させ、細礫～中シルトまでの粒子を同定し、粒径階梯ごとにカウントした。粒径階梯は細礫（4～2mm）、極粗粒砂（2～1mm）、粗粒砂（1～1/2mm）、中粒砂（1/2～1/4mm）、細粒砂（1/4mm～1/8mm）、極細粒砂（1/8～1/16mm）、粗粒シルト（1/16～1/32mm）、中粒シルト（1/32～1/64mm）の8階梯とした。（註1）

②粘土を含む胎土全体の化学組成分析の方法

試料の一部を振動ミルで微粉砕し、ガラスビートを作成し、理学電機工業社製の波長分散型蛍光X線分析装置で定量分析した。測定条件はX線管Cr（50kv-50mA）、計測時間はPeak40sec、Back20secとした。また測定元素はSiO₂、TiO₂、Al₂O₃、Fe₂O₃、MnO、MgO、CaO、Na₂O、K₂O、P₂O₅の10元素とRb、Sr、Y、Zr、Baの微量5元素である。SiO₂ガラスビート作成時に胎土表面に塗彩が確認される場合は除去したが、跡分けもしくは粒径の大きなもの回避はしていない。

(3) 分析の結果

①碎屑物の分析結果

分析値は薄片観察結果表（第8表）、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ（第2図）、胎土中の砂の粒径組成（第3図）、孔隙・砂粒・基質の割合（PDF貼付）として提示した。その結果に基づき、以下の3つの観点から分類を行った。試料別の分類結果を第7表に掲載し、以下にその解説を行う。

・碎屑物の鉱物・岩石組成による分類

碎屑物の鉱物・岩石の種類と含有量に着目して分類したところ、大きくA・B・Cの3つの胎土類型に分類された（第7表の「鉱物/岩石」）。以下類型ごとにその特徴を記載する。

A類：斜長石を主体とし、石英が比較的多く含まれ、他の分類に比べると角閃石がやや多い。また、火山ガラスは含まれないかきわめて微量である。本類には粘土塊（試料No.1・2）が該当した。

B類：斜長石を主体とし、火山ガラスを比較的多く含むことで特徴づけられる。安山岩がやや多く、流

紋岩がそれにつづくが、有色鉱物片は微量に含まれるのみである。本類にはSB09から出土した壺3点(試料No.3・4・5)、鉢1点(試料No.6)とSB01から出土した壺1点(試料No.12)、台付壺1点(試料No.11)、SB02から出土した高杯1点(試料No.10)の計7点が該当した。

C類:斜長石を主体とし、斜方輝石と単斜輝石の両者が比較的多く含まれ、火山ガラスは少ない。本類にはSB09から出土した壺3点(試料No.7・8・9)が該当した。

第7表 胎土分析の結果

試料番号	管理番号	遺構名等	種類	器種	分析部位	胎土分類			
						鉱物/岩石	碎屑物	粒径組成	化学組成
1	-	SB09	粘土塊	-	-	A	1	mf	a
2	-	SB09	粘土塊	-	-	A	1	f	a
3	289	SB09	土器	壺	体部上半	B	3	m1	b
4	290	SB09	土器	壺	胴部	B	3	m1	b
5	251	SB09	土器	壺	口縁下	B	3	m1	b
6	252	SB09	土器	鉢	体部	B	2	m1	b
7	253	SB09	土器	壺	体部	C	3	m2	c
8	254	SB09	土器	壺	体部	C	3	m2	c
9	255	SB09	土器	鉢	体部	C	3	m2	c
10	344	SB02	土器	台付鉢	体部	B	3	m1	b
11	335	SB01	土器	台付壺	体部	B	3	m1	d
12	334	SB01	土器	壺	体部上半	B	3	m1	d

※管理番号252は報告時に「鉢C」、管理番号344は報告時に「高杯」と変更(※4参照7表参照)。

・胎土における碎屑物の割合

胎土全体(碎屑物・基質・孔隙)に対する碎屑物の割合を数値化して分類を行い、割合の低い方から1～3の3類に分類した(第7表「碎屑物」)。まず碎屑物/胎土全体が10%程度の「碎屑物」1には試料No.1・2の粘土塊試料が該当する。次に20%程度の「碎屑物」2には試料No.6の鉢が該当する。また25～30%程度の「碎屑物」3にはその他の試料全てが該当した。

・砂の粒径組成

胎土中の砂の粒径組成は、極細粒砂の割合が10%を超えている粒径組成をm1類(mはmedium sandのm)、中粒砂と細粒砂の割合が突出して多く極細粒砂は10%未満である粒径組成をm2類とした。その結果土器のうち試料No.7～9がm2類、その他はm1類に分類された。また、これらとは別に粘土塊試料No.1は中粒砂と細粒砂の割合がほぼ同程度でモードを示すことからmf(fはfine sandのf)類とし、同試料No.2は細粒砂がモードであることからf類とした。

②粘土を含む胎土全体の化学組成分析(蛍光X線分析)

蛍光X線分析では下記の観点から4種類の元素の組み合わせを選択し、胎土化学組成散布図を示した(第4図)。

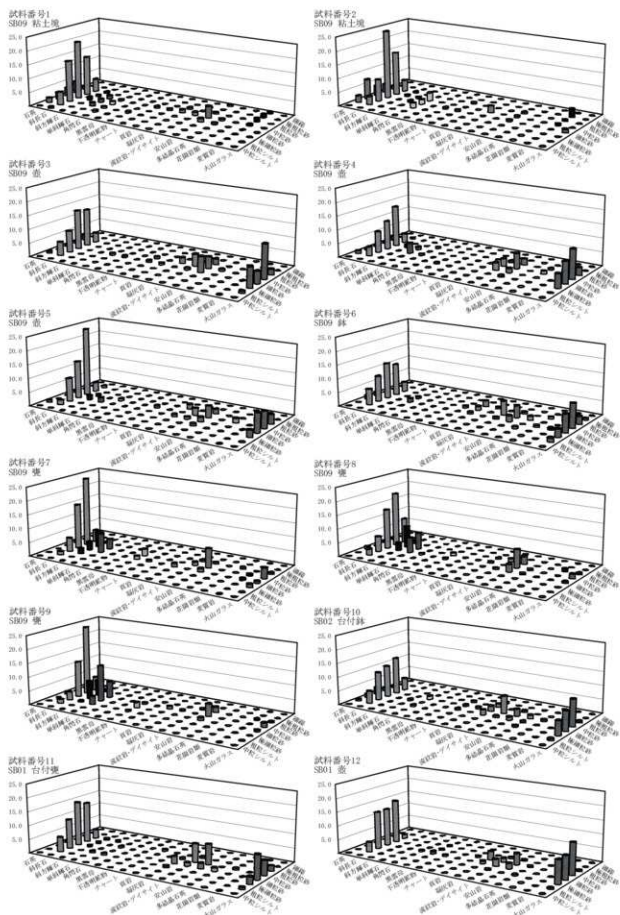
α: 粘土の化学組成中で最も主要な元素として、X軸をSiO₂とY軸をAl₂O₃としたもの(註2)。

β: 粘土の母材を考えるために長石類全体におけるアルカリ長石の割合(Na₂O + K₂O) / (CaO + Na₂O + K₂O)を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合K₂O / (Na₂O + K₂O)を縦軸としたもの(註3)。

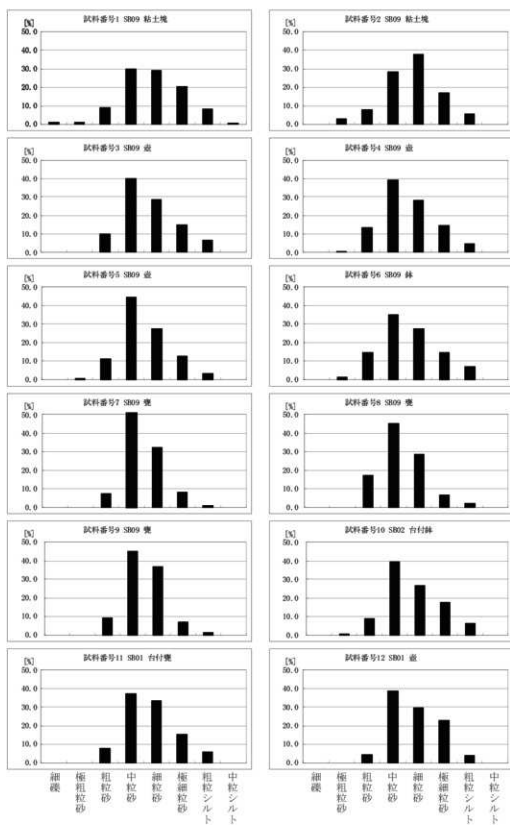
γ: 輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素の指標として、TiO₂、Fe₂O₃、MgOを選択し、Fe₂O₃を分母としたTiO₂、MgOの割合を示したものの。

δ: 微量元素を選択する。組み合わせとして、Rb - SrとZr - Ba (Zr - Baの図はDVD貼付)(註4)。結果として、どの散布図においても試料No.7～9の3点の壺は互いに近似した組成を示し、かつ他の土器および粘土塊とは異なる組成を示した。また、上記のβ以外では試料No.1・2の粘土塊は他の土器試料とは明確に分離される。またδのうちRb - Srの散布図で、ともにSB01出土の試料No.11・12が他の

試料番号	砂 粒 区 分	砂粒の種類構成															計							
		鉱物片								岩石片					その他									
		石英	カリ石	斜長石	輝石	角閃石	角閃石	ゼオライト	結晶石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	燧石	凝灰岩・ポイズイト	安山岩		花崗岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	粘土塊	植物性炭体
7	総量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	無磁粒砂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	磁粒砂	-	-	7	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	1	-	-	12
	中粒砂	1	-	41	9	6	-	-	-	4	-	-	-	2	11	-	1	-	6	-	-	-	-	81
	細粒砂	-	1	36	5	11	-	-	-	2	1	-	-	2	-	2	-	1	-	1	-	-	-	52
	無磁細粒砂	-	-	8	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	13
	磁粒シルト	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	中粒シルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	高灰																							362
	孔隙																							7
8	総量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	無磁粒砂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	磁粒砂	1	-	16	2	-	-	-	-	-	-	-	1	2	5	-	2	-	1	-	1	-	-	31
	中粒砂	1	1	35	14	11	-	-	-	2	-	-	1	-	12	1	-	-	3	-	-	-	-	81
	細粒砂	-	-	36	5	10	1	-	-	1	-	-	-	1	5	1	-	-	-	1	-	-	-	54
	無磁細粒砂	2	-	10	-	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12
	磁粒シルト	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
	中粒シルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	高灰																							467
	孔隙																							14
9	総量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	無磁粒砂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	磁粒砂	-	-	10	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4	-	1	-	1	-	1	-	-	19
	中粒砂	-	-	51	11	12	-	-	-	1	-	2	-	1	-	9	-	-	-	3	-	-	-	90
	細粒砂	2	-	36	13	26	-	-	-	4	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	74
	無磁細粒砂	-	-	6	1	6	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14
	磁粒シルト	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
	中粒シルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	高灰																							452
	孔隙																							16
10	総量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	無磁粒砂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	磁粒砂	1	-	7	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	14
	中粒砂	2	-	21	-	2	-	-	-	1	1	-	3	10	4	2	1	-	-	15	-	-	-	62
	細粒砂	4	-	18	-	1	-	-	-	1	-	-	3	1	2	1	-	-	11	-	-	-	42	
	無磁細粒砂	2	-	16	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	8	-	-	-	38	
	磁粒シルト	1	-	7	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	10	
	中粒シルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
	高灰																							397
	孔隙																							9
11	総量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	無磁粒砂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	磁粒砂	-	-	5	1	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-	12	
	中粒砂	-	1	22	1	-	1	-	-	-	-	-	1	10	11	-	1	-	8	-	-	-	56	
	細粒砂	1	-	24	1	-	1	-	-	-	-	-	4	2	3	2	-	-	13	-	-	-	50	
	無磁細粒砂	-	-	16	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	4	-	-	-	23	
	磁粒シルト	-	-	8	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	9	
	中粒シルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
	高灰																							437
	孔隙																							14
12	総量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	無磁粒砂	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
	磁粒砂	-	1	3	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	1	-	1	-	-	-	9
	中粒砂	-	-	30	-	-	-	-	1	-	1	-	6	3	8	1	-	2	-	22	-	-	-	74
	細粒砂	-	-	36	-	1	-	-	-	2	1	-	-	2	5	4	-	-	16	-	-	-	52	
	無磁細粒砂	-	-	36	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	16	-	-	-	44	
	磁粒シルト	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	8	
	中粒シルト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	
	高灰																							515
	孔隙																							21



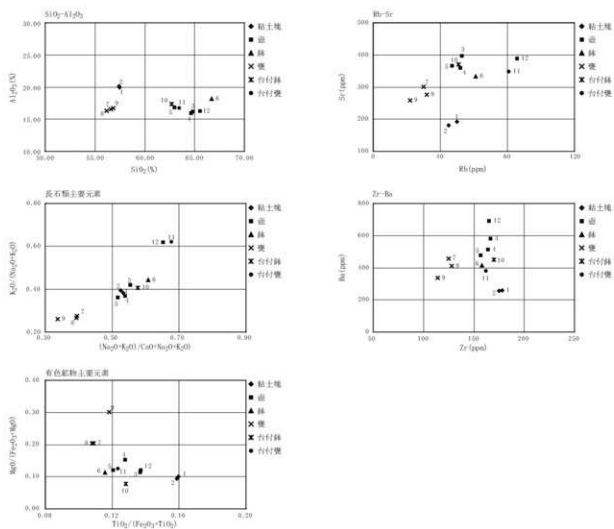
第2図 各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度(%)



第3図 胎土中の砂の粒径組成

第9表 蛍光X線分析結果

試料番号	主要元素											微量元素					
	SiO ₂ (%)	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	P ₂ O ₅ (%)	Igloss (%)	合計 (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)
1	57.49	1.27	20.90	6.69	0.04	0.75	1.60	1.13	0.70	0.05	10.28	100.00	50	192	7	178	280
2	57.43	1.27	20.99	6.73	0.04	0.70	1.54	1.03	0.67	0.05	10.45	100.00	45	181	10	175	235
3	65.58	0.56	16.26	3.33	0.05	0.45	2.63	1.90	1.37	0.61	7.06	100.00	53	396	19	167	580
4	64.65	0.60	15.90	4.09	0.08	0.73	2.90	2.14	1.25	0.47	7.19	100.00	32	359	11	164	512
5	63.01	0.66	16.78	4.80	0.06	0.65	2.85	1.95	1.10	0.49	7.65	100.00	47	366	13	157	477
6	66.73	0.62	18.17	4.73	0.10	0.60	2.29	1.98	1.58	0.18	3.02	100.00	61	334	15	158	413
7	56.56	1.02	16.38	8.34	0.11	2.13	3.44	1.63	0.62	0.79	8.78	100.00	30	300	10	125	456
8	56.16	1.06	16.31	8.76	0.11	2.24	3.49	1.66	0.60	0.67	8.94	100.00	32	277	8	128	411
9	56.84	1.16	16.70	8.64	0.13	3.72	4.38	1.65	0.58	0.41	5.79	100.00	22	259	12	114	338
10	62.71	0.63	17.37	4.29	0.08	0.36	2.49	2.02	1.38	0.29	8.38	100.00	51	370	11	170	449
11	63.47	0.68	16.72	4.83	0.04	0.69	2.61	2.08	3.40	0.50	4.98	100.00	81	348	14	162	378
12	64.84	0.53	16.18	3.33	0.05	0.45	2.42	1.73	2.81	0.38	7.28	100.00	86	389	14	165	690



第4図 粘土化学組成散布図

試料から分離された。このような点から化学組成の分類として試料No.1・2をa類、試料No.3～6・10をb類、試料No.7～9をc類、試料No.11・12をd類として第7表に記載した。

(4) 考察

バリノ・サーヴェイ(株)による考察を、以下に転載した。

今回の胎土分析結果のうち、胎土中の砂粒の鉱物・岩石種類構成による分類を基準とすると、A類は粘土塊試料の組成であり、砕屑物の量比は1類、化学組成はa類、粒径組成においてmf類とf類とに細分される。B類は、SB09出土土器以外の土器試料の組成であり、そのほとんどは砕屑物が3類、粒径組成がm1類、化学組成がb類であるが、試料番号6の鉢は砕屑物が2類、SB01出土土器2点は化学組成がd類となる。C類は、SB09出土土器3点の組成であり、いずれも砕屑物は3類、粒径組成はm2類、化学組成はc類である。

胎土に含まれる砂粒の鉱物・岩石種類構成は、土器胎土(素地土)の材料となった砂や粘土の採取された地域の地質学的背景を反映している。今回の分析試料はA～C類に分類されたが、基本的な組成、すなわち斜長石が非常に多いこと、輝石類や角閃石を伴うこと、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、安山岩の岩石片を含むこと、微量ながらも堆積岩類や花崗岩類および変質岩、珪化岩を含むことなど共通する特徴が認められた。火山ガラスは、鏡下で比較的新鮮であったことから、おそらく第四紀更新世の降下火山灰に由来すると考えられ、その場合、地域性を示す要因にはならない。したがって、A～C類の共通性からは、それらの胎土は同一の地質学的背景を有する地域内の堆積物に由来することが示唆される。

森平遺跡の位置する佐久盆地および周辺地域の地質は、河内・荒牧(1979)、荒牧(1993)、中野ほか(1998)などにより概観することができる。本遺跡は、千曲川の支流である湯川右岸の沖積低地に位置しており、森平遺跡付近の湯川右岸側(北側)には沖積低地より一段高い段丘が分布している。この段丘は、約2～25万年前に発生した浅間火山の山体崩壊堆積物である塚原泥流により構成されている(町田ほか編2006)。湯川左岸側(南側)にも段丘が分布し、上述の(町田ほか編2006)では塚原泥流からなる段丘の南部としているが、右岸側の段丘よりも上面の標高が若干低いことから、千曲川の形成した河成段丘とする記載もある(例えば長野県1991など)。岩村田付近より上流の湯川は、約1.3～1.5万年前に噴出した浅間火山軽石流期の火砕流堆積物からなる斜面の開折谷を流れている(町田ほか編2006)。さらに、森平遺跡から西へ2.5kmほどで、湯川は千曲川の沖積低地に入り、合流する。千曲川は、中生代の堆積岩類からなる秩父帯の分布する関東山地から流れ出し、東側の関東山地と、西側の主に安山岩質の火山噴出物からなる八ヶ岳北麓との間を流下し、佐久盆地南部では東側に安山岩質溶結凝灰岩からなる志賀溶結凝灰岩などの新第三紀鮮新世の火山岩・火砕岩類からなる山地も分布する。湯川との合流点付近における千曲川の沖積低地には、これらの地質に由来する砕屑物が混在していると考えられ、上述の地質記載は今回のA～C類の特徴とよく一致する。このことから、A～C類の胎土の地域性として、湯川と千曲川の合流点付近の地域を想定することができる。ただし、現時点では、各類の詳細な地域性を推定することはできない。おそらく、ある特定の層位や場所の堆積物が採取されていると考えられ、その範囲を絞っていくためには、周辺地域の各地各層位の自然堆積物を実際に分析し、比較検討する必要がある。

なお、SB09から出土した粘土塊は、上述したように、土器胎土との地質学的背景は共通する一方、胎土分類はいずれの土器試料とも一致しなかった。ただし、今回の分析結果では、土器試料に比べて砕屑物の量比が有意に低いという特徴が確認された。砕屑物の量比の違いが、自然堆積物の粘土と土器胎土用の粘土(素地土)との差異を反映したものであれば、砂粒等の混和材の状況や粘土の調整方法を示す可能性がある。

また、SB09出土土器では、壺と甕で胎土分類が異なるという特徴が認められた一方で、SB09の壺の胎

土は、同遺構出土の鉢や別遺構出土の台付鉢や台付鉢の胎土と近似することも確認された。これらのことから、森平遺跡における弥生土器の胎土は、SB09の壺の胎土とSB09の甕の胎土の両者により特徴付けられる可能性がある。

この壺と甕という器種間に認められた土器胎土の差異は、粘土や混和材等の調整、用途による素地土の違いなど土器製作時の事情を反映している可能性もある。同一の器種における胎土分類を詳細にみると、SB01出土の壺は、SB09出土の壺と砂粒の状況は類似するが化学組成において有意差が認められ、材料や調整の違いは若干あったことが推定される。

現段階では、佐久地域における弥生土器を対象とした調査事例は少なく、比較対照による本遺跡の胎土の特性を言及するには至らない。なお、水沢(1994)は、本分析と同様に薄片観察による鉱物・岩石組成と地質との比較から、塚田遺跡(御代田町塩野)出土の縄文土器胎土の地域性を推定している。本分析で対象とした土器の時代が異なり、また、分析以前の所見により在地とはとれない試料が多く選択されている。そのため、本分析結果との比較は難しいが、その中で分析により「在地の土」とされた胎土には安山岩片や流紋岩片が多く含まれるなど、本分析試料の胎土との共通点も認められる。今後は、試料の蓄積を行い、当該期の遺跡間や器種間における胎土の特性の比較、さらに、胎土の材料となった粘土や砂粒の地質学的な由来を検討することが必要と考えられる。

(5) 委託結果を受けての考察

委託結果は以上のとおりである。ここでは、粘土と土器の関係、遺跡出土土器胎土の由来2点について、若干の考察を加えたい。

①粘土と土器の関係

今回は碎屑物の分析結果として碎屑物の鉱物・岩石組成、胎土における碎屑物の割合、砂の粒径組成の3つの観点から類別が行われ、さらに化学組成分析によって碎屑物を含む粘土全体の類別がなされた。特に粘土塊(試料No.1・2)は碎屑物自体の割合が土器試料より明らかに低く、粒径の中粒砂以上の大きな碎屑物が土器よりも少ない結果となった。また、極細粒砂が20%内外とやや多い点で粒径組成のm1と共通し、極細粒砂が10%下回るm2とは異なることも分かった。このことは、SB09から出土した粘土塊を自然状態(何も調整がなされていない天然もの)と仮定した場合、土器作りに際して中粒砂以上の砂が混和材として添加されたことを示唆する。これに対し、土器試料No.7・8・9の3点(第7表「粒径組成」m2)は中粒砂と細粒砂が多く、逆に極粗粒砂がみられず、極細粒砂・粗粒シルトもきわめて少ない。そのため粘土塊No.1・2からこのような胎土の土器をつくる場合、極細粒砂以下を篩分けて除去しなければならないだろう。

このことから、粘土を採取し、そこへ粒径の大きな碎屑物を混和して製作された土器がB類、粘土から細粒の碎屑物を除去して製作された土器がC類という可能性が考えられよう。ただ、鉱物・岩石の種類をみると、粘土塊試料2に含まれている酸化角閃石、同1に含まれているザクロ石が、そこに中粒砂以上の砂を添加して作ったはずの粒径組成m1のうち一部の土器からは欠落しているなど、矛盾する部分もあり、製作過程は、それほど単純ではないことも予想される。

②遺跡出土土器の分類

今回の碎屑物の分析結果をふまえて、森平遺跡出土土器のうち掲載個体281点を肉眼観察したところ(4章第3節1)、鉱物/岩石における胎土分類(第7表)のB・C類ともに微細な白色粒子を多量に含んでいることで共通する。これは薄片の偏光顕微鏡観察と肉眼観察の対比によって中粒砂の主体を占める風化斜長石と同定される。特にB類はこの他に個体毎に格差があるものの、火山ガラスや高温型石英が認められ、薄片で安山岩・流紋岩・凝灰岩・花崗岩などに相当するとみられる岩片が観察される。そこで肉眼

観察上、胎土分類のB類に類似した特徴をもつ土器群を1類とした(第4章第7表)。また、胎土分類のC類(試料No.7~9)は、肉眼観察においても輝石が多く火山ガラスが少ないため、肉眼観察においてこれらと類似した特徴をもつ土器群を2類として区別した。

さて、胎土分類のC類は大雑把にとらえるとA・B類と同様の地質学的由来が指摘されたが化学組成を含む胎土分類の結果((3)②)からは、A・B類とは明確に分離されている。また碎屑物の種類において試料No.7~9は斜方輝石・単斜輝石を多く含み、酸化角閃石を含まないことに注目すれば、八ヶ岳山麓から千曲川へ流下したとみられる酸化角閃石を含む胎土分類のA類の土器群より、浅間火山の堆積物の組成(河内・荒牧1979、河内1995)により近いと判断される。また、今回の委託分析結果によるとSB09の甕(試料No.7~9)はすべてC類であったが、肉眼観察により設定した2類には壺・甕・鉢・蓋が含まれ、特に胎土と器種の関係が対応しているとは考えづらい。また、森平遺跡出土土器には1類、2類の他に、風化した黄褐色粒子が含まれかつ色調が10YR8/6の白色系の胎土が認められ、これを仮称3類とした。そしてこれら1~3類から外れる胎土も観察された。そこには有東式とされたSK001出土の壺502の角閃石・輝石を含み、白色の胎土も含まれている。結果的にミニチュア土器以外の掲載土器271個体のうち149点が1類、22点が2類、23点が3類で、それぞれ全体の55.0%、8.2%、8.5%にあたることが確認された。

このように肉眼観察という前提があるものの、遺跡出土の土器胎土の多くが1類というかなり類似した胎土で構成されることは、湯川・千曲川の堆積物の岩石組成を反映する限定的な粘土採取地と調整方法が想定されよう。C類胎土は輝石を含むという組成の背景が、器種による粘土の選択的でないとすれば粘土採取地等の違いによる可能性も考えなければならない。

(6) まとめ

今回の委託試料では、粘土塊も土器胎土も、大きくは湯川ないし千曲川もしくはその両者の堆積物の組成を反映していることから、近隣で採取したものとしてみられることが判明した。また碎屑物の種類・粒径組成・化学組成の検討から、土器づくりを行う際に素地土の調整が行われていた可能性や、粘土そのものの微妙な採取地の違いも予想された。今回の委託試料には、胎土が異なることから搬入品と判断されるようなものは存在しなかったものの、掲載土器全体の肉眼観察結果からは、今回の試料とは胎土が異なるものが確認された。これらの中に実際の搬入品が含まれているのかどうか、時間的な制約から分析し得なかったため、今後の課題としたい。

〔注1〕 通常土器中に入っている鉱物・岩石は粒径レベルの粒径であることから「砂」と標記されているが、今回は細理やシルトも考慮の範囲に入るため、「細砂物」と標記する。

〔注2〕 X軸にSiO₂・Y軸にAl₂O₃をとると、火山ガラスが多く、よりSiO₂の値が高い値にB類がみられ、火山ガラスも石英も含まないC類はそれと逆の傾向を示す。また、石英を含む粘土塊はそれよりやや酸性側(SiO₂側)に偏る。(執筆者解説)

〔注3〕 造岩鉱物のうち長石類全体におけるアルカリ長石の割合を横軸に、アルカリ長石におけるカリ長石の割合を縦軸に設定してX・Yグラフを描いた本結果において、No.1と12、1~6と10、7~9がグループを作っている。アルカリ長石は安山岩・デイサイト・流紋岩の類に増えていくため、石英が少なく輝石が多く、安山岩を母岩とする可能性がより高い試料No.7~9のC類がより低い値にまとまることは納得される。(執筆者解説)

〔注4〕 微量元素のうち、SrとRbは限器種の胎土分析においても日本列島の粘土の地域特性を反映するといわれている(三辻1983)。(執筆者補記)

第2節 今井西原遺跡の自然科学分析

自然科学分析は、すべてバリノ・サーヴェイ（株）に委託して行った。以下はその報告書を基に再構成した概要である。

1. 放射性炭素年代測定

今井西原遺跡 SB101 の年代を知るために、SB101 の床面付近で出土した炭化材 2 点 (C2、C4) について放射性炭素年代測定を行った。

測定は、加速器分析研究所の協力を得て、AMS 法によって行った。測定機器は、3 MW 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用し、測定時に標準資料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシユウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行った。同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行い、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出した。放射性炭素の半減期は LIBBY の 5668 年を使用した。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIBREV5.0 (Copyright 1986 - 2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与えて計算を行った。

その結果、C2 の年代は、1870BP、C4 の年代は 1750BP で、暦年較正年代で確率の高いものは、各 calAD85-175、calAD238 - 342 となった (第 11 表)。C4 の年代は、古墳時代前期と考えられる SB101 の年代と合致するが、C2 の年代はやや古めであり、年代測定に使用した材の性格について検討が必要と思われる。

第 10 表 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	暦年年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
SB101 C2	コナラ葉属クス木	1870 ± 40	-20.87 ± 0.69	1960 ± 40	IAAA - 42423
SB101 C4	コナラ葉属クス木	1750 ± 40	-28.28 ± 0.71	1800 ± 40	IAAA - 42424

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5668 年を使用した。
 2) BP 年代値は、1950 年を基準として何年前であるかを示す。
 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第 11 表 暦年較正結果

試料名	暦年年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.			
		cal AD	85	- cal AD	175			cal BP	1865	- 1775
SB101 C2	1866 ± 41	cal AD	85	- cal AD	212	cal BP	1759	- 1738	0.818 0.182	IAAA - 42423
		cal AD	191	- cal AD	212	cal BP	1759	- 1738		
SB101 C4	1750 ± 40	cal AD	238	- cal AD	342	cal BP	1712	- 1608	-3.608	IAAA - 42424

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIBREV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。
 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

2. 樹種同定

今井西原遺跡 SB101・ST104 の構築材や当時の周辺環境を知るために、SB101 の床面付近で出土した炭化材 7 点 (8 トレ、C1、C2、C4 西、C4 東、C7、C12) と、ST104 の P5 から出土した炭化材 1 点の計 8 点について樹種同定を行った。

同定は、炭化材の 3 面の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の断面を観察することによって行った。

その結果、SB101 出土炭化材は7点ともコナラ属コナラ亜属クスギ節に、ST104 P5 出土炭化材はバラ科ナシ亜科に同定された(第12表)。ST104 P5 出土炭化材の導管配列はナシ亜科の中でもカマツカに似るが、放射組織の大きさ等が現生標本と異なることから、種の同定までには至らなかった。

日本国内のクスギ節にはクスギとアベマキの2種類があるが、本地域ではクスギが一般的であることからクスギの可能性が高い。クスギの材質は重硬で強度が高いことから住居の構築材であったと思われる。ナシ亜科も強度が高い材質を有する種が多いが、現時点では用途等は不明である。

第12表 樹種同定結果

地区	遺構	時期	試料名	樹種
①区	SB101	古墳時代前期	8トレ	コナラ属コナラ亜属クスギ節
			C1	コナラ属コナラ亜属クスギ節
			C2	コナラ属コナラ亜属クスギ節
			C4 (B)	コナラ属コナラ亜属クスギ節
			C4 (A)	コナラ属コナラ亜属クスギ節
			C7	コナラ属コナラ亜属クスギ節
			C12	コナラ属コナラ亜属クスギ節
			PS	バラ科ナシ亜科
			ST104	

3. 珪藻分析

本遺跡内や遺跡周辺の古環境の変遷を知るために、1区Ⅰ-18地点の断面で採取した土壌サンプル7点と2区東壁で採取した土壌サンプル6点の計13点について珪藻分析、花粉分析、珪酸体分析を行った。

本遺構の土層は大きく4分層され(第6章第2図)、さらに各層が細分される。分析の対象としたのは、1区Ⅰ-18地点がⅠ-2層から1点(No.1)、Ⅱ-1層から1点(No.2)、Ⅲ-1層から1点(No.3)、Ⅲ-2層から2点(No.4・5)、Ⅳ層から1点(No.6)、SD101の埋土から1点(No.7)の計7点。2区東壁は、1層下部から1点(No.1)、Ⅲ層から2点(No.2・3)、溝状遺構の埋土から1点(No.4)、Ⅳ-1層から1点(No.5)、Ⅳ-6層から1点(No.6)の計6点である。

珪藻分析は試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を凝集、検鏡に適する濃度まで希釈、カバーガラス上に滴下して乾燥の後、プリエウラックスで封入して、永久プレパラートを作成した。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数した。但し、化石の少ない試料はこの限りではない。種の同定は、以下の植物誌や図鑑類などを参照した(原口ほか1998)、(Krammer 1992)、(Krammer & Lange - Bertalot 1986・1988・1991a・1991b)。

同定結果は、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示した(第13表)。淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応性を示した。また、環境指標種はその内容を示した。産出個体数100個体以上の試料は、産出率30%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成した(第5図)。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求めた。堆積環境の解析は、淡水生種は安藤報告(安藤1990)、陸生珪藻は伊藤・堀内報告(伊藤・堀内1991)、汚濁耐性はAsai & Watanabe分類(Asai & Watanabe 1995)の環境指標種を参考とした。1区Ⅰ-18地点のNo.5・6と2区東壁のNo.2・6を除く各試料から、計28属136種の珪藻化石が産出した。珪藻化石が産出した試料での完形殻の出現率は10～60%で上層にいく程出現率が高い。

1区Ⅰ-18 SD101埋土は珪藻化石の保存状態は不良であり、流水性種や塩分や塩類を豊富に含む水域

に生育する種や陸生珪藻等の様々な由来の種類が混在する状況が認められ、流水等による運搬作用により集水域の様々な環境に生育する珪藻化石が堆積したと推測され、当該期は河川の影響を強く受けていた可能性がある。

弥生・古墳時代の包含層である黒色土層(Ⅲ層)(1区Ⅰ-18 No.3-5、2区東壁 No.3)では、1区Ⅰ-18からは *Rhopalodia gibberula* が多産し、汚濁した水域にも耐性のある広域適応性種を含む流水不定性種や陸生珪藻 A 群を伴うといった特徴が認められた。このことから、塩類の集積し易いような富栄養の水域環境が推測されるが、陸生珪藻が検出されることから、定期的に水が存在せず乾いた時期も存在していたと考えられる。一方、2区東壁では陸生珪藻 A 群が多産し、沼沢湿地付着生種群を伴う特徴が認められたことから、当土層の堆積時はしばしば乾燥する湿地の環境であったことが推測される。したがって、この黒色土は、氾濫堆積物を母材とし、河川の影響が減少するとともに周辺が湿地化し、長期間植物が被覆し腐植が集積したと推測される。

Ⅱ・Ⅰ層では、珪藻化石群集は好汚濁性種、広域適応性種、中～下流性河川指標種群を含む流水性種等が検出されたことから、塩類を豊富に含む富栄養な水域環境が考えられる。なお、珪藻化石群集に認められた淡水～汽水性種の *Navicula veneta*、*Rhopalodia gibberula*、流水不定性の *Achnanthes hungarica*、*Gomphonema parvulum*、*Nitzschia amphibia*、陸生珪藻 B 群であり好汚濁性種の *Navicula confervacea* は、現在の水田土壌(安藤 1966、金網 1967、根来・東野 1986、伊藤 1994)や水田遺構(バリノ・サーヴェイ(株) 1986、田中 1987)から普通に検出される種類である。

第13表 珪藻分析結果

種 類	生態性			DIN 1区Ⅰ-18断面地点							DIN2区東壁						
	塩分	pH	流水	堆積 相群種	1-2	1E-1	1E-2	2	2	IV	SD00	1期	2期	3期	SD	IV-1	IV-6
					No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.) W.Smith	Eub-Meh			E2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia compressa</i> (Dilley) Boyer	Meh			E1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ambora veneta</i> Koetzing	Ogh-Meh	alk	eph		2	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>Bacillaria paradoxa</i> Gensel	Ogh-Meh	alk	eph	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella pusilla</i> Grunow	Ogh-Meh	alk	ind		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	Ogh-Meh	alk	eph	U	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema pseudonagum</i> Lange-Bertalot	Ogh-Meh	alk	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula gjeppertiana</i> (Bleisch) L.Smith	Ogh-Meh	alk	ind	S	-	-	6	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula pygmaea</i> Koetzing	Ogh-Meh	alk	ind	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula tenera</i> Hustedt	Ogh-Meh	alk	ind	S	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula veneta</i> Koetzing	Ogh-Meh	alk	ind	S	10	8	-	2	1	-	-	3	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia inconspicua</i> Grunow	Ogh-Meh	alk	ind		2	3	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>victoriae</i> Grunow	Ogh-Meh	alk	ind	U	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia obtusa</i> var. <i>scalpelliformis</i> Grunow	Ogh-Meh	alk	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia pullea</i> (Kuetz.) W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) Müller	Ogh-Meh	alk	ind		11	11	11	17	1	3	9	12	6	6	4	31	-
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	Ogh-ind	alk	ind	U	9	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes inflata</i> (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	alk	eph	T	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.) Grunow	Ogh-ind	ind	eph	KT	4	7	1	-	-	-	-	9	-	-	-	-	-
<i>Achnanthes minutissima</i> Koetzing	Ogh-ind	alk	ind	U	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ambora affinis</i> Koetzing	Ogh-ind	alk	ind	U	2	1	-	1	-	-	-	-	1	-	2	-	-
<i>Ambora montana</i> Krause	Ogh-ind	ind	ind	RA.U	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Ambocostea crenulata</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	eph		-	-	-	-	-	2	-	-	1	3	1	-	-
<i>Caloneis aerophila</i> Bock	Ogh-ind	alk	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis angustivalva</i> Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Caloneis bacillum</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	alk	eph	U	6	8	-	3	-	-	-	4	-	1	-	-	-
<i>Caloneis leptostoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	eph	BB	-	-	1	-	-	3	-	-	-	3	-	-	-
<i>Caloneis schumanniana</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	alk	eph	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Caloneis silicula</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	alk	ind		2	6	1	1	-	-	-	5	-	-	-	-	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>subtypica</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	alk	eph	T	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

種 類	生態性		DIN1区1-18断面地点						DIN2区東端								
	塩分	pH	環境 指標値	1-2	1-11	2	2	N	SD	1	1	2	2	SD	N	1-11	2
				No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	
<i>Craticula cuspidata</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	alū	ind	S	1	3	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Craticula lakshila</i> Grun. ex V.Heurck/D.G.Mann	Ogh-ind	alū	ind	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Craticula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-	1	-	-	-	-	3	-	-	-	-
<i>Cymbella perpusilla</i> A.Cleve	Ogh-bob	ac-ū	lph	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella silicula</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	3	5	-	-	-	-	-	-	4	-	-	1	-
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K.T	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cymbella tumida</i> (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-ū	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cymbella turgidula</i> Grunow	Ogh-ind	al-ū	r-ph	K.T	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-ū	ind	T	1	5	1	2	-	-	3	2	1	2	6	-	-
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	3	-	2	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Diploneis yatsukensis</i> Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	l-ph	RI	1	-	-	-	1	9	7	-	1	9	2	30	-
<i>Diploneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	1	4	4	5	-	-	3	10	1	9	-
<i>Eumotia gracilis</i> Meisner	Ogh-bob	ind	l-ū	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Eumotia monodea</i> Ehrenberg	Ogh-bob	ac-ū	l-ph	O	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eumotia pectinalis</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-bob	ac-ū	ind	O.T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Eumotia pectinalis</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-bob	ac-ū	ind	O.T	-	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-
<i>Eumotia pectinalis</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs.)Rabenhorst	Ogh-bob	ac-ū	ind	O	-	1	-	-	-	-	-	5	2	-	1	-	-
<i>Eumotia pectinalis</i> var. <i>ventralis</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-bob	ac-ū	ind	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Eumotia praeerupta</i> Ehrenberg	Ogh-bob	ac-ū	l-ph	RR.O.T	-	-	-	3	-	2	1	2	-	7	6	5	-
<i>Eumotia praeerupta</i> var. <i>hidena</i> Grunow	Ogh-bob	ac-ū	l-ph	RRO	-	-	-	-	2	-	5	-	2	1	8	-	-
<i>Eumotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-ū	l-ph	T	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>mesolepta</i> (Ralfs.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-ū	l-ph	T	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria constricta</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-ū	l-ph	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria constricta</i> f. <i>venter</i> (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-ū	l-ph	S	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria parvula</i> (W.Smidt)Grunow	Ogh-ind	al-ū	ind	U	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria pinnata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-ū	l-ph	S	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fragilaria virescens</i> Ralfs	Ogh-ind	ac-ū	l-ph	U	-	-	-	-	1	-	6	-	1	8	9	3	-
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait)De Toni	Ogh-ind	al-ū	ind	U	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Frustulia vulgaris</i> var. <i>capitata</i> Krause	Ogh-ind	al-ū	ind	U	-	-	4	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Gomphonema acuminatum</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-ū	ind	U	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema angustatum</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-ind	ac-ū	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-ū	l-ph	O.U	-	1	-	2	-	-	-	3	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	11	27	4	6	3	-	1	9	-	1	3	-	-
<i>Gomphonema parvulum</i> var. <i>lagensula</i> (Kuetzing)Fregoli	Ogh-ind	ind	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	1	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gyrosigma procerum</i> Hustedt	Ogh-ind	al-ū	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Gyrosigma</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Hantzschia amplicoxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-ū	ind	RAU	-	1	15	3	3	2	8	-	2	6	8	3	-
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-ū	al-ū	r-ph	K.T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Meridion circulare</i> var. <i>constrictum</i> (Ralfs.)V.Heurck	Ogh-ind	al-ū	r-ph	K.T	-	-	-	-	1	11	-	-	-	1	7	2	-
<i>Navicula ariensis</i> Okuno	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Navicula ebenedina</i> Grunow	Ogh-ind	al-ū	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula confusiva</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-ū	ind	RBS	27	18	3	1	-	-	-	-	51	-	1	-	-
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-ū	ind	RAT	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula contenta</i> f. <i>hiopsis</i> (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-ū	ind	RAT	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula cryptocarpale</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ū	ind	U	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula eglezensis</i> (Grag.)Ralfs	Ogh-ind	al-ū	ind	O.U	-	1	-	-	-	-	1	1	-	2	1	-	-
<i>Navicula eglezensis</i> var. <i>cuneata</i> H.Kobayasi	Ogh-ind	al-ū	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Navicula eglezensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-ū	r-ph	U	6	4	1	2	-	-	-	-	11	-	-	-	-
<i>Navicula gallica</i> var. <i>perpusilla</i> (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula hambergii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula ketschyi</i> Grunow	Ogh-ind	al-ū	ind	-	9	9	1	-	-	-	-	-	7	1	1	-	-
<i>Navicula motica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ū	ind	RAS	5	1	21	10	-	1	10	-	4	24	20	3	-
<i>Navicula plusiobila</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Navicula seminulum</i> Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RBS	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-ū	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

種 類	生 態 性		DIN 1 区 I - 18 断面地点										DIN2 区東郷						
	塩分	pH	底 本	環境		1 - 2 II		1 - 1 R		2 2		R SC001		1 期		SD		IV - 1 R - 6	
				指標	種	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	
<i>Navicula viridula</i> (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-β	rpb	KU	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-β	rpb	KU	1	2	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium affine</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-bob	inf	l-h	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustedt	Ogh-unk	unk	inf	RA	2	1	-	1	1	-	-	-	1	-	1	2	-	-	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	inf	lph	-	1	2	-	2	1	-	-	-	1	-	1	2	-	-	-
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia acidociliata</i> Lange-E.	Ogh-ind	al-β	inf	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-h	inf	U	16	19	2	1	-	1	-	-	5	1	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-β	inf	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia lantzschiana</i> Rabenhorst	Ogh-ind	al-h	inf	U	11	5	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	al-β	rpb	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia nana</i> Grunow	Ogh-ind	inf	inf	RBS	4	1	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia palustris</i> Hustedt	Ogh-ind	inf	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia sinuata</i> var. <i>delognesi</i> (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-β	lph	U	1	3	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia tubicola</i> Grunow	Ogh-ind	al-β	inf	S	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Orthoseira roseana</i> (Bab.)O'Meara	Ogh-ind	inf	inf	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia appendiculata</i> (Ag.)Cleve	Ogh-bob	inf	inf	RB	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia acropachia</i> W.Smith	Ogh-ind	al-β	lph	O	-	2	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	inf	inf	RA	1	-	10	1	2	1	3	-	2	10	3	3	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>brevicostata</i> Hustedt	Ogh-ind	inf	inf	RA	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia borealis</i> var. <i>linearis</i> M.Per.	Ogh-ind	inf	inf	RA	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia brassiana</i> (Grun.)Mills	Ogh-bob	ac-h	lph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia divergens</i> W.Smith	Ogh-bob	ac-β	lph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-β	inf	OU	-	1	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-bob	ac-β	inf	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia lata</i> (Breb.)Rabenhorst	Ogh-bob	ac-β	inf	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	inf	inf	S	1	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia neomajae</i> Krammer	Ogh-ind	ac-β	l-h	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogh-bob	ac-β	lph	O	3	3	-	-	-	-	-	-	4	-	1	1	-	-	-
<i>Pinnularia schenfelderii</i> Krammer	Ogh-ind	inf	inf	RI	4	1	-	2	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia Schroederii</i> (Hast.)Krammer	Ogh-ind	inf	inf	RI	-	-	-	1	-	1	5	-	-	1	8	3	-	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-β	inf	RBS	2	4	3	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	inf	inf	O	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	2	3	2	2	-	2	1	1	1	-	-	-
<i>Rhicosophea abbreviata</i> (Ag.)Lange-E.	Ogh-hl	al-β	rpb	KT	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopodia gibba</i> (Ehr.)Muller	Ogh-ind	al-β	inf	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
<i>Rhopodia novae-zelandiae</i> Hustedt	Ogh-ind	al-β	inf	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rhopodia quasimburgiana</i> Skovtsov	Ogh-hl	al-β	inf	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Selaphora americana</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-β	lph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Selaphora bacillum</i> (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-β	inf	U	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Selaphora brevissima</i> (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	inf	inf	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Selaphora pseudopapula</i> (Kraske)Lange-E.	Ogh-ind	inf	inf	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Selaphora papula</i> (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	inf	inf	U	3	2	2	10	-	-	-	-	8	-	2	-	-	-	-
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-β	lph	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis anopea</i> Ehrenberg	Ogh-ind	inf	inf	T	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis borrichii</i> (Pet.)Lund	Ogh-ind	inf	inf	RI	-	-	4	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis laevigata</i> var. <i>angusta</i> Hustedt	Ogh-ind	al-β	inf	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	inf	inf	RB	-	-	-	5	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Stauroneis plococentron</i> (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	inf	lph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-β	r-h	U	5	2	1	-	-	-	-	-	18	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella bohemica</i> Maly	Ogh-ind	inf	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella linearis</i> W.Smith	Ogh-ind	inf	lph	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella ovata</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-β	rpb	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-β	rpb	U	4	2	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-
<i>Synedra ulna</i> (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-β	inf	U	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-

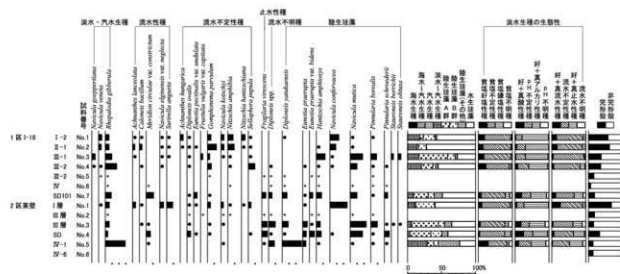
南水生種	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
南水～汽水生種	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
淡水～汽水生種	37	27	19	21	2	3	9	20	6	6	4	31	0		
淡水生種	167	176	97	81	30	29	93	180	33	97	107	75	0		
珪藻化石群数	204	204	116	102	32	32	102	201	39	103	111	106	0		

凡例

R1: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R: 汽水に対する適応性
Esh-Meb: 南水生種～汽水生種	al - bi: 真アルカリ性種	l - bi: 真止水性種
Meb: 汽水生種	al - i: 好アルカリ性種	i - ph: 好止水性種
Ogh - Meb: 淡水～汽水生種	ind: pH不定性種	ind: 淡水不定性種
Ogh - bi: 真塩好塩性種	ac - i: 好酸性種	r - ph: 好淡水性種
Ogh - ind: 真塩不定性種	ac - bi: 真酸性種	r - bi: 真汽水性種
Ogh - hab: 真塩好塩性種	unk: pH不明種	unk: 汽水不明種
Ogh - unk: 真塩不明種		

環境指標群

E1: 海水に属する底層指標。E2: 汽水に属する底層指標 (以上は小村1988)
 K: 中～下流河川川の指標。O: 沼沢地層付着性種 (以上は安藤1996)
 S: 好汚濁性種。U: 広域適応性種。T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe 1995)
 R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB:B群, RI: 米区分、伊藤・堀内1991)



海水～汽水～淡水生種産出率・各種産出率・完形産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は3%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第5図 主要珪藻化石群集の層位分布

4. 花粉分析

遺跡周辺の植生の変遷を知るために、花粉分析を前述の珪藻分析と共通の土壌サンプル計13点について行った。

試料は、各々約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛 比重2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリンス (無水酢酸9・濃硫酸1の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集した。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数した。

結果は第14表、第6図のとおりである。花粉化石が検出されたのは、1区I-18のNo.1・2、2区東壁のNo.1・2のみである。この他の試料では、花粉化石はほとんど検出されず、保存状態も不良である。木本花粉は、いずれの試料もマツ属が高率で検出されることを特徴とし、ツガ属、スギ属、コナラ亜属等が低率で伴う。一方、草本花粉は、いずれの試料においてもイネ科が多産し、この他にガマ属、ミズアオイ属、サンショウモなど水生植物の花粉化石や渡来種であるソバ属の花粉化石が検出される。

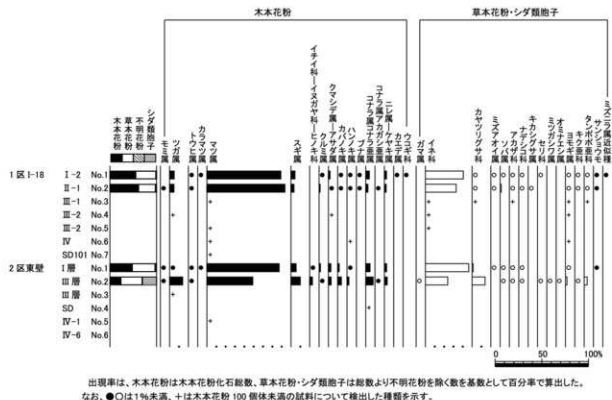
マツ属の割合が極めて高いといった組成は、北畑遺跡 (佐久市) で行われた分析調査では、中近世に

相当する堆積物で認められている（未公表資料）。また、長野県内では、北信地域は近世を境とし、それまで優勢であったコナラ亜属が減少しマツ属が急増するとされており（田中・辻本 2000）、本地域においても同様の变化があった可能性がある。なお、マツ属が多産する組成は、弥生・古墳時代包含層とされるⅢ層（2区東壁 No.2）からも認められたが、当地点はⅢ層上位は現耕作土であり上層の影響を受けている可能性もあることから、調査所見と合せて検証する必要がある。

第14表 花粉分析結果

種類	試料番号	DIN 1区148断面地点							DIN2区東壁					
		I-2 No.1	II-1 No.2	III-1 No.3	2 No.4	2 No.5	IV No.6	SD101 No.7	I層 No.1	II層 No.2	III層 No.3	SD No.4	IV-1 No.5	IV-6 No.6
本末花粉														
モミ属		-	1	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
ツグ属		15	12	-	1	-	-	-	2	14	1	-	-	-
トウヒ属		2	1	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
カラマツ属		1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
マツ属単葉型亜属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
マツ属多葉型亜属		188	171	1	-	3	1	-	148	32	-	-	-	-
マツ属（亜属不明）		58	46	-	-	1	-	1	48	17	-	-	1	-
スギ属		13	8	-	-	-	-	-	14	10	-	-	-	-
イチイ科-イヌゴヤ科-ヒノキ科		-	-	-	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-
ケル木属		2	3	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-
クマシラ属-アキダ属		6	2	-	1	-	-	-	7	3	-	-	-	-
ハンバシ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カバノキ属		2	2	-	-	-	-	-	4	4	-	-	-	-
ハンノキ属		1	1	-	-	-	-	1	-	2	2	-	-	-
ブナ属		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属		12	6	-	-	-	-	-	12	8	-	1	-	-
コナラ属アカガシ亜属		-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ヒトツグ属-ケヤキ属		7	5	-	-	-	-	-	6	3	-	-	-	-
カエデ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉														
ゴマ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
イネ科		229	140	8	1	1	-	-	247	102	-	-	-	-
オキワリタマ科		5	2	11	-	-	-	-	6	09	-	-	-	-
フユタケ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズアオイ属		2	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
タケ科		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
オキナクサ科-ウナギツクサ科		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
タケ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
ツバ属		1	5	-	-	-	-	-	4	2	-	-	-	-
アカヤコ科		1	1	1	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-
ナデシコ科		1	1	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
キンボウゲ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アブウナ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ハコ科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
フウロソク属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キキョウ科		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科		1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミツバシラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カラスウリ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属		2	3	5	2	-	1	-	1	7	-	-	-	-
キク科		1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ラン科が藜科		2	2	3	-	-	-	-	-	14	-	-	-	-
不明花粉		-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-
シダ類胞子														
ヒカゲノカズラ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

種類	試料番号	DN1区1-18前面地点							DN2区東壁					
		I-2 No.1	II-1 No.2	III-1 No.3	2 No.4	2 No.5	IV No.6	SD101 No.7	I層 No.1	II層 No.2	III層 No.3	SD No.4	IV-1 No.5	IV-6 No.6
ゼンマイ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヤシショウモ		2	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	
ミズニラ属近縁種		4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
他のシダ類胞子		-	8	23	8	5	4	2	12	128	-	2	-	
合計		311	280	1	2	4	2	1	255	100	1	1	1	
木本花粉		246	157	28	3	1	1	1	265	197	1	0	0	
草本花粉		0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	
不明花粉		7	9	23	8	5	4	2	14	129	0	2	0	
シダ類胞子		564	426	52	13	10	7	4	534	426	2	3	1	
総計(不明を除く)														



第6図 花粉化石群集の層位分布

5. 植物珪酸体分析

遺跡内の植生の変遷や稲作の様態を知るために、植物珪酸体分析を前述の珪藻分析、花粉分析と共通の土壌サンプル計13点について行った。

植物珪酸体分析は、各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム 比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集して、カバーガラス上に滴下・乾燥させた後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、（近藤・佐瀬1986）の分類に基づいて同定・計数した。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求めた。

結果は第15表、第7図のとおりである。1区I-18・2区東壁のいずれの試料からも植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められた。植物珪酸体含量は各層位で変化し、1区I-18のNo.4・5では植物珪酸体含量は約20万個/g以上と多く、2区東壁のNo.2・6

は1,000個/g未満と少ない。栽培植物のイネ属の植物珪酸体は、両地点ともⅢ層以降の土層から検出される傾向が認められた。以下は、各地点の産状である。

1区I-18断面

No.6は、植物珪酸体含量は約6,000個/gと本地点では最も少ない。ヨシ属、コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出され、ススキ属短細胞珪酸体と不明キビ型の産出が目立つ。

No.7は、植物珪酸体含量は約2.6万個/gとNo.6と比較して多い。検出される種類はNo.6と同様であり、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、不明キビ型の短細胞珪酸体の産出が目立つ。

No.4・5は、植物珪酸体含量は20万個/g以上と最も多い。No.6・7と同様の種類が検出され、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、不明キビ型の短細胞珪酸体の産出が目立つ。No.4からは栽培植物のイネ属が検出され、短細胞珪酸体は約800個/g、機動細胞珪酸体含量は約2,000個/gを示す。

No.3は、植物珪酸体含量は約3.8万個/gと減少する。検出される種類や産出状況はNo.2・3と同様である。下の試料と同様である。栽培植物のイネ属は、短細胞珪酸体含量は約700個/g、機動細胞珪酸体含量は約1,200個/gを示す。

No.2は、植物珪酸体含量は約4万個/gを示す。ほぼNo.3と同様の産出状況を示す。ただし、イネ属は、短細胞珪酸体は約1,600個/g、機動細胞珪酸体は約5,400個/gと増加する。また、栽培種を含むオオムギ族が検出される。なお、検出されたオオムギ族は、植物珪酸体の形態からは栽培種の判別は困難である。

No.1は、植物珪酸体含量は約10万個/gを示す。検出される種類や産出状況はNo.2・3と同様である。また、栽培種のイネ属や栽培種を含むオオムギ族も検出される。イネ属は、短細胞珪酸体は約6,100個/g、機動細胞珪酸体は約8,300個/gと多い。

2区東壁

植物珪酸体含量は、層位的に変化する。No.3で約16.7万個/gと最も多く、No.6では約60個/gと極めて少ない。

No.6は、植物珪酸体含量は約60個/gと極めて少ない。種類の特定に至るものは検出されず、不明のみからなる。

No.5は、植物珪酸体含量は約8.7万個/gである。ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科が検出され、ヨシ属や不明キビ型の短細胞珪酸体の産出が目立つ。

No.4は、植物珪酸体含量は4.5万個/gである。産出する種類や産状は、No.5と類似する。

No.3は、植物珪酸体含量は約16.7万個/gを示す。産出する種類は、No.5・4と同様である。なお、イネ属の植物珪酸体が検出され、短細胞珪酸体は約400個/g、機動細胞珪酸体は約900個/gである。

No.2は、植物珪酸体含量は約500個/gと少ない。産出する種類はほぼ同様であるが、それぞれ約200個/g未満である。栽培植物のイネ属は全く検出されない。

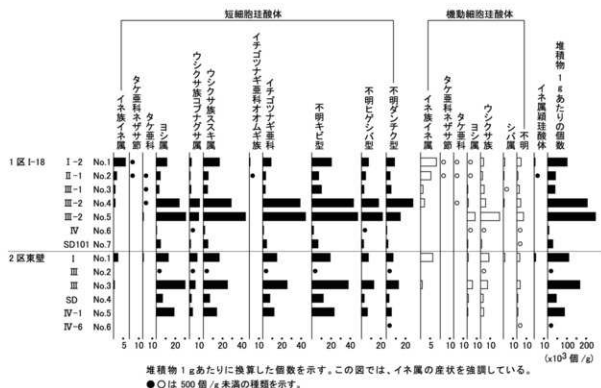
No.1は、植物珪酸体含量は約11万個/gである。産出する種類は下の試料と同様である。イネ属は、短細胞珪酸体は約2,200個/g、機動細胞珪酸体は約6,400個/gと本地点で最も多い。

イネ属の植物珪酸体の出現は、1区I-18・2区東壁ともにⅢ層であり、その上位の土層からも検出された。Ⅲ層(1区I-18 No.3・4)では、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出され、いずれも機動細胞珪酸体が多く1,000-2,000個/gであった。ところで、稲作が行われた水田跡の土壌ではイネ属の機動細胞珪酸体は5,000個/g程度検出されることが多く、安定した水田稲作が行われたと推定される(杉山2000)。また、川田条里遺跡(長野市)では、弥生時代から近世の水田跡でイネ属機動細胞珪酸体の含量が約4,900-7,300個/g(松田・河西2002)、更埴条里遺跡(千曲市)で検出された条里水田や条里以前の水田では数千-数万個/g((株)古環境研究所1999)といった調査事例がある。なお、更埴条里遺

跡のイネ属出現率は数%から80%を超える範囲にあり、堆積環境や耕作年数に大きく左右されることが指摘される(ハリノ・サーヴェイ(株)1999)ことから、本遺跡のⅢ層では稲作が行われた可能性がある。また、上述したようにヨシ属等の生育する湿潤な場所を利用し、稲作に伴い水質が富栄養化した可能性もある。

第15表 植物珪酸体含量表

種 類 試料番号	1区1-18							2区東壁					
	I-2層 No.1	II-1層 No.2	III-1層 No.3	Ⅳ-1層 No.4	Ⅳ-2層 No.5	不明 No.6	不明 No.7	I層 No.1	II層 No.2	III層 No.3	SD No.4	Ⅳ-1層 No.5	Ⅳ-6層 No.6
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ属イネ属	6135	1610	776	803	0	0	0	2247	0	424	0	0	0
タケ茎科ササ科	423	67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タケ茎科	0	368	155	402	789	0	0	749	0	0	0	0	0
ヨシ属	11213	4360	3102	21102	30739	617	4367	12735	120	30138	6061	18705	0
ウシタケ科コブナグサ属	3904	728	1551	10444	9471	77	1125	7866	30	5963	1867	3117	0
ウシタケ属ススキ属	16714	4964	4343	28922	43801	1291	4699	16481	30	25044	6383	13855	0
イネ科コブナグサ科オサムズキ属	846	398	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イネ科コブナグサ科	8674	3086	2637	26965	44591	925	4037	14608	30	25469	7309	11777	0
不明キビ類	30310	7044	9928	43383	47447	1657	6288	19103	180	37779	11790	23208	0
不明ヒゲシバ類	7193	4159	2482	17675	21703	482	2118	7117	0	12734	3751	6062	0
不明ウシタケ属	8674	3698	4864	27717	14600	578	1721	7117	30	12734	2849	5369	32
イネ科葉身細胞珪酸体													
イネ属イネ属	8251	5367	1241	2908	0	0	0	6388	0	849	0	0	0
タケ茎科ササ科	212	67	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
タケ茎科	212	67	0	402	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ヨシ属	423	403	420	1205	8297	77	596	1124	0	5518	1577	4903	0
ウシタケ科	3173	3080	3723	5222	19730	289	1191	8855	30	7216	2751	3291	0
ヨシ属	1481	671	155	803	0	0	0	1498	0	0	0	0	0
不明	4443	1180	2637	4917	7303	136	265	2967	0	3386	1081	1212	32
珪化組織片													
イネ属短細胞	846	134	0	0	0	0	0	1498	0	0	0	0	0
合 計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	8286	3052	2908	19413	213481	5627	24555	88023	420	150265	39690	83993	32
イネ科葉身細胞珪酸体	18136	9705	8706	13657	35130	482	2052	30932	30	16979	5109	5196	32
珪化組織片	846	134	0	0	0	0	0	1498	0	0	0	0	0
総 計	101127	40451	38314	306670	248601	6109	29687	110123	450	167244	44699	87289	64



堆積物1gあたりに換算した値を示す。この図では、イネ属の産状を強調している。
●は500倍/g未満の種類を示す。

第7図 植物珪酸体含量



第9章 総括

本書に掲載した佐久市森平遺跡、寄塚遺跡群、今井西原遺跡、今井宮の前遺跡は、北を浅間火山、南に八ヶ岳の群峰に抱かれた佐久平のほぼ中央、標高約660mの高地に位置する。中部横断自動車道建設に伴う4遺跡の発掘調査は平成16年度(2004)春の今井西原遺跡から着手され、平成19年度(2007)の今井宮の前遺跡で終了した。森平遺跡が湯川の右岸・寄塚遺跡群は左岸の河岸段丘上、今井西原遺跡は南側の台地、今井宮の前遺跡は千曲川と滑津川が合流する河岸段丘上と、いずれも河川の合流点付近に立地する。現在、中部横断自動車道の佐久中佐都ICを過ぎ、蛇行する湯川が路線外の至近距離に見えるあたりがかつての森平遺跡の調査区である。実際に遺跡に立つと湯川を挟んだ南側に河床から約18mの比高差をもつ断崖が眺望され、その頂部に寄塚遺跡群が位置する。逆に寄塚遺跡群からは眼下に森平遺跡を見下ろすことができる。

各遺跡の様相はそれぞれの小結にまとめているので、ここでは時期毎に各遺跡の調査成果を簡潔に整理する。

縄文時代

縄文時代の遺物は森平遺跡と今井西原遺跡、今井宮の前遺跡で出土している。森平遺跡では縄文後期の称名寺式~堀之内式にかけての土器がみられるが、遺構は検出されていない。今井西原遺跡では自然流路跡から加曾利E式~堀之内式にかけての少数の土器や石鏃、打製石斧が出土した。また今井宮の前遺跡でも堀之内1式の浅鉢や打製石斧が出土し、段丘崖際の長方形を呈する2基の土坑は陥し穴の可能性もある。一般に縄文中期後葉以降、縄文人の生業の場が低地に下降する現象が各地でみられる。その背景には河川漁撈の振興や水場での植物質食料の加工作業、あるいは狩猟場の拡大等が考えられる。遺跡周辺では佐久市長土呂遺跡・近津遺跡群・聖原遺跡で縄文時代の陥し穴が確認されていることから、この時期3遺跡が短期的なキャンプを伴う縄文時代の狩猟場として活用されていたと推測する。

弥生時代

中期後半粟林式段階の竪穴住居跡は、森平遺跡で粟林2~3式段階が17軒、寄塚遺跡群でも2軒確認された。また、掘立柱建物跡も森平遺跡で粟林2~3式段階のものが6棟みられる(第4章第4節1)。弥生時代の土坑は100基検出されたが、ピット状のものが多く、墓と判断されるものは無かった。また溝跡のうちSD08は弥生時代の竪穴住居群を囲む環濠と判断した。今井西原遺跡でもこの時期の土器が多数出土した溝跡が確認され、今井宮の前遺跡でも土器が散漫に出土している。出土土器のうち最も古い時期は粟林2式古段階で、そのうち特に寄塚遺跡群のSB01・02の壺・鉢にはいずれも良好な磨きがなされている。また対岸の森平遺跡では、粟林2式古~新段階のSB10の床面に伏せられた甌(有孔鉢)から渡来系弥生人の歯が出土した。佐久平でも渡来系弥生人等を通じて技術が導入され、集落周辺で水田稲作を試行しながら定住し、周辺の粘土を採取して土器づくりをおこなっていた可能性がある。また、多くの太型蛤刃石斧や扁平片刃石斧を保持し、磨製石鏃等の製作もおこなっている。そして、集落の規模も粟林2式新段階、3式段階へと拡大していったと考えられる。その後若干の断絶を経て、後期の前半には、森平遺跡で竪穴住居跡が5軒(SB13~15、ST05-08)と掘立柱建物跡が2棟、今井宮の前遺跡の包含層に土器が少数みられるのみとなる。住居の廃絶時などの火入れ行為は、弥生集落では珍しくないが、森平遺跡で

は半数近くで認められる。一旦湯川沿いに展開した人々が徐々に別の場所へ移動していったのであろうか。

森平遺跡の北方湯川右岸の台地上には北西久保遺跡（佐久市教委 1987）や西一本柳遺跡（佐久市教委 1994・1999・2003）ほかの集落群、湯川左岸の寄塚遺跡群の東側、湯川が大きく北に蛇行する地点には宮ノ上遺跡群根々井芝宮遺跡（佐久市教委 1998）等、周辺には弥生時代中期から後期に至る集落が集中している。今回報告したように栗林式段階における湯川の低位段丘（第1河岸段丘）への進出によって培われた技術が、その後佐久平一円に広がる「赤い土器のクニ」へと引き継がれていったものと想像したい。

古墳時代

今井西原遺跡には古墳時代前期4世紀にあたる隅丸方形の竪穴住居跡SB01が構築され、小形壺や台石等が出土したが、その後は古代の溝が作られるまで空白となり、集落への展開はみられない。対岸の森平遺跡でも古墳時代前期～中期の高杯等少数の土器が出土しているものの、施設はみられなかった。ただ昭和49年の圃場整備に伴う今井西原遺跡の発掘調査や佐久市教育委員会の寄塚遺跡群の発掘調査では（佐久市教委 2008）古墳時代前期を含む竪穴住居跡が数軒、根々井芝宮遺跡では古墳時代後期の例が報告されている。以上から、弥生時代のように大規模ではないし、この時期、湯川の左岸が居住地として利用されていたことが分かる。

古代・中近世

今井西原遺跡のもっとも北側には古代以降とみられる掘立柱建物跡4棟や区画を持った溝跡、多数の自然流路などが検出された。また、今井宮の前遺跡では中世になると杭列やピット状土坑が検出され、一帯に15～16世紀の建物跡が存在していた可能性も推測されている。またそれらは遺跡の東方に立地する中世の今井城跡とも関係する。寄塚遺跡群でも内耳溝が出土したSD01やSD02・03など、中世以降の流路が利用されている。

近世になると今井西原遺跡では台地中央部付近に東西方向の流路が整備され、水田開発が本格化したとみられる。また今井宮の前遺跡では、17世紀前半の大形土坑が数基検出され、それらは季節的に利用される井戸の一種と考察された。実際にこの地域は水利に乏しく、江戸時代初頭に市川五郎兵衛の三河田用水堰が開削されて初めて灌漑され、それ以前は湧水が利用されていた（佐久市教委 2008b）。今井宮の前遺跡の大形土坑はこのような環境下における、集水のための工夫を反映していると考えられる。近現代の遺物としては森平遺跡のSD01と今井西原遺跡の遺構外から寛永通宝が、今井西原遺跡ではケセルが出土している。

以上のように、本書では、湯川から千曲川が形成する河岸段丘周辺での、通時的な土地利用の様相を追うことができた。最も多くの遺物が出土した森平遺跡の調査は平成17年度夏から平成18年度夏にかけておこなわれている。当時は千曲川本流に面した栗林2式期の大集落である長野市松原遺跡は報告されていたが、夜間瀬川と千曲川の合流点に展開する中野市柳沢遺跡の銅戈・銅鐙が発見される約1年前にあたる。その後川久保・宮沖遺跡や琵琶島遺跡等、千曲川の下流域に展開する弥生時代集落がさらに多く調査され、近年、信濃の弥生社会の展開を考える上でこの時期が益々重要性を増している。今回明らかになった森平遺跡の特異な立地は、水害の危険性を受けながらも水利に優れた低地に集落を構え、水田開発に乗り出した佐久の弥生人にとっては適地であったことは想像に難くない。そして、湯川・千曲川という長大な水路によって下流域の先進的な大集落と繋がるのが可能となり、また逆に栗林2式が佐久平で一気に広がった背景にもこのような水運の利便性がある。そして具体的な交通手段としては長野市春山B遺

跡のような剝舟の使用が推測されるが、外来系土器や石器・石材などがもたらされたルートやシステムは、森平遺跡をはじめとした佐久の弥生集落を考える上での大きな課題として今後に残された。

いずれにしても本書によって、海から最も遠い信州の高冷地に居住する人々も、弥生社会を形成し、他地域との交流を行いながら、発展していく様相を垣間見ることができたと考える。

以上本書の成果が、弥生時代の長きにわたる研究史を誇る佐久平の歴史の中に位置づけられ、多方面にわたって広く活用されることを望みたい。

引用参考文献

- 青木一男 2000 「第1章第3節 1 器類・器種および部位名称、3調整手法、4 (1) 施文原体と文様、(3) 器類と文様帯」・「第2章第3節 加工円盤・小型土器・土製品」『松原道跡 弥生・総論3 弥生中期・土器本文』長野県埋蔵文化財センター
- Asai, K. & Watanabe, T. 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10
- 穴沢味光 1996 「川原町口式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 荒巻重雄 1993 「火山地質図6 浅間火山」地質調査所
- 阿部博志ほか 1990 「宮城県文化財調査報告書 132 指葉道跡」宮城県教育委員会
- 安藤一男 1966 「埼玉県川越市郊外の水田産珪藻類」『秩父自然科学博物館研究報告』13
- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100号
- 石川日出志 2012 「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『千曲川管佐・柳沢築地事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書-中野市内その3-柳沢道跡』長野県埋蔵文化財センター
- 市川隆之 2013 「第3章第3節 3 弥生時代の遺物」『千曲川管佐・柳沢築地事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書-中野市内その2-川久保・宮沖道跡』
- 市川健夫 2007 「千曲川流域の気候風土と地域文化」『千曲川大紀行』一草舎
- 井出正義・白田武正・大井隆男・尾崎行也 1982 「因説・佐久の歴史 上・下」郷土出版社
- 井出正義他編 1997 「定本・佐久の城」郷土出版社
- 伊藤敦史 1996 「太平洋沿岸における弥生文化の展開-駿河湾沿岸中期弥生土器からの検討-」『FYA』弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集 弥生土器を語る会
- 伊藤良水・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6
- 伊藤良水 1994 「乾田と畑の珪藻植生 日本珪藻学会第14回研究会講演要旨 9」『珪藻学会誌』103
- 上田典男 1995 「研究ノート 栗林式土器研究の一視点」『長野県埋蔵文化財センター紀要』4
- 白田武正 1980 「佐久地方の後期弥生土器について」『信濃』32 卷 4 号 信濃史学会
- 大沼忠泰 1988 「木古内新町4道跡」(財)北海道埋蔵文化財センター
- 大沼忠泰 2008 「特殊な施文具-魚骨文とオオバコ文-」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 小野真一・秋本真澄・森下 浩・原 茂光 1972 「北伊豆南町向原道跡発掘調査報告」『駿豆考古』第13号 駿豆考古学会
- 小野真一・秋本真澄 1979 「駿豆地方の弥生式土器集成」駿豆考古学会
- 上山田町教育委員会 2002 「御屋敷道跡」
- 『角川日本地名大辞典』編纂委員会・竹内理三 1990 「角川地名大辞典 20 長野県」角川書店
- 金銅善恭 1967 「木曾谷・伊那谷(長野県)の水田産のケイツウとツツミモ」『陳水学雑誌』28.2
- 鎌方正樹 2003 「井戸の考古学」ものが語る歴史 8 同成社
- 株式会社古環境研究所 1999 「更埴系道跡Ⅳ層・Ⅴ層におけるブランド・オパール分析-古代(糸里水田と糸里以前の水田)の稲作について」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26 -更埴市内その5-更埴系道跡、屋代道跡群(含む大境道跡、窪河原道跡)-古代1編』長野県埋蔵文化財センター
- 株式会社古環境研究所 2005 「佐久市西一本柳道跡 X 出土試料の自然科学分析」『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第127集 西一本柳道跡 X』佐久市教育委員会
- 川崎 保・桜井秀雄・堀 隆 2012 「特集 佐久地方の火山・洪水災害」『佐久考古通信 No.109』
- 河内善平・荒牧重雄 1979 「小諸地域の地質 地域地質研究所 (5 万分の1 図幅)」地質調査所
- 河内善平 1995 「松原園(群)をつくった888年の八ヶ岳大崩壊-八ヶ岳の地質見学案内・2-2-」『信州大学教育学部紀要』84号

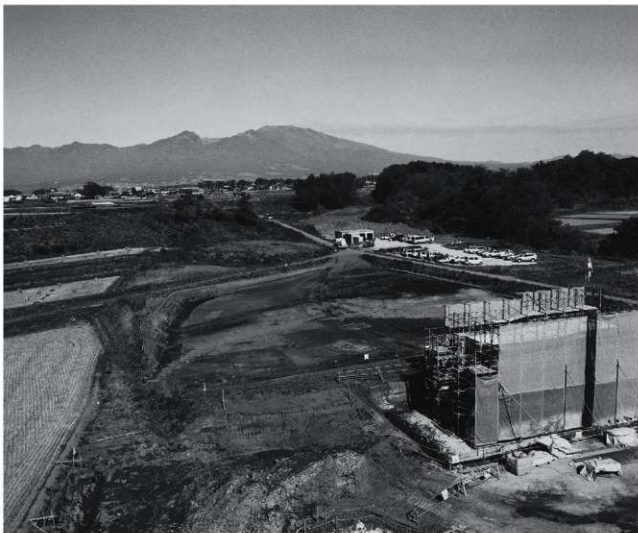
- 工業普通 2013「青銅器祭祀のひろがり」『千曲川群佐・柳沢築地事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書-中野市内その3-柳沢遺跡』
長野県埋蔵文化財センター
- Krammer, K.1992.PINNULARIA.eine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26.
J.CRAMER,353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.1986.Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaeae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1.
Gustav Fischer
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.1988.Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae.Bacillariaceae.Surirellaceae. In: Suesswasserflora
von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.1991a.Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales.Fragilariaceae.Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von
Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.1991b.Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae.Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae)
und Gomphonera. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer
- 熊井久雄 1988「ハッポ東麓地域」『日本の地質 中部地方1』日本の地質中部地方1 編集委員会編 共立出版
- 国立歴史民俗博物館 2007「弥生はいつから? -年代研究の最新編-」財団法人歴史民俗博物館振興会
- 小泉祐紀 2013「駿河における登呂式土器以前の弥生土器-登呂式土器成立の背景を考える-」『特別展 赤い土器の世界-登呂式土
器の赤彩を探る-』静岡市立登呂博物館
- 小坂共栄・藤野智由・北木牧 1988「第3章 3.2 (6) 内山地域」『日本の地質 4 中部地方1』
- 小林謙一 2007「関東における弥生時代の開始年代」『縄文時代から弥生時代へ新弥生時代のはじまり』第2巻 越山園
- 小諸市誌編纂委員会 1986「小諸市誌 自然編」小諸市誌編纂委員会
- 小山岳夫 1990a「地域編年の再検討-佐久地方の様相と変化-」『信濃』第42号第10号
- 小山岳夫 1990b「第3章 土器の移り変わり(編年)」『佐久考古6号 赤い土器を追う』佐久考古学会
- 小山岳夫 1998「巨大集落の出現-中央高地の弥生中期・粟林式期に何が起こったのか-」『長野県考古学会誌』86号
- 小山岳夫 1999「佐久地方の弥生土器」『99 シンポジウム「長野県の弥生土器編年」』長野県考古学会
- 小山岳夫 2011「粟林期の集落を考える」『長野県考古学会誌』138・139合併号
- 小山岳夫 2013「(4) 佐久地域群葬平遺跡・谷塚遺跡」『日本考古学協会 2013年度大会 分会Ⅲ 資料集成 信州の弥生遺跡-中期後
半から後期-』(追加資料) 日本考古学協会 2013年度長野大会実行委員会
- 權田和良 1959「南の大ききの性差について」『人類学雑誌』43 (1)
- 近藤純三・佐藤 隆 1986「植物球酸体分析 その特性と応用」『第四紀研究』25
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書6-松本市内その3-下神遺跡」
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1997「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16-長野市内その4-篠ノ井遺跡群」
- 佐久考古学会 2007「佐久の遺跡」佐久考古通信 No.99・100 記念号
- 佐久考古学会 1990「赤い土器を追う」
- 佐久市教育委員会 1975「郷土の文化財10 今井西原 佐久市今井西原遺跡緊急発掘調査概要」
- 佐久市教育委員会 1984a「北西の久保」
- 佐久市教育委員会 1984b「佐久市遺跡詳細分布調査報告書」
- 佐久市教育委員会 1987「佐久市埋蔵文化財調査センター報告書 第8集 北西の久保-南部台地上の調査-」
- 佐久市教育委員会 1994「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第34集 西一本神遺跡1」
- 佐久市教育委員会 1996「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第46集 濁り遺跡」
- 佐久市教育委員会 1997「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第185集 円正坊遺跡Ⅱ」
- 佐久市教育委員会 1998「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第49集 宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡」
- 佐久市教育委員会 1999「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第73集 西一本神遺跡Ⅳ」
- 佐久市教育委員会 1999「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第74集 鳴沢遺跡群 五里田遺跡」
- 佐久市教育委員会 2001「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第89集 川原端遺跡」
- 佐久市教育委員会 2003「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第109集 西一本神遺跡Ⅴ」
- 佐久市教育委員会 2004a「佐久市文化財 年報13」
- 佐久市教育委員会 2004b「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第124集 市内遺跡発掘調査報告書2003」
- 佐久市教育委員会 2005「佐久市文化財 年報14」
- 佐久市教育委員会 2006「佐久市埋蔵文化財調査報告書 第138集 市内遺跡発掘調査報告書2004」

- 佐久市教育委員会 2007『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第143集 市内遺跡発掘調査報告書 2005』
- 佐久市教育委員会 2008a『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第152集 市内遺跡発掘調査報告書 2006』
- 佐久市教育委員会 2008b『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第157集 寄塚遺跡』
- 佐久市教育委員会 2009a『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第164集 市内遺跡発掘調査報告書 2007』
- 佐久市教育委員会 2009b『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第165集 森平遺跡・北津津遺跡Ⅱ・西一里塚遺跡Ⅲ・大豆田遺跡Ⅲ』
- 佐久市教育委員会 2010『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第178集 今井城跡』
- 佐久市教育委員会 2011『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第188集 西一里塚遺跡Ⅱ』
- 佐久市 1988『佐久市志』自然編 佐久市志編纂委員会
- 佐久市 1992『佐久市志』歴史編(三)近世 佐久市志編纂委員会
- 佐久市 1993『佐久市志』歴史編(二)中世 佐久市志編纂委員会
- 佐久市 1995『佐久市志』歴史編(一)原始古代 佐久市志編纂委員会
- 佐久市 2003『佐久市志』歴史編(五)現代 佐久市志編纂委員会
- 櫻井秀雄 2011『住居跡から出土した石調をめぐって一考察』『考古学と陶磁史学-佐々木達夫先生追悼記念論文集-』金沢大学考古学研究室
- 櫻井秀雄 2012『東信地域における縄文時代中期の様相』『長野県考古学会誌』143・144合併号
- 笹沢 浩 1971『善光寺平における弥生時代中期後半の土器』『信濃』第23号第12号
- 笹沢 浩 1996『中部山岳地方の弥生土器』『新潟県考古学』『栗林式土器』『日本土器事典』雄山閣
- 笹澤正史 2006『土器・石器・特殊遺物等について』『吹上遺跡』上越市教育委員会
- 茂原生忠 2008『渡来人の出現-善光寺平の弥生時代人-』『赤い土器のクニ』の考古学』雄山閣
- 静岡原埋蔵文化財研究所 1992『川合遺跡 遺物編1(土器・土製品図版編)』
- 静岡原埋蔵文化財研究所 1996『川合遺跡 遺物編1(土器・土製品本文編)』
- 篠原大和 2010『駿河地域の中部高地系土器と有東式土器・登呂式土器』『中部高地南部における縄文系土器の放散』山梨県考古学協会
- 清水芳裕 1992『土器の器種と胎土』『京都大学埋蔵文化財センター紀要』Ⅹ
- 杉山真二 2000『植物珪酸体(プラント・オーバー)』『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社
- 鈴木三男・金城修一 1997『樹種同定』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15 石川条里遺跡第1分壙(財)長野原埋蔵文化財センター』
- 須藤 隆 1996『東北地方の弥生土器』『橋形四式土器』『日本土器事典』雄山閣
- 須藤 隆 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究 縄文から弥生へ』暮修堂
- 竹内理三監修 1990『角川日本地名大辞典』角川書店
- 建石 徹 2004『縄文時代における粘土の選択性』『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
- 田中広明 2009『信濃の道後、坂東の道口』『佐久考古通信』No.102 佐久考古学会
- 田中宏之 1987『群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の埴瀬』『群馬県立歴史博物館紀要』8
- 田中義文・辻本崇夫 2000『更埴系里遺跡・厩代遺跡群・窪河原遺跡における微化石分析』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 27 更埴市内その6 更埴系里遺跡・厩代遺跡群(含む大城遺跡・窪河原遺跡)-古代2・中世・近世編-』長野原埋蔵文化財センター
- 谷 和隆・塚原秀之・鶴田典昭・中島 通・橋詰 潤・羽生俊郎・前田一也・村田弘之・山科 哲 2013『中部地方の黒曜石原産地分析資料』『日本考古学協会 2013年度長野大会研究発表資料集-文化の十字路口 信州-』
- 土屋 積 2009『開館15周年企画展 山を越え川に沿って-信州弥生文化の確立-』長野原埋蔵史館
- 堤 隆 2004『浅間湖大鏡』浅間湖文ミュージアム
- 堤 隆・藤森英二・小山岳夫・富沢一明・櫻井秀雄・森泉かよ子 2008『考古学が語る 佐久の古代史』ほおずき書籍
- 寺内隆夫 1998『第5章第1節 弥生時代の土地利用』『更埴系里遺跡・厩代遺跡群-弥生・古墳時代編-』(財)長野原埋蔵文化財センター
- 寺島孝典 1993『弥生中期後半の土器様相』『松原遺跡Ⅲ』長野市教育委員会
- 寺島孝典 2013『栗林式土器の成立と展開』『一般社団法人日本考古学協会 2013年度長野大会研究発表資料集』日本考古学協会 2013年度長野大会実行委員会
- 第7回東海埋蔵文化財研究会 三重県実行委員会 1990『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐるとの問題』
- 徳永哲秀 1996『松原遺跡の縄文土器-その施文具の在り方を追う(その1)-』『長野原埋蔵文化財センター紀要』5
- 直井雅尚 2012『周辺から見た栗林式土器の実質と変化』『長野県考古学会誌』138・139合併号

- 長野県教育委員会 1997『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』
- 長野県教育委員会 2000『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査2－』
- 長野県教育委員会 2003『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査3－』
- 長野県教育委員会 2007『大規模開発事業内遺跡－遺跡詳細分布調査4－』
- 長野県農政農村整備課 1991『土地分類基本調査 小諸』
- 長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12－長野市内その10－榎田遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009『(主)長野県瀬原遺跡(四ツ屋バイパス)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－飯綱町内－西四ツ屋遺跡・表町遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2009『上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－小諸市内－中原遺跡群・野火洞遺跡・野火洞城跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2012『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4－佐久市内4－瀨り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群』
- 長野県埋蔵文化財センター 2013『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1－小諸・佐久市内1－鎌田原遺跡・近津遺跡・和田原遺跡群』
- 長野市教育委員会編 1993『松原遺跡Ⅲ』長野市埋蔵文化財センター
- 長野市埋蔵文化財センター編 2001『長野市高校グラウンド遺跡Ⅱ』長野市教育委員会
- 中野 俊・竹内圭史・加藤碩一・酒井 彰・濱崎聡志・広高俊男・駒澤正夫 1998『20万分の1地質図幅 長野』地質調査所
中野史一 2009『第6章総括』『西四ツ屋遺跡 表町遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 貫田 明 2000『第1章近世彩土器の文様帯構造と変遷』『松原遺跡 弥生・総論7 弥生時代・考察 検索』長野県埋蔵文化財センター
- 西本豊弘編 2007『縄文時代から弥生時代へ』新弥生時代のはじまり 第2巻 雄山園
- 根来健一郎・東野雅子 1986『日本における水田の珪藻類植物 第1報 奈良県桜井市附近の水田の珪藻類植物』『珪藻学会誌』2
- 馬場伸一郎 2006『佐久盆地における粟林式土器の編年と弥生中期集落』『長野県考古学会誌』112号
- 馬場伸一郎 2007『大規模集落と手工業生産に見る弥生中期後葉の長野盆地南部』『考古学研究』第54巻第1号
- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1988『埼玉の漢類 珪藻類』埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会
- パリオ・サーヴェイ株式会社 1986『中村遺跡』『関越自動車道(新碓氷)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-Ⅲ)』川崎市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団
- パリオ・サーヴェイ株式会社 1988『根々井芝宮遺跡出土炭化材同定報告』『佐久市埋蔵文化財調査報告書第49集 宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡 本文遺物編』佐久市教育委員会・佐久市土地開発公社
- 平林富三 1975『佐久市・南佐久』『新しな地名考』信濃毎日新聞社
- 町田 洋・松田時彦・海津正倫・小泉武榮編 2006『日本の地形5中部』東京大学出版会
- 町田勝則 1999『第V章第2節4考察』『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12－長野市内その10－榎田遺跡第2分冊(本文編Ⅱ)』長野県埋蔵文化財センター
- 町田勝則 2010『中部日本』『石器生産と流通にみる弥生文化 季刊考古学』第111号 雄山園
- 松田隆二・河西克造 2002『古代水田稲作における収穫様式の変遷に関する研究』『日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集』Matsumura, H. 1989『Geographical Variation of Dental Measurements in the Jomon Population.』『Anthrop.Soc.Nippon』97(4)
- 水沢教子 1994『塚田遺跡出土土器の胎土について』『塚田遺跡』御代田町教育委員会
- 水沢教子 1996『冨田式土器』『日本土器事典』雄山園
- 水沢教子 2004『岩石・鉱物からみた表土採取領域』『国立歴史民俗博物館研究報告』第120集
- 水沢教子 2007『塚田遺跡群出土煮滷具の胎土分析(上)』『長野県立歴史館研究紀要』第13号
- 水沢教子 2008『塚田遺跡群出土煮滷具の胎土分析(下)』『長野県立歴史館研究紀要』第14号
- 水沢教子 2009『藤々井遺跡群出土土器の胎土分析』『長野県立歴史館研究紀要』第15号
- 三輪茂雄 1978『白』ものと人間の文化史25 法政出版局
- 御代田町誌編纂委員会 1995『御代田町誌 自然編』
- 山田成洋 1996『有東式土器』『日本土器事典』雄山園
- 山梨県教育委員会 1997『油田遺跡』
- 山本 博 1970『井戸の研究－考古学から見た－』綜芸舎
- 八幡一郎 1934『北佐久郡の考古学的調査』

写真図版

道跡から浅間山を望む
(平成17年)



調査区全景
(平成17年)



PL 2 森平遺跡



調査区全景
(平成18年)



調査区全景
(平成18年)

遺構

左:SB01 (南より)

右:SB01 炉 (南より)



左:SB01

炭化物検出状況

(西より)

右:SB01

遺物出土状況

(南より)



左:SB01

遺物出土状況近接

(南より)

右:SB01

無頭壺出土状況

(西より)



左:SB02 北側

遺物出土状況

(北より)

右:SB02 南側

(西より)



左:SB02 南側

炭化材出土状況

(西より)

右:SB03・ST06

(西より)



PL 4 森平遺跡



左:SB03 型 (西より)
右:SB03
遺物出土状況
(西より)



左:SB03
遺物出土状況近接
(南より)
右:SB04 (南より)



左:SB04 型 (西より)
右:SB06 (南より)



左:SB06 型 (南より)
右:SB06
遺物出土状況
(南より)



左:SB07 - 08
(南より)
右:SB07 型 (西より)

左:SB07

遺物出土状況

(南より)

右:SB07

遺物出土状況近接

(北より)



左:SB08 (南より)

右:SB08 炉 (南より)



左:SB09 (南より)

右:SB09 炉1

(南より)



左:SB09

遺物出土状況

(南より)

右:SB09 P17

粘土断面 (南より)



左:SB10 (北より)

右:SB10 炉 (南より)



PL 6 森平遺跡



左:SB10
遺物出土状況近接
(西より)
右:SB11 (北より)



左:SB11 堀 (西より)
右:SB11
遺物出土状況
(東より)



左:SB11
遺物出土状況近接
(南より)
右:SB13 (南より)



左:SB13 堀
(東より)
右:SB14 (東より)

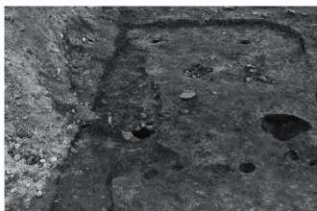


左:SB14
遺物出土状況近接
(南より)
右:SB15 (南より)

左:SB15
礎出土状況(西より)
右:SB15
遺物出土状況近接
(南より)



左:SB16(南より)
右:SB17(南より)



左:SB17 炉1
(北より)
右:SB17 炉2
(南より)



左:SB17
遺物出土状況
(北より)
右:SB17
遺物出土状況
(西より)



左:SB17
遺物出土状況近接
右:SB18(南より)



PL 8 森平遺跡



左:SB18
遺物出土状況近接
(南より)
右:SE20 (南より)



左:SE20 P5
遺物出土状況
(西より)
右:SB21 (北より)



左:SB21 型1
(北より)
右:SB21 型2
(東より)



左:SB23 (南より)
右:SB23
磨製石斧出土状況
(南より)



左:ST01 (東より)
右:ST02 (南より)

左:ST04 (南より)

右:ST04 P2

断面 (北より)



左:ST04 P7

遺物出土状況

(北より)

右:ST05

遺物出土状況

(西より)



左:ST05

遺物出土状況

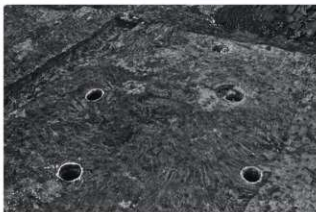
(西より)

右:ST07 (南より)



左:ST08 (南より)

右:ST10 (南より)



左:ST13 P1

遺物出土状況

(南より)

右:ST13 P2

遺物出土状況

(南より)



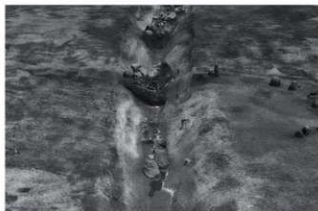
PL 10 森平遺跡



左:SD01
 竪出土状況 (南より)
 右:SD03 (西より)



左:SD08
 (西より、平成17年度)
 右:SD08
 (西より、平成18年度)



左:SD08
 遺物出土状況
 (西より)
 右:SD08 断面
 (西より)



左:SK001
 遺物出土状況
 (西より)
 右:SK003
 遺物出土状況
 (北より)



左:SK024
 遺物出土状況
 (西より)
 右:①区北東部
 竪・遺物検出状況
 (西より)

土器

SB01

1. 51-334

2. 51-001

3. 51-008

4. 51-005

5. 51-009

6. 51-010

7. 51-013

8. 51-006

9. 51-007



1



2



3



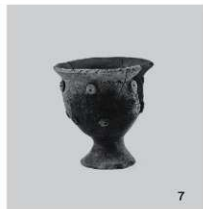
4



5



6



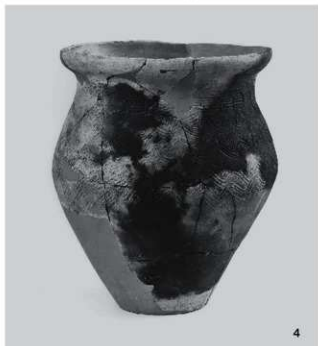
7



8



9



SB01

- 1 .51-003
- 2 .52-341 (1/2)
- 3 .51-331
- 4 .51-002
- 5 .52-335
- 6 .52-332
- 7 .52-333
- 8 .52-011

SB02

1 .52-347

2 .52-345

3 .52-346

4 .52-344

SB03

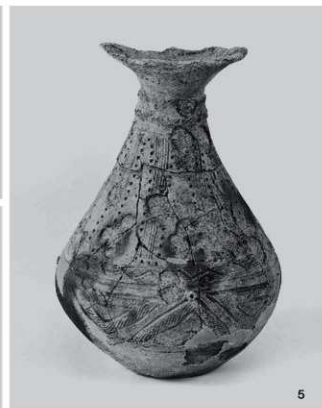
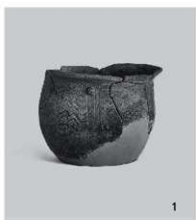
5 .53-355

6 .53-356

7 .53-370

8 .53-359

9 .53-361



PL 14 森平遺跡



SB03

1 .53-354

2 .53-358

3 .54-363

4 .54-367

5 .54-369

SB04

6 .54-397

7 .54-399

SB06

8 .55-386



SB06

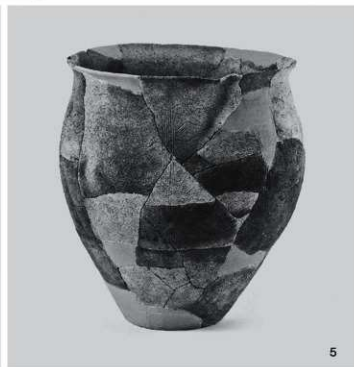
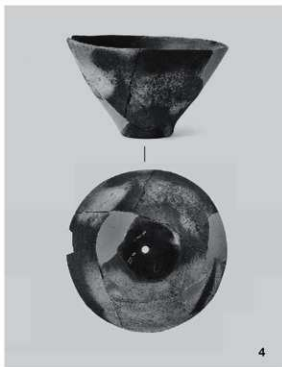
- 1 .55-379
- 2 .55-381
- 3 .55-380
- 4 .55-383
- 5 .55-384
- 6 .55-392

SB07

- 7 .56-415
- 9 .56-406

SB08

- 8 .56-408





SB07

1 .56-411

2 .56-409

3 .56-442

4 .56-441

SB09

5 .57-262

6 .57-250

7 .57-254

8 .57-253

9 .57-255

SB09

- 1 .57-257
- 2 .58-249
- 3 .58-256
- 4 .58-266
- 5 .58-264
- 6 .58-260
- 7 .58-261



1



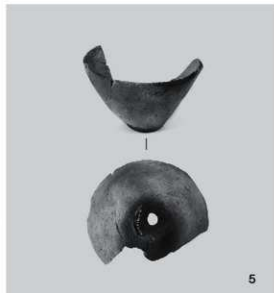
2



3



4



5



6



7

PL 18 森平遺跡



SB09

1 .59-272

2 .59-263

3 .59-252

4 .59-290

5 .59-286 (1/2)

6 .59-289

SB10

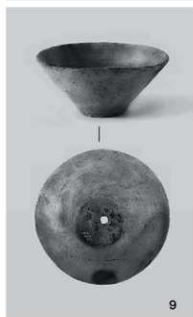
7 .59-454

8 .59-457

9 .59-458

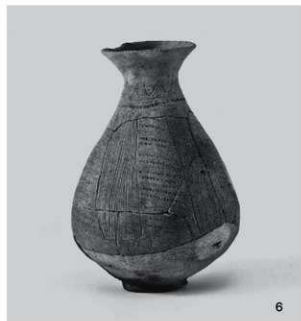
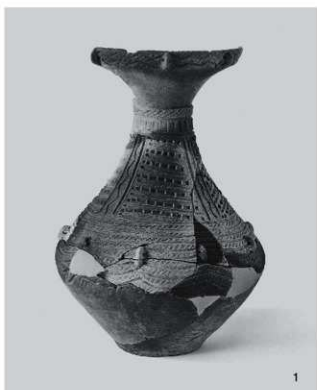
10.59-459

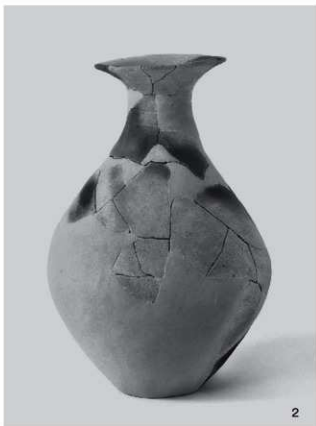
11.59-456



SB11

- 1 .60-479
- 2 .60-466
- 3 .60-468
- 4 .60-475
- 5 .61-483
- 6 .60-460





SB11

1 .60-467

2 .61-489

3 .61-474

4 .61-473

5 .62-480

6 .62-484

7 .62-465



SB11

- 1 .62-485
- 2 .62-464
- 3 .62-477
- 4 .62-469

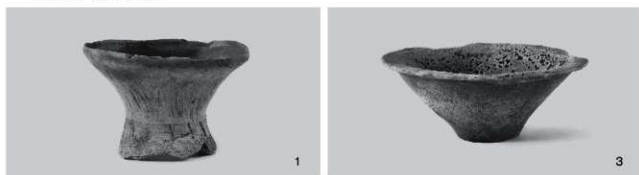
SB13

- 5 .63-074
- 6 .62-075

SB14

- 7 .63-014
- 8 .63-019
- 9 .63-015





SB15

1 .63-044

2 .63-045

3 .63-039

SB16

4 .64-060

5 .64-061

SB17

6 .64-098

7 .64-097

8 .64-099

9 .64-110

10 .64-296

11 .64-109



SB18

1 .65-064

SB20

2 .65-154

SB21

3 .65-123

4 .65-125

5 .65-124

6 .65-159

7 .65-151

8 .65-128

9 .66-136

10.66-149 (1/2)

SB23

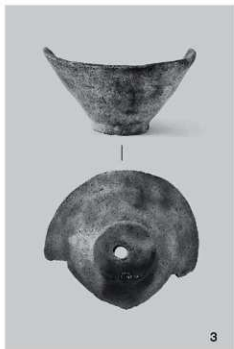
11.66-172

12.66-299

13.66-300 (1/2)

14.66-569 (1/2)





SB23

1 .66-176

2 .66-171

ST04

3 .66-524

4 .66-528

ST05

5 .67-522

6 .66-520

7 .66-527

8 .67-523

9 .67-525

ST13

10 .67-095

11 .67-564 (1/2)

12 .67-094

ST13

1 .67-093

SK001

2 .67-502

SK003

3 .67-503 (1/2)

SK011

4 .68-509

SK020

5 .68-510

SK024

6 .68-183

SD01

7 .68-447

8 .68-446

SD08

9 .68-199

10 .68-515

11 .68-200 (1/2)

12 .68-512

13 .68-198

14 .68-513 (1/2)

SD12

15 .68-194



1



2



3



4



5



7



8



6



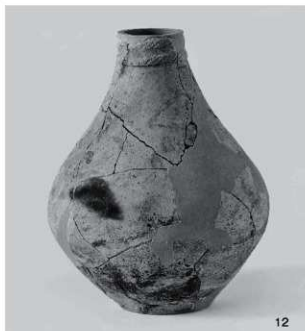
9



10



11



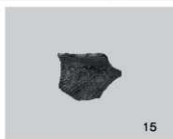
12



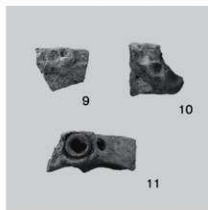
13



14



15

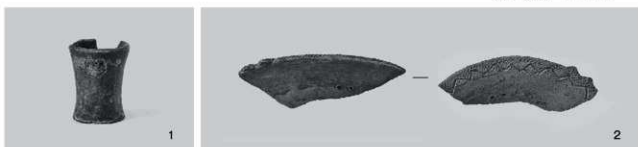


遺構外

- 1 .69-214
- 2 .69-210
- 3 .69-530
- 4 .69-211
- 5 .69-229
- 6 .69-223
- 7 .69-305
- 8 .70-236
- 9 .70-239
- 10.70-240
- 11.70-302
- 12.70-307
- 13.70-309

遺構外

1. 70-310
2. 70-306
3. 70-303
4. 70-304
5. 70-311
6. 70-542
7. 70-322
8. 70-545
9. 70-312
10. 71-319
11. 71-320
12. 71-328
13. 71-317
14. 71-321
15. 71-242



土器片加工円板

SB06

16. 71-390

SB07

17. 71-418 (土製品)

18. 71-435

19. 71-439

SB13

20. 71-566

21. 71-567

22. 71-568

SK010

23. 71-570

SK022

24. 71-511



遺構外

25. 71-219

26. 71-550

27. 71-555

28. 71-556

29. 71-557

30. 71-558

31. 71-559

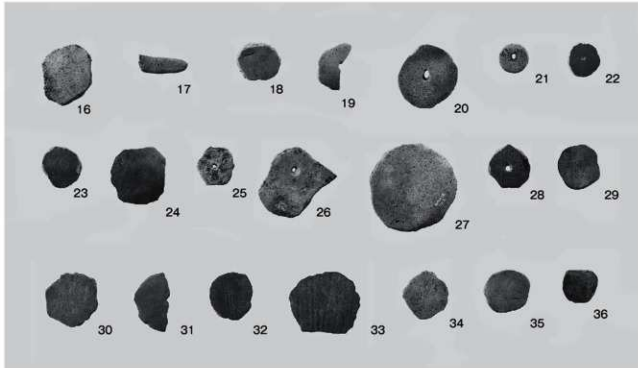
32. 71-560

33. 71-561

34. 71-562

35. 71-563

36. 71-571



PL 28 森平遺跡・寄塚遺跡群



森平遺跡出土土器

文様詳細

- 1 .66-409
- 2 .66-411
- 3 .53-355
- 4 .60-475
- 5 .60-475
- 6 .56-409
- 7 .60-479
- 8 .60-479
- 9 .63-039

寄塚遺跡群出土土器

文様詳細

- 10.6-13

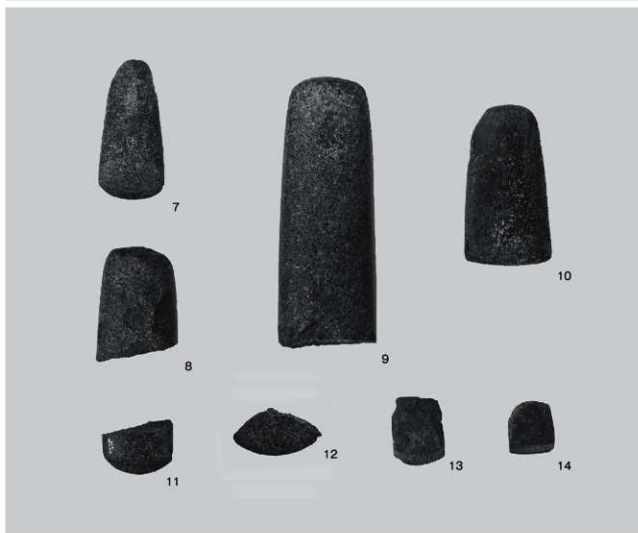
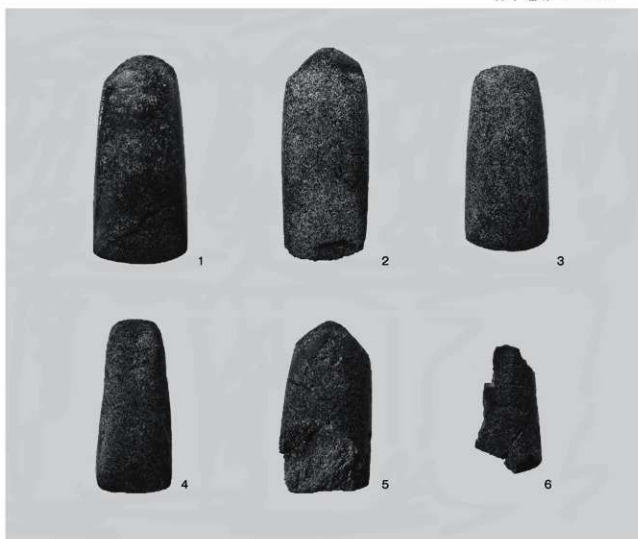
石器

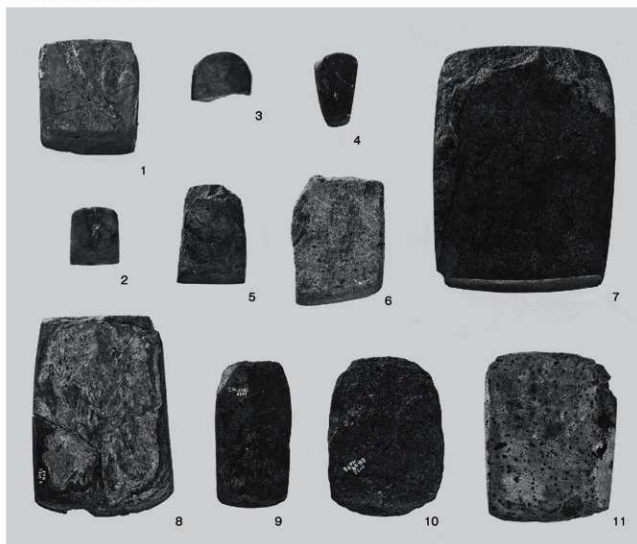
大型蛤刃石斧 (1/3)

1. 73-SB01-S027
2. 73-SB11-S033
3. 73-SB03-S129
4. 73-SB01-S028
5. 73-SB03-S029
6. 73-SB03-S030
7. 74-SB07-S032
8. 74-SB09-S074
9. 74-SB23-S076
10. 74-SB09-S075
11. 74-SB13-S097
12. 74-遺構外-S098

扁平片刃石斧 (1/3)

13. 74-SB01-S034
14. 74-SB07-S035





扁平片刃石斧 (1/2)

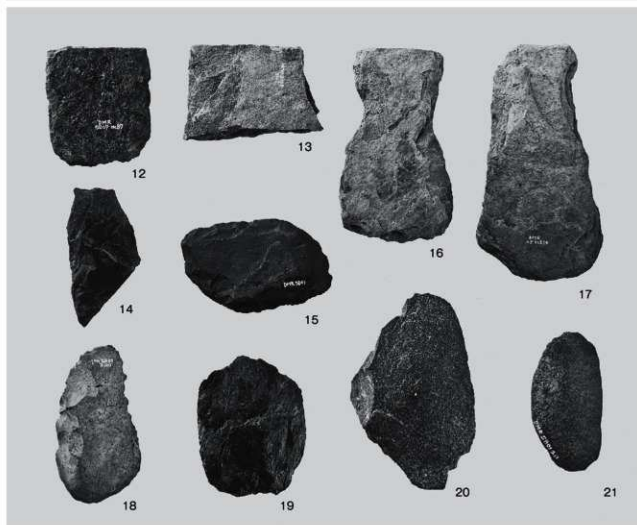
1. 75-SB07-S036
2. 75-遺構外-S042
3. 75-SB09-S037
4. 75-SB15-S040
5. 75-遺構外-S043
6. 75-SB11-S039
7. 75-SB11-S038
8. 75-遺構外-S041-S127
9. 75-SB09-S077
10. 76-SB09-S078
11. 76-SB07-S128

打製石斧 (1/2)

12. 76-SB09-S065
13. 76-SB15-S085
14. 76-SB03-S333
15. 76-SD01-S348
16. 76-遺構外-S086
17. 76-遺構外-S087
18. 76-SF2-S351
19. 76-SK010-S353

磨り切り具 (1/2)

20. 81-SB21-S093
21. 81-SB01-S130



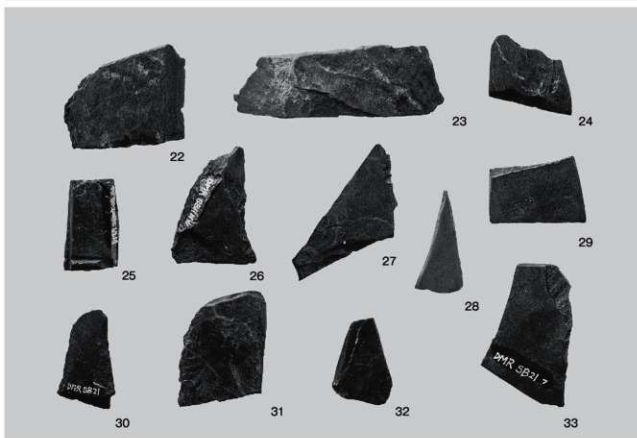
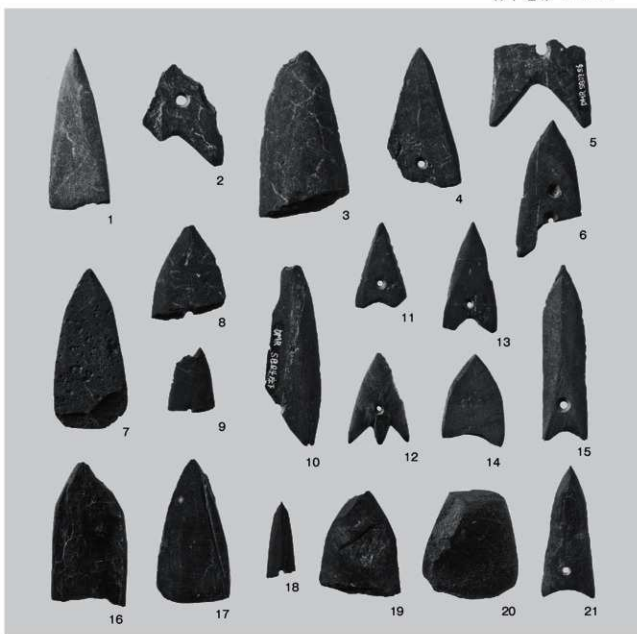
磨製石鏃 (1/1)

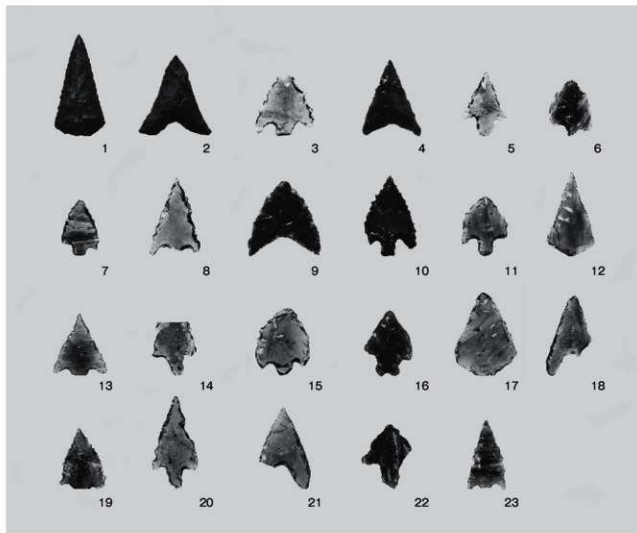
1. 77-SB03-S002
2. 77-SB03-S003
4. 77-SB03-S005
5. 77-SB03-S006
6. 77-SB09-S013
8. 77-SB03-S008
9. 77-SB09-S014
10. 77-SB04-S010
11. 77-SB05-S011
12. 77-SB11-S015
13. 77-SB07-S012
14. 77-SB14-S016
15. 78-SB14-S017
18. 77-SB16-S020
21. 77-SB21-S023

磨製石鏃未製品

(1/1)

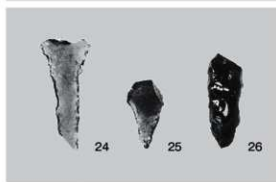
3. 78-SB03-S004
7. 78-SB03-S007
16. 78-SB14-S018
17. 78-SB14-S019
19. 78-SB17-S021
20. 78-SB21-S022
22. 78-SB03-S332
23. 78-SB07-S337
24. 78-SB07-S338
25. 78-SB07-S339
26. 78-SB11-S341
27. 78-SB14-S342
28. 78-SB02-S001
29. 78-SB01-S361
30. 78-SB21-S363
31. 79-SB09-S362
32. 79-SB21-S364
33. 79-SB21-S365





石鏃 (1/1)

1. 79-SB07-S024
2. 79-SB15-S025
3. 79-SB02-S151
4. 79-SB06-S152
5. 79-SB07-S153
6. 79-SB07-S154
7. 79-SB07-S155
8. 79-SB07-S156
9. 79-SB07-S157
10. 79-SB07-S158
11. 79-SB07-S159
12. 79-SB07-S160
13. 79-SB07-S161
14. 79-SB09-S163
15. 79-SB13-S165
16. 79-SB15-S168
17. 79-SB17-S169
18. 79-SB18-S170
19. 79-SK023-S171
20. 79-遺構外-S172
21. 80-遺構外-S173
22. 80-遺構外-S174
23. 80-遺構外-S176



石鏃 (1/1)

24. 80-SB08-S162
25. 80-SB04-S184
26. 80-SB04-S185



柱状片刃石斧 (1/1)

27. 77-SB07-S045
28. 77-SB17-S046



みがき石 (1/2)

29. 83-SB03-S133
30. 83-SB04-S134

楔形石器 (1/1)

31. 80-SB03-S194
32. 80-SB03-S195
33. 80-SB04-S197
34. 80-SB05-S198
35. 80-SB07-S205
36. 80-SB07-S206
37. 80-SB16-S213
38. 80-SK011-S224

敲石 (1/3)

1. 81-SB09-S081
2. 81-SK001-S111

石槌 (1/3)

3. 81-遺構外-S120

磨石 (1/3)

5. 82-SB09-S144

砥石 (1/3)

7. 83-SB15-S344

石皿

(1/3)

4. 84-SB07-S073

6. 83-SB06-S064

(1/6)

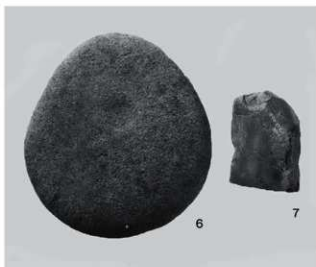
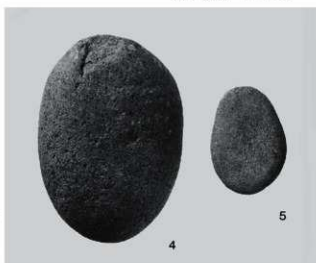
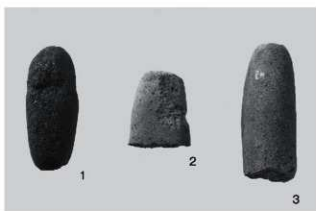
8. 85-SB21-S126

9. 85-SB01-S060

10. 85-SB15-S343

11. 85-SB23-S347

12. 85-SB03-S139





石皿 (1/3)

1. 84-SB08-S067

2. 84-SB08-S068

軽石製品 (1/4)

3. 86-SB09-S080

4. 86-SB07-S047

5. 86-SB07-S069

6. 86-SB07-S072

7. 86-SB01-S099

8. 86-SB09-S079

9. 87-SB07-S070

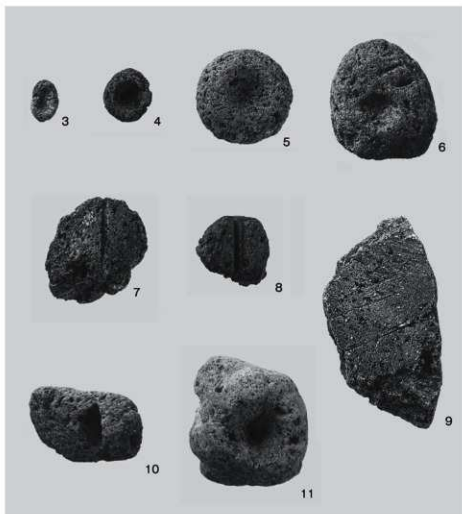
10. 87-SB07-S071

11. 87-ST02-S100

凹石 (1/4)

12. 88-SB21-S092

13. 88-SB09-S083



12

玉類 (1/1)

14. 88-SB01-玉1

15. 88-SB07-玉2

16. 88-SB07-08-玉3

17. 88-SB07-08-玉4



13

金銅器

18. SD01-M3

銭 (1/1)

19. 遺構外-M1

環状銅製品 (1/1)

20. SB21-M5

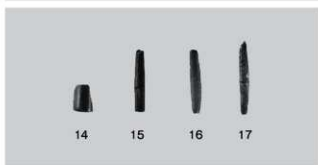
棒状製品 (1/2)

21. SB21-M6

棒状製品 (1/2)

22. SD-M2

釘 (1/2)



14

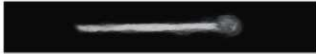
15

16

17



20



21



22



18



19

調査区全景
(上空より)

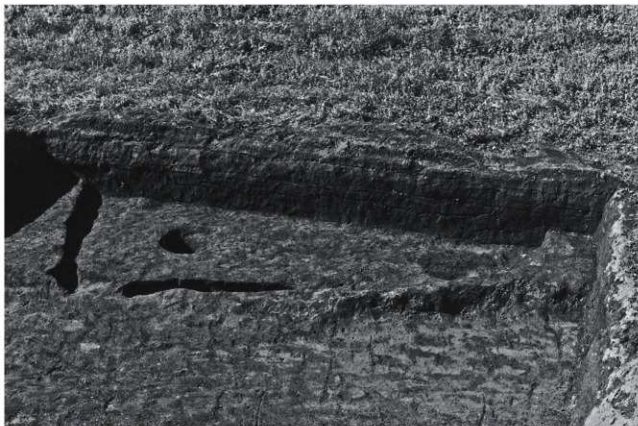


左:SB01 (南より)

右:SD04 (南より)



SB02 (東より)





土器

SB01

1.5-02

2.5-03

3.5-01

SB02

4.5-05

5.5-06 (1/2)

6.5-04 (1/2)

7.5-13

SD01

8.5-08

SD03

9.5-07 (1/2)

SD04

10.5-09

11.5-10

SK01

12.5-15

SX01

13.5-14 (1/2)

石器

石鏃 (1/1)

14.5-SD04-S02

大型蛤刃石斧 (1/3)

15.6-SB02-S03

打製石斧 (1/3)

16.5-遺構外-S04

スクレイパー (1/3)

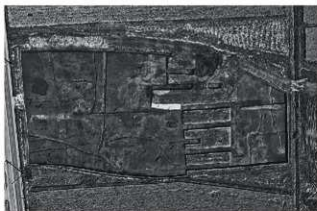
17.6-SB02-S19

石皿 (1/3)

18.5-SB01-S14

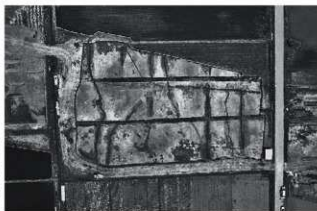
左:1区全景

(上空より)



右:2区全景

(上空より)



左:3区全景

(上空より)



右:4区全景

(上空より)



1区SB・ST群

(上空より)



左:SB101

遺物出土状況

(南より)



右:SB101

同左南壁際近接

(北より)



PL 38 今井西原遺跡



左:ST101 (南より)
右:ST102 (南より)



左:ST103 (南より)
右:ST104 (南より)



左:ST104 P1
磨製石鏃出土状況
(東より)
右:SD105 (北より)



左:SD110
遺物出土状況
(北より)
右:SD110
同左近接1 (南より)



右:SD110
同左近接2 (西より)

土器

SB101

1. .11-02

2. .11-03

3. .11-04

4. .11-01

5. .11-34 (1/2)

SD101

6. .11-11

7. .11-12

SD106

8. .11-14

SD110

9. .11-15

10. .11-17

11. .11-19

12. .11-22

SD112

13. .12-25

SD114

14. .12-27



1



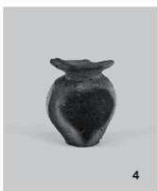
2



6



3



4



7



5



8



9



10



11



12



13



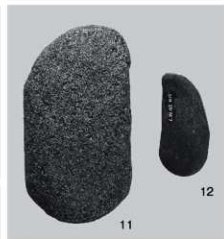
14



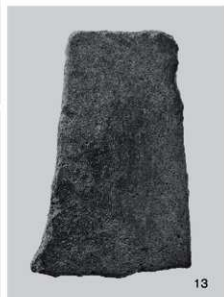
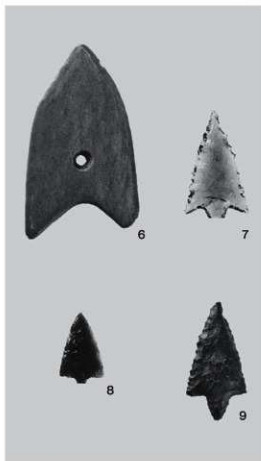
SD110
1.11-16
SD203
2.12-29 (1/2)
SD204
3.12-30
SD301
4.12-32
5.12-31 (1/2)



石器
磨製石鏃 (1/1)
6.12-ST104-S85
石鏃 (1/1)
7.12-SD111-S01
8.12-SK101-S02
9.12-SD111-S05
打製石斧 (1/3)
10.12-SD110-S29
磨石 (1/3)



11.12-SB101-S22
みがき石 (1/3)
12.12-SD111-S35
石皿 (1/4)
13.12-SB101-S23



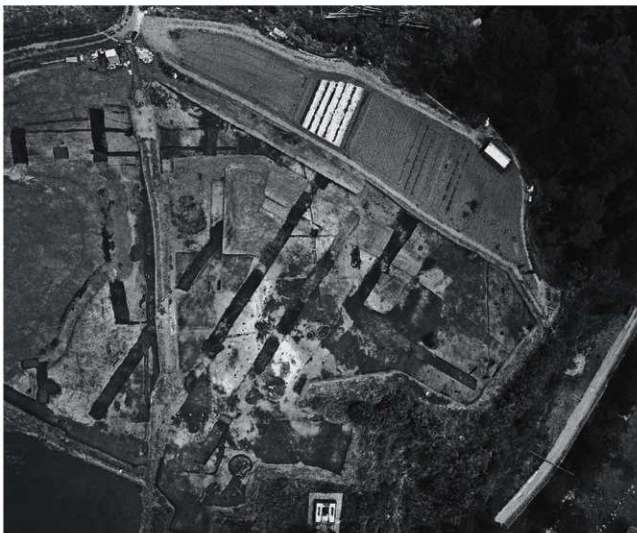
金属器
14.遺構外-M01
鏝 (1/1)
15.SD402-M02
キセル (1/1)
16.SD不明-M03
キセル (1/1)



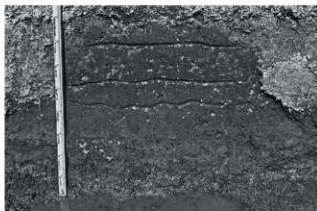
道路遠景 (西より)



3区全景 (左が北)



PL 42 今井宮の前遺跡



左:トレンチ掘削状況
(1区T11、西より)
右:3区T4④地点土層
断面(南より)



右:トレンチ位置平板
測量(南より)



左:2区深掘り地点
土層断面(東より)
右:5区T1土層断面
(西より)



左:4区トレンチ掘削
状況(西より)
右:4区T3②地点土層
断面(西より)



左:1区完掘状況
(北より)
右:2区東側完掘状況
(北より)

3区西側完掘状況
(北東より)



3区東側完掘状況
(北より)



PL 44 今井宮の前遺跡



3区土坑群

(ⅡL14付近、東より)



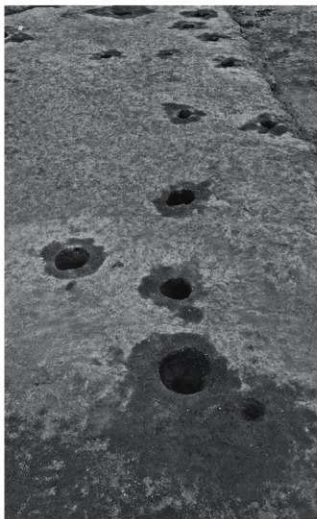
3区土坑群

(ⅡL19付近、東より)

左:SA01・02

(西より)

右:SA02 (西より)



SK002石積み

(北東より)



PL 46 今井宮の前遺跡



左:SK002東西土層断面(南より)

右:SK002礫出土状況(北西より)



左:SK002下層石列(東より)

右:SK002石積み(正面、北東より)



左:SK002石積み(側面、南東より)

右:SK002石積みと平石(南西より)



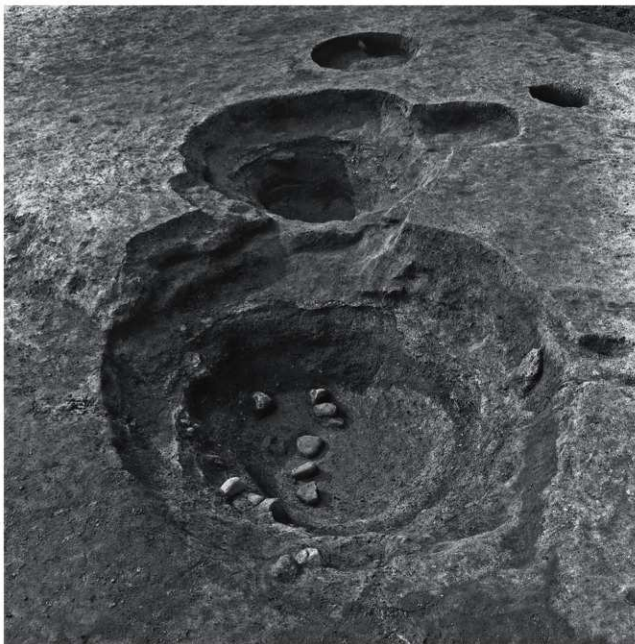
左:SK002平石(南東より)

右:SK002完掘(北東より)

下:SK002周囲の基盤層(北西より)



SK117~119
(南より)



SK117・118周囲の
基盤層 (北東より)



PL 48 今井宮の前遺跡



左:SK121掘り下げ
状況 (南より)
右:SK121礎など
出土状況 (東より)



左:SK121下層礎・
石白など出土状況
(南より)
右:SK121完掘
(北より)



左:SK121周囲の
基礎層 (北より)
右:SK007礎出土状況
(南より)



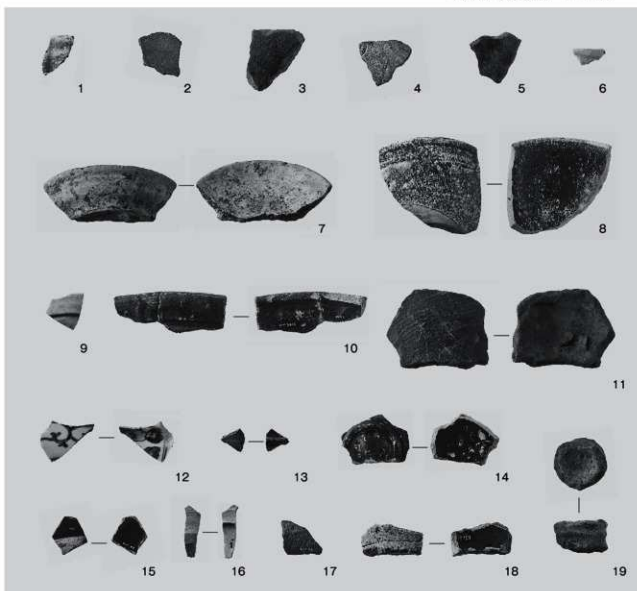
左:SK024完掘
(西より)
右:SK120人骨出土
状況 (南より)



左:SK120断面
(東より)

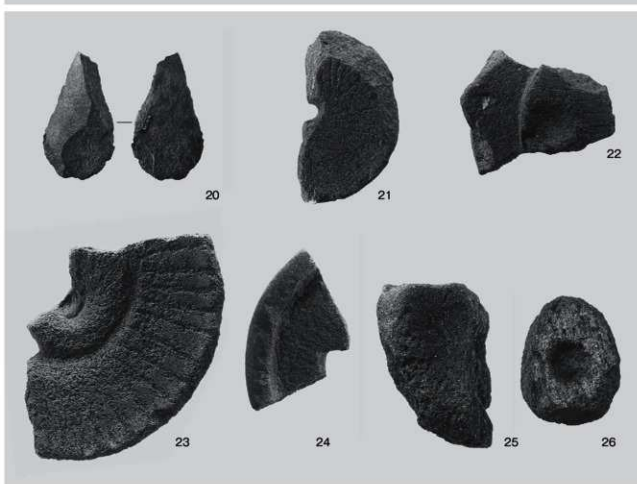
土器・陶磁器 (1/3)

1. SK032-2
陶器丸皿
2. (SK041)-4
内耳鍋
3. (SK041)-5
内耳鍋
4. SK042-7
浅鉢 (縄文後期)
5. SK043-8 内耳鍋
6. SK047-9
磁器染付碗
7. SA01-10
かわらけ
8. SK121-14
陶器碗
9. SK121-15
磁器染付碗
10. (SD05)-34
陶器すり鉢
11. (SD07)-38
須恵器壺
12. I層-115
磁器染付鉢
13. 2区 I ~ II層-51
陶器灯明皿
14. 3区 擾乱-101
陶器天目茶碗
15. II ~ III層-117
陶器碗
16. I層-114
陶器灯明皿
17. 3区-104 内耳鍋
18. 3区 I層-116
陶器鉢または壺
19. 3区3I III層-150
高杯 (弥生中後期)

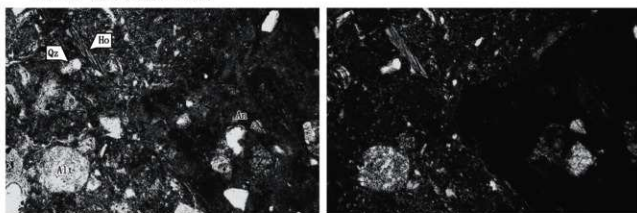


石器

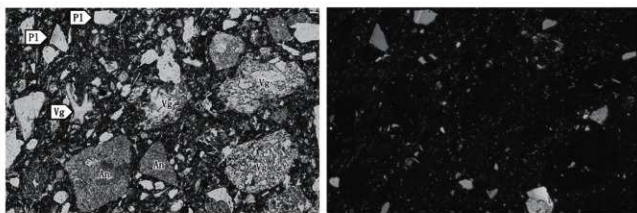
- 打製石斧 (1/3)
20. II区 II層-S2
- 石臼 (1/4)
21. SK121-S6
22. SK121-S4
23. SK121-S5
24. SK121-S7
- 石鉢 (1/4)
25. SK121-S8
26. 3区-S3



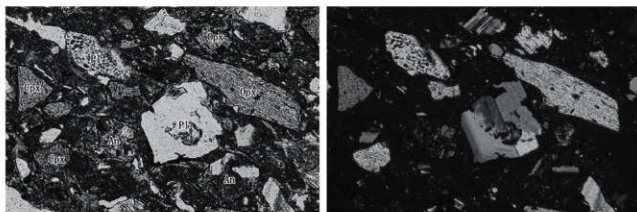
PL 50 森平遺跡胎土薄片



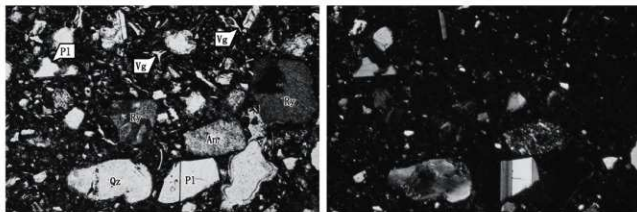
1. 試料番号1(S809粘土)



2. 試料番号4(S809-250)



3. 試料番号9(S809-255)



4. 試料番号10(S802-344)

Qz:石英 Pl:斜長石 Opx:斜方輝石 Cpx:単斜輝石 Ho:角閃石 Ry:流紋岩
An:安山岩 Alt:變質岩 Vg:火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー。

0.5mm

報告書抄録

ふりがな								
著者名	森平道跡 寄塚道跡群 今井西原道跡 今井宮の前道跡							
副著名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 一佐久市内5-							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	107							
著作者名	木澤教子、内堀 剛、上田典男、岡村秀雄、上田 真、谷 和隆、柳澤 亮							
編集機関	(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施川西963-4 TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157							
発行年月日	2014年3月25日							
ふりがな 所収道跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	道跡番号					
もりへい どうせき 森平道跡	ながの 県佐久市 大字横和	20217	593	36° 15' 21" (世界測地系)	138° 27' 05" (世界測地系)	20050822 ～	5,500	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
				36° 15' 32" (日本測地系)	138° 26' 54" (日本測地系)	20051222 20060418 ～		
						20060622		
きよづか どうせき 寄塚道跡群	ながの 県佐久市 大字横和	20217	231	36° 15' 28" (世界測地系)	138° 26' 41" (世界測地系)	20040823 ～	2,500	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
				36° 15' 16" (日本測地系)	138° 26' 52" (日本測地系)	20041220		
いまい 西原 道跡	ながの 県佐久市 大字横和ほか	20217	234	36° 15' 23" (世界測地系)	138° 26' 40" (世界測地系)	20040401 ～	20,000	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
				36° 15' 12" (日本測地系)	138° 26' 40" (日本測地系)	20041220		
いまい 宮の前 道跡	ながの 県佐久市 大字今井	20217	235	36° 15' 07" (世界測地系)	138° 26' 35" (世界測地系)	20060425 ～	8,000	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
				36° 14' 56" (日本測地系)	138° 26' 47" (日本測地系)	20060622 20070423 ～		
						20070516		
所収道跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
森平道跡	集落	弥生時代	弥生時代(竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡6棟、土坑100基、土坑3基、溝跡1条)、古代以降(溝跡10条)	縄文土器、弥生土器、土師器、ミニチュア土器、土器片加工円板、大型鋸刃石斧、扁平片刃石斧、磨製石磯、磨製石磯未製品、石錐、楔形石器、石槌、石皿、管玉、銭(寛水通宝)人骨(歯)、動物骨		湯川低位段丘上の掘立柱建物跡を伴う弥生時代中期の集落。		
		古墳時代						
寄塚道跡群	集落	弥生時代 古墳時代 中世 近世	弥生時代(竪穴住居跡2軒) 古墳時代(土坑1基)、溝跡(古代以降2条、中世以降1条)	弥生土器、土師器、須臾器、内耳鍋、大型鋸刃石斧、石磯、楔形石器、打製石斧、石皿				
今井西原道跡	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世 近世	縄文中期末～後期(溝跡・自然流路跡2条)、弥生時代を含む(土坑1基)、古墳時代(竪穴住居跡1軒)、古代以降(掘立柱建物跡4棟)、弥生以降(溝跡・自然流路跡18条)	縄文土器、弥生土器、土師器、須臾器、煎山燈明皿、磨石、石皿、磨製石磯、石磯、キセル、銭(寛水通宝)				
今井宮の前道跡	集落	中近世	時期不明(掘立柱建物跡1棟)、15～16世紀初頭(枕形陶磁器(常滑焼)かわらけ、跡2列)、大型土坑(近世前半内耳鍋、石臼、石鉢、砥石、4基)、小・中型土坑(中近世磨製石斧、打製石斧、銅片・2基、うち1基は人骨1体が屈石核、人骨葬された土坑墓)	縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器(常滑焼)かわらけ、石臼、石鉢、砥石、銅片、人骨		近世土坑墓より10代後半の人骨を検出。すり鉢状の大型土坑の南西側面に、水をくみ上げる際に側面の崩落を防ぐ目的で積み上げられた可能性のある石積みあり。		
要約			本書に掲載した4道跡は佐久平の中央部、千曲川とその支流の湯川が合流する地点付近に所在する。森平道跡は湯川から数10mという至近距離の低位段丘(第1河段段丘)に立地し、弥生時代中期を主体とする集落で、集落東西と南側は湯川の蛇行流路、北側は環濠で区画され、後期前半までの遺構が検出されている。うち約半数は焼酎を伴う竪穴住居跡であり、各時期1～数棟の掘立柱建物跡が伴う。それぞれの住居跡の床面近くからは多くの土器が出したが、うち1軒の住居跡の床面出土の順の中から、渡来系弥生人の歯が出たことは佐久平初の発見となった。森平道跡と湯川を挟んで南に位置する寄塚道跡群は湯川の新崖上に立地する小規模集落で弥生時代中期の竪穴住居跡が検出された。その南に隣接する今井西原道跡は台地上に立地し、古墳時代前期の竪穴住居跡、古代以降の掘立柱建物跡や、溝跡および自然流路跡が検出された。また近世には、台地中央部の流路が整備され、水田開発が本格化したとみられる。その南、千曲川に至る河段段丘上には今井宮の前道跡が位置する。15～16世紀の枕形土器がみられ、東側に隣接する中世の今井城との関係が示唆される建物の存在も想定されている。17世紀の大型土坑も複数検出され、集水のために季節的に利用される井戸の一種と推測された。以上4道跡の調査によって、弥生時代中期の集落道跡の様相と、中世から近世にかけての台地上の水田開発のあり方を考察するための新資料を提供したことは大きな成果である。					

平成26（2014）年 3 月 25日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書107

森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5

—佐久市内 5—

発行者 国土交通省 関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 鬼灯書籍株式会社
〒381-0012 長野市柳原2133-5
Tel 026-244-0235 Fax 026-244-0210